

IS—Twin/Face—

reizen

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

少年は幸せだった。いくつかの不幸が訪れていても、その時だけは幸せだった。そして少年に一枚のチケットが渡される。それは地獄への片道チケットだった。

目次

第1章 優しき顔には裏があり	
第1話 二人の男	1
第2話 今時の女	16
第3話 組長選出	31
第4話 篠ノ之箒の事情	49
第5話 本音	66
第6話 本性	82
第7話 乱入	97
第8話 過去	116
第0章 彼の仮面は滑り落ちて	
第0-1話 End peace	138
和の終わり	

第0-2話 In Battle	
Round 戦闘突入	
第0-3話 Further call	159
amity さらなる災難	
第0-4話 Black haze	180
黒い霧	
第0-5話 Reality be	201
shown 見せられる現実	
第1-2章 繰り返される出会いと別れ	224
第9話 動く話	240
第10話 達観少年	255
第11話 女たちの強襲	272
第12話 銀髪の少女	290

第13話	百獣の複合王	306	第21話	ただ、自分を鍛えるために	
第14話	失ったもの、手に入れたもの	321	……		
第15話	立場逆転	341	第22話	まさしく絶対選択肢	445
第16話	切れた彼は制御が効かない	355	第23話	過密すぎるクラス	477
第17話	ひたすらボコる放課後	372	第24話	それでも家事全般大丈夫	
第18話	VSアンノウン	393	第25話	抜かりない	507
第19話	食い違う意見、現れる魔物	410	第26話	同類扱いしてんじゃねえ	521
第20話	うごめく気配	427	第27話	同類との再会	536
第2章	荒ぶる少女と秘める少女		第28話	開幕！ 学年別トーナメント！	551

	第29話	狂者、激突	566
	第30話	忘却した目的	582
	第31話	置き土産	599
	第32話	フランス遠征	614
	第33話	ブチ切れるのも仕方ない	629
	第3章	闇が渦巻く臨海学校	
	第34話	舞崎静流の暴論	644
	第35話	過保護な周囲	659
	第36話	再会―ハジメマシテ―	
673	第37話	夏だ！ 海だ！ 特訓だ！！	689
	第38話	邂逅―Where are you?―	703
	第39話	めぐりまわる修羅場	722
	第40話	ブラッドデーモンズ	739
	第41話	恋は盲目―I love you―	753
	第42話	一方的な暴力	768
	最終章	篠ノ之	
	第43話	唸る修羅	785
	第44話	やはり舞崎静流は狂っている	799

第45話 篠ノ之三姉妹

813

第46話 これからのこと

827

第47話 突きつける真実

843

最終話 優しい風景

856

第1章 優しき顔には裏があり

第1話 二人の男

その学校は厳密にはそう決まっではないが、特質上では実質的に「女子校」となっていた。そのため規則は一般的な女子校のものを参考にされている。また、カリキュラムも通常授業とは別に「IS」という、パワードスーツを用いた軍事訓練に砂糖の塊を入れた感じの授業が行われる。

そんな特殊な学校……IS学園に今年度、二人の男子生徒が入学することになった。

「IS」とは「インフィニット・ストラトス」という今日では「競技」として用いられている戦闘用パワードスーツの略称である。IS学園はISを学ぶ学校であり、世間では軍事学校と言うイメージが強い。それでも入学希望者は設立当初から常に定員の10倍はおり、激戦区となっている。

そんな学校に入学する男子生徒はどれほどのものかと聞かれても、おそらく一人の評価は高いだろうがもう一人の評価はイマイチとなる。何故なら一人はイケメンであり、もう一人はブサメン……ではないが、少なくとももう一人に容姿は劣っていた。さらに

言えばその男の髪は無駄に整えられており、同時に「残念なナルシスト」と言う称号も得ている。もっとも彼が髪をセットしたのかと聞かれれば彼を知る人間は揃って「それはない」と答えるだろう。寝癖があるならば直すのが、少なくとも普段から髪をセットするなどと言う行為を行うような人間はなく、ましてや周りが女だからという理由で気合を入れてセットするタイプでもない。

(……………休憩しよ)

チラホラと生徒が集まりだしたのを見たもう一人の男子は私用していたシャープペンシルを机の上に置き、教科書とノートを重ねて枕代わりにしてそのまま突っ伏す。

それからしばらくして教室に同年代に見える一人の女性が入ってきたことで一同は席に着く。そのうるささに顔を上げた男子生徒はその女性の姿を確認するとすぐに顔を下げた。

そしてSHRが始まるがイマイチ生徒たちが悪いため、初めて教職を務める彼女は一通り学校のことを説明し終わると、「自己紹介を始める」という名目で生徒たちに丸投げをした。

しばらくその自己紹介が続いたところで、女性が自分の目の前にいる男子生徒に声をかける。

「織斑君……………織斑一夏君！」

一度目で反応しなかったため、二度目はフルネームで、そして先程よりも大きな声で名前を呼ぶと反応する男子生徒声を上ずらせながらも返事をした。

「大声出しちゃってごめんね？ でも今自己紹介中で、「あ」から始まって今は「お」の

織斑君なんだよね。だからね、自己紹介してくれるかな？ ダメかな？」

本人にその気はないのだが、比較的猫なで声を出して尋ねる女性——山田真耶は何度も頭を下げていた。

「あの、そんなに謝らなくても……っていかか自己紹介しますから、先生落ち着いてください」

「本当？ 本当ですか？ 約束ですよ、絶対ですよ!!」

男子生徒の手を平然と手に取って詰め寄る山田真耶。やがて自分がしたことを理解した彼女は手を戻して大人しくなる。

先程まで真耶と手を繋いでいた男子生徒は最前列に真ん中と言う、注目を集めやすい場所に座っていたためか、自己紹介をするために後ろを向いて生徒たちを一望する。先程まで彼を見ていた視線が一気に注いだため、話すのを躊躇った。

(ええい。ここで躊躇っていたら男が廃る!!)

自分にそう言い聞かせた少年は挨拶を始め、

「えー……えっと、織斑おりむらいちか一夏です。よろしくお願ひします」

頭を下げたから数秒してあげる。するとさらに視線が集中し始めたので、彼は最後列の左端に座る自分と同じ「男」という性を持つ者を見た。

だがその男は未だに突つ伏している。それでも視線をかわそうとしたのが通じたのか、その男子生徒は顔を上げた。

（頼む、俺に救いを——）

その念は届かなかったようで、男子生徒は再び突つ伏した。

（ヤバい。これ以上黙っていたら「暗い奴」つてレッテルを貼られてしまう!! それだけはなんとか避けねば!!）

頭をフルに回転させ、ある一つの単語が出て来たのでそれを堂々と言った。

「——以上です!!」

しかしそれは女子たちが期待したものではないこと、そしてようやく出たと思っただけのがそれだったため、ほとんどのクラスメイト達はその場で滑る。

「え? 何か問題ありました?」

本気でそう尋ねる一夏。彼の後ろに人影が現れ、一夏の頭部に衝撃を食らわせた。

そのまま勢いよく机に突つ込み、前後から事実的に攻撃を食らう一夏。頭を擦って文句を言おうと後ろを見ると、鋭くなっていた視線は緩くなり、

「げえっ、関羽?!」

最近では武将を女にしたものを見かけるようになったが、例えそうだとしても一般的に男の武将として知れ渡っている名前を堂々と言うのは失礼に当たる。二発目が当たったが、誰も同情しなかった。

だがそれは傍から見ればの話であり、一夏にとっては話は別だ。

「誰が三国志の英雄か、馬鹿者」

そう言った女性が上げた功績を考えればあながち間違いでもなかったりする。

千冬は真耶との会話を始めるが、一夏は考えていた。

(な、何で千冬姉がこんなところにいるんだよ!? 職業不詳で月に1度か2度ぐらいしか帰らない我が姉が!?)

織斑千冬と織斑一夏。この二人は姉弟であり、この世の中では珍しいほどに仲がいい姉弟である。だが千冬はあまり一夏に自分のことを話さないため、一夏によく「失踪癖がある」と思われていた。さらに自分には見せない顔を真耶に見せていることもあって、新しい姉を見て困惑を覚える。

会話が終わり、千冬は生徒たちの方を見て自己紹介を始めた。

「諸君、私が織斑千冬だ。君たち新人を一年で使い物になる操縦者に育て上げるのが仕事だ。私のいう事はよく聴き、よく理解しろ。できない者にはできるまで指導してやる。逆らっても良いが、私の言っていることはいずれ貴様らのためになる聞け。いい

な」

織斑千冬。補足すると彼女は世界最初に行われたISの大会で世界一になった女性である。そのため国内外問わず、彼女に憧れるものは少なくないため——

「キヤー!! 千冬様! 本物の千冬様よ!」

「ずっとファンでした!」

「私、お姉さまに憧れてこの学園に来たんです! 北九州から!」

「あの千冬様にご指導いただけるなんて嬉しいです!」

「私、お姉さまのためなら死ねます!」

——このようにかなり度を越えた熱狂的なファンがいるが、これはまだ多少マシな方だった。

「……毎年、よくもこれだけの馬鹿者が集まる者だ。感心させられる。それとも何か? 私のクラスにだけ馬鹿者を集中させてるのか?」

本気で呆れている千冬だが、その言葉はむしろ増長を招く結果となった。

「きやああああああ!! お姉様! もっと叱って! 罵って!」

「でも時には優しくして!」

「そしてつけあがらないようにして躰をして〜!」

一夏は担任が自分の姉だったことに混乱と驚愕していたのだが、さつきまでのソニッ

クブームでその感情が冷めていて、つい先日見た「誰も知らない〇〇シリーズ」でやっていた「自分よりも強い感情が近くにあると人は相対的な意識が働いて落ち着く」という説明を思い出していた。

生徒たちを沈めた千冬は一夏を見て辛辣な言葉を吐く。

「で？ 挨拶も満足にできんのか、お前は」

その言葉に言い訳をしようとする一夏だが、出した言葉がまずかったことに気付いたのは殴られた跡である。

「いや、千冬姉、俺は——」

「織斑先生と呼べ」

「……………はい、織斑先生」

一夏としてはつい家にいる風と呼んでしまったが、「せめてどうしてか説明してほしい」と内心泣き始める。

しかし、どうやらクラスメイトたちは千冬と一夏の関係性に気付かなかっただけで、周りでひそひそと彼らの関係性を話し始める。

「え……………？ お、織斑君で、あの千冬様の弟……………？」

「それじゃあ、世界で数少ない男で「IS」を使えるっていうのも、それが関係して……………」

「いいなあ。代わってほしいなあ……………」

「え？　じゃあもう一人も……………」

自然ともう一人の男子の方に視線が集まるが、さつきから微動だにしない。それに気づかなかった千冬はその男子に挨拶するように言った。

「もうそろそろ時間だな。最後に舞崎まいさき、自己紹介をしろ。……………舞崎？」

「舞崎」と呼ばれた男子は返事をしないどころか、全く動かなかった。

心配になった千冬はその男子の所へと移動する。

「おい、舞さ——」

唐突に拳を繰り出される。千冬はそれを受け止めると同時に顔を上げた少年は周りを見回して、

「ああ、なんだ。夢か」

ホツとため息を吐いて伸びをしようとしたが、自分の腕が千冬に掴まれていることに気付いた。

「……………意外です。IS操縦者も発情するんですね。発情期ですか？　だったらすぐに男を作ることをお勧めしますよ。ただでさえIS操縦者って敬遠されがちなので。それと離してくれませんか？　残念ですが、僕はあなたほど年上の方はタイプじゃないんです」

「あ、ああ……………」

急に言われた内容が頭に入ってこなかったため、つい普通に離してしまふ。

「で、一体何か用ですか？　僕は見ての通り勉強に忙しいので早く用件を伝えてくれませんか？」

「……………まあいい。もう時間がない自己紹介をしろ」

言われた少年は「わかりました」と答えて席を立ち、一度咳払いをする。

「初めまして、みなさん。私の名前は舞崎静流^{しずる}。女として使われることが多い名前ですが、れっきとした男です。ISに関してはいつい最近動かせることを知ったためそんなに知識がありませんが、できれば仲良くしていただけると幸いです」

あまりにも普通の自己紹介だったことで全員が驚く。だが千冬だけはホツとした様子で言った。

そして教卓の前に戻った彼女が、先程の自己紹介と同じテンションで堂々と言う。

「これでSHRは終わりだ。諸君らにはこれからISの基礎知識を半月で覚えてもらう。その後実習だが、基本動作は半月で体に染み込ませろ。いいか、いいなら返事をしろ。良くなくても返事をしろ。私の言葉には絶対に返事をしろ！」

女子たちは一斉に「はい」と返事する。一人は未だに現実に戻れず、一人は恥ずかしさから沈黙で返す。そして教員二人が部屋から出た瞬間、静流は出していた教科書と参考書を積み立てて枕にし、突っ伏すのだった。

舞崎静流の精神体力はこの時間で既に限界を迎えていた。彼はこの学園に入学がまった時にはこの日まで二週間もなく、本当勉強する日々を続けていた。

家族がいない彼は引越越しすることを決めたが、そのための引越越しの準備を終えた時の1週間と数日。さらに毎日のトレーニングもかなりハードを送っていたのである。とはいえ流石に休憩してはいたが、その時もロボット関係のゲームやアニメを見るなど、ここに適応するためのことをしていたので実質寝る時以外は準備しかしていない。元々アニメは見ていたとはいえ、それでも体に来るものがあった。

そのため、一時間目が終わった彼はすぐさま体を休めているのである。
(やっぱり、もう少し手加減しても良かったかなあ)

流石に寝てしまつては次の時間に支障をきたしてしまふので意識を手放すことはしていないが、それでも気を緩めればすぐに寝れる自信はあった。

そんな状態の静流に、とある生徒が声をかける。

「ちよつといいか?」

「……ああ、君か。何だい?」

静流の前に現れた黒髪でこのクラスで……いや、この学園の生徒で静流を除いて唯一の男子生徒になる織斑一夏。織斑千冬の弟だ。

「この学園で男つて俺と静流だけだろ? だから挨拶しておこうつて思つて」

「この学園の女はすべて俺の物だ、手を出すな」つて?」

「いや、何でだよ」

静流の口から飛び出した爆弾発言に冷静に突つ込みを入れる一夏。

「いやあ、てつきり挨拶つて言うからそういうことかなあつて。中学時代にいたんだよ、そういう人」

「い、いたのか……お前も苦労してるんだな」

同情的な視線を向ける一夏に、静流は微笑んで返し手を差し伸べる。

「改めて、僕は舞崎静流。……そういえば、こういう時つて好きなロボットとか言つた方がいいの?」

静流の質問に一夏は「え?」と言う顔をした。

「悪い。俺、あまりそういうのはあまり知らないんだ」

「そうなんだ。なんか、ごめんね」

「俺もごめん。今度見ようか？」

「いいよ。IS関係をこの年から勉強するのって結構疲れるし、そんな元気なんてないよ？」

「そうなのか？ そうだ、俺は織斑一夏。一夏でいいぜ」

「そう言つて二人は握手をする。とその時、一人の女生徒が二人の所へと近づいていき、声をかけた。

「んんっ！ ……ちよつといいか」

二人の男子はその声を方へと向く。そこには美しい黒髪に長いポニーテール、髪をまとめている緑のリボンがトレードマークな女生徒がいた。

「……箒？」

「二週間ぶりだね、篠田^{しのだ}さん」

「え!？」

静流の言葉に驚きを顕わにする一夏。その様子が顔に出ているが、静流はその女生徒の方を見ているので気付いていない。その女生徒は言うと、静流と話をしていた。

「そうだな。だが今の私は「篠^{しの}ノ^の之」なんだ」

「そうなんだ。ごめんごめん」

「いや、いい。つい最近までそう名乗っていたのだからな」

二人は仲良く話しているため蚊帳の外にいる一夏。しかし当の本人はそれに突っ込みもせず、ただただ箒と呼んだ知り合いが成長していることに驚いていた。

織斑一夏と篠ノ之箒は幼馴染だ。そのため過去の箒の事を知っているが、話し方が男口調ということもあつてよく男子から弄られていたこともあつて自分以外の男と話すことはほとんど見たことがない。一夏の場合はその状況を助けたこともあつて会話するが、それ以降も一夏の前では他の男と会話することはなかった。

(……箒……成長したんだな……)

本人が聞けば怒られるとわかつている一夏は言葉に出さないが、それでも何を考えているのか気付いた箒は一夏にジト目を向けた。

「一夏、何だその目は」

「え？ 生まれたままの目をしているんじゃないのか？」

「たぶんそういうことを言いたいんじゃないと思うよ、篠……ノ之さんは」

静流に言われて何かを思い出した一夏はすぐに聞く。

「そういえば、二人つて知り合いだったのか？」

「うん。昨年度の頭に彼女が転校して来てね。隣同士だったからそれが縁で話すようになったんだ」

「へえ……」

意外そうに箒を見る一夏。その反応に箒は「何か言いたそうだな」と圧力のようなものをかけるが、一夏はゆっくりと顔を逸らす。

「そう言う君たちは？　もしかして篠ノ之さんがずっと話していた——」

「それ以上は言うな！」

急に叫ぶ箒に元から注目していた生徒たちに、興味を持っていなかった者たちが加わる。顔を赤くする箒だが、その熱を冷ますように一夏が言った。

「？　よくわからないけど、俺たちは幼馴染なんだ」

「……へえ」

この時点で何か気付いたらしい静流は相槌を打つように答える。その答えを聞いた一夏は「反応が弱いな」と思うが、それは彼が箒の気持ちに気付いていないからできる所業だった。

「で、篠ノ之さんはどうしたの？　もしかして早速行動に移そうとして、僕を排除しに来たとか——」

「お前はもう黙ってる！」

「やだなあ。僕の口を閉めるのは並大抵じゃできないってよく知ってるでしょ」

「……………ああ、そうだな」

箒はどこか遠くを見始める。二人が知る世界が展開されているようで一夏はまた置

き去りにされるが、怒るよりもむしろ二人が仲良く話す様に感動していた。

するとチャイムが鳴って教員たちが戻ってくるのを見て、箒と一夏はすぐさま戻っていく。だからだろう、静流の顔が少し変わったことに気付かなかった。

第2話 今時の女

「——であるからして、ISの基本的な運用は現時点で国家の認証が必要であり、枠内を逸脱したIS運用をした場合は刑法によつて罰せられ——」

現在は二時間目——しかし朝から入学式と始業式があつたからか、実質5時間目の授業を受けている静流の精神的な体力は少々心もとない。

(でも、コミュニケーションはとつておくべきだよね)

後で休ませてもらおうと思つた静流は気を取り直してノートを取り続ける。そのページは宇宙にある惑星の光を思わせるほど黒く、その中に少しの色が混じっている。大切なものには線を引いたり赤ペンで注意書きをしたりと、まるで優等生のノートの一つだった。

だが静流は何度か得意な所は高成績を取つたことはあれど、トップを取つたことがなかつた。あくまで成績はそれなりに高い方ということだけである。しかし静流はそれで満足していて、別段気にしていなかつた。

(……つて、何してるんだらう?)

黒板に書かれていることを見ようと前に向いた瞬間、静流の目に一夏が隣の女生徒と

話をしているのを見た。顔を青くしている一夏を目撃した静流は、今の一夏の状況を察する。

(……………もしかして勉強していない……………とか?)

そんな馬鹿な——と思う静流。だがその予想は間違っていないかった。

「織斑君、何かわからないところがありますか?」

最前列の真ん中——さらに言えば教卓の真ん前という絶好のポジションだからだろうか、副担任の山田真耶が様子がおかしい一夏に声をかける。一夏は急に聞かれたこともあつて慌てるが、

「わからないところがあつたら聞いてくださいね。何せ私は先生ですから!」

胸を張つたために幼めな容姿を持つ真耶には似つかわしくない、箒よりもやや大き目な双丘が揺れた。そこに気付かないほど安心感を得た一夏はすかさず挙手する。

「先生!」

「はい、織斑君!」

「ほとんど全部わかりません!」

項垂れながらそう答える一夏。

「え…………。ぜ、全部、ですか…………?」

困惑する真耶は思わず周りに質問する。

「え、えっと……織斑君以外で、今の段階でわからないという人はいませんか？」

この学園に通う生徒は、この学園に入学を目指して勉強してきている。最初の授業内容で躓くことなどまずありえないことだ。もつともそれは一夏には当てはまらないことなのだが――

「……織斑、入学前に配布された参考書は読んだか？」

見かねた千冬が一夏にそう尋ねると、一夏の脳内に電話帳並の厚さを持った参考書が脳内に過る。

「……あの分厚いやつですよね？」

「そうだ。必読と書いてあっただろう？」

「……………古い電話帳と間違えて捨てまし――」

――ズバゴンツ!!

とても出席簿で殴つても出ない音が周りに響く。それを聞いた周りは少し引いた。

「この馬鹿者が。……仕方ない。後で再発行してやるから、一週間以内に覚えろ。いいな」

「い、いや、一週間であの分厚さはちよつと……」

すると千冬は静流の方を向く。嫌な予感がした静流は目を逸らすが、容赦なく質問する。

「舞崎、お前はどこまで参考書を読んでいる」

「……………理解と言う範囲によりますけど、大体100ページぐらいですかね」

ちなみに参考書は1万ページぐらいある。

「…一応聞くが、お前はこれまで何をしていた？」

「…そうですね。起床時間が大体4時45分くらいなので、5時ぐらいからランニングと柔軟、それに筋トレして、6時から15分くらいまでシャワーを浴びて、そこから45分くらいまで勉強して、7時過ぎまでに朝食を作ってアニメを見るかゲームをしながらご飯を食べて、30分過ぎから勉強。で、2時間ぐらいしたら空気が来るのでゲームして、30分すれば満足するからそこから1時間45分くらい勉強。12過ぎぐらいに昼食を食べて、1時半までゲーム。で、ゲームは飽きるから勉強して、4時半ぐらいから風呂洗って、沸かしている間に外に走って来て、大体1時間ぐらい休憩込みで戻ってきて、6時半ぐらいまで風呂入って、ご飯作って、そこからゲームしつつ勉強して、10時ぐらいに就寝しました」

「ゲームのしすぎだ。その分は勉強に当てたらもう少し進んだだろうに」

「これでもまだ譲歩した方だと思えますよ。酷い時にはゲームしながら勉強か、もしくはずっとオンラインゲームをしますからね。10时就寝は守りますが」

すると周りの生徒たちがひそひそと話し始める。それは静流が「オタク」ということ

が露見し、侮蔑するような内容だったが、当の本人にはすべて聞こえていた。

(……………みんな、見てないんだ)

意外に思いつつもそれ以外は何も思わず、さらに千冬からも何もなかったこともあってそのまま勉強を再開した。

「まあいい。舞崎、貴様も残りを一週間で覚えろ。それと——」

「お断りします」

「……………何？」

まさか断られると思っていなかった千冬は戸惑いを顕わにしたが、静流は容赦なく言った。

「別に僕は、まったく勉強していかないってわけではありませんからね。イメトレや体力もI S訓練の一環だと思いますが」

「……………いや、しかしな。ゲームは——」

「最近のゲームでもより細かく動くものはありますし、動画で確認しましたがI S戦の参考にはなると思っただけです。アニメだってI S抜きでもそれなりに参考になるものもあります。むしろ立ち回りは現実に起こる事象よりも参考になると思っただけです。そこまで加味しての先程の発言でしょうか？」

「……………ああ、もう。わかった」

降参した千冬はため息を吐くが、気を取り直したのかバツタリと目が合った一夏を睨んだ。

「ISはその機動性、攻撃力、制圧力と過去の兵器を遥かに凌ぐ。そういった「兵器」を深く知らずに扱えば必ず事故が起こる。そうしないための基礎知識と訓練だ。理解ができてなくても覚えろ。そして守れ。規則とはそういうものだ」

一夏はその言葉に打たれたが、対照的に静流は興味をなくしたのか自分の勉強を再開した。

「……貴様。「自分は望んでここに在るわけではない」と思っているな？」

唐突にそう言ったこともあつて静流は顔を上げる。千冬は目は一夏を見ているのを確認した静流はそのまま気にせず勉強を続けた。

「望む望まざるに関わらず、人は集団の中で生きなくてはならない。それすら放棄するなら、まず人であることを辞めるのだな」

それを聞いた数秒、静流は書いていたシャープペンを止める。だが何事もなかったかのように再開する。

「え、えつと、織斑君。わからないところは授業が終わってから放課後教えてあげますから、頑張つて？ ね？ ねっ？」

「はい。それじゃあ、また放課後によりしくお願いします」

一夏は普通に答えたつもりだったが、真耶の脳内には意外にも乙女だったようだ。

「ほ、放課後……放課後に二人きりの教師と生徒……。あっ！　だ、ダメですよ、織斑君。先生、強引にされると弱いんですから……。それに私、男の人は初めてで……」

その言葉にどういふことかわからなかったのか、一夏は心配そうに見ていたが、周りからの冷たい視線にそれどころではなかった。

そんな中、既に渦中にいない男子生徒は——何故か口を動かしていた。

二時間目が終わり、静流はすぐさま休憩するために教科書とノートを積んでいるところに一夏が現れた。

「なあ静流、頼みがあるんだ」

「勉強は自分でした方がいいと思うよ。君と僕とでは理解の法則が違うんだし」

だがほとんど休憩モードに入っていて、今すぐにも寝たい静流は少々冷たく返す。

「そこをなんとか。頼む」

「……………その前に寝かせてよ。僕だつて疲れているんだしさ」
「ああ。悪い」

——そりやそうだよな

何も自分だけじゃない。だつて男なんだからこんな好奇心旺盛な女子たちの視線にさらされて疲れないわけがないな——そう思った一夏は退散しようと思つていると、別の方から違うアプローチがやつてきた。

「ちよつと、よろしくて?」

「へ?」

まさか話しかけて来る人間がいるとは思ひもしなかつた一夏。静流は意識を手放そうとしている時に声をかけられたこともあつて不満げに顔を上げる。

「聞いてます? お返事は?」

「あ、ああ。聞いてるけど……………どういう用件だ?」

するとその女生徒は声を上げた。

「まあ! 何ですの、そのお返事。わたくしに話しかけられるだけでも光栄なのですから、それ相応の態度というものがあるのではないのかしら?」

一夏は顔を引きつらせたが、我慢して言つた。

「悪いな。俺、君が誰だか知らないし。静流、知つてる?」

「……………そんな余裕なんて僕にはないよ。そもそも僕、自己紹介中に落ちちやって途中からしか聞いてないんだから」

だがその女生徒にとって、二人の反応は信じられないことだったらしく、見下した態度で言葉を続けた。

「わたくしを知らない？ このセシリア・オルコットを？ イギリスの代表候補生にして、入試主席のこのわたくしを」

それも無理はないことだろう。男にとって普通、ISは厄災をもたらしたようなものだ。なにせISの出現で自分たちの地位が下がったのである。それに関して知って置けというのは無理な話だろう。

その一人である一夏は早速セシリアに尋ねた。

「あ、質問いいか？」

「ふん。下々の者の要求に応える貴族の務めですわ。よろしくてよ」

許可が出たこともあって一夏は遠慮なく言ったが――

「代表候補生って……………何？」

その内容が内容だけに聞き耳を立てていた生徒が全員こける。それほど一夏が言ったことは常識外れだった。

「あ……………あ……………あなた！ 本気で仰ってますの!？」

「おう。知らん」

凄い剣幕で迫るセシリア。だが一夏はそれに臆することなく素直に答えたため、頭を抑えてしまう。

「なあ静流、代表候補生って何だ？」

「……………確か、11歳くらいから登録できる国家所属の操縦者。ISに関する基礎知識……………それこそ今僕らが習っているところなんて暗記して言えるレベルの人たちで、IS操縦にも長けている人たちで、さらに登録だけでもIS学園以上と言われているから、エリートとして扱われている」

脳内で思い出しながらそう説明すると、気分が回復したのか手を腰に当てて胸を張ったセシリアは堂々と言った。

「そう、エリートなのですわ！」

そして一夏に人差し指を向ける。先端がもう少しで一夏の鼻に当たりそうなほど近かった。

「本来なら、わたくしのような選ばれた人間とは、クラスを同じくすることだけでも奇跡……………いえ、幸運なんですよ。その現実をもう少し理解していただける？」

「そうか。それはラッキーだ」

「……………馬鹿にしていますの？」

「お前が幸運だつて言ったんじゃないか」

ちなみにだが、国家に所属するI S操縦者は複数……少なくとも、3人以上はいるので二人しかいない男性I S操縦者とクラスを同じくする方がよほど幸運である。故に一夏もしくは静流と同じクラスになった女子たちの方が幸運と思うべきだろう。

「大体、あなたI Sについて何も知らない癖に、よくこの学園に入れましたわね。それにもう一人は少しはできるようですが、さつきから崩しに崩しているとは、本当にわたくしの話を聞く気がありますの？ 男でI Sを操縦できると聞いていましたから、少しくらい知的さを感じさせるかと思つていましたけど、期待外れですわね」

「俺に何かを期待されても困るんだが」

ため息を吐きながらそう答えると、静流はそれに追隨するように言った。

「ごめん、オルコットさん。頭使い過ぎてオーバーヒート起こしてるから、もう自分の席に戻ってください」

一見、普通に授業を聞いている静流だが、実は同時進行でその先の勉強をしているのである。一週間で少して100ページは勉強したとしても、いつまでもゆつくりしているわけではないことをよく理解している静流は少しでも追いつかれないように見えないう努力をしていた。

「ふん。まあでも？ わたくしは優秀ですから、あなたたちのような救いようのない人

間にも優しくしてあげますわよ」

——じゃあもう帰って！

なんとかその言葉を出さずに耐える静流だが、そろそろ色々と限界だった。主に数々の罵倒に対して言い返したいという意味で。

「ISのことでわからないことがあれば、まあ……泣いて頼まれたら教えて差し上げてもよくなって。何せわたくし、入試で唯一教官を倒したエリート中のエリートですから！」

堂々とそう宣言するように言ったセシリアに対して、一夏は再度尋ねる。

「入試って、あれか？　ISを動かして戦うってやつ？」

「それ以外に入試など……いえ、確かわたくしは代表候補生つてことで免除されたんですわね。ともかく、わたくしが言っているのはそれですわ！」

そう。IS学園の入試制度は特殊だ。通常、午前の中にISに関する筆記試験が行われ、午後からISでの戦闘試験が行われる。だが代表候補生の場合、既に同程度のISに関する試験が行われ、合格しているため免除されるのだ。そのため、戦闘試験が朝から行われる。

「あれ？　俺も倒したぞ、教官」

「……はい？」

だが一夏も、ちょうどタイミングよくその試験会場に訪れていた。

というのも一夏がISを動かした場所はIS試験会場。ちなみに彼が受ける予定だった藍越学園は確かに近くにあったが、同じ試験場ではなかった。

そこで一夏のことでも混乱した大人たちは、とりあえず人がいないこともあつて戦闘試験を行ったのである。

「倒したつて言うより、いきなり突っ込んできたからかわしたら、勝手に勝手に壁にぶつかつてそのまま動かなくなつたんだ」

「……………それつて倒したつて言わないと思うよ」

「あ、やつぱり?」

しかしセシリアは自分だけじゃないことが相当ショックだったため話を聞いておらず、驚きに目を見開かせている。

「わ、わたくしだけと聞きましたか?」

「女子ではつてオチじゃないのか?」

静流の脳内ではその言葉を聞いた瞬間、一夏がよく戦争映画で見られる迷彩装備をした上で戦場をかけ、見事地雷を踏み抜いて爆発したイメージが流れた。

「つ、つまり、わたくしだけではないと……………?」

「いや、知らないけど——」

——キーンコーンコーンコーン

独特なりズムでチャイムが鳴り、セシリアは舌打ちをして戻って捨て台詞のような言葉を吐いた。

「この話の続きはまたいずれ。逃げないことね！」

(……………もう来ないでほしいけど……………)

——来るだろうなあ

授業が始まったこともあり、顔を上げた静流はメモ帳を出して記入し始める。

『セシリア・オルコット』

イギリスの代表候補生。プライドが高く、女尊男卑。これからも絡まれる可能性あり。要注意』

そうメモをした静流は名前の隣に「~~ベ~~」マークを記入した。

(……………まあ、それで毎度毎度僕の邪魔をされたら困るんだよねえ)

などと思いつながら前を見ると、教壇には山田真耶ではなく、織斑千冬が立っていた。

「それではこの時間は実践で使用する各種装備の特性について説明する」

瞬間、静流の顔が千冬が心の底から驚くほど喜びに満ちる。そしてそれは——

「舞崎、もし頭に異常があると思うなら保健室に行つて来ていいからな」

「……………え？」

本気で千冬が心配するほどだった。

第3話 組長選出

放課後になり、静流はすぐに教室から出て行く。これから彼は日課であるトレーニングを行うからだ。

静流は真面目なこともあつて朝と夕方は運動することが多い。もつとも夕方はつい最近から行い始めたことであり、その運動量は以前よりも下がっている。

ちなみにだが、静流は他の外国人留学生と同じで早くから入寮している。本来それは他国から来たため体を時差に慣れさせるための処置であり、日本人が入寮されることは禁止されているが静流は訳あつてそれが許された。

——ブンツ　ブンツ

両手で持つてようやく初めて持てる長い棒を振り回す静流。森の中で行われているため、散っている桜の花弁がその風で舞い上がる。

(これも随分軽く感じるようになった)

そう思いながらも静流は特に意味もなく回す。これが続けたこともあり、静流の身体能力は大幅に上がったと言つても過言ではない。

しばらくして既定の数に達したこともあり、静流はその棒を巻いて背負い、部屋に向

かう。その姿はさながら長旅から帰ってきたという感じで、周囲で同じく運動している人たちの注目を集める。だが静流自身は何ともない風に歩いており、そのまま寮の中に入った。

——ズドンッ!!

そのまま自分の部屋へと向かっていると、急に重い音が聞こえる。まるで何か硬い物同士がぶつかって、貫通した音のようだ。

(……………?)

さらにそれが自分の部屋の方からであるため、余計に静流は警戒する。

そのまま歩いていく静流。当然、警戒は怠っていない。そしてそれは周りが女共、しかも薄い生地ですぐに見えそうならいの露出をして、静流の存在に気付いた女子たちが騒さわごうとも一切気にしなかった。

「……………何、してるの?」

集まった中心に来た静流。一夏が床に座っていて、目が合った瞬間に静流はドアに視線を向けた。

「……………君、背中に針でも仕込んだの?」

「ち、違えよ! そういうんじゃない!」

「……………じゃあ、これは——」

するとドアが開き、中から箒が現れる。私服に着替えたのだろうか、何故か袴姿でいて、さらに静流の鼻にシャンプーの匂いが襲った。

「……………シャワー上がり？」

「舞崎か。……………変か？」

「洋服がもはや当たり前になっっている今の世の中じゃあ、一般的に袴を着るのは変な部類に入ると思うけど」

「……………こういう服しか持っていないんだ」

すると静流が冷や汗をかき始め、じつくりと袴姿を観察する。

「……………何だ？」

箒はあまり注目されるのに慣れていない。そのため、次第に顔を赤くしてゆつくりとドアを閉め始める。

「ちよつと待ってくれ箒。静流も、もうそろそろ止めてやれよ」

だが静流は返事せずにただ箒を観察する。そこで箒はあることに気付き、静流の前へ手を出した。しかし静流は何の反応も示さず、ただ一点を見ていた。

「……………気絶している」

「え？」

「おそらく私の袴姿を見て日頃から着ていると思い、値段換算をしていたのだろう。舞

崎は計算が特に得意だからな。単純式なら100問の問題を5分で終わらせるほどだが……その値段を予想し、ショートしたというところか」

——パンツ！

箒は静流の前で音を鳴らすと、静流はまるで電気を一瞬流されたかのように体を動かした。

「あ、篠……ノ之さん、どうしたの？」

「いや、気絶していたのでな。大丈夫か？」

「うん。大丈夫。ちよつと計算したらショックを受けて……」

「じゃあね」と言った静流はそのままそこから離れる。全員はポカンとした顔で静流をそのまま見送る。一夏はようやく立ち上がり、箒と共に部屋の中に戻ろうとして思い出した。

「悪い！ ちよつと来てくれ！」

「え？」

急に引つ張られてバランスを崩す静流。だがそれもすぐに回復し、そのまま部屋の中に入れられる。それを見て周りには歓喜の雄叫びを上げたが、一夏は一切気にせずドアを閉めた。

「な、何？ どうしたの？」

「ど、どうしたもこうしたもねえよ！ 何で俺と静流が別の部屋なんだよ」

「それは僕にもわからないけど……別に気にすることじゃない？ ねえ、篠ノ之さん」

「そ、そうだな」

話を振られた箒は顔を赤くしながらも肯定する。

「とにかく僕は部屋に戻るよ。ここで騒いだって仕方がないし、もしかしたら僕の部屋にも同居人がいるかもしれないから、向こうが不満があるならまたここに来るよ」

「で、でも——」

「舞崎がこう言ってるんだ。一夏だつて男なら、潔く受け入れろ」

箒の言葉もあつてか一夏は「わかった」と頷き、静流は部屋を出る。

そしてそのまま自身の部屋である「1058」号室へと向かった。

翌日。朝早く起きた静流は昨日と同じコースで同じ金属の棒を背負い、走る。そして森の中に入って筋トレし、木を相手に稽古をし、棒を振り回し、帰りも走つて戻る。こ

れでも背中が重いこともあってかなりのトレイニングになる。

それを終えた静流は部屋でシャワーを浴び、さっぱりしてから購買部の時間まで勉強を。始まる数分前に部屋を出て、購買部にある学生証をタッチして支払いし、教室に入ってそこから勉強を始める。

しばらくすると教室のドアが開き、最初だと思っていた女生徒が既に静流がいることに驚いた。そのことに気付かない静流はそのまま勉強を続け、しばらくして人が多くなったところでチャイムが鳴る。

「諸君、おはよう」

「おはようございます」

「「お、おはようございます」」

教室に二人の教員が——というよりも千冬が入ってきたことで全員の気が引き締まる。静流は顔を上げると、いつの間にか教員が来ていたので軽く頬をマッサージした。

「これよりクラス対抗戦に出る代表者を決める」

その言葉に全員が動揺し、お互い顔を見合わせた。

「クラス代表者とはそのままでの意味だ。対抗戦だけではなく、生徒会の開く会議や委員会への出席……つまり学級委員や委員長みたいなものだ。ちなみにクラス対抗戦は、入

学時点での各クラスの実力推移を測るものだが、今の時点で大した差はないが、競争は向上心を生む。一度決まると原則的に一年間変更はないからそのつもりでな」

そう説明があつたことで今度は隣や前後で会話をし始める。そんな中、一人の女生徒が挙手した。

「はいっ。織斑君を推薦します！」

それに続いてもう一人も挙手、同時に意見を言う。

「私もそれが良いと思います！」

やがて「確かにそれがいい」や「数少ない男の子なんだし、持ち上げないとね！」などと言つた会話が聞こえてくるが、一夏は立ち上がつて言つた。

「お、俺?！」

まるで当然と言わんばかりに「彼ならなんとかしてくれろ」という視線を向けられ、一夏は焦り始めた。

「織斑、席に着け。邪魔だ。自薦他薦は問わない。他にはいないのか? いないなら無投票当選だぞ」

「ちよつと待つてくれ! 俺はそんなことをするつもりは——」

「自薦他薦は問わないと言つた。他薦されたものに拒否権はなどない。選ばれた以上は覚悟をしろ」

無慈悲に放たれるその言葉を聞いた一夏は少し考え、挙手をした。

「だったら、俺は静流を推薦するぜ！」

「……………」

だが静流は完全に興味がないのか、さつきから勉強をしている。

「舞崎、参加しろ」

「でも、辞退できないんですよね？ だったらすみませんが、僕は自分のことに専念させてもらいます。どうせ結果はわかりきっていますし」

「……………」

千冬が辞退させないようにしたのは、積極的な参加を心がけてもらうためだったが、静流の言葉は計算外だった。もしこれで静流の言葉を聞いて他の者も参加しなくなったらどうしようかと心配したが、一人の女生徒が手を挙げていたこともあって、そんなことはなかった。

「篠ノ之、何だ？」

「あの、私も舞崎を推薦します」

「「え？」」

男子二人が同時に間拔けな声を上げるが、千冬は尋ねた。

「織斑はともかく、どうして篠ノ之は舞崎を推薦しようと思った？」

「……私は、去年一年間舞崎と同じクラスでした。その時彼は、クラス代表ではありませんでしたが人を動かす力を存分に発揮し、さらに本来のクラス代表を食わない程度に立ち回っていたと思います。それほどの力を持つていれば、このクラスでも存分に力を発揮できると思ったので推薦しました」

「……………」

——まさかそんな風に思っているなんて

自分がそう評価されているとは思わなかった静流は目頭が熱くなるが、それでも周りの反応は悪い。

「でも、私は織斑君の方が良いと思うよ」

「舞崎君はちよつと……なんか暗そうだしさ」

「むしろ裏方の方が似合うんじゃない？」

それを聞いた箒は反論しようとするが、自分が持つスマホが振動し、それを手に取る。静流からのメールであり、「反論したら負けだよ」と書かれている。

千冬は箒が何かをしていることに気付いていたが、それが今必要なことだと判断し、見逃すことにした。

(……………確かに、そういう意味では舞崎が適任か)

おそらくこのクラスで生身で強く、感情が激しい箒が暴れたら大半の人間が大怪我を

するだろう。それを御し、立ち回れる人間は貴重であり、このクラスでも上手くやっていける。だが、千冬には一つ不安要素があった。

(それをどう、説明するか)

そこまで考えていた時、机が叩く音が辺りに響く。

「待つてください！ 納得がいきませんわ！」

セシリア・オルコット。昨日、一夏と静流の二人に絡んでいた女生徒であり、イギリスの代表候補生だ。

その女はさつきからずっと自分が推薦されるものと思い込んでいたが、誰からも推薦されることがなかったため、「私、不機嫌です！」と言わんばかりに怒りを見せていた。「そのような選出は認められません！ 大体、男がクラス代表だなんて良い恥さらしですわ！ わたくしに、このセシリア・オルコットにそのような屈辱を一年間味わえと仰るのですか!？」

千冬の隣にいる真耶が止めようとするが、千冬がそれを制止する。

「でも、これ以上は——」

「いや、いい」

——言いたいのなら、言わせておけばいい

千冬は幼い頃からよく黒い噂を立てられることが多かった。嫉妬などの類であり、そ

う言う手合いはいつも気が済むまでやらせていた。もちろん、とある人物に協力を仰ぎ、自分が巻き込まれないように気を付けて。

「実力から行けばわたくしがクラス代表になるのは必然。それを、物珍しいからという理由で、経験があるといつても表立ったことがない極東の猿共にされては困ります！」

わたくしはこのような島国まで I S 技術の修練に来ているのであって、サーカスをする気は毛頭ございませんわ！」

「……………」

千冬は心配になって静流の方を見るが、静流は先程から変わらず勉強をしていたのを確認すると内心安堵した。

「いいですか?! クラス代表は実力トップがなるべき、そしてそれはわたくしですわ!」
興奮が冷めないセシリアはそのままの勢いで話し、自分がとんでもないことを言っていることに、そしてクラスメイトを敵に回しているのを気付いていない。さらにセシリアはそれも酷いことを堂々と言い放つ。

「大体、文化としても後進的な国で暮らさなくてはいけないこと自体、わたくしにとつては耐え難い苦痛で——」

「——イギリスだって大してお国自慢ないだろ! 世界一まずい料理で何年覇者だよ——」

(……この馬鹿者が)

今のは黙っておくべきだった。後は注意し、自分がどれだけのことを言っていたかをわからせるつもりだった千冬はばれない様に舌打ちをする。

「あつ……あ……あなたねえ！ わたくしの祖国を侮辱しますの!」

「先に侮辱したのはそっちだろ！ 静流！ お前からも言つてやれ！」

(おい馬鹿！ なんてことを——)

だが静流は話を振られたことで驚いているだけで、ポカンと口を開けているだけだった。

「……………もしかしてあなた、話を聞いていなかったとか——」

「……………あ、うん。でもさ、僕はいいかな？ そうやって言い返したって喧嘩が大きくなるだけで何の意味もないと思うんだ」

「日本が馬鹿にされたのが意味がないって言うのかよ!」「あなたもわたくしの祖国を侮辱しますの!」

「ちよ、ちよつと落ち着いてよ。そういうことじゃないんだって」

静流は二人をなだめ、改めて説明する。

「ちよつと考えてみてよ。そもそもイギリスは本初子午線を通っているんだ。本初子午線から見たら日本なんて本当に極東と言つても差支えがない場所にある。それにそも

そも、日本の近くにI S学園があるのつてI Sの発祥が日本ですべての兵器がその価値を失わされた。そのことでI Sは各国に分配され、一番調べられている日本の近くにI S学園が作られたつてだけ。それにいくら貴族つて言つてもオルコットさん自身も忙しかつたとか、事情があつてあまり日本文化に触れられていないかもしれない。織斑君だつて、あまりイギリスの文化を知つてるわけじゃないでしょ？」

「……そ、それはそうだけど……」

「それにオルコットさんだつて日本文化に完全に触れているわけじゃない。あなたにも代表候補生としてのプライドがあつて、男に負けたくないという気持ちはわかる。でも、だからつてあまり先入観だけでそうやつて一方的に非難するのは止めてほしいんだ」

「……ええ。そ、それもそうですわね。確かに、今回ばかりはわたくしに非がありません」

少し納得がいかないところがあるのか、渋々と言う感じだ。瞬間、彼女は一夏に指を向けて言つた。

「ですが、あなたがわたくしの祖国を侮辱をしたことは変わりません。わたくしと決闘なさいー」

「おう、いいぜ。四の五の言うよりわかりやすい」

(えー)

実の所、静流はほとんど聞いていた。セシリアは激昂していたことも、それにキレて一夏がイギリスを侮辱することも。だからこそ、ここはお互いを納得させて和解させた方が後々絡まれることはあるにせよ、それほど苦しい思いはしないと。

だがセシリアの怒りはそう簡単に冷めるものではなかったらしい。そして一夏も容易に受けてしまった。

(すまない、舞崎)

千冬は静流の行動を少しだけだが理解していた。その上で二人がこんなことを言いだしたのなら、もう止めることはできないだろう。

「言っておきますけど、わざと負けたりしたらわたくしの小間使い——いえ、奴隸にしますわよ」

「侮るなよ。真剣勝負で手を抜くほど腐っちゃいない」

「そうですねの？ まあなんにせよちようどいいですわ。イギリス代表候補生のこのわたし——セシリア・オルコットの實力を示すまたとない機会ですわね！」

今のセシリアと対照的な態度を取って沈んでいる静流。だが周りはその様子を情けないと思うよりか、むしろ同情的な視線を向けていた。

「ハンデはどのくらい付ける？」

「あら、早速お願いかしら？」

千冬は物凄く嫌な予感を感じて、それを証明するかのように一夏は言った。

「いや、俺がどのくらいハンデ付けたらいいのかなーと」

瞬間、クラスから笑いが起こり、同時に千冬は頭を抱えた。

(……………この馬鹿者が)

「ここはIS学園。そしてさっき向こうが言った「自分の実力を示すまたとない機会」——つまりセシリアはISで戦おうとしているのだ。それは素人である一夏に対して、一方的な勝利を得るためである。」

そして一夏のあの言葉で笑ったのは——彼女らが心の底から一夏が負けることを確信しているからだ。

「織斑君、それ本気で言ってるの？」

「男が女より強かったのって、大昔の話だよ？」

「織斑君は、確かにISを使えるかもしれないけど、それは言い過ぎだよ」

それを聞いた一夏は「確かにそうだ」と思う。

今の男の立場が弱いのは男の腕力が何の役にも立たない——それはISがあるからだ。

ISがあれば従来の兵器を凌げる、ISは女にしか扱えないが、それはつまり女がい

れば国を守れることができる。つまり女が強い。

それが今の考え方で、それは日本を含め全世界のほとんどが考えていることだ。

(今ので笑っていないのは、二人か)

その内の一人は篠ノ之箒。一夏とも、そして静流とも交流がある。そしてもう一人はどちらにもないが、少なくとも静流の敵ではないことは確かだ。

(…………怒るだろうが、入れるか)

そう思った千冬は今は今もう興味をなくしたのか、勉強をしている静流を観察する。

「…………じゃあ、ハンデはいい」

「ええ、そうでしょうそうですね。むしろ、わたくしがハンデを付けなくていいのか迷うくらいですわ。ふふつ、男が女より強いだなんて、日本の男子はジョークセンスがあるのね」

セシリアは一夏をあざ笑う。

すると一夏の斜め後ろの女子が忠告するように言った。

「ねー、織斑君。今からでも遅くないよ？ セシリアに言つて、ハンデ付けてもらつたら？」

「男が一度言い出したことを覆せるか。ハンデはなくていい」

「えー？ それは代表候補生を舐めすぎだよ。それとも、知らないの？」

確かに一夏はＩＳに関して何も知らない。姉である千冬もＩＳ学園の教師をしているのであまり帰らない。そして今度は自分もＩＳ学園で住むことになった。そのため両親がいない家庭で育った一夏はいつも通りに掃除したこともあつて大して勉強時間を取るどころか、参考書を捨ててしまった。彼の友人の一人はＩＳ——というよりも代表候補生に興味を持っていたが、ＩＳ関連の話はあまりしていない。そして一夏は千冬が戦っている動画を何度か見たことがあるだけで、代表候補生がどれだけの強さかを知らなかった。

今できることと言えば、後悔することぐらいだろう。

「さて、話はまとまったな。それでは勝負は一週間後の月曜。放課後、第三アリーナで行う。織斑とオルコット……そして舞崎はそれぞれ用意をしておくように」

「……えつと、自分もですか?」

まさか参加することになるとは思わなかった静流は困惑しながら尋ねる。

「そうだ。織斑だけならば抜きにしようと思っていたが、思いの外まともな推薦もあつたことだ。それにこの決闘はクラス代表を決める際に起こった決闘だ。推薦されたお前にも参加する義務がある」

「いやいやいやいや、ないですから! 絶対ないですよ!」

「ただでさえ、ＩＳを動かして日が浅いのに」と言葉を続けるが、千冬はそれを遮断す

るように言った。

「一度決まったことにガタガタ抜かすな。男ならやるくらいの勢いは見せろ」

もうすぐSHRが終わるということもあり、千冬はそう言ったがすぐにそれが悪手だということを理解する。

静流は特に何も言わず、「わかりました」と答えると同時にチャイムが鳴った。

第4話 篠ノ之箒の事情

SHRが終わってすぐの職員室。その日はたまたま彼女ら二人に担当する授業がないため、職員室で溜まった仕事を消化することになる。

そのデスク上で千冬は座るとすぐに盛大なため息を漏らす。

(……………やってしまった)

昔から彼女はそうだった。男に対して過度な期待をすることが多く、さらに言えば口が悪い。いくら時間が迫っていたからと言って静流に対してあの言い方はないと思っ

た。

「大丈夫ですか、織斑先生」

「……………大丈夫です……………」

「舞崎君、ですか」

真耶の言葉に千冬は頷く。

今回のクラス代表決めに、千冬は静流を決闘を出すかどうかで迷った。

確かに静流は素人で、おそらくセシリアとまともに戦うことすら無理だろう。だが――

(だがアイツなら——)

千冬は一夏と静流に決定的な差があることを理解していた。

一夏は直情型でほとんどが勘で行動することがある。だが静流は冷静で空気が読める。だからこそ、

(だからこそ、あの試合に出て空気を知る必要がある)

ISでの実際行われるものがどんなものか。セシリアとの戦いで自分本来のスタイルを確立してほしいと思つたいた。

静流は普段のISの表舞台だけじゃない。それによつてできた裏を見て来た。そして千冬はそれに立ち会つていたからこそ、今の静流には感謝と尊敬の念を持つている。

(……………できれば、舞崎にはそのままでもいい)

千冬がそう思っていると、真耶が千冬に声をかける。

「織斑先生、学園長が部屋に来るようにと言っていましたよ」

「……………何？」

千冬は席を立ち、職員室とは別の部屋にある学園長室へと足を運ぶ。

ドアをノックし、返事を聞いてから「失礼します」と言つて部屋に入る。

「お待ちしておりました、織斑先生」

椅子に座る初老の女性がそう言いながら席を立ち、千冬に応接用に準備されたソ

ファーに座るように促した。

千冬はソファーに座ると、どうやらあらかじめ用意していた麦茶を持って来て、千冬の前に渡す。

「どうぞで」

「ありがとうございます」

千冬はそれをいただく。その女性——学園長も席に座り、話を切り出した。

「先程、学園上層部から通達がありました。専用機は織斑一夏の方に渡せ、と」

「……………そうですか」

自分の弟に渡されるので本来なら喜んでいいのだが、千冬は浮かぬ顔をする。学園長はそれが気になって尋ねた。

「喜ばれないのですね。嬉しくないのですか」

「実力で選ばれたわけではありませんからね。それに——」

——それに、一夏よりも舞崎の方が良いだろうに。

学園長はその気持ちに気付いたのか、笑みを浮かべながら言った。

「他人の恋愛事情に口を出す気はありませんが、不祥事は困りますので彼が卒業してからにしてくださいね」

「ちよつ、それってどういうことですか!？」

「違いましたか？ てつきり織斑先生が舞崎君に惚れたのかと」

「そういうことはありませんよ。ただ、舞崎の方があの機体を上手く扱えるのではないかと思っただけです」

一夏に渡される機体のことを知っている千冬がそう言うのと、学園長は目を丸くする。しばらくすると笑い始めた彼女に対して千冬は怒った。

「何ですか、いきなり」

「いえ。……意外だったんです。あなたがそうやって他人を鼻屑するなんて」

「…………それは学園長がああ時の舞崎しか知らないだけです。今の舞崎はまともです」

「……………そうでしょうね。聞いた話では、彼はちやんとクラスに溶け込もうとしているのか。これも織斑君の……………いえ、篠ノ之さんのおかげでしょうね。彼女が彼と交友関係を持っていたからこそ、舞崎君はクラスに溶け込もうとしている」

学園長の言葉に千冬は「そうですね」と答える。

実際、千冬もそう言う意味でも箒に感謝していた。以前から交流があることは知っていたが、ああも仲良さげに話しているとは。

(……………いや、褒めるべきは舞崎の方か)

千冬にとって小学生の時の箒は自分と同じ——あまり友達が作れないタイプだと

思っていた。だが今では好いている一夏ではなく、静流という別の友人もいるのだ。当時の状況はわからないが、おそらくは――

（舞崎の方から話したか）

そう思うと、自分の心配は杞憂かもしれないと思い始める。

――そんなことはないというのに

3時間目が終わると同時に一夏の周りに人が集まりだす。朝も何人かが一夏に話しかけており、それがきっかけで行動に出たのだろう。中には有料の整理券を配っている物もいた。

一夏としては箒と話がしたかったが、その肝心な本気は既に席を離れた後だった。

「……舞崎、少しいいか？」

「……ん？」

寝ようとしていた静流を箒は起こす。少々不機嫌そうだった静流だが、話しかけて来た相手が箒と知るや顔を上げた。

「何かな？」

「……さっきのことを、謝ろうと思って」

静流はそれを聞いて呆然としたが、やがて笑った。

「何がおかしい」

「いやいや、別にそんなことは何も思っちゃいないよ。それに僕自身、心が救われた気がしたしね。……もしかして、この二時間ずっとそんなことを気にしてたの？」

「あ、ああ」

「気にしなくていいのに。それに織斑先生の言う通りでもあるからね。流石に織斑君の推薦だけじゃ、是が非でも取り下げてもらおうつもりだったけど——」

——パンツ!!

どこからともなくそんな音を聞いた静流と箒は前を見る。前の方では何故か目力だけですべてを支配できそうなオーラを放つ千冬がいた。

「休み時間は終わりだ。散れ」

まるで蜘蛛の子を散らすかのように逃げていく生徒たち。それを見た二人は少しばかり唾然とした。

「篠ノ之さんも、ほら」

「……そ、そうだな」

最後辺りになったが、実際はまだ休み時間なので特に注意されなかった。

「ところで織斑、お前のＩＳだが準備まで時間がかかる」

「……………へ？」

「学園で専用機を用意することだ」

「え……………えっと……………」

どうやら一夏はまだわかっていないらしい。一夏は静流の方を見るが、まだ休み時間と言ふこともあつて静流は突つ伏していた。

「せ、専用機!? 一年の、しかもこの時期に!?!」

「つまりそれつて政府からの支援が出てるつてことで……………」

「ああ。いいなあ……………。私も早く専用機欲しいなあ」

周りがそう騒ぎ始めているというのに、一夏はどうして羨ましいのかを理解していなかった。

「舞崎、教科書６ページを音読しろ」

「『ＩＳすべてにはＩＳの心臓とも言えるＩＳコアというものが必要であり、その技術は全く開示されていません。現在確認されているＩＳコアは４６７個で、それはすべて篠

ノ之東博士に作られたもので、完全なブラックボックスとなっていていたため未だに他の国では作れない状況にあり、世界各国にある企業や機関では数少ないコアをやりくりして研究、開発、訓練を行っています』

「……それはお前がまとめたものか？」

「まとめたものをさらに思い出しながら言ってみました。あ、もしかして「コアを取引することはアラスカ条約の第7項に抵触するから禁止」ってところも言うべきでした？」

それを聞いた千冬は完全に「間違えた」と思った。

「そうか。……まあつまりはそういうことだ。本来なら専用機は国家もしくは企業に所属する人間にしか与えられない。が、織斑の場合は状況だからデータ収集を目的として専用機が用意されることになった。理解できたか？」

「……な、なんとなく……」

千冬は心の底から後悔していた。弟の勉強不足であることを悔やむのもそうだが、自分に専用機を渡す権限がないこともそれに含まれる。

「じゃ、じゃあ、静……舞崎に専用機がないのですか？」

「ああ。発覚した時期、そして順番から織斑の方を優先された。悪いな、舞崎」

「いえ、お気になさらず」

そう言つて静流は時間も時間だからか、勉強を始める。

すると一夏の二つ後ろに座る生徒が手を挙げて質問した。

「あの、先生。篠ノ之さんつてもしかして篠ノ之博士の関係者なんでしょうか……?」

千冬はそれを聞いて一度箒の方を見る。箒も千冬の方を見て真意を理解したのか、頷いて答えた。

「そうだ。篠ノ之はアイツの妹だ」

瞬間、教室は騒がしくなる。そして彼女らは席を立ちあがり、一瞬で箒の所へと迫った。

「そこまでだー!」

それを断ち切るように千冬は大声を出し、動きを止める。

「で、でも先生——」

「でも、何だ? 仮に貴様らの家族に天才がいて、そいつが失踪したとしよう。常にそいつと連絡を取っていないかと聞かれ、学生生活に支障をきたされたらどう思う。私が今日ばらしたのは、いずれ知られることだからだ。好奇心だけで騒ぐのは止める。いいな」

「……はい」

一人が返事すると、波紋が広がるように周りの生徒も同じように返事をする。そして千冬は真耶に授業を始めさせた。

昼休みになるとすぐにセシリアが一夏の所へと早速向かう。

「安心しましたわ。まさか訓練機で対戦しようとは思っていなかったでしょうけど」

食堂に行つて食事にしようとしていた一夏は突然のことに思考が付いて行かず、間の抜けた返事をしてしまう。

その頃、箒の所へ一人の生徒が向かつていた。先程千冬に箒のことで質問したその少女は箒に対して興味というよりも――

「あの、篠ノ之さん。さつきはごめんね」

どうやら下手すれば騒ぎになっていたことを謝りに来たらしい。

「……………ええと」

「あ、そういうえば自己紹介がまだだったね。私は鷹月静寐^{たかつきしずね}。よろしくね、篠ノ之さん」

「…よ、よろしく。……その、さつきことはあまり気にしなくていい。織斑先生が鎮めてくれたし、私の姓も姓だからな。ISに興味を持っている以上、気になるのは仕方がないだろう」

そうスラスラと言えていることに箒が驚いていた。

(これも、舞崎のおかげか)

そう思いながら静流の席を見るが、既に席を立ったのか誰もいなかった。

その視線に気付いたらしい鷹月静寐は箒に言った。

「もしかして、舞崎君のことが気になるの?」

「……………うむ。変かもしれないが、私にとって舞崎は恩人だからな」

「……………お、恩人?」

そこまで重い話だと思わなかった静寐は驚く。するといつの間にかいたのか、静寐の隣からのほほんとした声が箒の耳に届いた。

「ねえねえ、マッキーが恩人ってどういうこと?」

「……………お前は?」

「布のほとけほんね仏本音だよ。よろしくね、しののん」

「……………し、しののん!」

それを聞いた静寐はフオローを入れた。

「どうやらこの子、他人にあだ名をつけて呼ぶタイプみたいなの」

「……………そ、そうなのか……………」

初めて見るタイプだということもあり箒は臆するが、静流と出会った時も似たような

感じだったことも思い出して「そういうものだ」と納得する。

「それでそれで、マッキーが恩人ってどういうこと〜?」

「……話せば長くなる。少し待て」

箒は一夏とセシリアが話をしているのを確認しつつそう言い、二人の方に行く。

「オルコット、もうそこまでにしてやってはどうだ? 仮にも今は昼食を取る時間であり、他にも休み時間もある。続きはまた別の機会にしてやってくれ」

「あら、篠ノ之さん。そう言えばあなた、篠ノ之博士の妹なんですってね」

「ああ。生憎それだけだ。残念ながら必要な情報を取れるとは思わないことだ」

するとセシリアは箒の目を見て恐怖を覚えて怯む。というのも箒は一見すれば何もない風に見えるが、その実そのことに触れられたことで目が笑っていないのである。流石の一夏もそんな箒に対して少し恐怖を抱いた。

「ま、まあ、どちらにしてもこのクラスで代表に相応しいのはわたくし、セシリア・オルコットであるということをお忘れなく」

そう言ってセシリアはどこかに行く。それを見届けるつもりは元からなのか、離れたのを確認した箒はすぐさま言った。

「一夏。共に食堂に行かないか? 静流はもう行っているようだぞ」

「何だって!! 一緒に食堂に行こうと思ったのに……」

「おそらくオルコツトを避けたのだらうな。言つては悪いがあの手は正直私も苦手だ」

そう言つた箒は先に行き、静寐と本音、そして一夏は彼女の後に付いて行つた。

一方その頃、静流の方はと言うと半円形の形をした複数座れる席に一人で座り、黙々と食事を取つている。行儀が悪い事を承知で本を読んでいる。

周りは空いているその部分に座りたいと思うが、静流に声が掛けずらいこともあつて敬遠されていた。それからしばらくして箒たちが訪れ、各々の食事を受け取つて空いている静流の席へと向かう。

「静流、一緒に座つていいか？」

「……………いいよ」

静流はお盆を持つて立ち上がり、少し離れて一夏たちに指示をする。

「君たち二人はさつき僕が座つていたところから。織斑君は左から真ん中に入つて。そして篠ノ之さんが入つて行つて、その隣に僕が座るよ。あ、君たち二人はじゃんけんして決めてね。流石にそれで喧嘩別れしても責任取れないけど」

「……………」

箒は知つているが他の三人はわかりやすい指示に戸惑いを見せる。

「どうしたの？」

「いや、急に指示をしたと思つたらわかりやすい指示が飛んで来たから……」

「意外だろう？ 舞崎はよくそれで裏委員長とか呼ばれていた。一部には裏番とか言われていたな」

「それはただ囃してただけだよ。僕はそういう大層な存在じゃない」

箒が着席しながらそう言ったこともあり、場所が空いたので静流はそこに座った。

「そういうえびさ、静流。ISのこと教えてくれないか？ このままじゃ来週の勝負でもできずに負けそうだし」

「普通はそうなんだけどね。だって織斑君だって素人でしょ？ 相手は経験者なんだし」

「それはそうなんだけどさ……」

「じゃあ、篠ノ之さんに教えてもらえば？」

「何!？」

驚いたような顔をする箒に、静流は小さな声で言った。

「これはチャンスだよ。こういう時を狙って接近しないと気が付いたら別の子と引っ付いている、なんて洒落にならないでしょ？」

「……そ、それはそうだが」

その様子を見ていた本音は囃すように言った。

「ねえねえ、マッキーとしののんって仲いいけど、付き合ってるの？」

「ちよつ、本音?」

急だったことで静寐はそう注意するように言ったが、それでも年頃の女子であり、どうやら気になるようだ。

「残念ながら。それに今はそういうのに興味を持てるほど、余裕なんてないしね」

「そうなんだ」

静流たちがそんなことを話していると隣では箒たちがISのことを話していた。

「……仕方ない。舞崎も今度の試合に向けて頑張っているんだ。私が——」

「——ねえ! 君って噂の子でしょ?」

箒が承諾しようとしていると、誰かが一夏に声をかける。全員が驚いてそつちを見ると、赤いリボンをしている生徒だった。

IS学園は学年によってリボンやネクタイの色が決まっており、今期1年の生徒は青を、2年は黄、3年は赤となっていた。つまり彼女は3年生という事になる。

「はあ、たぶん」

一夏は噂に興味がない……というよりも気にする余裕がないため微妙な返事をする。

「代表候補生と勝負するって聞いたけど、ほんと?」

「はい、そうですけど」

それを聞いた4人は一斉に恐る恐る静流を見るが、先程のテンションはどこに行った

のか、今は大人しく食事をしていた。

「でも君、素人だよな? IS稼働時間はどれくらい?」

「……えっと、20分くらいだったかと」

「それじゃあ無理よ。ISって稼働時間がモノをいうの。その対戦相手、代表候補生なんですよ? だったら軽く300時間はやってるわよ」

だが一夏はどれくらい凄いかわからないのでイマイチその時間にピンと来ていなかった。

「でさ、私が教えてあげよつか? ISについて」

それを聞いた一夏は驚き、その三年生を見る。知識の豊富さなどを考え、もしかしたらと思っていたところに思わぬ横槍が入った。

「結構です。私が教えることになっていきますので」

まさか一年生が出て来ると思わなかったようで、三年生は表面上は笑顔を見せながらも箒を見下す視線を向ける。

「あなたも一年生でしょ? 私は三年生。私の方が上手く教えられると思うなあ」

「私は、篠ノ之東の妹ですから。なので結構です」

するとその三年生は顔を青くし、

「そ、そう。それなら仕方ないわね」

そう言つて逃げるように去る。

その様子を見ていた静流は特に何も言わずにいたが、静寂と本音は何とも言えない視線を箒に向けた。

「笑いたければ笑え。私はそれだけのことをした」

そう言つた箒はそのまま食事を続ける。静流は早めに食べ終わったため食器を片付けて席を立つ際に言つた。

「でもまあ、ありがとう。さっきの、僕のためでしょ？」

「——!? きよ、去年は世話になつたからだ」

その言葉に静流は小さく笑い、席を立つて食器を片付けに行つた。

「なあ、箒。本当に教えてくれるのか？」

「言つてしまつた以上は、な。それに、舞崎とやるよりも同室なのだから効率も良いだろう」

「そ、そうだな！」

そしてこの後、彼らは腕試しという事で剣道場に行くことになるのだが、それが思わぬ展開になるなどまだ誰も予想していなかつた。

第5話 本音

「篠田^{しのだほうき}箒だ。よろしく頼む」

だがそこで起こったのは笑いだった。それは彼女にとっていつものこと。感じがまんま「箒」だからである。

——箒

それは特別な思いから付けられた名前であり、箒自身その名前を気に入っていた。だが未だ、その名前に込められた意味を知る者に巡り合ったことはなかった彼女は、転校するたびに笑われている。

さらには、からかうために質問する人間も出ることだった。ほとんど同じようなもので「掃除が得意なのか」や「掃除やの娘なんですか」などが主である。

そして箒の予想通り、一人の男子生徒が手を挙げた。だがその質問は予想の斜め上を越えたものだった。

「もしかして篠田さんの家に大型の望遠鏡ってありますか？」

全員がその男子の方を見る。

その生徒は背は高い方なのだが、ひよろつとして印象を受ける。所謂インドア派

のような人間だった。

「……いや、そんなものはなかったはずだが……」

神社と剣道場がある屋敷と言っても過言ではない家に生まれた筈だが、そう言ったものは記憶が正しければ置いていないはずだ、と考える。

(……姉さんが個人で持っていていそうだがな)

その生家から離れて既に4年は経過していたが、未だ鮮明に記憶に残る生家から言われた物を探すが、そんなものはなかった。

「ってことは違うのかな？ てつきり僕は筈星……彗星の方の意味で名前を付けられたって思ったんだけど」

彼女は思っていないかった。彼との出会いが自分の人生を大きく変えることになることは。

「ということで、織斑先生。ISの使用許可を下さい」

「……いや、舞崎。唐突に「ということだ」というのは間違っていると思うのだが……」
放課後。職員室ではそんなやり取りが行われていた。

授業が始まって二日目の放課後。男子が現れたことで注目を浴びることになった静流だが、来たのが静流だとわかった瞬間に何事もなかったように仕事に戻る彼女ら。そして同時に一夏でないことに愚痴が起るが、当の本人は全く気にしていないのか何も反論しなかった。

「でだ、何故ISの使用許可を？」

「単純なことなのですが、僕も織斑君もISに関しては素人でしょう？　なので飛ぶ訓練ぐらいの許可はもらえないかなと。今は篠ノ之さんに教わることになっていますが、彼女は専用機持ちではないので流石に限界はありますし、彼女の立場を考えて合わせて三機ほどお願いしたいのですが」

「………三機、か」

それはかなり無理な話だった。

本来、ISを借りるには何枚もの書類にサインなどを記入し、申請しても一学年で8クラス分——1クラスに30人（ただし静流が遅く発覚したため、1組のみ31人）——つまり240に3をかけ、ざっと720人はいる計算になる。

2年生になれば整備科や特殊情報科など、いくつかの専門分野を受講することになる

ので多少は少なくなるが、それでも開発過程で必要となるため受講するものもいるのだ。

「できればすぐに忘れないよう、日曜日の夜七時辺りに都合していただきたいのですが」
「……………確かに、それならば他の生徒も食事をしている頃だな」

だがその時間、千冬にはもう一つ用があった。今年度の新人歓迎会が今週の日曜に行われる予定なのだ。当然、それには真耶も含まれ、先輩としてはそつちも行くべきなのだろう。

「わかった。手配をしておくので書類を書いて提出しろ。筆記用具は——」
「持っています」

そう言つて静流はペンを出して冊子となつている束を取つてそれを読み、サインしていく。

それを一通り終えて千冬に提出した静流は挨拶してから部屋を出た。
(しかし、一夏とは随分違うな)

今頃静流の言つた通りならば箒に教わつているのであろう自分の弟を想像する千冬。
今頃二人の共通点とも言える剣道で腕試しをしているだろうと考える。

(使う機会はないと思つて記念に買つておいたが、まさかな)

そう考えながらも千冬は教員の歓迎会参加リストを見て、参加しない教員を確認し始

めた。

実際、千冬の想像通りの展開となっていた。

一夏は本人にとってどうしてあるのかわからない剣道用の道具一式を部屋から持つて来て、道場で箒と部活中なので少し離れたところで打ち合っていたのである。ちなみにこれは千冬が「大きくなったらまたするだろう」という思いからプレゼントとして買ったものだったが、鍛える一環として荷物に紛れ込ませたものだ。

「……………どういことだ」

「いや、どういことって言われても……………」

一夏は床で胡坐をかき、面を外した状態で肩で息をしていた。

「どうしてそこまで弱くなっている」

「じゅ、受験勉強してたから、かな？」

「……………中学では何部に所属していた？」

「帰宅部。三年連続皆勤賞だ」

ドヤ顔でそう言う一夏に箒は盛大にため息を吐いた。

（……………普通、ここまで弱くなるものなのか？）

箒は離れていたこともあつてわからないのだが、一夏はずっと働かせつばなしの姉のことを案じて年齢を偽つてバイトをしていた。今ではそれは一夏の貯金となつていますが、そのこともあつてここ数年一夏はまともに竹刀を握っていない。

(……いや、一夏にだつて事情はあるんだ。そう責めることもあるまい)

同門……しかもライバル的存在だつた一夏が弱くなっていることは素直にショックだ。だが一方的にそのことを責めたところで環境に変化が起るわけがない。

そう思った箒は強く言わずに言葉を探ろうとしたところで、ギャラリーの中から陽気な声が聞こえて来た。

「すみません。通してください。俺に恥部を触れられて嫌な思いをしたくなければ道を……ありがとうございます」

少し涙を流しながらそう言った静流。箒は自然と同情してしまった。

「どうしたんだ、静流。一緒にしないっていつてたんじゃないのか？」

一夏は静流にそう尋ねると、静流は持っていた冊子を二人に渡す。

「二人の事だから、たぶん忘れていたと思つてね。僕の分も出すついでに持つて来たつてわけ」

そう言つて静流は二人にその冊子を渡す。先程静流がサインしていたＩＳ貸し出し申請書を見た一夏は喜び、お礼を言つた。

「サンキュー、静流！　こういうのが欲しかったんだよ」

「……………」

一気に不機嫌になる筈。彼女は静流の方を睨むと、それに気づいたのかフオローする。

「でも通るかわからないから剣道でも柔道でも、武術とかボクシングとか……ともかく武道はしておいた方が良さと思うけど。織斑君は専用機を持つって言ったって、どんな機体になるのかまだわからないだし」

「それもそうだけどさ」

そう言うてくる一夏に静流はさらに言った。

「でも、実際織斑君って篠ノ之さんより弱いから今も床に座っているんだよね？」

「そ、それは……っていかさういいう静流はどうなんだよ？」

「僕はもちろん弱いよ。というか剣道は中学の授業の一環としてしたぐらいで、まともな経験はないかな」

そう答える静流に対して一夏は「人のことを言えないじゃないか……」と答える。

「でもその分、いつもトレーニングしているから体力だけはあるかな」

「そういえば、舞崎は去年のマラソン大会でも上位入賞していたな。確か、3位だったか？」

「まあ、前二人が長距離走のエキスパートだからね。今頃私立にスカウトされてお互いを高め合っているんじゃない？」

そんな会話を繰り返す二人を一夏はただ眺める。それに気付いたのか、静流は二人に言った。

「じゃあ、用はそれだけだから僕は帰るね。サインが終わったら織斑先生に提出する」と

その言葉の後、静流は道場を出ようとギヤラリーの方へと進むと、自然と通路が開いて悠々とその道を歩いていく。今日も彼はトレーニングをするつもりなんだろう。

そしてその数日後、使用許可が出たはずの静流はフィールド内に姿を現さなかった。

「……………遅い」

日曜日の夕方。目まぐるしく進んだ一週間が終わり、いよいよ明日の放課後にセシリア・オルコットとの決闘を控えた一夏は箒と一緒に第二アリーナのフィールド内で待機

していた。

その日は千冬の働きで三人一緒に打鉄を借りることに成功した。少なくとも土曜日のSHRで副担任の真耶からそう聞かされていたのである。

そのため一夏と箒は先に来て支給されているISスーツに着替え、打鉄を受領して今も来ない静流を待っているのである。

「まあいい。舞崎には悪いが先に始めるとしよう」

「もう少し待とうぜ。そうした方が——」

「いや、舞崎はあまりそういうのが嫌いな奴でな。一度遅刻した時に「今度遅れた時は先にしておいてほしい」と言っていた。始めた方が舞崎も気が楽になるだろう」

そう言つて箒は一夏の指導を始める。

——一方、静流はと言うと管制室にいる教師に呼び出されていた。

「あの、用事つてなんでしようか？」

初めて入る部屋が機械的だということもあつて少し緊張と興奮をする静流。すぐさま周りを観察して色々と触りたいという衝動に駆られるが、今は目の前の教師に対して集中した。

「君に話があるのよ」

「話、ですか。あの、これからISに乗れる時間なのですみませんが後にしてもらえませ

んか？ ご存知でしょうが、この学園じゃI Sに乗れる時間って限られていますから、無駄にしたいくないんです」

せつかく手に入れた練習時間でもあるため、静流としては有効に使いたい。だがその女性はそのを否定するようなことを言った。

「その必要はないわ。何故ならあなたの分の機体なんて用意していないもの」

「……どうしてですか？」

「その理由、説明する必要があるかしら？」

そう言われた静流は自分が今置かれている状況、そして目の前の女性がどんな人間かを考え、推測する。

I Sが出たことで日本を含め、世界各国ではI Sを取り入れられることになった。その中でも先進国がメインとなって大量のコアを獲得したため、残りの国では分配されなかったか分配されても代表候補生として鍛える余裕がない国がほとんどである。それでも、その国にもI S適性が高い人間は現れることが多い。そんな状況で世界的に見れば多く獲得できた国の一つである日本で女性優遇制度を設けた結果、全世界で一番「女尊男卑」の風潮が強くなってしまった。その理由は第二次世界大戦後しばらく「男尊女卑」だったことが大きな要因となった。

そもそもそんな風潮が強かったのは昔からであり、男性の方が政治や戦に駆り出され

ることが多く、自然とそうなったからである。が、設立当時はそれすらも薄れており、「男女平等」の風潮が強かった。しかし結局は女が国防となることで「女尊男卑」となり、「男尊女卑」以上に女性が虐げられることが多くなつた。

「……………そういうことですか」

本当は「どうして織斑君が認められているのですか？」と聞きそうになつた静流だが、その理由もすぐに察知した。

「理解が早くて助かるわ。わかつたなら、明日の試合も負けなさい」

「え……………?」

予想外のことに思わずそんな声を漏らす静流。

「何か問題でもあるかしら?」

「……………いえ。少し驚いただけです。まさか素人の僕が代表候補生に勝てる、なんて思つたのかなあ……………」

素直に口に出すとその女性教員は「まさか」と答えた。

「あなたのような素人が代表候補生なんかには勝てるわけがないじゃない。でも、念には念つてことよ。万が一、あなたが勝ちそうになつたら負けなさい」

「……………わかりました」

不服そうに答える静流は続けて尋ねる。

「話は以上ですか？」

「ええ。わかったならすぐはこのアリーナからも、そして今日から一週間以内にI S学園から去る準備もすることね」

「……………」

「返事は…………？」

「……………わかりました。でも、その前にここの施設を借りていいですか？ 理由はどうか、取り決めを守らずに帰るので、一言声をかけるべきかと思えます」

「……………それならいいわ」

そう言つてその女教師は設備の説明をする。静流はそれに従つてマイクを起動させた。

「織斑君、篠ノ之さん、聞こえる？」

『舞崎か？ 一体どうした!? 何故来ない』

すぐさま反応する筈。静流は簡単に説明した。

「実は僕が使う予定だった打鉄に故障が見つかつてね。だから今からそのメンテナンスが始まるし、どうせなら朝から風邪気味だったから、明日に備えて今日はもう帰ろうと思うんだ。約束守れなくてごめんね」

『いや、それなら仕方ねえよ。お大事にな』

一夏がそう答えるが、箒からは中々返事が来ない。モニターで彼女の様子を確認すると、何か考え事をしているようだった。

『本当にそうなのか？』

「うん。昨日はちよつと熱く感じたから少し早く半袖で寝ただけど、それが原因かもしれない。ごめんね、心配かけて」

そう言った静流はマイクのスイッチを押し、「失礼します」と言ってから部屋を出る。しばらく歩くと静流は足を止めて後ろを向くが、何も無いと思つた静流はまた歩き始めた。

「篠田さん、唐突だけどおっぱいを揉ませてくれない？」

「……………本当に唐突だな、おい」

隣に座る男子にそう言われた箒はため息を吐く。

以前から箒はこういっただけは言われたことはないが、自分の胸部に視線を向けられ

たことがある。なので自分の胸が男にとってそういうものかどうかということは重々承知していた。

「あ、これでも一応はちゃんと部活動の一環だからね？ 身体研究部……まあ、僕以外は基本的に幽霊部員だから、未だに「部」として認可されないんだけど」

「当たり前だろう。第一、そんな如何わしいものに誰が入るか。その幽霊部員も友人が名前を貸しただけだろうか？」

「いや、ちゃんとした動機で入ってきた人だよ？」

そう言われた筈はもちろん、周りにいる人たちも驚きを見せる。周囲の人間は興味本位から聞いていたが、まさか関わることはないだろうと思っていた部活動に筈が転校してきたことで「物知り」として頭角を現した男子生徒が入っているとは思わなかったのだ。

「その人たち、整体師とか医者になりたいんだって。その一環として、人体の構造とはどういうものか調べるために入部してくれたんだ」

「そういうお前はどんな夢を持っている？」

「僕は将来はエンジンアとかプログラマーとか、理系に関することに触れたいなと思ってる。ISじゃなくて別の——それこそ表立って役に立つロボットとかを開発したいなあって。人型兵器とかに乗って空を自由に飛びたい気持ちはあるけど」

ドヤ顔をしてそう答えるその少年。箒には一瞬少年の瞳が黒く、何かがうごめいた気がしたが、気のせいだろうと思って忘れることにした。

「まあ、今はトレーニングとかしているから、自分の人体構造とかを研究することはできるけど……女性の検体はいないからさあ……中学生にしては大きすぎると言っても過言ではない胸を持つ篠田さんに協力をお願いしよう」と――

「――却下だ」

強く言う箒に対してその少年は悲しそうな顔をした。

「お願い！ 協力して！ なんでも……とは言えないけど、篠田さんの女の子としての魅力を引き出す手伝いはできるはずなんだ！」

「何を馬鹿なことを。大体、今の私にそんなものは必要ない」

「……………好きな人、いるくせに」

「!？」

小さいが同時にショックを受ける程の衝撃に見舞われた箒。隣に座る男子はある写真を見せる。

「いやあ、マメだねえ。わざわざ写真を撮ってその裏に日にちと名前を書くなんて」

「うわああああ!!」

箒は慌てて写真を奪おうとするが、少年はギリギリかわし続ける。

「き、貴様ああああ!!」

本人は気付いていないが、涙目になっている筈。それを見た少年は耳元で言った。「放課後、残るように」と。

そして二人は誰もいない教室に残ったが、一人はエロを、一人は別のことを考えていたため意見が食い違うことになるが、それはまた別の話。

第6話 本性

決闘当日。一夏と静流はそれぞれ準備されたISスーツを着てスタンバイしている。同じ男子なのだが用意されたISスーツに差異があり、一夏は腹を出しているが静流は少しサイズが小さいTシャツとスパッツを装備している状態だった。さらに寒いからか、上には長袖のジャージを羽織っている。

「……遅いな、俺のIS」

一夏が小さくそう呟く。放課後になり、二人の準備ができてしばらくしたが未だに一夏のISは来ない。

今回の対戦は専用機持ちとなる一夏が最初にセシリアと戦い、その後に静流がその勝者と、最後に静流と一回戦の敗者と戦うことになっているのだが、肝心の機体がまだ来ていないのだ。

するとISをピットに運ぶ通路のハッチが重苦しい音と同時に開き、まるでタイミン
グを計ったかのように人間用のドアが開いた。

「舞崎、済まないが先に出てくれ。時間の関係上、これ以上は待てない」

「………わかりました」

どこか渋々と言った感じにそう答え、移動する静流。再び自動でドアが開き、現れた真耶が静流の後ろに現れた。

「舞崎君、これをどうぞ」

そう言つて真耶は静流にUSBメモリを渡す。

「これは？」

「生徒用のUSBメモリです。IS学園内でしか基本的に使えないものとなつていまし、主に生徒の各パーソナルデータなどが登録されて、訓練機を使用する場合はこのメモリを規定の場所に差し込んで同期しますと、なんと疑似的にですが訓練機で最適化することが可能なんです！」

どこぞのパイロットのカットイン並みに無意識に胸を揺らす真耶。だが静流はそつちに向いておらず、ただ差し出されたUSBメモリを観察していた。

「そういうえば、生徒の中にも専用機が欲しいと言つていた人はいましたね。もしかして、それ対策ですか？」

「はい。他の方はまだ訓練機の使用許可がされない期間ですし、一年生のこの時点では保存して持ち帰るようなものはないのですが、2、3年生になると授業内容によつては家でする人が多いので、一人一人専用のメモリが用意されるんです」

真耶の説明に相槌を打つ静流は、現れた打鉄を見る。

「ラファール・リヴァイヴはなかったんですか？」

「すみません。どうしても人気で、生産した時期も時期ですし……それにこれはあくまで模擬戦となつていますから……」

改めて打鉄を見る静流。その機体をよく観察すると、

(……やっぱり邪魔に感じるね、あのスカートアーマー)

そう思いながら腰から下に伸びている長いアーマーに注目する。

(防御力を上げるためのアーマーか。アポジモーターもなさそうだし、イメージ操作をするには少し厳しい機体かな)

ここ一週間、I Sを乗れなかったとは言え静流は何もしなかったわけではない。授業中に別の勉強をすることはもちろん、自分にできることは一通りしたつもりだった。だが本音を言えば使うならウイングがあるラファール・リヴァイヴの方が良かったと思っている。

「問題ありませんよ。これでいきます」

「！　そうですか！」

よほど嬉しかったのか、まるで花が咲いたみたいだに笑顔になる真耶。静流はそれを最後まで見ずにジャージを脱いで真耶の方に放り、打鉄に触れると閉じていた装甲が開いたので、まるで慣れているかのようにコックピットに乗り移る。

真耶は受け取るとそれを丁寧に畳んだが、ツボに入ったのか静流は微笑んだ。

— ACCES —

機械音が響き、同時に装甲が閉じて男性用に調整された装甲が閉じる。静流は周りを確認すると、予想通りUSBポートがあり、そこに渡されたメモリを差し込んだ。

【自動疑似最適プログラム、始動。1分後に完了します】

ハイパーセンサーにそんな表示がされ、今度は武装一覧というものが現れる。

「山田先生、武器の一覧が出ましたが」

『そのページで学園で使用許可が出されているものを登録できます。一応、初めての登録ということもあって初心者用の武器が登録されていますが、まだ容量はありますし選択してください』

静流にはまるでイヤホンで聞いているように真耶の声が聞こえる。「これがIS装着時の状態か」と思いながら、言われた通り静流は武器一覧を少しばかり弄った。終わるとすぐに登録ボタンを押すと、

【武装登録完了。生徒用メモリーに保存中……保存しました】

【最適化終了。メモリーに保存中……保存しました】

そんなアイコンを確認した静流は軽く腕を回す。

『気分はどうだ、舞崎』

千冬は一夏が驚くほど珍しく心配そうな声をかける。

「問題ありません」

『そうか。昨日のことは聞いています。もし体調が悪くなったらいつでも言え』

「わかりました。じゃあ、移動します」

真耶は道を開け、静流はそのままカタパルト発射台に移動した。

『静流！ 頑張れよ！』

「……………ああ」

一夏の声に無機質に答えながら脚部装甲を準備されている場所に接続。すると側面のラインが光る。

「舞崎静流、打鉄、行きますー！」

その言葉に反応してか、自動的に動き始めるモーター式カタパルト。それが最終地点に着くと同時に射出され、静流は不安定ながらも着地した。

観客席は今回の試合を聞きつけたからか、生徒たちで満員となっている。静流の着地行動がおかしかったからか、「間抜け」や「ひっこめ」などのヤジが飛んだ。

「あら、あなたが先ですの？ もう一人は逃げたのかしら？」

「今もピットにいるよ。機体待ちで」

「あら。あらあらあら……………」

するとセシリアは同情的な瞳を静流に向ける。

「可哀想に。あのような方と共にいるから、あなたがこのような目に合いますのよ。どうでしょう？ わたくしに忠誠を誓うというのなら、あなたのような方をわたくしの下僕にしてあげますわよ」

「……その申し出、是非受けさせてもらおうよ」

少し間が空いてからそう答えた静流。セシリアは尋ねた側だと言うのに答えが不満だったのか眉をひきつらせた。

「……あなた、それを本気で仰ってますの？」

「？ そうだけど、何か問題ある？」

セシリア・オルコットが今の状態になったのは、父の姿を見ていたからだ。

彼女の家は俗に言われる「貴族」というものであり、イギリス内でもかなり有名所のお嬢様である。その入り婿だった彼女の父親は立場的にも弱く、常に女である母親の顔色を窺うような人間だった。それが静流と似て被り、セシリアの怒りを刺激させる。

「あなたという人は、プライドがありませんの!？」

「プライドだけじゃ生きていけないと思うけど」

静流は何も考えず反射的に答える。だがそれがさらにセシリアの怒りを買い、彼女は怒鳴った。

「もういいです！ あなたのようなプライドがないクズなど必要ありません！ ここで無様な姿を晒して死になさい！」

「……………え……………」

ハイパーセンサーに警告が表示される。セシリアの手に握られているライフルの銃口が静流に向けられる。

「おっと、ヤバイ」

静流はそこから跳んで避けるが、いつもとは倍近くの跳躍、さらに慣れていないISでの移動に行動が遅れる。着地点を予想され、撃ち抜かれた。

「馬鹿な人。時代遅れのロボットゲームなんかで勉強するから、まともに操作もできないんですよ！」

「……………」

だが静流は何も返さず、ただ回避に専念する。

（ホバーは使える……………よね！）

すると静流の考えを読み取ったのか、打鉄の脚部装甲が変形してそのまますすぐ進んだ——が、

「うわっ!?!」

慣れないホバー走行ということもあり、バランスを崩しながら進む。だがそれが余計

に無防備な状態をさらけ出すことになり、静流はさらにダメージを受け続ける。

だが静流は衝撃に顔を歪ませることはすれど、最初から諦めているからか悔しがる様子を見せない。

「そのまま地面に這いつくばりなさいな！」

静流はセシリアの方へと視線を向け、ハイパーセンサーの警告を一瞬だけ確認する。そしてセシリアが引き金を引く瞬間、着弾点から体を逸らす。レーザーが着弾して砂煙がまき散らすが、それ以外のダメージはない。

「かわした!?!」

「上手くできるかどうかわからなかったけどね」

そう言った静流は進んでいる状態で足を曲げ、ジャンプすると同時に打鉄のブースターを噴かせて上昇した。

「あ、思ったよりも簡単——!?!」

セシリアのレーザーが直撃し、シールドエネルギーを削られる。静流はすぐさまそこから離れ、距離を取った。

「わたくしは、あなたの遊び相手ではありませんわ!」

「僕も遊んでいるわけじゃないけどね」

そう答えると静流はアサルトライフル《ほむらび焰備》を展開する。それをセシリアに向けた

静流は引き金を引こうとした。だが、急に手が震え始める。

セシリアはそれをチャンスと思い、《焰備》を撃った。

「まだ——」

下がりつつ下降する静流は再び《焰備》を展開し、セシリアに向ける。だがまた手が震え始め、動きが鈍った。

「あなたは、ふざけていますの!？」

「いや、ちがつ——」

だがその異変に気が付いていないセシリアは、容赦なく《焰備》を破壊した。

その異変に気付いた箒は眩くように言った。

「舞崎は、もしかして撃てないのか?」

「え?」

驚く一夏を他所に、箒はピット内に設けられている教師二人が戻った管制室に繋がる受話器を取る。

『どうした?』

「織斑先生、今すぐこの試合を中止してください!」

すぐに出た千冬は箒はすぐにそう言った。だが千冬は無慈悲に言い放つ。

『それはできない』

「どうして!?! あなただつて舞崎の異変に気付いているでしょう!?!」

『だからこそだ。その恐怖は、舞崎自身が越えなければならぬ』

そう言つて千冬は通信を切る。

(……このままだと、舞崎は潰れてしまう)

当初は世界で活躍するIS操縦者になることを夢見てこの学園に入学することを選んだ人間が、ISで相手を攻撃することができずに整備科などサポートの方へと守る人間も少なくはない。静流もそう言うタイプのだが、彼の場合はそう簡単にそんな存在になれないのだ。それをわかっているからこそ千冬は克服させるために敢えて勝負を続けさせた。

だがそれをわかつていない筈は内心舌打ちすると、試合終了のブザーが鳴り響いた。

【打鉄、シールドエネルギー全損確認。勝者、セシリア・オルコット】

会場が湧き、同時に静流に対して罵倒やヤジが飛んだ。

「とてもつまらない戦いでしたわね。次の相手もこの程度だと思つと、虫唾が走りますわ」

間違いなく注意が飛ぶぐらいの罵倒をするが、観客席からはむしろそれを褒めたたえるかのよう拍手が起こる。その光景を背に、何事もなかったかのように静流はさつき

までいたピットに戻ってきた。

「大丈夫か、静流」

対戦中に届いたらしく、ISを装着している一夏。静流は「うん」と答えて、一夏の隣にISを移動させる。

「どうして攻撃しなかったんだ？ やろうと思えばできるだろ？」

「……………どうやら僕は怖がっているみたいだね。今までこういったことつてしたことがないからかな？」

「そんなものか？」

「そんなものだよ。だって僕、体は鍛えているけど戦闘経験なんてないんだし」

負けたというのに笑いながらそう答える静流。どうやらさっきの戦いの事は引きずっていないようだ。

するとスピーカーから千冬の声が出て、一夏に指示する。

『織斑、オルコットはすぐにでも出れるそうだ。先に出て待機している』

「わかりました。じゃあ箒、静流、行ってくる」

「……………ああ、勝ってこい」

初心者に平然と無茶な注文をする箒。静流は「行ってらっしゃい」とだけ言うと、一夏はさっきの静流の真似をした。

「織斑一夏、白式、行くぜ！」

カタパルトが射出されて飛び出す一夏。先程とは打って変わって歓声が沸く。それはまるで静流への当てつけとも取れる。

だが静流は気にしておらず、それどころか次の試合に向けて調整を行っていた。

(PIC……確か、ISの飛行を補助する機能だったつけ)

またの名を「パツシブ・イナーシャル・キャンセラー」——慣性を消し、ISを自由に飛行するその操作をマニュアルに設定する。

さらに武器の種類も初心者用に毛が生えた程度だったものを、かなり変更を行った。

その頃、一夏とセシリアは会話をしていた。

「最後のチャンスをおげますわ」

「チャンスって？」

「わたくしが先程と同じように一方的な勝利を得るのは自明の理。ですから、さっきの方のようにボロボロのみじめな姿を晒したくなければ、今ここで謝るならこれまでの非礼を許してあげますわ」

それを聞いた一夏は笑い、あつさりと言う。

「そういうのはチャンスとは言わないな」

「そう？ 残念ですわ。それなら——」

セシリアは射撃体勢に入り、引き金を引く少し前に言う。

「お別れですわね！」

彼女が持つライフル《スターライトMk-III》から閃光が走る。一夏は白式の自動防衛システムによって直撃は避け、移動を始めた。

それは静流とは違い鮮やかで、軌道は危ういがそれでも素人ながらにかなりのレベルはあると思わせるほどだ。もつともそれは、高機動型の機体に振り回されているだけでも取れるが。

その様子を見ていた箒は、静流の方を見る。未だに彼女は静流に対してどう声をかけようかと考えていた。

だが静流はまるで気付いていないのか、さつきから各所の設定を弄り始めている。

そして試合がある程度進んだ時、静流は脚部装甲をカタパルトに接続した。

「舞崎。準備には早いんじゃないのか？」

重苦しい音を聞いて静流の方を見た箒がそのことを指摘するが、静流は首を振った。

「大丈夫だよ。もう出るから」

一夏にミサイルが直撃し、爆発が起こる。爆炎で姿が見えなくなったが、煙が晴れ、新しくなった白式の姿が現れる。

「これは……」

「ま、まさか……」ファーストシフト「次移行!?!」
あなた、今まで初期設定だけの機体で戦っていたって言うの!?!」

白式は静流とセシリアの対戦が始まって数分して到着した。しかし二人の戦いがかなり早く終わったこと、セシリアがほとんど休憩をしなかったので初期設定で戦うことを強いられていたのだ。

一夏は一次移行したことで手に入れた《雪片式型》を手に取り、語るように言った。
「俺は世界で最高の姉さんを持つたよ」

それを聞いた瞬間、静流は笑った。その笑みは邪悪なもので、まるで狩人が獲物の前で舌なめずりしているようである。さらに今まで感じたことがない強烈な殺気が箒を襲う。その威力の強さに怯え、驚く箒は今もなおまき散らす殺意の根源である静流を見た。

「舞崎……?」

「篠田さん、今までありがとう」

「俺も、俺の家族を守る」という、一夏の恥ずかしい言葉をBGMに静流は慈悲深い笑みを箒に向けながらそう言った。そして――

「君と過ごした一年間は楽しかったよ。心からそう思う」

――じゃあ、その殺気は何だ?

箒はその言葉を出かかったが、気圧されたこともあつて口にすることができない。

「でも僕は知ってしまったんだ。この世界の歪みを。だから壊すことに決めたんだ」

「……………何を」

するとカタパルトのラインが光りはじめ、今もなお黒歴史認定されるであろう吐き続ける一夏を無視して静流は飛び出した。

「舞崎静流、すべてを…破壊する」

瞬間、カタパルトが射出され、静流はまるでミサイルのように一夏に向かって飛んでいく。それに気付いたセシリアの様子がおかしいと思つた一夏は後ろを向くが時既に遅し。彼の視界は黒い塊に占領されていた。

第7話 乱入

——ドオンツ!!

吹き飛ばされた一夏はそのまま壁にぶつかる。あまりのことに驚きを隠せないセシリアは、それを行ったのがさつき自分が倒した静流だという事に気付くのが遅れた。

そのせいか距離を詰めることを許してしまい、そのままメイスで顔面に一撃をもらう。

「くっ!?!」

すぐさま体勢を立て直したセシリアは自身のメインウェポンであるレーザーライフル《スターライト Mk-III》を静流に向ける。

「落ちなさい!」

それをメイスで消した静流は対IS用手榴弾を展開してそれを左で投げる。本来なら山なりなのだが、まっすぐと飛んだことでセシリアの虚を突く。だが流石は代表候補生と言うべきか、セシリアは地面スレスレにまで下降して回避、機体に備わっているミサイル発射口2門から2発ずつ発射すると、《スターライト》でそれが当たらないように狙撃する。

すると静流に通信が入り、真耶がいった。

『何をしているんですか、舞崎君！ そんなことをしたら——』

静流は無言で通信を切り、目の前にいる敵に集中する。

「落ちなさい！」

レーザー、そしてミサイル4基をともに食らい、爆炎を起こす。

(これで少しは足止めをできればいいのですが、それにしても一体どうして——!?)

結論から言うと、全く足止めにならなかった。

むしろまるで油断させるために少し間をあげたようで、そのままミサイルを思わせる猪突猛進で進む静流。セシリアはそれを狙撃し落とそうとするが、予測し、とても素人とは思えない絶妙な操作でレーザーを回避される。

(い、一体どうなって——)

「弱いね」

静流の手に握られている某RPGで戦士が持っている剣を模して造られた《ソルジャーソード》でセシリアの胴体を真っ二つするかのようライオンを描き、そのまま上に吹き飛ばした。

「がっ!?!」

「予想以上に、弱すぎる」

「この——」

緊急復帰システムを使って彼女の機体に備わっている予備のビットを読み込ませる。本来競技中に使用すればルール違反となるが、今は静流の暴走という建前があるため、緊急時のシステムを使用したのである。もつともそれは一度しか使えないものだが。

だがセシリアとして、一夏に暴露されたことで静流にも伝わっていることは理解している。

それでもセシリアは自身の腕と相手の未熟さを信じて自機の名となった武装を信じたのである。

「わたくしを舐めないでくださいな！」

4基のビット兵器が散開し、静流を仕留められる位置へと移動する。

「当たり前ささい！」

四方からのビットによる一斉射撃。静流はそれをフェードアウトするかのように移動する。

「かわした!?!」

「なるほど。ISというものはこうもできるのか。流石に異空間に行くことはできないようだが——それでも十分か」

「何を——」

——わけのわからないことを

内心、セシリアはそう思っているが、すぐに戦闘へと思考を切り替える。静流の動きが先程とか各段に違うためであり、それが彼女の中にある恐怖を掻き立てていた。

——油断すると、殺られる

ISには絶対防御があるため、死ぬことはない。が、それはあくまでISを展開する限りのことだ。ISを解除されれば人にISが攻撃すれば容易に死ぬ。

セシリアはビットで牽制しつつ《スターライト》で狙撃するが、静流の独特の動きで絶妙なタイミングで避けられる。当たるとしても、両肩に浮いている非固定浮遊部位アンロックユニットの防御シールドに当たる程度だ。しかしそれも高速で修復されていくので、実質ダメージは0である。

「こんな……こんなこと………」

セシリアの顔が焦りに変わる。それを見てか観客席も今どんな状況か理解し始めた。するとビットがすべて爆散する。

「!？」

「何を驚いているの？」

いつの間にか静流の両手には対IS用拳銃が装備されている。どうやらそれで撃ち壊されたらしい。

「君のビットパターンはすべて見切った。もつとも、自分が動けないという救いような弱い弱点を抱えているようだけどね」

「……………さつきまでののはすべて演技だった、ということですよ」

「当たり前だろ？ 僕が織斑を含めて家畜如きに本気で仲良くするわけがない」

「……………家畜、ですって……………」

セシリアの手がわなわなと震え始める。だがセシリアはすぐに正気に戻ったが、目の前には打鉄の脚部装甲があつた。

それがセシリアの側頭部に当たり、そのまま観客席を守るように展開されるシールドバリアにぶつかる。

「まだですわー！」

セシリアはすぐにさまミサイルを発射すると、静流はメイスを展開と同時に横に薙ぐ。すると先端が分離してアンカーとなり、ミサイルを破壊した。

「そんな!？」

「これを持つたら言わないとね……………滅、殺ー！」

メイスアンカーを巻き戻し、射出と同時に叫ぶ静流。セシリアは飛んでくるアンカーを回避し、アンカーがバリアにぶつかって反射されるが静流はそのまま力任せに振り抜き、バリアから音を上げつつ移動させてセシリアの左肩にぶつける。

「ま、まだですわー！」

「そう」

——ドウルルルルルルルルルツツ!!

静流の手元で不気味なエンジン音が鳴り響く。だが本人は気にせずそのまま突っ込み、持っていた武器でセシリアの首を掴んだ。

「こ、これは——」

「アンタみたいなのがいるから、世界はあああああ!!!」

チエインソーが付いた枝切狭を模して造られた《チエインシザー》が唸りを上げ、ブルー・テイアーズのシールドエネルギーをガリガリと削る。それは一種の処刑に見え、観客席の各所で悲鳴が上がった。

すると突然、下の声が叫び声にも似た声上がる。

「——やめろおおおお!!」

《チエインシザー》が真つ二つに切断され、寸でのところでセシリアは解放される。それを行った本人——織斑一夏がセシリアと静流の間に入った。

その姿はまるで、姫を救いに来た騎士さながらだった。

「どうしてこんなことをしたんだ、しず——」

だがそれは、静流の手によって中断される。

静流は一瞬で一夏の懐に飛び込み、パイルバンカー《グレイ・スケール灰色の鱗殻》でピンポイントで一夏の鳩尾を攻撃したのだ。

元々、度重なる攻撃で白式のシールドエネルギーはほとんどなくなっていた。それが今ので完全に消滅し、一夏はそのまま落下する。

撃墜した一夏は白式が解除された。しかし静流は最初から気にするつもりはさらさらなののか、すぐさまセシリアを地面に叩きつけ、それでシールドエネルギーがなくなった。

静流はその前に着地して《焔備焔備》をセシリアに向ける。

「お、お待ちなさい！ そんなことをすればあなたは——」

「そうだね。確かに引き金を引けば僕は殺人者だ。じゃあ、これならどう？」

すると静流はISを解除し、着地して背中に隠していたらしいトンファーを出した。その行動にどのような意味があるのか図り兼ねているセシリア。静流は動かない彼女を見て言った。

「これなら僕と君は対等の立場になった。さっさと戦闘態勢を取りなよ。ここからは肉弾戦だ」

「……そんな野蛮な——」

だがセシリアは最後まで言葉を言えることができなかつた。一息に距離を詰めた静

流に殴り飛ばされる。

「野蛮か……。それは君たち家畜のことでしょう？」

バリアにぶつかったセシリア。しかし彼女に静流はバリア発生装置も兼ねている塀に飛び乗り、落下してくるセシリアを問答無用で攻撃しようとした。

——だがそれは、突然遮られる

突如として目の前に現れた水の球体。それがセシリアを中に入れると、すぐさま静流の方に鞭の形をした水を飛ばす。

触手とも取れるそれが二本となり、尚も静流に攻撃を仕掛けるが、あるアクションをしたことで水は止まった。

「……何のつもりだい？」

静流の視線の先には別種のI.S.が存在し、静流を睨みつけていた。

「あなたの暴走を止めに来たのよ」

「……その言い方はおかしいよ。それじゃあまるで、僕が悪いことをしているとでも言いたげじゃないか」

「あなたは悪いことをしているのよ。現に、途中乱入して試合を荒らした。それが良いことだとはとても言えないでしょう？」

その言葉に静流は盛大にため息を吐く。そして、同時に彼から殺気が放たれ始めた。

「——笑わせないですよ。ルールなんて守って、法律なんか順じた結果、君たちは何をしました？ 下らない嫉妬、下らない論理。そんなことでお前らは、僕の家族を潰したんじゃないか」

「そのことと彼女は関係ないわ！ それに、彼も——」

女生徒の言葉に静流は視線のみで語る。「君は馬鹿だね」と。

それを悟ったのか女生徒は黙った。

「その金髪は女尊男卑で、バカなことを吐いていたその男は最初から僕の敵だ。……ああ、君もだね。じゃあ、さっさとその機体から降りなよ」

「私はあなたの暴走を止め、拘束しに来たのよ。戦うつもりはないわ」

「……やはり君も同じか。つまらない」

そう言う静流は興が冷めたと言わんばかりに戦闘態勢を解く。だが水が襲うとすぐさま反応して回避行動をとった。

「所詮君も、ISと言う力に溺れて振りかざすだけに興味がないゴミでしかない。ここにいる女と同化していると言ってもいい」

「それは違うわ。私はただ、有効な手段を使っているだけよ」

「どうだか。だって君たち女はこれまでずっと男を見下してきたんだ。そんな君たちをどう信じろと？ あれだけのことをしたくせに？」

「……………」

静流の言うことに心当たりがあるのか、女生徒は沈黙する。

「へえ。多少の良心はあるんだ。だったら今すぐI Sを解除して僕と戦うかその二人を置いて去るかどちらかだ」

「——その必要はない」

Dピットから全員が聞いたことがある声が響く。

静流と対峙する女生徒が声の方を見ると、視線の先にはスーツ姿だが木刀を持つ千冬がいた。

瞬間、会場が「女神が舞い降りた」と湧いた。

「織斑先生、どうして——」

「更識、二人を保健室に連れて行け。ここは私が引き受ける」

「……………ちよつと早いかなあつて思うけど、まあいいや」

呟くように言った静流は戦闘態勢を取って千冬に言う。

「木刀って言うのが手加減されているようで気に入らないけど、殺されても文句を言わないですよ」

「無論だ。貴様は私が倒す」

そう言ってピットから飛び降りた千冬は着地と同時に距離を詰める。間合いに入っ

たと認識するとすぐに抜刀した。

千冬は後悔していた。

よもや自分が騙されようとは思わなかったこともそうだが、何よりも静流が抱える怒りを理解しきれなかったこと。その状態で試合に出し、一夏とセシリアを傷つけたこと。

静流が抱える怒りのことを、千冬は知っていた。

だが静流はそれを一切感じさせずただ平穩にいた。いや、むしろ以前よりも大人しすぎたという印象を持っていたのだ。だからこそISに乗せ、少しでも自分がこれから一生関わっていくであろうISというものがどういうものかを知ってもらうために。そう、彼女は一切のひいき目なしに静流を参加させたのである。

——だからこそ、自分が止めなければならぬ

静流の怒り——それが自分に向くように千冬は木刀を持ち、立ち上がった。今の静流にISで止めたところで女たちの力を認めず「どうせ兵器の力を借りなければ女はまともに戦えない」というイメージを捨てられないだろうと推測したのである。

——ガッ!!

居合切りを足で受け止めた静流は、後ろに吹き飛ばされた。いや、ただ吹き飛ばされたのではない。距離を離すために敢えて飛ばされたのだ。

着地するとそのまま滑る静流。停止すると同時に地面を駆け、千冬に接近する。

——スッ

静かな、それでいて素早く弧を描く木刀をそのスピードを維持して回避した静流は飛び蹴りを入れる。千冬はそれを片手で防ぐが、思った以上に力があり、左手首を痛めた。だが、その手で満足しない静流はそのままトンファーで目を潰そうとする。

（——なら）

木刀を自分の顔の前に持つてきて防ぎ、その反動を使って先ほど静流が見せたように距離を取る。

「逃がさないよ」

——ゾクッ

瞬間、千冬は寒気を感じた。目の前の舞崎静流という存在がより大きく感じた。

だからだろう。千冬はすぐに我を忘れてしまう。

元々、自分が出てきたのはあくまで静流を止めるまで。色々と虐げるつもりはないのだ。

しかし千冬は静流から放たれた殺気にあてられ、動きを変える。

風すらも切り裂くことを思わせるほどの高速の連撃。それを静流にぶつけた。

「——へえ」

静流も負けておらず、それをトンファーで受け流していき、千冬の眉間に腕を突いて伸ばした。

——瞬間、千冬の動きがさらに早くなる

その速さは最早人間を超えており、二人の戦いを見ていた人間のほとんどがそれをすべて見る事ができなかった。そしてそれは——学園最強と言われる更識楯無ですらもだ。

フィニッシュで千冬は静流を吹き飛ばす。最後に飛んでいた自分の意識を戻した千冬はすぐに静流の元に駆け寄った。

(また、やってしまった……)

千冬の必殺状態であるある種の領域。その状態になった時、千冬はまったく手加減できなくなる。だが千冬をそこまでにする人間は本当に数が少なく、今のところそれができるのは同い年の二人であり、静流は三人目だった。

「すまない舞崎。だが——」

——貴様も悪いんだぞ

先程のことを咎めようとした千冬だが、すぐに上体を左に逸らして回避した。

「舞々」――

わけがわからず、千冬は静流に声をかける。だが静流には聞こえていないのか、構わず千冬に攻撃を繰り出した。

彼女はその状態を予想すると同時に目の前に立つ男に恐怖を覚えた。

「……何故、貴様が……いや――」

千冬はもう何もかもを捨てた。

教師としての自分、今までの自分を捨て、先程と同じ状態に入る。

――目の前に立つ静流と同じ領域に

その戦いは一瞬で決した。千冬が木刀は物干し竿と呼ばれるほどではないが長刀に当たるものであり、その木刀で殺さない程度に喉と鳩尾を一瞬で突いたのである。

立ち上がらない静流。それを見て観客に座る生徒や教員は惜しめない拍手を送る。

やはり織斑千冬は最強だと言わんばかりに。暴走し、一方的な暴行を加えた静流を蔑み、侮辱をはじめとした罵声を浴びせ続ける。

だが千冬は瞬時に理解していた。横たわる静流が誰よりも強いことを。そして――
――いづれ自分を超えるかもしれないと予感した。

二人の戦いを見ていたとある教員はまるで汚物を見るように静流を見ていた。

(本当、馬鹿な男ね。所詮 あなたたち私たち 男は女に勝てるわけがないのに)

今となつては常識と化しているが、一般的に男が女に勝てることはない。法律では完全に女が優遇されており、どんな些細なことでも——例えそれが嘘だろうが関係なく、犯罪と認識されれば男は懲役10年前後の刑が処される。

それがISによる試合の無断乱入、さらに女生徒に暴行を加えたとなれば20前後かそれ以上は免れない。

そのことに笑みを浮かべたその教師は肩を叩かれる。水を差されたことで不服そうな顔をして後ろを見ると、学園内の有名人がいた。

—— のほとけうっほ 布仏虚

1年生はともかく、2, 3年生で彼女の名を知らない者は少ないだろう。第3学年の整備科の主席であり、すべての技術者の憧れであるIS学園内の研究室である「轡木IS技術研究所」——通称「轡木ラボ」の採用がほぼ確定されていると噂されるほどだからだ。

「あら、布仏さん。こんなところでどうしたの?」

「実は先生に話がありました……」

——ガチャ

周りが騒いでいることで音がかき消されたが、何か重苦しい音がした。

近いこともあつて聞こえたらしい教員は手元を見ると、彼女の右手首には手錠がかけられている。

「……これは一体どういうことかしら？」

「それはあなたが良くご存知でしょう？　ねえ？　昨日、あなたが舞崎静流君にした仕

打ちを忘れたことについて話を聞きに来たんです」

虚がそう言うと、その教員は鼻で笑った。

「ああ、あれ？　あれは昨日、彼から申し出たのよ。体調が悪いから辞退させてほしいと」

「——隠し事は止めた方が良いですよ。既にあなたが彼に対してISを使わないように言っている証拠は押さえております」

「……………」

教員はコンクリートを蹴る。そのまま虚をかわして逃げ出そうとするが、虚が教員の足を引っかけてその先の階段を転げ落とした。

教員はすぐに立ってドアを押し開け、逃げ出す。だが——急に足を取られてその場

で転がった。

「にひひ〜」

虚とどこか似ているが、声質が少し違うことに気付いたその教員は顔を上げると、見たことがない生徒が自分の前に立っていた。リボンからして1年生だと気付いたが、動くよりも早く顔を蹴られる。

小さいことで大人しいと感じたが、戦闘力はそれなりにあるようで尻もちをつかさされる。

「退きなさい！ 退かないと——」

教員の警告を無視して1年生で虚の妹——のほとけほんね布仏本音は何かのスイッチを入れると、

彼女の手元から自分の声が再生された。内容は昨日のことで、もう一人男の声も流れる。

「あなた、どうして——」

「実は、昨日の会話を聞いてちゃったんだ〜」

「そういうことです。これからあなたにはこれからの業務を止めていただくことになるでしょう。最初の職員会議で言いましたよね？ 生徒——特に男子生徒に対する強い差別行為を禁止し、された場合、最悪強制退職は覚悟してもらおうと」

「……………あなたたちねえ！」

立ち上がった教員は虚の方を向いて叫んだ。

「ISが男に汚されているのよ!? そんな現状に何とも思わないの?!」

「思いませんが」

「ぜ〜んぜん?」

二人は否定する。そして本音が続けて言った。

「むしろ〜マッキーはちゃんと勉強しているんだし〜私としてはもうちよつと評価されるべきかなあ〜」

「戯言を! あんなゲーム如きで勉強した気でいるなんて——」

「最近のゲームは結構馬鹿にできませんよ。それを利用して専用機持ちになっている生徒を私たちは知っていますので。それにわかりませんね。するならば何故、織斑一夏君にもそういう風にしらないのですか?」

「千冬様の弟気味があんな男と同列なわけがないでしょ!?!」

それを聞いた虚はため息を吐き、冷たい目で彼女を見ながら言った。

「まあ良いでしょう。あなたには然るべき処遇が決定されます。それまで地下部屋で大人しくして下さい」

そう言ってもう一つの手錠をかけた虚は、その教員をどこかへと連行していった。

観客席では静流に対するブーイングが響いていた。

そんな中、とある生徒はどこか納得した顔で運ばれていく静流を見ていた。

(叔母さんが妙に入れ込むから見に来たけど……)

最初は正直、彼女は叔母の目が狂ったと思った。

大人しく、真面目に授業を受けて仇敵である織斑一夏と仲良く話をしている姿を見た時は本当に信じられなかった。織斑千冬と同等の強さを持つと言われている叔母が入れ込む相手が、こんな腑抜けかと。

だが実際は違った。さっきの暴言といい、織斑千冬との一戦といい、少なくとも余裕で自分たちのレベルにいるとその生徒は確信していた。

(とうか、下手すればオレよりも強いんじゃない?)

そんな疑問が浮かんだが、やがて彼女は首を振り、後輩に言われてその席から立つ。

——どこか満足気に、そして獲物を狙う目を見せながら

第8話 過去

あの出来事から色々と処理があつたため、3時間は経過していた。

8時過ぎだということもあつて学校には残業することになつた教員と用務員ぐらいしか残っていない。ほとんど暗い廊下を千冬は歩き、ある場所へと向かつていた。

千冬がそこを通り過ぎるたびに後ろが暗くなり、また、センサーが感知される場所へと足を運ぶと廊下が明るくなるのを繰り返していると、目的地である保健室へと着いた。

既にそのこの担当をしている教員は帰っており、人はいない——はずだった。

「……篠ノ之、もう面会時間は当に過ぎている。部屋に戻れ」

だが箒は首を横に振る。その理由を千冬は知つていたため、これ以上は無理に言わず、外に誰もいないことを確認して箒の隣に座る。

二人の前にあるベッドには一夏……ではなく静流が寝かされており、四肢は革ベルトで固定されている。

「……箒、聞きたいことがある」

久々に——少なくとも、IS学園で教師と生徒の関係になつてから初めて千冬に名

前で呼ばれた筈は驚きのあまりその場で体を震わせてしまった。

「……なんででしょうか？」

「確か貴様は舞崎と同じ中学だったな。その時の様子を聞かせてくれないか？」

「……………わかりました」

そう答えた筈はゆっくりと話し始める。

「正直なところ、舞崎には色々と黒い噂がありました。中学校の不良グループの大将をしている、とか、親を半殺しにしたとか。ですがそんな噂を気にしていないなかったのか、それとも元々興味がなかったのか無関心……………というよりも、別のことに夢中でした」

「別のこと？」

「肉体改造です」

「……………千冬さん？」

「いや、なんでもない」

——そんなわけがない、な

静流の出生は至って普通だったことを思い出した千冬は視線を筈に戻した。

「確かに最初は、救いようがない変態だと思っていました。すぐ胸のことを言ってくる

っ」

箒の胸部にあるものは男女関係なく引きつけるものがある。千冬も以前はある人物に対してその手の嫉妬心を抱いていたことを思い出した。

「ですが、あることがきっかけで仲良くなったんです」

「あること」

「それは——」



——
一年前

「これより、修学旅行の班決めをしまーす！」

「「イエーイツ!!」」

中学最後の一大イベントの一つ、ということもあって、男女関係なくクラス中のテンションが上がる。

だがその中で今年度の初めに転校してきた箒は暗くなっていた。

「……………どうしたの、篠田さん」

「……………なんでもない」

隣に座っている静流が尋ねるが、箒は暗い表情のまま答えて俯いた。

あの転校初日から1か月が過ぎたが、箒はその一月をほとんど一人で過ごしていた。まるで友人を作ることを拒絶しているようだと言われ、静流は推測する。

「これから自由に決めてもらいます。必ず男女3人ずつで班を決めてください」

「「はーん」」

全員がそう返事すると、すぐに班が揃いだした。

しかし女子を含めて誰も箒を誘おうとしない。明らかに2人しかいない女子の組も、敢えて箒を避けている様子だった。だがこれの原因は箒にもある。

転校から数日経ったある日、箒は興味本位で話しかけてきた女子たちに怒鳴ったのだ。その女子たちも積極的に箒と仲良くなるろうと思つてのことだったが、普段から他人

と話すことに慣れていないのと、友人になってもいずれ引越し、連絡が取れなくなるからである。

それから箒は友達を作ることを見詰りと感じ始め、転校するたびに拒絶していた。

「ねえ、篠田さん。一緒の班にならない？」

隣に座る静流はそう尋ねると、箒は「いい」と言いつて断る。

「じゃあ、おっぱい揉まれるのと一緒の班になるの、どっちがいい？」

「……どうしてその選択肢が出てくるのだ」

静流に対して冷たい態度を取る箒。今となつては箒に話しかけてくるのは静流ぐらいであり、クラス内の名物カップルとなりつつあった。

「いやあ。だってそれくらいの選択肢を出さないと絶対に断られるだろうし」

静流は身体研究部……もとい同好会に入っている。と言つてもそこまで複雑なことをしておらず、ある意味興味本位でだ。その興味から箒に近づいているため、彼女はそれを鬱陶しく思っていた。

「どちらにしてもお断りだ。他を当たれ」

「個人的には、篠田さんがそれだけ大きなものを持てるのは背中に秘密があると思つているんだよね」

「人の話を聞け！」

静流の態度に箒の中に一人の女性を彷彿とさせつつ、静流に言った。

「大体、どうして私と組みたがる。構おうとするんだ。はつきり言つて迷惑だ」

「あ、その二人！ 一緒に班を組まない？」

「だから人の話を聞け！」

箒は叫ぶが静流はさつそくその二人を口説きに行く。二人とも大人しいタイプの女なため静流のお眼鏡に適つたのである。

「でも、篠田さんつて怖いし……」

「そうだよ……あんな人と同室つて嫌だよ」

その言葉が耳に入ったのか、箒は何かに殴られたような衝撃を受ける。しかしすぐに「これも自分が蒔いた種だ」と自分に言い聞かせて我慢した。

「違うんだよ、二人とも。みんなも聞いてくれ！ 確かに篠田さんはすぐ暴力を振るうし常に睨んでくる。それでビビる教師も一人や二人ではない。けどそれは彼女が不器用だからだ！ 考えてみてほしい。中学の最後の年にいきなり転校したらみんなも不安に思うだろう。篠田さんはそういうタイプであり、落とせばデレる」

「何を根拠に言っているんだ貴様は!!」

「女の勘ならぬ、男の勘だ」

静流の言葉は箒の神経を逆なでているだけに過ぎない。だが静流はそれに気付いて

いないのか、それともわざとなのかさつきからあることないこと言い続ける。

「それに篠田さん、少しは歩み寄ってみようよ」

「余計なお世話だ！」

そう言つて箒は鞆を取つて飛び出すように教室を出た。

現在は6時限目。LHRで生憎教員は修学旅行前の打ち合わせということで席をはずしており、誰も箒を止める人はいなかった。

しばらくして箒は自分にあてがわれた部屋に帰る。

いつもならば少し歩いた所に止まっている車が迎えに来るのだが、彼女は剣道部に所属していてその部活を終えてからのため止まっていな。もつとも、少し歩くだけで家に着くのだが、自分の周りにはいる大人たちはそれを許さなかつた。

「……………はあ」

箒は普通の人間とは違う。常に政府の人間に生活を監視されている。その理由は彼女が何かしたというわけではなく、彼女の姉にあつた。

箒の姓は今は「篠田」と名乗っているが、本当は違う。彼女の本名は「篠ノ之 箒」であり、小学五年生になる直前からこんな生活を送らされていた。当初は両親と生活していたが、中学になると同時にその両親とも別居を強いられる。

「もう嫌だ。こんな生活」

ぼそりと言う箒。本気で彼女は今の生活に辟易していた。これならまだ、以前の方がましである、と。

（そもそも、何なのだあの男は。まるで、私に気があるようだが……）

善意……いや、下心。

以前、自分をこんな状況に追いやった姉である「篠ノ之 束」の妹と知られた時には悲惨だった。そのことがすぐに拡散され、ある者は憧れを、ある者は嫉妬を抱き始めたのである。

幸い、箒には仲間がいた——とと思っていたがその人物が箒を苦しめた張本人だったのである。

それ以降、箒は誰とも関わらなくなった。孤独となり、剣道での戦い方も変わり始めた。

（……だとしても、男がISを動かせないのは変わらないだろうに）

まだ気付かれないとは思いつつも、箒は思わずそう思ってしまった。

すると、彼女のスマホに一件のメールが届く。どうやら自分の担当の役員かららしく、そこには「修学旅行を辞退させる」という旨の連絡が書かれていたのである。

(……またか)

彼女にとつて、こういう行事を休ませるといふ連絡は珍しくない。以前もこういった連絡があり、そのたびに彼女は政府からの要請などの理由で学校行事を休んでいる。周りがその時のことを話しているのを聞いて当初は疎遠を感じたが、自分に味方がないことを知った時にそれも思わなくなったのだ。

箒はベッドから起き上がると、言い渡された宿題をしようと机へ移動する。と同時に室内にチャイムが鳴った。

(……誰だ)

インターホンが鳴ると彼女の部屋にある小型のモニターが映るようになっていた。そこには自分を早退へと追い込んだ主がいた。

(……一体、何の用だ)

怪しみながら通話ボタンを押そうとした箒だが、果たしてそんなことをしているのだろうかと思ひ留まる。

すると向こうはカメラに気付いたのか、手を振り始めた。

(……そこで暴れられても厄介だし、とりあえず入れるか)

普段は来ないその主のことだ。適当に相手をして最悪殴って追い返そうと思った箒は無言で入れることにした。

中に入ったその主こと静流は箒の部屋のインターホンを鳴らす。箒は敢えてチェーンをかけたまま開けると、さつきと変わらない様子の静流は手を振った。

「……何の用だ」

「HRでプリントが配られたから、それを届けに来たんだ」

「そうか。では帰れ」

「え〜。そこはお茶を出すとかしてよ〜」

物凄く残念そうな顔をする静流に対して、箒は容赦なく木刀を突き付けた。

それを間一髪で回避した静流は鞆を入れた。

(……………ああ、もう)

箒は経験上、すぐさま降参する。そしてチェーンを外して開けると、静流は「お邪魔しまーす」と言っただ中に入った。

そこで箒は静流が背負っている物に注目する。

「それは……私の竹刀入れ……」

「珍しく忘れていたから持つて帰って来たんだ。昼休みにトレーニングしていることは知ってるからさ、もしかして放課後もするかなあつて思っただけ」

実際のところ、それだけ言えば箒は感謝している。慌てて出てきたから竹刀を置いてきてしまったが、予備もあるし何よりも家に帰ってから厳しい外出制限が課される。最近室内でどれだけ小さく竹刀を振り、物を壊さないようなことにも挑戦していた。

そこだけ感謝した箒は厄介なことになる前に静流を追い出そうと考えたが、それは間に合わなかった。

——ガチャツ キイツ

ドアの鍵が開けられ、外から女性が入ってきた。

その女性は静流を見るや否や、腕を掴んで外に放り出そうとするが動かない。

「今すぐ出て行きなさい」

おそらく力で押し出せないことに気付いたのだろう。女性は静流を睨みながらそう言うが、静流は眉一つ動かずにいた。

「……………」

何を考えているのか、全く反応を示さない。急に現れた女性は静流を殴ろうとしたところで口を開いた。

「もしかして、篠田さんのお母さんですか？」

「……………はい？」

二人の女はまったく同じタイミングで疑問を呟くが、静流は気にせず挨拶を始める。

「初めまして。僕は…箒さんの同じクラスで隣の席の男子こと舞崎静流です。娘さんにはいつもお世話になっております」

丁寧な挨拶をし終えた後、唐突に挨拶したこととで茫然とするその女性は、しばらくして突っ込みを入れた。

「私は確かに彼女の保護者的立ち場にあるけど、母親じゃないわ。というかまだ私は20代よ!」

「……………もしかして、10歳で箒さんを産んだんですか!?!」

「まずそこから離れなさい!」

突っ込まれたことに首を傾げる静流。どうやら本気で何故怒られているのかを理解していないようだ。

「ともかく、あなたは帰りなさい。ここはあなたが来て良い場所ではないわ」

「じゃあ、すみませんが説得を頼めますか? 娘さんが修学旅行に乗り気じゃないみたいなんです」

「彼女は修学旅行に行かせるつもりはありません」

その女性がびしやりと言うと、あまりのことに驚きを隠せなかったのか静流は呆然となる。だが30秒ぐらいすると回復して驚きを露わにしながら言った。

「ちよつ、何ですか!?!」

「彼女はあなたたちと違って特別な人間なんです。そんな行事に参加できるほど、暇じゃないんですよ」

「何を言っているんですか!」

いきなり大声を上げた静流に二人を驚くが、その二人に静流はさらに追撃をかけた。「修学旅行と言えば恋愛発展の行事イベント。中学生最終学年が故にしばらくすれば受験がありますが、そこに本腰を入れるまでのほんの短い期間を女子としてのレベルを上げるために使わずどうすると言うのですか!? 確かに篠田さんにはとても中学生と思えないほどの双丘があります。ですが、今の篠田さんには「経験」が足らず、意中の男子を射止めるほどのスキルもない! そんな状況で彼女を青春の本格ステージとも言える高校生にするつもりですか!? バカですかあなたは! もう一度子供からやり直してきなさい!」

「どうして私がこんな意味不明な説教を受けないといけないのよ!」

その言葉に箒は同意した。

だが静流は一切止めるつもりはないようで、さらに捲し立てようとするがそれよりも先に女性に遮られる。

「もうどうでもいいわ! ともかく今すぐ帰りなさい! さもないと警察を呼ぶわよ!」

その言葉に固まる静流だったが、やがてあることに気付いたのかこう言った。

「ホワイトボードが必要ですね！」

「ドヤ顔で何を言ってるのよ、あなたは！」

「簡単なことです。警察を巻き込んであなたの野望を打ち砕きます！」

そう、堂々と宣言した静流に女性は叫んだ。

「もう頭に来たわ！ とつと失せなさい！ この変態！」

「男が変態で何が悪い！ そもそも男は女を孕ませる生き物であり、それは性そのものに植え付けられたものなので——」

「だから語ってんじゃないわよ！」

話し始める静流に女性は突っ込みを入れる。それを見た箒は内心思っていた。

(……何だこれは)

クラスメイトが便りと竹刀を持ってきたのはまだわかる。後者に関しては感謝しているが、後から来た女性と口論になるには想定外だった。

「大体、どうして篠田さんが修学旅行を休まないといけないんですか。そこからしておかしいじゃないですか。彼女にだって修学旅行に行く権利はあるでしょう!?! 極度の貧乏つてわけでもないし、日本はその辺りはきちんと保障しているはずです」

「それに関しては言えないわ」

「つまりあなたは、篠田さんのおっぱいから脂肪を吸うために休ませ、僕たちがいない間に篠田さんのおっぱいの脂肪を吸うんですね！」

「つまりってあなたねえ!? ……ああもう、言えばいいんでしょ、言えば!」

「ごまかすより真実を言った方が早いと思ったその女性は堂々と言った。

「聞いて驚きなさい! 彼女はね、あの有名な I S 開発者——篠ノ之束の妹なのよ!」

「……………」

それを聞いた静流は本気で驚いたようだ。

(……………また転校か)

そう思った箒は荷物を纏めるために部屋の奥に引つ込もうとした。だが——

「……………あの、それがどうしたんですか?」

「……………待ちなさいよ! 彼女はあの篠ノ之束の妹なのよ!? それなのに「それがどう

した」っておかしいじゃない!」

その意見はあながち間違いではない。

事実、さつきまで静流は驚きを見せていたし、本来なら男はすぐさま箒の胸元を掴んで自分たちが下になった元凶の妹に不満をぶちまけるはずだ。箒はそのことを何度か取り調べをした男性に言われたし、幾度か「責任を取る」という形で脱がされそうになった。

「だって、所詮彼女はその天才の妹ってだけですよね？ それに僕、ISが凄いつてのは思いましたけど、兵器としては正直イマイチだと思います。というか個人的にどうでもいいですよ。まあつまり、性能としては評価しますけど個人的な野望の階段程度としか見てませんから」

思わず箒は止まってしまった。

今まで彼女は正体をばれると常に「篠ノ之束の妹」として見られてきた。男には憎悪を、女には嫉妬を向けられて生きてきた。

だがここまで尋ねてきたクラスメイトはどうだ。篠ノ之束の妹として見るどころか、「ISは階段」と、自分が上る足掛けとしか見ていない。

——その言葉が何よりも、箒には嬉しかった

「…………ちよつと待ちなさい。じゃあ、何であなたはこの家に居続けているのよ。そう思っているなら、さっさと帰るでしょ」

「ああ。考えてみれば不自然ですね。って言ってもそこまで大層な理由じゃないですよ。ただ彼女は僕が書こうとしているライトノベルのメインヒロインのモデルとしてピッタリだったので、リボン解いてストレートになった時の髪形を写真に収めさせようと思っただけです」

思わず二人は黙ったが、同時に同じことを考えていた。「この男は、そんなことのため

にこの家に来たのか」と。

「まあ、ラノベ作家と兼業して科学研究者と技術者にもなりたいんですけどね。だってほら、今ってI Sが主流ですけど、個人的には一昔前のリアル系やスーパー系のロボットが憧れなんで、どうせなら災害救助用のロボットを開発しようかなって。なにせ自分、まだ子供なので夢を見る権利はあるんですよ」

そう言つてドヤ顔をする静流。

それを聞いた箒はその女性に言った。「修学旅行に行かせてほしい」と。

「……………そんなことがあったのか」

「はい。ですが、その後のことがとてもムカつきましたが」

「——知り合い以上、友達未満ってのが？」

「そうだ。アレは流石にカチンと来たぞ。どうせなら堂々と友達と宣言してくれてもいいものを——つて待て」

箒と千冬は揃って下を見ると、両手両足を革ベルトでベッドの柵に拘束されているのを無理やり抜け出そうとしている静流を確認した。

「いつから聞いていた」

「最初からだよ。まったく。急に変なことを言い始めちゃって、恥ずかしいと思ったらあ
りやしない——つていうか、いい加減この拘束を取つてくれない？」

「それはできない」

千冬がそう言うのと静流が顔をひきつらせた。

「そもそもだ。どうしてあんなことをした？ あそこで我慢すればこんなことにならない
くて済んだのに——」

箒がそう言うのと静流は馬鹿にするようにクスリと笑った。

「ああいう思考が、祖父ちゃんと祖母ちゃんを殺したとしても？」

「……………どういうことだ」

そう尋ねたが、箒は顔を青くしていく。

おそらくこれから紡がれる言葉の先を理解したのだろう。彼女の手は震え始めた。

「祖父ちゃんと祖母ちゃんは殺されたんだよ。オルコットみたいな女尊男卑の女にな
するとドアが開かれる。」

そこには静流に I S を触れさせなかった教員がおり、手にはどこから手に入れたのか

破片を持っていた。

それを見た千冬はすぐに立ちあがる。

「立花先生。一体どうしたのですか？ それにその刃物は——」

「どけえええええええ!!」

立花は叫びながら静流の方へと走る。それを千冬は阻止すると、静流は箒に言った。

「左のバンドを外して！ 早く！」

「わ、わかった」

非常事態だからと自分に言い聞かせながら、箒は静流の左手首の革ベルトを外す。

そして彼女が左足へと移動したとき、素早い動きで右手首のベルトを外した静流は右足をすぐに取った。

「退いて！ 退きなさいよ！」

「いい加減にしろ！ 何故こんなことを——」

「その女が女尊男卑思考だからだよ。僕は大丈夫だからその女をもう解放してもいいよ」

そう言って静流はベッドから降りる。だが千冬は離すつもりはない。

すると保健室のドアが開かれ、二人の生徒が入ってきた。二人とも銃を所持し、どちらも立花に銃口を向ける。

「立花先生、大人しくしてください」

「それ以上抵抗すれば——」

——ガッ

鈍い音が辺りに響く。すると立花は力なく膝を付き、前から倒れた。

「……………やれやれ」

ため息を溢しながら殴った本人——静流は立花に近付く。

そして破片を回収すると腕を掴まれたことで容赦なく立花の頭部を踏み抜き、さらに蹴り上げながら壁にぶつけた。

「待って。それ以上は——」

「得物を持つ人間に対する過度の攻撃は無力化の基本でしょ」

だがこれ以上は静流もする気はなかったのか、大人しく下がる。

一人の女生徒が立花を捕まえ、三人が静流を警戒する。だが静流はタオルを破片に巻き付けると後から現れた水色髪の女生徒に放る。

水色髪の女生徒——更識楯無さらしきたてなしが受け取ったのを確認すると、静流は言った。

「……………ねえ、彼女と二人つきりにしてくれないかな？」

「何を考えている？」

「何も。ただ彼女は篠ノ之束の妹の妹として知るべきことを教えてやるだけさ。それに

僕、二次元にしか興味がなくてね。あなたたち三次元にはまるつきり興味が無い」

その言葉を完全に信じられるほど、彼女らは静流に心を許しているわけではない。だが箒は三人に言った。

「……すみません。彼と二人だけにさせてくれませんか？」

「……だが——」

「大丈夫です。いざという時はなんとかします」

千冬は尚も食いがろうとした。だが、箒の目は既に覚悟しているようで、その意思が伝わったのか大人しく下がる。

「更識、布仏。二人だけにするぞ」

「ですが——」

「心配ない。それに、二人には積もる話はあるはずだ。その邪魔をする権利は私たちに無い」

そう言つて半ば追い出すように二人を、そして千冬自身も部屋から出て行つた。

確認した箒はゆっくりと言葉を紡ぐ。

「……意外だね。僕はてつきり、武器を持つかと思うたよ」

「それは無いさ。それに、お前が私に手を出さないくらいわかる。さっきの言葉「知り合以上友達未満」というのは、舞崎なりの結界なのだろう？ それに舞崎が今まで私を

「篠ノ之東の妹」として見たことがないのも知っている。つまり、これから話すことはその状況になった理由を話すということだ」

それを聞いた静流はクスリと笑い、両手を挙げた。

「参った。参ったよ。じゃあそのご褒美に話してあげるよ——僕が今のようになったのを」

第0章 彼の仮面は滑り落ちて

第0—1話 End peace～平和の終わり～

中学生活の三年目、その終盤は大抵の人たちは勉強で忙しい。けど、それは僕にはもう関係がないことだ。

そのため周りが頑張って勉強しているというのに、僕は余裕たっぷりロボットの設定資料集を眺めていた。

「……おい、舞崎」

「何？ 篠田さん？」

隣に座る同じく受験終了組の篠田さんが声をかけてくる。彼女の名前は篠田^{しのだほうき}箒と言つて、三年生という時期で運悪くこの学校に転校してきた女の子である。ちなみに中学生にしてはおっぱい大きい。女の子にはそういう目で見ないようにしているが、彼女は別格だ。……恋愛感情はないにしても、一度揉んでみたい。

それはともかく、文武両道と言う言葉と姿勢が意外に似合う彼女は一体何の用で僕に声をかけたのだろうか？

「そういう勉強に関係ない本を読むのは止めてやれ。周りが睨んでいる」

「篠田さんだつて難しい本を読んでいるくせに」

「こゝ、これは我が家に伝わる剣技が記されている本でだな……」

……………篠田さんは僕以上に変わっている。

よくわからない本を持っていたり、家が厳しいのかスマートフォンが普及昨今で何故かガラパゴス携帯だったり、電話帳は何故か家族以外の人の情報に乗せてはいけなかったりと、結構古風だ。転校当初はそれで弄られていたが、僕の得意なギャグと話を逸らす方法で漫才を確立させてうやむやにし、僕がボケで彼女が突っ込みと言う名の暴力を繰り返していた。そのせいか、何故か僕たちが夫婦認定されてよく囃されたが、そこは得意な話術でカバーした。そう。SHRを乗っ取って急に持論を展開したのである。そのおかげで僕は度胸を、彼女はテクニクを身に着けただろう。でも正直、後から考えて思っただけあの言い方はないな。

『篠田さん。どうやら僕らは他者が認めるほどにお似合いなカップルらしい。だから言わせて。結婚しよう。必ず幸せにするから』

アレを聞いた瞬間、男子たちは本気でメモをしていたのには驚いた。しかも卒業アルバムに乗せられている「女が決めた。男に言ってもらいたい告白ランキング」では堂々の一位を獲得したのだ。まあ、ランキングとして成立していないから、僕を除け者にして男たちに好きな女子に告白する時に言うセリフを募集したみたいだけど。それでも

一位を取れるのは、周りが本気じゃなかったからだろう。ちなみに僕と篠田さんの間では、「おふぎけの一環」と言う話で蹴りが付いている。

「あのねえ、篠田さん。そういう本よりも君はもつとこういう本を読んだ方がいいと思うよ」

そう言うって僕は『今時だからこそ学べ！ 男を落とす女のテクニック集』というタイトルの本を渡した。

「き、貴様、この時期になんて本を持って来たんだ!?!」

「いやあ、前々から思っていたんだよね。篠田さんっておっぱいは大きいけどその話し方と性格故にその利点を潰している気がするんだ。ま、その話し方でも利点はあると言えはあるけど——」

「そういう問題ではない！ 第一、これはどう考えても18歳未満は閲覧が禁止されている——」

すると彼女はある一点を見つけ、

「お前が著者か!?!」

「表紙は結構できているけど、裏面や中身はスツカスカ」

「——おい」

声をかけられ、そちらに向く。担任の田辺女史（27（自称22歳））が俺たちを睨ん

でいた。

「いつまで話しているのかしら？　今は自習だけ話していい時間じゃないのよ？」

「まあまあ、落ち着いてください。先生はアラサーですがまだ希望はありますよ？」

「私は男になんか興味はないわ！」

「以上、行き遅れかけている女性の言い訳でした。みなさんはこうならないように気を付けましょう」

「舞崎いいいいいい!!」

「どうやら凶星だったようだ。」

「先生、うるさいですよ」

「お前たちが原因だ!!」

「うるさい!!」

今度は周りから言われて田辺女史は沈黙する。

するとチャイムが鳴り響き、六時間目の終了を告げた。

掃除、HRと終えた俺たちはそのまま帰り、僕はそのまま近くのトレーニング施設へと向かう。

「今日も手伝いか」

後ろから篠田さんが付いてきた。まあ、やることは違えど目的地は同じだ。それに僕

は彼女のある秘密を握っていて、そのせいからより絆が深まっていると言えるだろう。……それでも僕の彼女ではないのは、僕が女に対して性的好奇心はあれど恋愛感情が抱くことはないからだ。

「よお、もう学校は終わったのか？」

声をかけられたのでそっちの方を見ると、そこには僕の従兄の高間晴文たかまはるふみがいた。

「そうじゃなかったら怒るでしょ」

「違くない。篠田ちゃんも一緒にどう？ 今日人は少ないからいつも以上に設備を貸し出したりとかはできるよ。その代わり、真壁さんには内緒——」

「——ほう。誰には内緒だった？」

晴文……ハルさんが「ギギギ」という擬音が聞こえてくるとすら思えるほどブリキ状に首を動かす。入口にはサングラスをかけた男がいた。

「よお、ガキ共。お前ら勉強はどうした？ 受験終わるまでは来るなって言っただろうが」

彼の名前は真壁浩人まかべひろとさん。完全に見た目が「ヤ」から始まる人に見えるけど、実際は色々都合してくれる優しい人だ。僕のように両親と別れて暮らしている人にこうして低賃金だけ働く場を提供してくれて、遊べる金も作れるようにしてくれるし。

「受験なら終わりましたよ。余裕で合格です」

そう言つて俺は藍越学園の合格証書を見せる。

「ほう。国際PC学部か……それつてすごいのか？」

「将来的にはPC関連で何でもできる人を作るのが目的らしいですからね。希望者には夏休みに強化合宿に参加できるとのことですし、藍越学園は他分野……まあ、僕の場合は技術関連での特別講義も開いてくれますしね。まさしく、うつつけの学校ですよ！」

僕には両親がいない。捨てられただけだから生きてはいるが、ここ6年ほど会っていないのは確かだ。

そのため周りで相談してくれる人はほとんどおらず、進路は誰の意見も聞かずに行動しなければならぬのだ。逆に言えば、やりたい放題と言うわけである。でもそんなことをしていたらこのご時世、間違いなく普通に生きられなくなるのは確かだ。

「んで、嬢ちゃんはどうかんだ？」

「私も一応は合格しました」

そう言つて篠田さんは鞆の中から合格証書を出す。

「お、お前さん……それは……」

「………IS学園です」

あ、IS学園つて……アレの操縦を学びに行くつもりだったの？

驚きを隠せない僕は唾然としてその証書に書かれた校門らしき部分を見る。

(…………いや、まあ彼女の場合は仕方がないか)

これは彼女の秘密に関係するものだが、まあ話を聞けば聞くほど篠田さんの本意ではなさそうだ。おそらく政府からの圧力みたいなものだろう。まったく。ろくな法律を打ち出したりとろくなことをしないな。それでいて無駄に権力を持っているから困る。

「悪い、篠田ちゃん。もうしまつてくれないか？」

事情を知っているハルさんがそう言うって篠田さんに言うのと、僕の方を見ながら「わかりました」と言い、証書を片す。

僕は親に捨てられた。でもそれは巡り巡ってI Sが現れたことが原因だった。

I Sが現れたことで政府は「女性優遇制度」と言うものを施行し、女の地位を上げたのだが、それによって一部の過激派のようなものが言い始めたのだ。「すべてにおいて女が優れているのだ」と。実際、そんなことあるわけがない。篠田さんもその辺りの事は理解していると思っただけ——

(…………難関校に合格したって割にはそんなに嬉しそうにしてないね)

負の感情もそんな違和感のせいでなくなり、今では普通にしていると思う。

するとどうしたことか、ハルさんは何故かこんなことを申し出た。

「すみません、真壁さん。ちよつと空き部屋を借ります。篠田さん、一緒にいいかな」

「え、ええ——」

すると真壁さんはハルさんの肩を掴む。

「おつと。そいつはいけねえな。いくらもうすぐ卒業っていつても彼女はまだ中学生だぞ。そんな子供に酷いことをする気か、ロリコン」

「ちよ、違いますつて。少し聞きたいことができたので——」

「……ほう」

出た。真壁さんの「尋問魔眼」。これに見られた人は恐怖のあまりについ余計なことを言ってしまうのである！ ただし、その効果には個人差があり、

「ちよつとキツイ話なので、その——」

どうやらハルさんには効かなかつたようだ。

というかハルさん、何で僕の方を見たの？

「……わかつた。ただし——」

「問題は起こしませんから」

そう言つてハルさんは篠田さん連れて中に入る。僕も手伝いがあるので中に入ると、付けていたテレビはニュースをしていて、キャスターは何故か血相を抱えていた。

『……で臨時ニュースをお伝えします。三日前に行われたIS学園の試験会場で史上初の男性IS操縦者が発見されました』

——え？

僕は——いや、僕だけじゃない。ハルさんも真壁さんも、そして篠田さんもテレビに釘付けになった。

それほどその事項は問題であり、注目することなのである。

『動かしたのは〇〇中学三年の織斑一夏君おりむらいちかで、これを受けて政府は彼の身辺調査を進めると共に、3月から10代から20代の男性を対象とした適性検査を各自で実施することを本日表明しました』

それは聞いた僕は顔を青くしているだろう。

しばらくすると画面が表示される。どうやら地区によって開催日は違うらしい。

「……………ああ、うん……………日にちを変えてもらえないかな」

僕は思わずそれを二度見してしまった。

何故なら——僕の地区の開催日が中学の卒業式と同じ日だったから。

——この時、僕は達観するんじゃないやなかったんだ

僕は後に起こる未来がわからず、最悪な運命を迎えようとしていた。

卒業式っていうのは、大体思い出を振り返るものだと思う。

だけどはつちやけ過ぎた僕には泣けるような思い出はない。というか、これから始まる適性検査で胸が高鳴っているのか、卒業式に使われた体育館で集められた男たちは動かしした時の予定を語っていた。

「俺、I Sを動かせたらハーレムを作るんだ！」

「は？ お前の顔じゃ無理だな。そしてハーレム王には俺はなる！」

「お前こそ無理だ。この天才である僕がなろう！」

「黙れ、万年最下位男！」

本当に正反対だ。とはいえある意味仕方がないことかもしれない。男の子というものはロボットに興奮してしまうものだから。

(…………でも、さすがにI Sなんかには興奮を覚ええないな)

20 m級の人型兵器なら興奮を覚えるんだろうけど、I Sなんかじゃ興奮を覚ええない。

「なあ、舞崎はどう思う？ 俺たちの誰がモテると思う？」

同じクラスの人が僕の所にやってきてそんなことを聞いてきた。

「……誰が動かせるとかじゃなくて？」

「もちろんだよ。動かせるか動かせないかじゃない。モテるかモテないが重要なんだ」

「…………モテてハーレムなんか作っても、最終的に血を血で洗うような大惨事になると思うよ。僕が知っているゲームだと全員がヤンデレと言って、簡単に言えば好きな相手が好きな同性を殺したりとか、好きな人を拘束して世話をしたりとか…………で、気に入らないことがあれば刺したり…………って、刺激が強すぎたかな？」

全員が顔を青くして僕から距離を取る。

「よ、良かったな。篠田さんがヤンデレじゃなくて——」

「僕の場合は結構純愛の方が好きだから——というかむしろ僕がヤンデレ化しちゃうかな？ 例えば拘束されたらなんとか口説いて拘束を外してもらって、そして逆に拘束して動けない状態で僕の言う事を聞くまでじっくり時間をかけて調教して体を慣れさせてあげる。しっかりと従順になるまで多少厳しくしたり、いや、ある程度言う事を聞くようになったらネットリの方へと移行して、それからキチンと教え込んで誰が主人なのかをわからせて、初めて自分がペットだという事を自覚させようと思う——そんな大逆転ゲームを開発するのってありかな？」

「あ、アハハハハ。ゲーム、だよね？ ね？」

「あくまでゲームか。う、うん。いいんじゃないかな?」

その割には随分と距離を開けてくるね、君たち。

「くっ。これが舞崎静流の能力「マウスビジョン」か」

「し、篠田さんが僕の息子を○○してくれるのを想像してしまった。そんな馬鹿な!!?」

「俺はさゆりちゃん自慢のボディにすり寄ってくるイメージだ!」

か、カオスだなあ。

ちなみに「マウスビジョン」というのは、僕の説明によって彼らの脳内でそういうイメージがはつきりとできることからそういうことを言われたようだ。

どうせ彼らの場合、想像力が高いってだけで僕にそんな力ががない。あつたとしても使いどころがわからない。

そんなことを思っていると前のサイドドアから男性や女性が複数人入ってきて、大きな囲いを設置し始める。

「静かにしなさい!」

そう一喝されたことでその場にいた男子たちは一斉に口を閉ざす。それを確認した女性は言った。

「これから適性検査を始めるわ。いい? 私語は特別に許可してあげるけど、その代わりキビキビ動きなさい。こっちは暇じゃないの!」

たぶん全員思っただろう。「ああ、そういう人間か」と。

ISができて、女性優遇制度が施行されてからというもの、高圧的な態度を取る女性は増えてきた。昔は男尊女卑だったから、今度はこっちのターンだと言わんばかりにだ。そもそもそれはその方が都合がいいし、僕たちは男女平等の世界しかしない。知っているのは僕らではなく、むしろ高齢者の方がだろう。というか僕たちは僕と言う少し変わった男が常識の範囲でかき乱しているが、高圧的な態度を取られる理由はない。

「わかつたら返事くらいしなさい」

するとパラパラと返事を返す。マイクをオンにしたままだったので「これだから男は」という眩きが聞こえて来た。

「まあいいわ。ではこちらで名前と学年と出席番号、そして住所を記入した後、ISに触れない。良いわね」

そう僕たちに命令した彼女は用意されたらしい椅子に座る。

その近くには個人情報を書くブースがあり、対応するのは全員女性だった。

(……………早く終わらせて帰ろう)

どうせ動かせないのはわかり切っている。いくら一人が出たからって政府は焦りすぎだ。前々から思っていたけど、やっぱり馬鹿なんだろうか？ ほら、いくら学歴が良くて馬鹿な人は馬鹿でしょ？ つまりそういうこと。

(そういえば、ハルさんと篠田さんは結局何の話をしていたのだろうか?)

結局、あの後二人だけで部屋に入って話をしていたらしい。そして気のせいかな篠田さんは以前よりもハルさんと話すことが多くなった。……でも前にあのニユースが流れた時、熱っぽい瞳で動かしした男を見ていたよね。……というかあれ、篠田さんの好きな人だし。

(ダメだなあ。最近、ちょっと一般的基準を忘れつつある。やっぱり周りが異常だと自分たちもそれに染まってしまふのだろうか?)

そんなことを考えていると、どうやらブース前まで来ていたらしく、さつきからブースに座っている女性が僕を呼んでいた。

「早く来なさい! あなたのせいで詰まっているのよ!」

「あ、はい」

言われて僕は急ぎ足でブースの前に立つ。そして名前を書いていくと、さつき僕を呼んでいた人とは違う女性が僕を見て言った。

「本当に愚図。よくそんなので生きていけるわね」

「……………」

「ここまで露骨だと引くよ、本当に。」

なんとかそれを顔を出さずにやり過ぐそうとすると、さらに言ってきた。

「何？ あなた、言い返すこともできないヘタレなの？ 死んだ方が良いんじゃない？」

「……………クス」

「!?」

去り際に意味深に笑ってやると、凄いい形相で睨みつけて来た。後ここで「可哀想な人を見る目」を向けてやると、効果は倍増します。

後ろから「男風情が馬鹿にしてんじゃないわよ！」と聞こえてくるけど、興味ないしどうでもいいしタイプでもなんでもないので完全に無視。聞こえていない振りをしてそのまま進んでいく。

「舞崎、よくあんな罵倒を我慢できるな。正直すげえよ」

「そうかな？ あれくらい、誰だってできるでしょ」

「いや、あんなに言われたら普通に無理だ」

クラスメイトに話しかけられた僕は平然と答える。そうか。みんなは無理か。

「流石は誰とも距離を置いていた篠田さんをクラスに溶け込ませた裏委員長。やり方も半端ない」

「別に。僕はただ普通に行動しただけだよ」

「普通に行動した結果がクラスの中心でおふぎけとはいえ告白かよ」

そんな会話をしていると、クラスメイトの番になった。

「見てろよ。俺が桃源郷に乗り込んでやるぜ！」

「あ、スト○イクフリ○ダムがあるかの確認もよろしく！」

「おうよ！」

クラスメイトは意気揚々とISの周辺に置かれていいる仕切りの中に入っていく。だがどうやら無理だったようで、肩を落としながら中から出て来た。

「次の人、早く来なさい」

「はい」

さっきの女性が中から呼ぶので、仕方なく行くことにした。

仕切りの一部に入れる場所があるのでそこから中に入る。目の前にはISが深緑色のISがあり、僕は思わずそれに見とれてしまった。

「何をしているの。早く触りなさい」

「……………」

女性の声に僕は正気に戻る。

（……………そうだった。これは……………）

僕の家族を潰す原因となった物に見とれてしまうなんて、僕もどうかしている。

たぶん整備士の腕がよく、磨き上げられた綺麗さに見とれてしまったんだろう。馬鹿

だ、僕は。

そう思いながら僕はそつと腕を伸ばす。

「……………こ……………な……………こ」

「……………え？」

一瞬、ほんの一瞬だけど声が聞こえた。

辺りを見回すが、不正をしないためか中にいる女性以外は誰もいない。

「何をしているの？ さつさと手を離して出ていきなさい。あなたの汚い手でISが汚れるじゃない」

(……………)

この人は普通に話すことはできないのだろうか。いや、彼女はこれが普通なのだろう。こんなのが世界にたくさんいるのだから、よく人類は滅びないでいるものだ。

人類の異常な粘り強さに感心していると、急に頭に何かが突き刺さった。

「……………え？」

あれ？ 痛くない？ っていうか何？ 動かし方？ PIC？ 知らない単語が

さつきから頭に入ってくる。

何かに押しつぶされそうな感覚に襲われる。そういえば、さつき女性が何かを――

――何故か女性は僕を見て「信じられない」という顔をしていた

すると急に体が浮き上がったと思ったら、腕に何かが現れて引つ付いた。

「……………これは一体…………？」

嫌な予感がして辺りを——そして僕の体を見回す。するとどうしたことだろう。さつきまでの深緑のISは僕の体に引っ付いてしまっているではないか。

「……………何なんだよ、これは」

今、自分に起きていることが理解できなかった。

本来、ISは男には扱えないはずだ。だがどうしてか、俺はそれを装着しているのである。

「……………君」

わけがわからず混乱していると、さつきから近くにいた女性が俺に声をかけていた。

「あ、はい。何でしょう？」

思わず返事してしまったところで思い出した。「こいつ、動くぞ？」と言うのを忘れた、と。

「今すぐそれを解除しなさい。仕方はわかるわね」

「わかりま……………」

物は試しということで俺はさつきまで食い込んでいたアームが解除するイメージをする。実際それが行われているかと聞かれれば「No」と答えるだろう。うん。結構混乱しているね。

（落ち着け、落ち着くんだ。今のは夢かただ事故で、ちよつと間違えて動いてしまつてだけなんだ）

完全に解除されたことを確認した僕は、もう一度そのISに触れるが——どうやら夢ではないらしい。

「何をしているの。降りなさい！」

「……………はあ」

盛大にため息を吐く。

別にこんなものを動かしたくなかつた。むしろ何で僕？ ISの技術力の高さは評価しているけど、それでも冷静に考えて発覚し次第^{あんなところ}IS学園に入れられるのはわかり切っている。しかもあんなイケメンとだ。……死にたくなつてきた。

そんなことを考えていると、目の前に見慣れない物が現れた。

「まさか本当に他の男が動かせるなんてね」

「……………え、えーと……………」

——モノホン？

うん。本当は見慣れてる。確か彼女が持っているのはベ○ツタとかいう銃だったはず。いや、でもちよつと待つて？ 何でそれを一般人（？）が？ そしてどうしてそれを僕に向けているの？

「恨むなら、ISを動かしてしまった自分自身を恨みなさい。じゃあね」
そう言ってその女性は銃口を僕に向けた状態で、トリガーを引いた。



その頃、指定された地区にやってきた静流の従兄であり、兄のような存在でもある高間晴文は中学校に訪れていた。

「……………はあ。まさかあの問題児の妹がここに通っていたとはな」

そんな意味深な言葉を吐きながら、左手をポケットに入れて何かをまさぐっている。

(まあ、別にあの子が悪いわけじゃないか)

そう思いながらも会場となっている中学校体育館に入ると、彼の耳に銃声が届いてその音源の方へと走った。

第0—2話 In Battle round 戦闘突入

——キュインツ

何かにぶつかつてどこかに飛んだと思う音を聞きながら、僕は女性の顔面に拳を叩き込んだ。

「よくつも、私の顔に——」

そして飛び蹴りで首に攻撃する。バランスを崩して銃を手放したのでそれを回収して深緑色のI Sにもう一度触れた。

「冗談じゃないよ。どうして動かしただけでこんな目に合わなくちゃならないんだ」

さつきとは違つてステータスなどが開き、この機体名が「ラファール・リヴァイヴ」だということを知つた。どうやらI S学園から貸し出されているらしい。

そんなことは今重要じゃない。ここから逃げないと。

その思いで僕は走り出そうとするが、バランスを取れずにこけてしまった。

(ふう。なんとかドアは弁償しなくてもいいみたいだ)

そんな安心はすぐに捨て、僕は今度は壇上とは反対側にある出入口に向かうけど、

詰まっちゃう!?

「ああもう! 羽! 装甲! 閉じて!」

すると四肢以外は消えてくれて、通りやすくなったのでそのまま外に出た。

そしてもう一度展開しようとする、待機していたのかまた別の機体が現れた。

「逃がさないわよ! 犯罪者!」

「むしろこっちは被害者だよ!」

「ISを奪って逃走したじゃない!」

「仕方ないじゃないか! こっちは殺されかけたんだから、逃げなきゃ!」

何で15歳で人生に幕を下ろさなければならぬ!? 交通事故とかじゃない限り

そんなものは認めない!!

でもこのままだと間違いなく逃げられない。僕はもう一度叫んだ。

「全装甲、顕現!」

すると元の形に戻ってくれたのでこのままどこかに逃走しようとするが、向こうは熟

練者のように既に僕の右側にいた。

「はあああああッ!!」

抜刀からの一閃のつもりらしい。鞘から刀を抜く時の形を取っていたので、僕はそのままタツクルする。

「ちよっ——」

学校の校舎の一部が破壊されたけど、少子高齢化時代において僕ら子供の生存が何よりも大切だと思うから許してほしい。もつと言えば、僕は被害者です。

(でも、逃げるって言ってもどこに……)

嫌だけどIS学園しかないかもしれない。そこならば生存確率は高くなる。

僕はISにマップを表示させ、IS学園までのルートを表示させる。

「逃がさないわよ!!」

行こうとした瞬間、僕の後ろからさっきのISが現れて飛びかかってきた。

(ロボなら、ホバーで動けるはず——)

そう思って僕は足元をに意識を集中させる。脚部装甲の一部が開き、僕はそのまま移動した。

「逃がすか!!」

——ガッ!!

何かが引つかかってバランスを崩して倒れてしまう。

「何をするんだよ!?!」

「大人しくしなさい。これは命令よ!」

「そんなことを聞くわけないでしょ!」

どうやら脚部装甲にワイヤーが絡んだらしい。僕はそれを外そうとするが、複雑に絡んでいて中々外せない。

「まだ抗うのね。なら、これで痛めつけてあげるわ」

そう言つて女性は鞭を虚空から出してそれで攻撃して来る。

僕は飛んでくる鞭の先端を掴んで止めようとするが、不規則に動いているので中々掴められない。そんな時だった。

『逃げるな!!』

耳に——違う。これはスピーカー？

すると空中に何かが映る。そこには週に5日以上は顔を見ている従兄の姿があった。



静流が貸し出されたIS「ラファール・リヴァイヴ」で逃げ出した時、まだ教室で思いの話をしていた女子たちは写真を撮ったりしていた。中には男子も混じっており、女尊男卑となり、女が男を奴隷のように扱き使う今ではある意味珍しい光景となっている。

その様子をたった一人で見っていた篠田箒は、羨ましいと思っていた。

彼女の名前、「篠田」は偽名である。本名は「篠ノ之箒しのののほうき」と言い、世界を変え、一部では「天災」と称される篠ノ之束しののたばねの妹である彼女は小学4年生の3学期が終了する直前の剣道の大会当日に政府によって引越しを余儀なくされた。彼女は姉の居場所を探るための情報源として、そして人質として常に政府に監視されていた。小学校卒業までは両親と共にいたが、中学入学と同時に一人暮らしをさせられ、それでも何度も転校させられたのである。

(まさか、一年も同じ学校にいられるとは思わなかった)

長くて3か月。酷い時は2週間で転校することが彼女にとって1年も同じ場所に留まるなど本当に珍しいことだった。だがそれは一重に本来なら隣にいるはずの男子生徒——舞崎静流のおかげだろう。

彼はある意味、彼女にとって二人目のヒーローと言える存在だった。一人目はいつの間にか剣道で強くなっていることで、そして二人目は環境を整えてくれた。その方法は箒が嫌いな姑息な手が多かったが、いつの間にかそれすらも受け入れていた。

(……本当に、感謝する)

気が付けば何か水のようなものが自分の手の甲に落ち、それが自分の涙だと知った彼女はすぐに自分の目をぬぐった。

「篠田さん、一緒に写真を——って、どうしたの!？」

どうやら泣かれているのを見られたらしい箒は慌てて誤魔化そうとするが、4月に来たが3年になって転校してくる存在が珍しかったのか、それとも話し方が珍しかったのかある意味注目の的だった彼女が泣いているというニュースはクラス内にすぐに広がり、全員がそつちを向く。

「い、いや、違う、これは——」

「わかっている。わかっているよ」

一人の女生徒がそう言っただけで箒の肩を叩き、

「舞崎君に帰って来てほしいんだよね?」

「それこそ違う!」

だが周りは誰一人そうだと確信しているのか、誰も箒に耳を貸さずニヤニヤした。

「わ、私は別に、舞崎に対してそういう感情を持つているわけじゃなく——」
「まあでもわからなくもないけどねえ。数学教員の音田に文句言われた時もすごかったし」

「先生。確かに彼女の話し方は周りと違います。これは新しい話し方であたのような方にはご理解できないかもしれません。ですがそれは彼女が悪いのではなく、古きものに固執して受け入れられないあなたの方に非があると思います。もう少し「萌え」について学んでみてはいかがでしょう？　それができないあなたはいずれ生徒たちに舐められ、学級崩壊はもちろんの事、それが周りに伝染し、齢50にして無職。奥様には逃げられ、子供には呆れられ、家においては責められる毎日を送りたいのですか？　それが嫌ならまずは魔法少女から手を付けることをお勧めします」。つて、凄かったよね」
「ああ、後「それとも彼女には下ネタ用語で弄られたいですか？　おそらくそれは違和感がなくなつていまうのであまりお勧めしません。もうあなたも50ですし、今更自分の娘どころか孫ぐらいの年齢の中学生に発情するのは流石にまずいでしよう？　いくら彼女の胸が大きいからつて欲情はダメです。するならソープで、もしくは風俗でお願いします。ま、最近は女尊男卑なので一昔前に比べたら割高でしょうから教員の安月給じゃ無理でしょうが」つてのものな。一体何でああもスラスラと罵倒できるのか知つてみたいものだ」

「……いや、私は……」

顔を赤くしながら箒は「違う」と否定しようとするのを見て、別の生徒が言った。

「でもホントびつくりしたよね。最初は「すごく怖い」って聞いてたし、上級生には何度も絡まれていたからヤンキーかなって思ったよ」

「……………そうなのか？」

「実際、結構静かだったよ。でも話しかけたら意外に話すタイプで驚いたよ。ほら、ウイングなんとかって」

「ああ。あれは俺も見ただけど面白かったぜ。特に自爆して死んだはずの奴が——」

それから別の話が始まるが、箒は一人で別のことを考えていた。

「でも小学校の時は酷かったよ。ほら、彼って両親いなくてお祖母ちゃんが参観に来たときに周りがはやし立てたからさ」

「その影響か、上級生に目を付けられて潰しちやっただんでは？ 確か、机で思いつきり頭を殴ったって聞いたけど」

ふと、周りが気付き慌てて箒に対して弁解した。

「待って！ 違うの！ 別に嫌われさせようとしているってわけじゃなくて、その——」

「いや、大丈夫だ。私も、今の舞崎がどんな人物かということ把握している。ただ、そ

んな過去があつたとは驚いているだけだ」

素直にそう説明する箒に対して周りはホツと胸をなでおろす。その時だった。

——アーン

どこかから乾いた音が聞こえた箒。しかしそれは彼女だけでなく他の生徒たちも同様で全員が興味を持って外に出る。

すると外にはフランス製の第二世代型 I S 「ラファール・リヴァイヴ」を纏った静流の姿があつた。

「え？ ちよつ、何で——」

「舞崎君が I S を動かしてる?!」

その言葉で全員が窓側に寄つて静流の姿に注目するが、箒は一人別の場所を見ていた。

(どうして晴文さんがあんなところにいるんだ!?)

静流の従兄で箒が通うジムのインストラクターをしている男性の姿を見つけた箒はそつちに注目する。

「ちよつと待つてよ！ ここはどう考えても逃げるところでしょ!」

急にそう返す静流を見て箒は一人そこから晴文の所へと向かった。

一方、静流は急に現れた晴文に「逃げるな」と言われて焦っていた。

「ちよつと待つてよ！　ここはどう考えても逃げるところでしょ!？」

『いや、戦え。ここはもう戦うしかない』

「どうして!？」

『これから戦うが続くからだ』

晴文ははつきりとそう言い、さらに言葉を続ける。

『いいか、静流。ISを動かした以上、これからお前は命を狙われる。今のよう——』

「ごちやごちや言つてんじやないわよ!」

そう言つて女は鞭を振るつて晴文の近くを攻撃した。

「兄さん!」

「大人しくしなさい!」

今度は静流に向けて鞭を振るう女。だが静流は先端を掴み、そのまま晴文に近づい

た。

「兄さん！ 大丈夫!?!」

『……久々に聞いたな、その呼び方……』

「今はそんなことを言ってる場合じゃないでしょ?!」

静流は鞭の先端を離して晴文を抱える。すると後ろから再び鞭が飛んできた。

「この、言う事を——」

「——止めろ!!」

唐突に聞こえた叫び声に女は反応を示す。

「今度は何なんなの………あ、あなたは!?!」

「貴様、いい加減にしろ! 一体舞崎が何をしたというのだ!?! どうやらISを動かしたようだが、ただそれだけだろう! ましてやISを持たない人に攻撃するなど!?!」

まるで示し合わせたかのように、ボールが、そして机が飛び交い始めた。それを知った教員たちは止めに現れるが、生徒たちの一部がそれを止めにかかる。

『……すごいな。ここの生徒は』

「ホント、兄さんの真似して煽った僕に付いてきただけのことはあるよ」

呆れ半分、嬉しさ半分と言った具合で静流はそう言うのと、晴文は静流に行った。

『どうしてこんなことになったのか知らない。けどな………ここは動け。無力なのにそれ

でもお前を助けようとする奴らに応えてやれ』

「……でも、ISは兵器だ」

悲しそうにそう言った静流にため息を零して提案した。

『………だったら、不殺だ』

「…不殺？」

『ああ。殺さないように攻撃しろ。舞崎静流が中学で見せた輝きを何も知らない奴に見せてやれ！ お前はお前を、そしてお前らしく不殺を貫けばいい。それにな、ISつてのには絶対防御があるんだ。衝撃はあれど、死にはしない………だから——貫け、自分を。あの女を倒すためじゃない。周りに応えるためにだ！』

先程の悲しい顔はどこに行つたのか。喝を入れられ笑顔になつた静流は頷き、後ろを振り抜いた。

視線の先には業を煮やした女が今にも鞭で周りを攻撃しているところだつた。

「さつきからごちゃごちゃと、殺されないからって調子乗ってんじゃないわよ！」

そう叫んで今にも振り回そうとする女に対して、静流は突っ込んだ。

「不意打ちなんか食らうわけ——」

静流をかわしながら馬鹿にしつつそう言う女性だが途中で言葉を切る。それもそのはず。静流はダイレクトに胸を掴んで後ろに周つたからである。

「この、どこ触つて——」

「狙い通りだ」

そう言つて静流は後ろを向いた女の顔を殴つた。

「よ、よくも私の顔を——」

「悪いね。僕の好みだつたら今すぐ首輪をして是非とも持つて帰つて調教と言いたいけど、君は僕のタイプじゃない。お引き取り願おう」

「何がよ?!」

だがその口調は周りが待つていたことであり、観客となつた生徒たちはフィーバーを起こした。

「待つてました、静流節!」

「やれ! 我らの裏委員長!」

次々と声援を送る男たち。女も「ぶちのめせ、あなたの本気!」などと叫んでおり、ほぼ全員が静流のことを応援し始める。

「ああ、たかが胸を触られたぐらいであまり騒ぎ立てない方がいい。それだとまるであなたが良い歳して「処女」だという事がばれてしまう。そして僕と対峙してそう簡単に勝てるなんて思わないように」

「ふざけてんじゃないわよ!!」

女はパイルバンカー《グレー・スケール灰色の鱗殻》を展開して静流に食らわせようとしたが、静流はその姿を見た瞬間、女の腕を外へと弾いた。

「確かにそれは危険だ。だけど——」

そこからの展開はまさしく早業だった。

女の腕を首少し下に近づける。すると杭の先端が自然と女の喉を向き、喉を打つ。女も流石に効いたようで悶絶した。

「これは僕が好きなき武器の一つだね。そう簡単に落ちる気はない」

「……よ……よく——」

「ではここから僕も手伝おう」

そう言つて静流は女を押し倒して馬乗りになり、唯一装備されていた《ブラッド・スライサー》を展開し、それを女の首に突き立てる。

すると見る見るうちに女が装備する武者のようなISに備わっているシールドエネルギーがなくなつていき、静流が使用しているラファール・リヴァイヴに警告が発せられた。だが静流はそれらは一切無視して立てた状態になった。安全を保護するためか打鉄のシールドエネルギーがなくなると同時にラファール・リヴァイヴも動かなくなり、静流を輩出して転がした。

「と、わわっ……酷いなあ、も——」

勝てたことに油断した静流はその場に立った。女性はその隙を逃さず、ナイフを出して静流を攻撃しようとするが、それよりも早く静流はカウンターのハイキックを叩き込んだ。

「な、なんで……」

驚きながらも蹴られたことが大きくバランスを崩して倒れる女。静流は女が持っていたナイフを取り上げて、さらにISを放置した状態で教室に戻った。



教室に戻った僕を待っていたのは隔離という非情だった。

すぐに先生たちに空き部屋に連れて行かれた僕は装備そのまま座っている。なんとか勝てたけど、妙に非現実的な感覚がする。

だからだろう。さつきから疲労がどつと来ている。

(……………何で僕は卒業式の日にあんなことをしたんだろう)

普通に考えておかしすぎる。いや、平然と戦った僕が言うのもただけどさ。

そんなことを考えていると、扉が開いて黒いスーツを着た人たちが入ってくる。

「ぎゃあああああ!!」

「おい待て!」

ヤバいと僕の第六感が告げている。たぶんこの人たち、僕をこのまま連れて行くつもりだろう。そうなったら無力の僕は否応なく解剖され、無残な姿になるだろう。

「嫌だああああ!! まだ15で彼女もできたことなくて童貞で死ぬのは嫌だああああ!!」

「待て! 我々はそのために君に会いに来たわけではない!」

「信じるもんか!!」

「いや、そこは信じろ! 我々は君を解剖するつもりはない!」

「……………」

いやいや、冷静になれ。普通に考えてそれはない。だって僕はISを動かしてしまっただんだ。それで「ありえませんが」とか都合が良すぎる。

「今回はこちらにも非があつた。今後は慎重に人員を選んで対処させてもらう」

「……………」

落ち着け。机は既に装備している。後は次弾となる椅子の近くに移動して構えると、今度は別の——いや、カテゴリ上は一般人に分類されるであろう人が入ってきた。

「……………に…ハルさん？」

「つたく。何で俺がお前らの仕事を手伝わなきゃいけないんだよ」

「仕方ないだろう。お前の身内なんだから少しは手伝え」

何故かハルさんは政府の人と仲良く話している。どうやら知り合いらしいけど、まさか政府に関係者がいるなんて思わなかつた。

「改めて挨拶させてもらおう。私は別地域の担当で日本政府IS管理局に所属する武藤むとう正勝まさかつだ。彼とは高校時代まで付き合っていた仲だ」

「え？ 二人つてそういう関係——」

「友人だ。友人」

なんだ。てつきり「B」から始まる禁断の関係だと思つていた。

「今回の件は本当に済まない。彼女も同じ管理局の人間なのだが、どうやら女権団にも

所属していたようだ。今回のことは厳しく処罰させてもらう」

「……………」

「ああ、言っておくけどこいつは昔から「厳格」と言う言葉が似合う奴だから、その女も正しく処罰されるはずさ」

ハルさんがそう言うのでとりあえず信じておくことにする。

「で、政府の役員さんが僕に何の用ですか？」

「今日はこれを渡しに来た」

そう言っ僕に何かの封筒を渡す。表には「IS学園」と言う文字、そして校章が入れられていた。

「……………やっぱりそれしかないか？」

「ああ。それ以外となると実験場に送られてしまうだろう。そうになると、私でも対処できない」

「……………」

「…不服か？」

僕の様子がおかしいと思ったのか、武藤さんがそう声をかけてきた。

「君の気持ちはわからなくもない。この女尊男卑の時代でその象徴のような学校に行けと言っているのだからな。君の気持ちはよくわか——」

「あなたに僕の気持ちがかかる、ですか。随分と軽く見られましたね」

——役人風情が偉そうに

内心舌打ちしながら、僕はそう言った。

「……君——」

「悪い武藤。静流はちよつと難しいタイプなんだ。特にその……」

「ああ、悪い。私も軽率過ぎた」

あまり語らないと思つての判断か、ハルさんは敢えて言葉を濁したが武藤さんも何かを理解したようだ。

「…………わかりました。本当は別のことをしたかっただんですが、仕方なく、本当に仕方なくIS学園に行くことにします」

「…………ありがとう」

「…………」

何でお礼を言われたのかわからないけど、僕はとりあえず帰る用意をする。どうやらハルさんが車で来ちやつているらしく、それで帰ることになった。

「…………やつぱり嫌か？」

「もちろん」

帰り道にそんなことを言われた僕はすぐに頷く。当たり前だ。僕にとってISは敵

でしかない。

僕は今から6年前、母を殺しかけたことがあった。その母は典型的な女尊男卑主義者であり、僕や父はそれを理由にいつも色々文句を言われていた。父がいななきにはいつもたばこを押し付けられ、今でも腕にはそのやけど痕が残されている。そんな時、何をどうしたのか母は包丁を手にした。その日は父が出張でいない日曜日で、僕は時間が早いことに疑問を感じたが、先に料理を作ると思ったから別に何とも思わなかった。でもそれは思い違いであり、母は急に僕を刺そうとしたのである。その時、僕はちようど使っていたミニニカーをぶつけ、包丁を奪って肩を切った。痛さに悶絶する母を見て僕は怖くなり、急いで救急車を呼んだ。そして出張先で事情を聞いた父に殴られ、捨てられた。僕を置いて二人はいなくなっていて、僕は父方の祖父母の下で暮らすことになった。今一人暮らしをしているのは、父親の思い出がたくさん詰まった部屋にいるのは中々苦しい物であり、僕は早期自立による生活力を高めることを理由に家を出たのである。……長期休業の時はそこまで離れていないこともあって普通に帰っているけどね。

安易な発想かもしれないが、ISは女を変えた。だから敵である。

「……………でもな、そうでもしないとお前は死んでしまう。だから俺は——」

「わかっている。どうせだったら彼女の一人でも見つけてくるよ」

そう言って僕は元気づけた。でもわかっている。それは自分のことで周りを巻き込むということ。だから安易にそんな存在を作るつもりはなかった。

でも僕はわかっていたいなかった。ISが敵ではなく、女と言う生き物が敵であることを。

第0—3話 Further calamity～さらなる災難～

家に帰った僕は早速願書にすべて記入し、荷物の整理に取り掛かる。

(……たぶん何度か帰れるけど、その時は外食か何かを買うかな)

後は高校のバイト先を見つけないといけない。IS関係の仕事に就く人はそれなりに高給取りだと聞くけれど、流石に高校生は違うだろう。だからと言ってこれまで生活費とかバイト代を使ってコツコツと溜めて来たへそくりを使うのも気が引ける。

(そう言えば、学食とかってどうなるんだっけ?)

後で入学願書と一緒に入っていたパンフレットに目を通さないと。説明書を読んで組み立てる派だからね。

(でもIS学園かぁ……)

そう言えば篠田さんもIS学園に行くんだよね。そうだったら今度はフォローしてもらおうかな。恩着せがましいのは理解しているけど、ほとんど女だし大きなおっぱいで受け止めてって感じに。

(……そう言えば、もう一人男子がいたけど……)

ああいうイケメンとはお近づきになりたくないから却下だな。となれば一人で過ごすしかない。小学校時代に逆戻りか。

(いや、落ち着け)

中学校時代で僕はそれなりの付き合いを築くことができた。なら、それを活かしてそれなりの関係(友人前後)を作ればいいだけの話。……まあ、そう簡単に行くわけないんだだけ。

(さて、馬鹿なことを考えるのは止めて、荷造りの続きだ)

しかしおかしいな。さっきからテレビを点けた状態で放置しているのに、何故か僕のことをニュースに流れない。放送されてもおかしくはない事なのに何でだろう？

そう思っていると、もう6時半だというのに珍しくドアのチャイムが鳴った。

(何だろう。こんな時間に)

妙に嫌な予感がしたこともあって、僕は財布とスマホを携帯する。いつでも動けるような服装にしているから、後は靴を履くだけだ。

あまり待たせるのも悪いから、靴を素早く履いてチェーンがかかっていることを確認してドアを開ける。

「…何でしようっ？」

「舞崎静流さんですね。本日午後1時半前後、あなたに暴行を加えられたという報告が

あり、あなたを逮捕しに——」

——バンッ

僕は慌ててドアを閉める。逮捕もそうだけど、僕が今見たのはそれだけじゃない。何かさっきの人は銃を持っていた。

「逮捕の前に日本政府のIS管理局に所属する武藤さんって人に問い合わせてくださいよー！」

鍵を閉めてそう叫ぶが、さっきの態度が気に食わなかったのか、ドアを殴り始めた。

『貴様、その態度は何だ！ 大人しく出てこい！』

一瞬で取り立てに変わった女たちを無視して、僕はベランダの方へと走った。

僕が住んでいるのは駅から少し離れた2階式アパートで、その2階に住んでいる。そのベランダから飛び降りた僕は着地すると同時にそこから逃げた。どうやら周りに控えていたらしい女たちは唾然としているようで、何のアクションも見せない。

「逃がすな！ 追え！」

「この異端者め！」

と思っただけすぐに復帰したらしい。切り替えが早いとこういう時に困る。

——ドウルルウウウッ!!

何か激しい音がしたと思って振り向くと、大型バイクが近づいてきた。二人乗りして

いるらしく、後ろには鉄パイプを持った男が乗っていた。後部座席の奴はフルフェイスではない。

「死ねや!!」

「——ッ」

接近して来る鉄パイプが僕の頭部へと迫った。



「それで、結局あなたは動かせなかったの？」

「ああ。まあな」

静流が襲撃されている頃、晴文は実家へ帰っていた。今日はあの騒ぎでさらなる混乱

が予想されるため、住居から逃げて来たのである。

「でもすごいわね。夏休みにでもここに来たら彼女を連れて来るんじゃないかしら？」

「それはないだろうな」

そう言つて晴文は読んでいた小説を閉じる。

「あら、どうして？」

「叔母さんは元々、女尊男卑思考を持つていた。そんな人に謂れもない理由で虐待され続けたら、普通なら女嫌いになるけどそんなことになつたことはない。小学校の時も何度かそういう女と一緒にいたみたいだが、決して嫌々従つていたわけではないみたいだし……とかむしろ、憐れんでいたからな」

「……………ああ、言われてみればそうねえ」

そのことを思い出した晴文の母。彼女も静流の叔母と言う立場なため何度か静流と会つたことはあるが、女と言う理由で特に何か冷たい態度を取られた記憶がない。

「むしろ普通に接しられていたつていうか……あまり会つたことがなかつたから事件後すぐはそこまで打ち解けていた気はしなかつたけど、徐々にそんなこともなくなつたし」

「その代わりなのか人一倍……いや、4、5倍ぐらいでISを憎んでいるからな。ISの話題になると物凄く不機嫌になる——」

——ピピピピッ!! ピピピピッ!!

急に室内にそんな音が鳴り響く。晴文は眉を顰めつつ自身の通信端末とは違うもう一つの端末を手に取る。

「あら、それは一体——」

「久々に帰って来てなんだが、ちよつと出てくる」

「え? ちよつと晴文——」

月は三月だがまだ少し寒いため、晴文はジャンパーを着て、靴を履いて車のキーを置く。

「ちよつと晴文、こんな時間に一体どこへ——」

「異常事態が起こった。静流を回収して来る」

「……そ、それはいいけど……」

外に出た晴文はドアの前で立ち止まる。

「……悪いんだけどさ、母さん。もしかしたら俺、生きて帰って来れないから……その時は二階にあるボイスレコーダーをある人物に直接渡してくれ」

「え? それってどういう——」

それだけ言い残した晴文は車に乗り、飛び出すように出て行った。



「——え？ 事故？」

「そんな、何でこんな時間に!？」

後ろの方から野次馬が聞こえる。いくら鍛えているって言っても奪ったバイクを道路に横に滑らせながら停止させて通行止めにするのは命を削った。

でもそれをする必要が今の僕にあった。ごめんね、人の命がかかっているから取引先に迷惑かけても女たちに文句を言っただけほしい。

「まだここにいないはずだ。探せ！」

近くではそんなことを言う女が聞こえる。どうやらリーダーのようだが人質に取ったところで僕にはどうすることもできない。

(次は自転車か何かを奪うしかないかな……)

完全に犯罪者の思考だけど、緊急事態だから見逃してもらえるはずだ。職務怠慢をしすぎたな、政治家共。

そんなことを考えていると、

「——見つけたぞ!!」

考え事をし過ぎたためか、僕の姿を見つけたらしい。

僕はすぐにそこから逃げ、信号で止まっている車を見つけた。しかも交差する信号は今は黄色。

(今だ!)

乗用車の屋根に飛び乗る。すると車は発進し、そのまま左に曲がって進んでくれた。

「追える者は今すぐ追え! 逃がすな!」

そんな不吉なことが聞こえてくるけど、その時には進路を変えれば大丈夫だ。

(……………何で僕、15歳でこんな危ないことをしているんだらう?)

母親を倒した時からだろうか、僕はことごとく道を踏み外している気がする。授業参観の日にお祖母ちゃんが来たことで周りから囃され、親に捨てられたことがばれて囃さ

れたから「そんなことで何でそんなにテンションが高いの？　頭がおかしいから病院でも行つたら？」って言つたら喧嘩になつて、そしたら上級生に目を付けられて「弟が殴られたから」という理由で殴られて、僕を抜き使うって言い残したけど正直大人しく殴られたからもういいじゃんって思ったから無視していたら、「下級生の癖に生意気な」って言つて殴つてきたから仕返しに一撃で倒れるって言うことで椅子で壁に押し付けて身動きを取れない状態で今まで分を返したただけなのに、お祖母ちゃんと呼ばれるし「そつちの教育が悪い」だの「親なしが原因」だの好き勝手言うから、「成績ですら僕に負け、挙句喧嘩に負けて兄を呼んで一度は倒したからつて油断するように教育したあなたが原因なのでは？」って言つたら逆に切れるし、それが原因でクラスメイトのお嬢様に目を付けられて荷物持ちから始まつて、とうとう執事扱いされて僕の都合も無視しはじめのからやんわり断つて帰つたら虐めの標的にされて、その原因だつたお嬢様に対して直談判したら惚けるし、今度は証拠を集めて提示したら「男のくせに生意気」と既にそう言うのに染まつている奴らからさらに過激な虐めに発展したけど誰も助けてくれなくて、そんなことになっている中に誰かが「ISが最強」という話になつたから、その反論としてM○やA○の方が兵器としての価値は上だということ教えたら、集団で文句を言われて「ISに乗れない弱者が!!」って言うから「兵器に乗つて人殺しするつもり？」って返したら、切れて周りに物を投げるように言つて、周りはその言う通りに投

げてきて、椅子がもろに飛んできたから蹴り返したらお嬢様の横を通り過ぎて、それが原因でお漏らし云々でとうとう転校をしていったし、今度は悪い中学生からつるむように言われたから無視したら、乗り込んでくるけど元々教師なんて使えないとしか思えなくなっていたから一人で処理したら距離を置かれるし、中学生になっても悪い奴が近づいてくるし、そして今度は鉄パイプで殴られそうになるし！回避したらそのまま木に引つかかってバランス崩して倒れてたけどさ。ケガしても流石に最後は関係ないです。(ともかく、なんとしても逃げないと……)

やっぱりあの時、IS学園に行けばよかったと今になって思う。そんな時だった。

「もう逃がさないぞ、異端者！」

後ろから、それなりに大きい車から何人かが上に立っている。

「狙撃手は我々のサポートを！行くわよ！」

三人ほどが鉄パイプやらバットやらを持ち出して現れる。リーダー格が車の屋根に飛び乗って迫ってくる。

僕は周辺を見渡し、徐々にスピードを緩める車群を、そして交差点を曲がろうとする一番右端の道路に並ぶ車を見て、すぐにそっちに向かった。

「待て！ 逃げるな！」

その言葉を当然無視した僕は、前へ前へと進んでいく。そして最前列の車に着いたと

き、指定方向信号は消えていたようで停止してしまった。

「どうやら貴様も年貢の納め時が来たようだな！」

「……………」

ギャラリーがこちらに注目し始める。まあ、さつきから意味がわからない車上戦を始めようとするのだから注目が集まるのも当然だろう。

「怖くて話せないか。まあいい。今すぐ楽にしてやる！」

まだ近づいていないのにそんなことを言う女性。僕は隠し持っている物に手を伸ばそうとすると、それを遮るように車のクラクションが鳴り響いた。

「何だ!？」

普通なら、クラクションは危険を回避するために慣らすものだ。それが何度も鳴らされるため、僕は注目した。そしてその方向には見覚えがある車がある。

「……………僕を舐めるなよ」

「!? 何を——」

僕は後ろを向いて僕らから見て横を走る車に向かって跳んだ。

すべての車道が右折部を含め3車線ある交差点で、たぶん僕は今日伝説を起こす。

全員が驚いて僕に注目を集める。そして僕は通り過ぎようとする一台の車の上に着地すると同時に再び跳躍。そして僕を回収しに来たハルさんの銀色の車が通る。そして体を丸くしてそのまま着地した僕は転がる。

——危ない！

誰かがそう言ったのが耳に届いた時、僕は屋根から落ちそうになった。しかし右腕は伸ばしていて、そのまま力任せに落ちる体を助手席側の窓に突っ込ませ、中に入った。

「お見事」

「鍛えた体は伊達じゃない、てね」

ガン〇ムネタを交えて答えた僕は、手を挙げていたハルさんの手を右手の甲で叩き、シートベルトを装着した。

僕らに乗せた車は現在、市街地から離れてつづら折りの山道を走っている。

「……………何でこんなところを走っているの？」

「この先に俺の知り合いが所長をしている。ISSの研究所がある。嫌だろうが、そこからISSで一通り訓練を付けてもらおうように頼んでみるさ」

「……………」

ISSの訓練か。そんなのはもちろん嫌に決まっている。でも僕は、悲しいけどISSを使える男になってしまったんだよね。だったらこれ以上、巻き込まれても大丈夫なように戦う術を身に着けるべきか。

「……………まあ、性格はちよつとアレだが安全は保障されるはずだ。いざとなれば俺がどうにかするし、静流の専用機も開発される可能性だつてあるだろうしな」

「……………専用機、か」

脳内にシリーズものの機体が次々と浮かび上がる。未来を見せて混乱させる機体とか、敵の陣営の男と友達になった男の機体とか、覚醒から色々とやって、理不尽な制裁を食らわせる上官を持った男の機体とか。

「プロヴィ○ンスの要素は外せないな」

「よりもよつてそれかよ。ドラ○ーンは腰メインにして背中には悪魔の翼を付けるか。声繋がりで」

「じゃあ、現れる時は「俺、参上！」って言わないといけないね」

「ついでにメイドにもこだわりを持つしかないな」

「しかも医者を目指さない。最悪、ロリコンになる必要もあるのか」

笑いながらそんな会話を中断していると、近くで爆発が起こる。そして土砂が崩れ始め、僕らが乗る車を襲った。

「敵は一体どこから——」

なんとかそれを回避したハルさん。僕は嫌な予感をして後ろを見るが、後ろには車の影はなさそう。

「今のは何!? 一体どこから——」

「……………そんなことがあるっていうのかよ」

「え!?!」

目の前に何かが現れる。それは今では見慣れているもので、この世界を狂わせた原因である——

「……………IS」

「シートベルトを外せ!」

言われて僕はすぐにシートベルトを外す。え? でもシートベルトは付けないといけないんじゃないじゃ——

そんなことを考えていると、急にフロントガラスから見える景色が変わり、世界がくるくると回り始めた。

「……………まさか」

——これって、僕らが回っているんじゃないだろうか？

そんな疑問が過った。そしてそれを証明するかのように音がし始め、地面が上下に移動する。そして僕は、何故か車から飛んだ。

暗い世界——と思ったけど、熱く感じた僕は目を開く。

何でか痛いけど、僕はハルさんの車を探した。

(……………声は出さない方がいいかな)

僕はそう思つて削られた後を辿る。何か恐怖心が過るけど、それでも僕は進んだ。

しばらくして道が現れたので出ると、そこにはハルさんの車があった。

周りに誰もいないことを確認した僕は車に手を伸ばす。運転席にはハルさんがいたが、どうやら気絶しているみたいだ。

中に入って僕はハルさんを助手席に移動させ、運転席に座る。

(右がアクセルで、左がブレーキ。そして、このよくわからないレバーを「D」にして……)

よくハルさんが運転しているのを見ていたから、やり方はわかつている。ナビで近くの病院に案内するようにして、ダッシュボードの中に入れてある小型のサイレン装置を鳴らして上に車上に置き、アクセルを思いっきり踏んで進ませる。おぼつかないハンド操作で市街地に向かう。

すると、急に地面が爆発した。

「その車、止まちなさい！」

上からそんな声が聞こえてくる。ヘリの音はしれないがブースター音がすることから、さっきからISが飛んでいるのだろう。

僕はそれを無視して、むしろスピードを上げて市街地まで走った。

(さっきの声、あの女性に似ているな)

僕を殺そうとした女性を思い出す。今だって印象に残っているのは殺されかけたからだろう。ともかく無視して、僕は市街地にまで急ぐが、蛇行運転を始める。僕の予想は当たったようで、上から弾丸が降ってきたかと思ったら銃弾が止んだ。

(……今だ！)

さらにアクセルを踏んで、そしてガードレールがない所を狙って山道を走る。

「いい加減にしなさい！ 止まれって言うてるでしょう！」

ふざけるな。こっちはハルさんがヤバい状態なんだ。でもサイレンを鳴らしている以上、しばらくすれば異常に気付いてくれるはずだ。

本来ならもつと時間がかかるだろうけど、山道をそのまま下ったから時間を短縮できただけ車はボロボロだ。そのまま市街地に入って信号を無視し、右折して交通状況を混乱させる。周りから罵倒が聞こえるけど、そんなものは一切無視だ。

そしてようやく病院に着いた僕は急ブレーキをかけて病院の入口の真ん前に止まる。するとサイレンが鳴りっぱなしだからか、中から人が飛び出してきた。

「サイレンを消せ！ 患者にとつて害になることくらい知ってるだろ！」

「そんなことよりも、今すぐ担架を持ってきてください！ 重傷者が一人いるんです！」

「何?！」
僕は運転席から降りてそう言いながら助手席に回りこみ、ドアを開けてハルさんを出す。

すぐに担架を持って来てくれて、ハルさんを寝かせた僕はサイレンのスイッチを切った。

「馬鹿な暴走ごっこは気が済んだかしら、舞崎静流」

「……………」

上空を見ると、やっぱり僕を殺そうとして胸を揉まれた挙句倒された女性が待機していた。

「な、何でこんなところにISが!？」

「あの少年、一体何を——」

僕はサイレンを片付けるふりをしてある物を取り、それを起動させて分投げた。

その隙に僕は車に乗って、すぐにそこから離脱する。

「もう付き合っていられないわ」

一瞬、重力が感じられることがなくなつたのだと思つた。気が付けば僕は何かに引つ張られる感じがして、何かにぶつかる。

シートベルトを付けていなかったから外に出されると、目の前にはISを装着している奴らがほかにも二人、そして金属バットや鉄パイプ、さらにはエアガンらしきものである。

「へえ、これが今日動かしたっていう男？」

「織斑一夏に劣るけどそれなりじゃない？」

「でもまあ——」

——ガンッ

何かが左肩にぶつかり、衝撃が走る。

「生意気なのよねえ、男がISを動かすなんてえ」

——クスクスクスクスクスクスクス

周りからそんな笑い声が聞こえてくるが、今のでかなり食らってしまったか、それとも今食らったのかはわからないが、体がまともに動かせないでいた。

「ああ、ごめんなさい。恨むなら、ISを動かした自分を恨みなさい」

そう言った女性が何かを振り上げた——かと思ったら爆音が耳に届き、僕はまた空を飛ばされた。



その頃、IS学園では二人の操縦者がそれぞれのISのチェックを行っていた。

「学園長、準備ができました」

「私もです」

『わかりました。ではお二人とも、準備をお願いします』

女性、少女の順番に言うと、スピーカーから少し枯れた声がそう指示する。言われて一人は準備された機体に取り、それぞれカタパルトに向かう。

『今回の任務は匿名の通報の真偽を確認するためです。もし真のことならば、新たに現れた男性IS操縦者を確保してください』

「わかりました。気持ちの準備はいいか、更識」

返事をした女性は少女……というよりも体形はもはや女性に近い、「更識」と呼ばれた女にそう声をかける。

「織斑先生こそ、久々の実戦なんですから調子に乗って大きな失敗をしないでください
ね」

「よく言う」

「織斑先生」と呼ばれた女性はそう言うと言先に行くためか、準備されたカタパルト発射台に脚部装甲を接続した。

「織斑千冬、打鉄特式、発進するー！」

声に合わせて電磁式カタパルトが前進し、最終地点に着く時にぶつかつた衝撃で飛び出す。同時にブースターが勢いよく空気を噴きだし、上昇した。

その頃、残つた少女は機体に乗ることで見ることができている投影式ディスプレイ「ハイパーセンサー」に移る一つ上の女生徒「布仏虚」のほとけうつほと話をしていた。

『お嬢様、気を付けて。先に出ている山田先生が言うには、どうやら自衛隊のISは出ているみたいですが、様子が変らしいです』

「……それはますます気になっちゃうわね。ともかく……」

彼女も自身の機体の脚部装甲をカタパルトに接続する。すると周囲のラインが光り、彼女の耳にアナウンスが聞こえた。

『進路クリア。発進どうぞ』

「更識楯無さらしきたてなし、ミステリアス・レイディ、出るわよー！」

カタパルトが射出され、千冬と同じ動作でそこから出撃する。

18時35分。静流が襲われて30分を超えてIS学園から二機のISが出撃した。

第0—4話　Black haze（黒い霧）

唐突だった。

唐突に、日本にテロが起こった。だがそれは実際、外国からの入国者が起こしたのではなく、たった一人の少年とそれを殺そうとせんがために行動しているある組織が起こしたことであり、ある意味偶発的なことだろう。

幸いなことに負傷者は出たがまだ死者は出ていない。少なくとも、政府が認知している範囲ではだ。

（全く。何の後ろ盾がない男性操縦者が現れただけでこの騒ぎか）

日本総理大臣である阿村はため息を吐きながら、私兵による搜索の結果を待つ。

目の前には一人の老人がおり、さつきから大声で話をしていた。

「わかりました。では、そのように」

そう言つて老人は電話を切り、通信端末をしまった。

「お待たせしました、総理」

「全くだ。君は礼儀というものを知らないのかね」

さげすむような目でその老人を見る阿村だったが、次第にそれは虚勢へと変わってい

く。

「申し訳ございません。生憎、私はあなた程度の存在など気に留めるつもりはありませんので」

「……………貴様をI S学園の理事長を任命したのは私だぞ」

「おやおやあ？ 確かあの時はあなたが泣きついてきたのでは？」

「……………そんなことはなかった」

「まあ、特別にそういうことにおきましよう」

自分よりも下であるはずの老人に対して怒りを見せる阿村だが、自分から攻撃を仕掛けようという馬鹿な真似はしなかった。それもそうだろう。彼は幼い頃にあらゆる武道を身に着けたとしても、目の前にいる老人は初段や二段になったぐらいで勝てるような存在ではない。

「で、私を呼んだのは一体……………つていうのはよしまししょうか。今あなたが動員させている件に一切手を出すなどということですか？」

「理解が早いな」

「実はあなたに呼び出される前に、別の方から頼まれていたのでね。新たに現れた男性

I S操縦者を頼む、と」

それを聞いた阿村は驚きを顕わにする。

今回の襲撃事件、やらせたのは他でもないこの阿村であり、「死なない程度までなら痛めつけることを許可する」と言う条件で女権団に自衛隊のＩＳも貸し出して確保に動かせたのだ。

「なら、今すぐその者たちを下がらせる。命令だ」

「生憎、出したのは世界最強と生徒会長の二人なのでね。少々説得に骨が折れます」

「……………」

阿村は自然と目の前にいる老人を睨んでいた。

「まあ、そう睨みなさんな。闇を背負うても私とて人間。無闇に人を殺すのは好きではないのですよ。それが何の罪も持たない子供なら、なおさらね」

「……………罪か。女にしてみれば、あの男は罪を背負っているようなものだろう」

「だから、そのガス抜きとしてあの少年を使つたと。まったく、これだからあなたは困る」

そう言いながら笑うその老人の言葉に、阿村は眉を動かした。

「所詮、一個人など替えが利く」

「……………では、ゲームをしませんか？」

「何？」

唐突の老人の申し出に阿村はもう一度眉を動かす。老人はどこか楽しげに話を続け

た。

「簡単なものですよ。二人目の男性IS操縦者を誰が手に入れるか、予想するのですよ。私が目にしたIS学園の人間が手に入れるのか、あなたが用意した駒が手に入れるか……もしくは、私たちではない、第三者が手に入れるか」

そう言った老人の顔には邪悪な笑みが浮かんでおり、それを阿村が見た瞬間、外が明るくなった後にしばらくして彼らの耳に爆音が届いたのだった。

静流や彼を狙う女たちがいた場所で爆発が起こった。

そのせいか、周りが吹き飛んでいて、原型が留めていない。

(少しやりすぎたかしら)

それを行った存在は落下しながら惨状を見てそう思い、ほんの少しだけ反省する。

だがそれもすぐに終わり、彼女は辺りを観察して目当ての人物を見つけ、ゆつくりと近づいた。そして着地すると同時に纏っていたISを解除し、その人物の胸に手を当て

て脈拍を調べる。

(あら、良い胸筋……じゃなくて、どうやら生きてはいるみたいね)

「……………」

目当ての人物は気が付いたのか、体を軽く震わせながら目を開ける。

「気が付いたかしら?」

「……………」

「意識がはつきりしていないようね。悪いけどこのまま連れて行かせてもらうわね」

「——待ちなさい」

金髪の女性が手を伸ばそうと、それを遮る声があった。女性はそちらの方を向いたが、彼女の瞳は声をかけた人物を完全に見下していた。

「何故、私たちに攻撃したの? あなたは女でしょう?」

「生憎、私は今の世界が壊れようがどうでもいいの」

「なんですって?」

金髪の女性は再び I S を展開し、話しかけて来た人物に対して攻撃した。

「……………あ……わ?」

目当ての人物——静流の意識が完全に戻ったようだが、どうやら万全の状態とはい

かないようだ。

金髪の女性は部分的にISの装甲を解除し、静流の頭をそつと撫でる。

「あなたを迎えに来たわ」

「……む……かえ？」

「そう。この腐敗した世界を終わらせるために」

そう言つて女性は静流を抱えようとしたところで、女性は何かを感じて自機に装備されていゝ尻尾を上げる。

——キュインツ!!

その尻尾で火花が散る。すると近くで突風が起こり、それを感知した女性は尻尾を振るう。

——キンツ!!

するとISを装備した別の女性——打鉄特式を装備した織斑千冬が現れ、金髪の女性を斬ろうとしたが、それを防がれる。

「近くにISの反応があつたから来ているとは思つたけど、まさかあなたが出て来るなんてね」

「更識! 少年の確保しろ!」

「了解!」

千冬の後ろからミスティアス・レイデイを纏つた更識楯無が現れ、静流の元へと移動

するが急停止して下がった。

「どうした？」

「彼の周りに金色のバリアが張られています。あれでは迂闊には——」

「そういうことよ。彼は私が連れて行くわ」

そう言った金髪の女性は振り向く。そこには未だ意識がはっきりしない静流が呆然としていた。

「行きましよう、坊や」

「……………」

「大丈夫よ。あなたがこれから行く場所は、女尊男卑も男尊女卑もない場所。あなたはそこで、少しは働かないといけないけど、困るのはそれくらいかしら？」

「……………」

その時、彼は何を考えたのだろうか。静流は手を伸ばし始める。

「待って！ 彼女に従っちゃだめ！」

榎無は静流に向かってそう言うが、金髪の女性は笑みを浮かべて彼の手を取ろうとしたが——

「——ありがとう」

金髪の女性が伸ばした手を取った静流は体を上げて立ち上がり、そのまま呆然とする

三人を残して去って行った。

「え？ ちよつ——」

まさかの行動に全員に驚くも、金髪の女性がすぐに静流を追った。

「逃がすか。更識！」

「言われなくても！」

金髪の女性の前に水の壁が現れるが、そのISの周囲に金色のバリアが張られ、数秒停止させるも壁を抜ける。

だがその数秒あれば、千冬は周り込める。

金属音が鳴り響く。金髪の女性の後ろから銃弾が飛び、金色の装甲に届くかと思ったが、高熱のバリアに阻まれて溶けてしまった。

「更識は私の援護を。真耶は少年の保護に向かってくれ」

「了解」しました」

遠方からついさつき静流が使用していたラファール・リヴァイヴが静流が逃げた方へと飛ぶ。

「スコール・ミューゼル。貴様を捕えさせてもらおう」

「やれるものならやってみなさい、ブリュンヒルデ」

二つの機体が交差し、周辺に再び爆発が起こった。



一体何をやっているんだろう、僕は。

意味がわからない人たちにいきなり襲われて、ハルさんに助けられたと思ったらISの妨害に遭うし、挙句今度は集団で攻撃されるし。

(本当に、何なんだよ)

さっきの金色のも、そして他のも、絶対に僕を殺そうとしてきた人たちだ。そんな人たちに付いて行ったらどうなるかなんて火を見るより明らかだ。

「ともかく、どこかに隠れないと……」

いや、隠れたところでなんとかなるの？ 相手はISを持っているんだよ？

(だったら、ISに乗るしかないのか……?)

でも、昼の時はたまたまみんなの援護があつて、突っ込んで上を取ることができたからで、僕の実力じゃない。……そりゃあ、ホバー機能を使えたけど偶然でしかない。

その時だった。

「——見つけたわ!」

遠くからそんな声が聞こえた。すると近くが爆発し、僕の近くにある何かが吹き飛ばす。

「よくもやってくれたわね。あなた」

「僕は何もしてはいないんだけど!」

大体、僕はあるな機体を持っていない。金色を持つならシラ○イ装備かオ○ワシ装備のA○ツキか百○と相場が決まっている。

「よく言うわ、あんな女を近くに待機させるなんて——」

「だから僕じゃないって言ってるでしょ!」

ふざけるのも大概にしてよ、まったく。

内心ため息を吐いていると、その女はため息を吐いて鞭を出した。

「まあいいわ。どっちにしろあなたは死んで……いや、連れてこいつで命令されているのよね」

この人、絶対殺す気だ。

やっぱりおかしいよ、この世界は。何でこんな思考がおかしい奴が平然と外を出歩いているのだろうか。

そんなことを思っていると、鞭が僕に接近してきた。

(太いから、掴めない)

そう思っ僕は回避する。

「ISの攻撃を避けた!」

それくらいなら、僕でも避けれるさ。

なんたつて僕は、小学校時代に下手すればター○系を超える程の黒歴史を築いてしまっているんだから。それに——僕はこれまで伊達に嘖抜けて生きて来たわけではない。

「(い)の——」

近場の壁を見つけた僕はそこから逃げ出す。すると何か僕の上を通り過ぎた。

「——」

何かを言っているのはわかる。でも僕の耳には届かない。

わかってしまったんだ。ようやく理解してしまったんだ。この状況は、一体どうい
ことなのかを。

今、二人は争っている。でもこれはおそらく僕を捕まえ、解剖する場所を争っている
だけなんだろう。

(……………どうして僕は……………)

どうしてこんなことになったんだろう。

僕は何をしたんだろう。

ISを動かした？ でもそんなこと、僕が知っていたわけではない。それにどうして
僕がこんな目に遭わなければならぬ。

(……………とにかく逃げよう)

近くにいたら僕は本当に死んでしまう。そう思ったから、僕はそこから逃げた。



時間的には一般市民が仕事を終えて帰る時間だが、ISを運んでいる彼らの就業終了時間はもう少しかかる。

専門トレーラーの護送を行っていた武藤正勝は爆発が起こった地域の近くを通っていた。

「しかし、酷い状態だな」

市民は既に退避しているようで、人っ子一人いない。その状況を眺めながら、正勝は逃げたらしく空いている道路を走っていると、隣に座る女性がそと彼の肩に触れた。

「何のつもりだ、戸高満とだかみつる代表」

「酷いです。二人きりなんですから、少しくらいフラックに接してくれてもいいでしょうに」

「この状況で何を言っているんですか、あなたは」

満の言葉にため息を吐く正勝。年齢は正勝の方が上だが、それでも敬語を使っている

のは彼女が国家代表だからである。

「仕方ありません。パターンを変えましょう」

「それよりもまず、この状況でそれを考えるのを止めてください。不謹慎です」

「ですが、私たちは何度も会えないんです。未だに携帯番号も教えてくれないし、会って約束しようとしても「用があるから」という理由で全然会ってくれないし……今日も運命と思ったから、こうして……」

正勝の脳内に「急にシフトを変わってほしい」という連絡があつたことを思い出す。思えば本来このルートを通る人物は相手が彼女と知っていたから交代を申請してきたと思つた正勝は、今度会つたら一通りボコつた後に何かを奢らせようと思つた。

「ん？ あれは……」

ふと、満が外を見ると何かがちらに向かつているのが見えた。正勝は周りにいないことを確認してからハザードランプを点け、右サイドに止める。

「……彼は——」

「知っているのですか？」

「はい。少し……」

サイドブレーキを入れた正勝は車から降りて向かつてくる人物——静流に声をかける。

「舞崎君、どうして外に——」

「……………どうして……………」

正勝の姿を見つけた静流は近づき、襟首をつかんで車に叩きつけた。

「あなたたちのせいだ……………あなたたち政府が、女性優遇制度を設けたからこんなことになったんだ！」

「ま、待て！ 一体どうしたというんだ!?!」

正勝が声をかけるが、静流の意識は既に別の——後ろに向いていた。正勝を離れた静流はさつきまで正勝が運転していたトラックの後ろに周る。

「おっと、この先に触れてはいけないぞ」

先回りしていた満は言い聞かせるように静流に言うが、ここで静流は予想外の行動に出る。

「——!?!」

いきなり満を殴ろうとする静流。だが拳は空振りした。

「大丈夫か」

「は、はい——」

正勝が満を引っ張って回避させたのである。

その隙に静流は囲いがされている荷台の上に移動し、多い被せられているシートの一

部を所持していたナイフで斬り裂いて荷台の中に入る。

「止めろ舞崎君！　ここでそれを動かしたら、君は嚴重に——」

「だったら全員、二度としゃべれないようにしてやるだけだ！」

そう返した静流は横たわるように置かれている二機のIS……日本製の打鉄とフランス製のラファール・リヴァイヴの内、ラファール・リヴァイヴの方に触れた。

——ACCESS——

機械音が周囲に響き、正勝と満は中でISが起動されたことを理解する。同時に、静流は信じられない光景を見ることになった。

(……何?)

ラファール・リヴァイヴから黒い液体のようなものが打鉄の方へと流れ、ドロリ、と装甲が溶け始めたのである。

だが静流はもう気にしていないのか、ただただ変化があるラファール・リヴァイヴを——いや、かつてそうだったそれを見ていた。

「……行くよ」

するとロープが切れ、天井代わりとなっていた天幕が剥がれ落ちる。同時に静流が宙に浮き、ISを纏った姿で現れた。

(ISなのか、アレは……)

正勝が疑問に思うも無理がなかった。何故なら静流の周りには金属の装甲ではなく、黒い靄のようなもので原型が留められていないのである。

そんな疑問を感じつつも、正勝はバイザーで顔の上半分を隠している静流に声をかけた。

「舞崎君、君は——」

「あなたは下がって」

静流の前に満がそう言いつつ躍り出て、静流に銃を向けた。

「悪いね。止まってもらえるかい？」

「……………雌豚風情が……………僕に指図するな!!」

すると静流の周りに球体が現れ、そこからレーザーが発射された。

「ビツト!? どうして彼が——」

「わからない。ともかく何とかして彼を抑えてくれ!」

「!? わかりました!」

正勝は敬語で話すのを忘れていたが、満は目ざとくそれに気づき、テンションを上げて回避した。すると満の耳に正勝の声が届く。

「戸高代表、今すぐ彼から距離を取れ!」

「え——!?!」

途端に満が使用する打鉄射型のハイパーセンサーが警告音が鳴り響く。

「高エネルギー反応……まさか——」

満は静流に——いや、静流の胸部に視線を向ける。そこにはエネルギーが収束されており、今にも発射できるほどだ。そこで彼女の脳内に映ったのは、トラックの近くにいる正勝である。

満はすぐに正勝を回収し、トラックから離れる。そして——

「……すべて消え去れ……お前らなんかあああああ!!!」

エネルギーが放出され、直進する。その道にある建物は何かも食らい尽くし、破壊していく。

そしてその先には——真耶と静流を狙う女性がいた。

「え?」

「何——」

二人はその放流に巻き込まれ、光線はさらに突き進む。そしてそれは——あの三人がいる場所にも及んだ。

「離脱しろ!」

千冬の指示に楯無は従って回避する。スコールと呼ばれた金髪の女性も回避し、その光線がなくなるのを千冬と楯無と共に見ていた。

「……なんなの、これ」

思わず楯無は呟いたが、それに答える……いや、答えられる者はいない。

すると三人のハイパーセンサーに警告が発せられる。

【付近にて所属不明機を確認。こちらをロックしています】

その表示に千冬は舌打ちをすると、あるシグナルを見つける。

「……あれは……真耶か!？」

「え? 山田先生!？」

驚いた楯無は下を見ると、地上ではボロボロになったラファール・リヴァイヴを纏う

真耶の姿があった。

「真耶、しつかりしろ!」

「……せ、先輩………」

わずかに意識があるのか、真耶は千冬に声をかける。

「一体誰がこんなことを——」

「全く、何なんだ!!」

すると近くにいたのか、静流を襲っていた打鉄を装備した女性が立ち上がる。

「貴様——」

「待ってよ! 私は違うわ! こっちだって何がなんだか——」

「——どうやらその原因が来たようよ」

睨みつける千冬に対して女性は弁明している時、それを遮るようにスコールがその原因に目を向けながら言った。

そこには先程の黒い靄のような物を使う静流の姿があり、一直線に打鉄の所に向かう。

「な、なん——」

打鉄の女性は間一髪で回避する。だが静流が着地したところから黒い何か伸び、女性の首に巻き付いた。

「この、きさまあッ!!」

「叫んでいるだけか?」

静流は打鉄に接近して、拳を叩き込む。だが女性はシールドで防ぐが、木っ端みじんに吹き飛んだ。

「ただの拳如きで——」

アサルトライフル《焰備ほむらび》を展開して静流に向けて撃つ女性。だが静流は既にそこにおらず、《焰備》が爆発した。

「な、何——」

——ドンッ!!

突如、伸びるように静流の手からメイスが現れて女性の首に激突した。

「アンタたちが悪いんだ」

そう言いながら静流は回転して遠心力を付けた状態で女性の側頭部を攻撃した。

「アンタたちが、こんなことをするから——」

上に飛んだ飛んだ静流はメイスを女性の頭部に叩きつけ、シールドエネルギーが切れ
て機体が停止した。

「待て」

着地した静流に千冬は声をかける。すると不愉快そうな顔をした静流は千冬に向
かって言った。

「ああ、そういえばアンタも女だったな」

「何——」

メイスを構えた静流は千冬に対して攻撃を仕掛ける。だが千冬とて元は世界最強で
あり、今でも彼女自身が真の最強として称えられるほどの実力者だ。ついさつきISを
動かせた静流は敵ではない。

「ふんっ——!!」

近接ブレード《葵》を一閃する千冬。メイスを切断して静流を気絶させるために接近
した。

「すまないが、強行手段を取らせてもらおう」

《葵》の峰の部分で静流を攻撃しようとする千冬。だがその間をスコールが割って入り、防いだ。

「悪いわねえ、織斑千冬。彼は私がもらうの」

「何を——」

「……………おい」

静流から重苦しい声が漏れ、二人はそつちを向いた。

「ごちゃごちゃうるせえんだよ、家畜共」

再び静流の胸部装甲に光が収束され、光線を放った。

だが千冬も、そしてスコールも回避し、その光線は彼方へと飛んでいく。

「今のは、さっきの——」

「おそらく二人を攻撃したのは彼ね。一体あんなものをどこで——」

スコールが推測するが、静流は一切その隙を与えなかった。

すぐさま左手にライフルを展開し、ビームを撃つ。だが彼女の機体の周囲に展開されるプロミネンス・コートが防いだ。

「無駄よ。その程度の攻撃は通らない」

「だったら——」

静流はライフルを消してそのまま突っ込んでプロミネンス・コートに触れた。

本来ならば触れた瞬間、装甲は焦げてシールドエネルギーが減っていくのだが、むしろそれはスコールの機体——ゴールデン・ドーンに起こったのである。

それに否定して、静流の機体の背部ウイングスラスターから光の翼が現れて大きくなる。

「死ね！」

今度は近接ブレードを展開し、スコールの心臓部めがけて突き刺す。

だがスコールはすぐさま後退。距離を開けるが——それに追従するように静流が動く。

すると二人の間に間欠泉が噴き、静流が怯んだ隙にスコールは撤退する。

「……………ああ、そういうえば」

静流の機体の胸部の装甲が開き、エネルギーが充填され始める。

それを見た千冬は楯無に真耶を持たせて撤退させた。

「テメエらを殺すの、忘れてたよ」

そう言つて静流は先程撃つた熱線を千冬たちがいる場所に向けて発射した。

それにより、近くのビルや車などが消し飛んだ。

「——うわあ」

驚いた僕は思わず飛び起きてしまった。

(一体なんだったんだ、今の)

流石の怖さに僕は震えながらも覚えている。確か女の子が僕を悲しそうな目で見ながら謝っていたんだ。

(……………地味に怖いね)

しかも周りは黒く、その女の子だけ幽霊のように光っているから余計にホラー要素が強かった。未だに僕の足が震えているよ。

僕は軽く深呼吸をしてから周りを見回す。

「……………(っ)は……………一体……………」

ちよ……ちよつと落ち着こう。

見慣れない部屋にはどこか高級感が漂っている。カーテンで遮られて周りが見えない。あ、そうだ……僕は昨日、理不尽な理由で殺されかけたんだっけ。

すると僕のテレパシーでも感じたのか、カーテンが開かれた。

「おはよう」

「あ、おはようございます」

そう返した僕は、再び周囲を見回した。

「……あの、ここは——」

「ちよつと待ってくれ。今すぐ、現状を説明してくれる人を呼ぶから」

そう言って女性は電話を取り、話をするやすぐに電話を切った。

そしてしばらくするとドアが開かれ、見覚えのある男性が現れた。

「まさかこうしてすぐに会えることになるとは思わなかったな、舞崎静流君」

「……武藤さん」

政府の役人である武藤さんが何故にここにいるんだろう？

そんな疑問が僕の頭に過つたけど、同時に昨日のことを思い出した。

「……そうだ。ハルさんは!? 高間晴文は無事なんですか!？」

記憶が正しければ重傷を負っているはずだ。それに急いでいたとは、かなり無茶な運

転をした衝撃でところどころ痛めているはず。

すると武藤さんは俺に「立て」と言った。

「高間はこの病院にいる。説明するよりも先に見せた方が早いだろう」

「……わかりました」

嫌な予感がした。

見てしまつてはもう取り返しがつかないと思つたけど、僕は立ち上がつて用意されていた服に着替える。幸い、点滴を打たれているわけでもないし、着替えは容易にできた。靴を履いて準備を終えた僕を確認した武藤さんは廊下に出る。どうやらどこかの病院らしい。昨日駆けこんだところはどんなだったか覚えていないけど、こんな上等なところだったのだろう。

しばらく歩くと武藤さんはドアをノックする。中から知り合いの声が聞こえ、返事をもらったので中に入ると、叔父と目があつた。

「……静流君」

「…失礼します」

返事はない。

だけども僕は構わず中に入る。少し歩くと中が1人部屋であることがわかり、ハルさんがベッドに寝かされていた。

遠くからでもわかる。

重苦しい、医療ドラマで見たことがある患者が危険なシーンで大体置かれている医療機器が並べられている。

それを確認した時、付添である叔母さんと目が合った。そして叔母さんは立ち上がり、僕の方へと歩いてきて――

――パンツ

乾いた音。それが病室に響き渡り、武藤さんが叔母さんと止めようとしたが、僕は武藤さんを止める。

すると襟元を持ち上げられ、叔母さんに罵られ続けた。僕はそれをただ聞いていただけで、「自分は悪くない」という言葉を出さないようにしていた。

確かに自分は悪くない。ISを触らせたのは政府の方だし、動かせると知って攻撃してきたのは向こうだ。僕から喧嘩を売ったわけでもない。

でも何故か、叔母からの罵倒は自分が受けなければいけないと思った。

どれだけ時間がかかっただろう。叔母さんは叔父さんに止められていた。

「……僕はこれで失礼します」

そう言つて部屋を出ようとすると、自動ではないはずのドアが勝手に開けられた。

入口には武藤さんと似た格好をした男性が立っており、後ろにも何人が控えていたら

しい。すぐに僕を囲む。

「これはどういうことだ」

「武藤さん、あなたは黙っててください」

そう言った男が僕の方を向く。

そして腰に手を伸ばしたその人は俺を腕を掴んだ。

「舞崎静流、君は我々に同行してもらおう。拒否権はない」

「それは私に一任されていたはずだ」

「事情が変わったんですよ、武藤さん。彼はこのまま連れて行かせてもらいます。ということだ。一緒に来てもらおう」

無理やり僕の腕を引こうとする男性だが、中学生とはいえそろそろ高校生になる。それに僕は周りと違ってそれなりに筋肉があるのでそう簡単には運べない。

見た目から細いと思っただけその男性はバランスを崩すがすぐに持ち直した。

「……どういうことだ？」

「待ってください」

その男性の疑問を遮った叔父さん。僕に近付こうとすると他の人が遮った。

「アレを」

「わかりました」

叔父のすぐ前にいる男性がスーツの内ポケットからあらかじめ用意していたと思われる紙を叔父さんに押し付けるように渡す。

それを受け取るとすぐに叔父さんは破り捨てた。

「人一人売るには十分な額だと思うが、不服か？」

「そう言う問題じゃない。こんなふざけたことは今すぐ止める」

問答無用と言わんばかりの殺気を感じた僕は身震いした。いつも優しかった叔父が怒りを見せるなんて別々に暮らしていることもあつて見たことがない。ハルさんが忙しい時はいつも相談に乗ってくれた、父親のような存在だ。

僕は周りが言うには頭がいいらしい。

状況もよく理解しているし、自分がどのように立ち回ればいいのかわかつている。以前、叔父さんにそう言われたのをすっかり覚えていて。だから僕は家では大人しくしていたし、不必要な喧嘩はあまりしないようにしていた。

だからだろう。子供の僕は身近な大人からあまり怒られたことがない。だからこそ叔父さんがそこまで怒りを露わにするのはレアだった。

「彼の父親はすぐに受け取ってくれたがね。「好きにしてい」とも言っていたが」

「……あの馬鹿め……」

「実に無駄金ですね」

ため息を吐きながら嫌味を含めてそう言つてやった。

「何？」

「無駄金だと言つたんですよ。確かに彼は私と血の繋がりがありますが、それだけです。もつとも、僕は例えどれだけあなたに金を積まれようと、あなた方に従うつもりはありません。それよりも、I Sを無断使用した女たちをここに連れてきてください」

謝つたところで怒りを収めるつもりは毛頭ない。けど、何よりも連れてきてハルさんをこういう風にした女どもに立ち場をわからせたかつた。

—— 僕を怒らせたらどうなるかを

「何のことだ？」

「……………え？」

「何のことだと聞いている。昨日、そのような事実はなかつた。むしろそれは君だろう？ I Sを使える君はその力を誇示し、街を破壊して回つた。違うか？」

「……………」

この男が何を言おうとしているのかわからなかつた。

いや、わかりたくなかつたんだろう。僕の悪い癖だ。

「……………なるほど」

未だに掴んでいる手を掴んだ僕はそれをはがす。すると僕を掴んでいた男性が悲鳴

を上げた。

後ろで何かが抜かれた気配がした。おそらく警棒か銃か。どちらにしても僕は負けるつもりはない。

僕はすぐに他の男たちを潰そうとしたけど、間に武藤さんが入り止める。

「……………」

そういうことか。

武藤さんの立ち場を察した僕はすぐに彼を敵と認識して潰そうとするけど、それよりも早く後ろを向いて背中を晒して言った。

「すぐに武器を収めろ。今回のことを然るべき場所に報告されなくなかったらな」

「あなたの言うことは聞けません。これは我々に対する反逆行為と認識し、あなたを捕縛することも可能ですが？」

さつき叔父さんに紙を渡した男性がそう言うと、武藤さんはため息を溢す。

「……………やれやれ。随分と勝手なことをしてくるな。立場的には俺の方だと思っただが」

「それはかつての話ですよ。先輩、あなたは余計なことをし過ぎた。聞けば昨日、あなたは国家代表といたというのにその少年に機体を奪われたそうですね」

「それは——」

「——クスッ」

彼らの近くから小さな笑いが聞こえた。

瞬時に全員がそちらの方を向く。視線は不気味な笑みを浮かべる僕へと集中した。

「とりあえず、あなたの方の意見はわかりました。で、いつになったらあの騒ぎを起こした人たちをここに連れてきてくれるのですか？」

その言葉を言い終えるのとほとんど同時だったんだろう。さつき僕に倒された男が覚醒し、首を絞めてきた。

「止めろ！」

「もう止めてくれ!!」

武藤さんの声量を超えて叔父さんが懇願するように言った。

だけどさつきから首を絞めてくる男は止める気配はない。だから僕は容赦なく相手の目を抉り突いた。

幸い、僕の爪は長い。相手の眼球を潰すには十分だったようだ。

「ぐわああああ!!」

雄叫びに似た悲鳴を上げながら、その男は膝を付いて右目を抑える。僕がもう一つを潰そうとすると、武藤さんが腕を掴んで止めた。

「何をするんですか？」

「それはこっちのセリフだ。今のはいくらなんでもやり過ぎと言わざる得ない」

「まだ頸動脈を切つてないだけマシでしょう？ それにこれは向こうから売つてきた喧嘩ですし、何より——勝手に僕の運命を決めつける輩がどうなるうか、知ったことじゃないですよ」

それに、昨日のことでよくわかった。

確かにISは世界を乱した。女性にしか動かせないという制約。現行兵器を遥かに凌駕する性能。それらのせいで女たちは狂い始めた……だけどあくまで、それは火種になっただけに過ぎない。

大本はそれを作つて放置したアホであり、ISを擁護し、上になった立場を使つて男をこき使い、逆らつたら牢獄行きという下らない風潮を作つたのも、昨日の下らない騒動起こしたのも人間。そしてその原因となつた法律を作つたのは、エリートを気取つた昔から勝手に入ってくる金で自分たちは凄いと勘違いした政治家というゴミ共だ。事実、公表されていないだけだろうけど政治家の家族が牢獄に入つたつてニュースは聞かないしね。

「さあ、早く昨日の騒動の首謀者を連れてくるか、住所を提供してくれませんか？ 住所を提供してくれたら、僕が一人で潰してここに引きずつて来ますので」

小学生——高学年の時からそれをしてるんだ。今更驚かれても困る。

顔を引きつらせる彼らを僕は笑いそうになるのをこらえつつ、戦闘態勢を維持する。

「こいつ、狂ってやがる」

「狂っているのは僕じゃない。世界の方だ」

——このまま待つとしても拉致が明かない

そう判断した僕は跳び出して全員倒そうとした瞬間、渋い音楽が鳴り響いた。

どうやらその音楽は叔父さんのスマホかららしい。一度距離を取った僕はハルさんと叔母さんを巻き込まない位置に移動すると、叔父さんの口から信じられない言葉が漏れた。

「——家が…燃えてる？」



静流は家の塀から屋根へ、まるで忍者を思わせる動きをして次から次へと通り過ぎる。

辛うじて設けられた道路は安全のためか一方通行が多いため、車では遠くなる。だが生身で移動した場合はその限りではない。

ましてや静流の身体能力は普段は思わせないが非常に高く、また持久力もあるのでタラメな移動方法で家から家へと飛び移れるのだ。

その様子を見ていた正勝は、ただ静流の身体能力の高さを感じするしかなかった。

「……晴文君は、とんでもない化け物を育てたようですね」

それを聞いた晴文の父であり、静流の叔父でもある舞崎敏則とじのりは笑う。

「君もそう言うと思うていたよ、正勝君。でも、あの身体能力やさつき見せた行動力を持たなければ彼はとつくに壊れていただろう」

「……………やはり、静流君がこうなったのは母親に殺されそうになったから、でしょうか？」

悲しそうな顔をしながら正勝がそう言うと、敏則は「だろうね」と答えた。

「確かにきつい性格はしていたけど、まさかあんなことになるとはね」

「……すみませんが、調べました。確か、元々堅い性格だったとか」

「うん。それに当時は妊娠して荒れていたから。それに、母とも仲がそこまで良くなくてね。弟は仕事で外に出ていたし、あの時の状況で静流がしたってことになったんだ。それに、本人もそれを認めたし」

そこまで言った敏則は車を操作して左の道に入る。

「でも、流石に弟は彼の味方をするべき……いや、させるべきだった」

「……恋愛とは、何をどう転ぶかわからないものですかから」

「もしかして、彼女でもいるの？」

正勝が答えようとした時に敏則はブレーキを踏んで完全に停止させ、ハンドブレーキを引いてその場に停止させる。二人はシートベルトを外して外に出ると、出来上がった人混みを押し退けながら中心に向かった。

一足先に着いた静流は自分の実家とも呼べる家屋が赤々と燃えているのを見た。

誰も何もしないのを見て苛立ちつつも家の前に降りる。近くに人がおり、突然現れた静流に文句を言うが無視して中に入ろうとすると、中から誰か出てきた。

「お祖母ちゃん！」

何かを抱え、所々火傷を負っている祖母の姿を見つけた静流は駆け寄る。弱々しく倒れる祖母を受け止めた静流は祖母から感じた熱に眉を顰めるが、それでもしっかりと握った。

「……静流かい？」

「そうだよ、お祖母ちゃん。どうしてこんな……お祖父ちゃんは!? お祖父ちゃんはどうしたんだよ! 誰か! お祖母ちゃんを——」

「無駄じゃよ。さつき、ワシの目の前で……落ちてきた柱の下敷きになった」

静流の祖母はそう言つて弱々しい動きで自分が持っている物を静流に差し出した。

「……これを……そして、裏の納屋に入っているのも……持っていきなさい」

「お祖母ちゃん。そうだ、消防車……救急車も……誰か——!!」

——ドンッ!

体全体で静流は抱いていた祖母に押される。わけがわからなかった静流は自身の祖母が地面に倒れた音を聞いて駆け寄ると、何か又メットしたものに触れた。

「静流君！」

後ろからようやく追いついた敏則が現れ、惨状を見て悲鳴を上げそうになったのをこらえた。

(……………何で……………)

その液体が祖母であるものと認識した静流はレンガを殴り、そこから血があふれ出る。

「舞崎君！」

正勝が慌てて駆け寄る。すると正勝は何かにぶたれたようによるめき、バランスを崩すもなんとか耐える。

「……………武藤さん」

「大丈夫だ。ISじゃなければ、防弾チョッキと試作型の男性用ISスーツの二重構造で耐えられる」

だがその衝撃までは吸収しきれないようで、苦悶した。

「……………そういう、ことですか」

正勝の耳にはよく届かなかった。

静流は祖母を優しく置く。そして、ただ優しく祖母を寝かせて、両手を合わせた。

その姿は痛々しく見えたが、まるで何かを開いた聖人のようにも感じ取れる。少なくとも、正勝はそう思った。

第1—2章 繰り返される出会いと別れ

第9話 動く話

——現在

「……………あの二人が…死んだ、だと?」

時間も夜だというのに、シヨックだったのか箒は叫ぶ。

箒は以前、静流の祖父母と交流があった。

静流には月に一度、家に帰るように言われていたが修学旅行やテストやらで帰れなかったことがあった。その埋め合わせの時に翌月に家に帰ったのだが、箒も無理矢理連れて行かれたのだ。「相手のご両親と挨拶する訓練」という名目で。

その時に色々話をした。箒の祖父母は、母方は勘当されたこともあつて面識がなく、本家の方はどちらも箒が小さい時に早く亡くなっているので高齢者ともなるくらいの上とはあまり話したことがないため、かなり貴重な経験をしたと思つている。それどころかも事情を聞いてシヨックを受けたが、静流が友達を家に連れてくるのが珍しく——ましてやそれが女の子なら猶更で、優しくしてくれた。

「祖父ちゃんの後から焼けた状態で発見されたらしい。あまりにも酷い惨状だったか

ら、叔父さんに止められたんだよ。叔母さんも見てないらしい」

「……その、叔母さんとの仲は……」

「別に気にしてない。実際、ハルさんは二人が結婚してやっとできた子供らしいから、あそこまで怒るのは理解はできるし」

しかし、そう答えた静流の顔はどこか浮かない顔だった。

当然だろう、さつきから箒に対してまるで他人事のように過去のことを話していたが、実際彼にしてみれば辛い出来事なのだから。

「……ただ、俺はもう、女を信じる気はない。そしてそれは君も例外じゃないよ、篠ノ之箒」

「……………」

——私は大丈夫だ！

そう宣言したかった箒だが、静流を見てるとそう宣言できなかつた。

箒はあの家族から、そして押し売り気味でもあつたが、静流から様々なことを教えてもらった。恋愛のこと。どう立ち回ればいいのか。そして——あの試合の時もそうだ。

箒は以前、剣道の試合で荒々しい戦い方をして勝利を納めた。

当然、それは箒が望んだわけではない。だが結果としてそうなつたのであり、相手の涙を見て自分がどれだけのことをしたのか悟つたのである。

だが、静流は言ったのだ。

—— 気にすることなんてないんじゃない？

あの時は本気で怒りを覚えた。

箒にだってプライドはある。あのような戦いを認める気はなかった。だが——

—— どれだけ綺麗ごとを並べたって、結局武道は相手を倒すための手段だよ

今なら十分に理解できる。静流は十分に理解している—— いや、理解してしまっているのだ。

戦いは勝たなければ意味がない。負ければ死—— そこまでいかないにしても、かなりの重傷は追うだろう。

(……そう言えば、舞崎は……)

箒と出会う前、静流にはよくない噂が流れていた。それは箒も知っていることで、聞けば中学を占めていたらしい。

それほどの大物が何故箒に興味を持ったのかは、本人曰く「ただの研究対象！」と宣言するほどだが、むしろそれは嘘だと思っていた。だからと言って、自分がそこまで魅力的だとは思わないから恋愛感情を抱かれているとは思っていないが。

つまり静流は常に勝つか負けるかの二つの間にいて、立ち回っていた。あの時はわからなかったが、今ではわかる。

「……………舞崎、貴様がこの学園に来た理由は——」

「そう。オルコットやさつきさんの女のような女尊男卑を狩る為だ。まあ、技術的な学習も視野に入れているけど、まず最初は女尊男卑の根絶。そこを逃す気はない。まあ、極力女尊男卑しか攻撃しないつもりだけど——例え君だろうが、僕の邪魔をするなら倒す」

静流から殺気が放出される。その濃度はとても15歳で身に着けるほどではなく、箒もそこまでのレベルを浴びたのは始めてだ。

「話は以上だ。僕は帰らせてもらおうよ」

そう言つて静流は外に出る。

ドアを閉められ、脅威と認識される者がいなくなつた瞬間、箒はその場に膝をついた。箒はシヨックだった。

今まで彼女は、何度か……いや、ほとんど助けられた。

自分のコミュニケーション能力が低い——ならば、それを矯正すればいい。柔軟になればいいと言つてくれた。自分の性格を理解してくれる友人もでき、学校は違うが今ではその友人とは連絡を取り合う仲だ。

だが、今の箒には、恩返しができるほどの力はない。少なくとも、姉と連絡を取り合わず、一方的に避けている箒にはだ。

静流と箒が話を終えた頃、別の部屋で寝ていたセシリア・オルコットは目を覚まし、自分がどうしてここにいるのかを考えていた。

(……そうですわ、わたくしは——)

——舞崎静流によって、倒された

完全な不意打ち。しかし同時に完全な敗北を突き付けられた。

緊急復帰システム——それは競技中の乱入を想定して作られたシステムであり、予め登録していた武装を呼び出すシステムを行使した場合、戦闘開始時の能力と何ら変わらない性能を発揮する。

だがそれを用いたというのに、完全な敗北を突き付けられたのだ。

——悔しい

自分の技量は少なくとも、まだ静流よりも上だと思っている。それは操縦時間が比例しているからだろう。

セシリアは三年前、親を亡くしている。

そこから親の遺産を狙う親戚から自分と自分の元から離れなかった従者を守るため、あらゆる分野の勉強を始めた。その一環で受けた I S 適性テストで A を、同時に実施された B T 適性で異例の A + を叩き出し、イギリス政府から人材を確保するためにあらゆる条件を出されたのだ。ほとんどがセシリアに有利なことであり、それほどまでに執着するのは彼女の適性が今後の祖国の発展につながる——そう思ったセシリアは申し出を受けた。

その後、勉強する時間は減ったがその分を I S につき込んだ。

——だが、結果はどうだ？

舞崎静流を調べなかった自分も悪いだろう。所詮は男だと甘く見ていたこともある。そして何より、セシリアから見ると静流のそれは間違いなく嫌っていた父親そのものだった。

セシリアにとって、父親は弱かった。

母親は女尊男卑になる前から実力ある経営者であり、いくつもの会社を運営していた。そして入り婿としての負い目もあつたのだろう。父親は次第に家でも発言しなくなつた。

それほどまでに父親と雰囲気似ていたはずの静流が何故、あそこまで変わったか。

そこまで考えたセシリアに、IS「ブルー・ティアーズ」からアラームが鳴る。

何事かと思つた彼女はヘッドギアのみを部分展開した。

IS学園には少なからず暗黙の了解が存在する。

専用機持ちがヘッドギアのみを展開している場合は、近づくことなかれ——それは専用機持ちが政府と重要な話をしているため、特に周囲に警戒しているため襲撃も何もするなということ、そして政府と会話をすることは何よりも優先されるためである。本来、学園敷地内は指定の場所と状況を除いてISを部分展開すら禁止になっている。

『……気絶したと聞いていたが、目は覚めたようだな』

通信がつながつたかと思えば男性——それも自分が良く知る相手だった。

「ええ。それで、一体何の用ですの?」

セシリアもそつげなく返す。

というのも通信相手は自分の婚約者だが犬猿の仲とも言える「テイラン家」の次男「ルイ・テイラン」だった。

整つた顔立ちだが、セシリアとルイは何故か反りが合わない。セシリアにとっては相手の執事、ルイにとってはセシリアのメイドとは話すこともでき、大人の世界ということもあるのか、大人同士もそれなりの関係も築けていたが、二人だけは仲が悪かつた。もつとも、今ではルイは学生の身分にして政府の高官ポジにいる、将来が約束された

も同然の男なのだ。

『面白い動画がアップされていたんだよ。お前の声が録音されている音声のみだがな』

「……………面白い動画？」

『聞けば笑えるぜ』

そう言つてルイは動画サイトのアドレスを送る。

それを開いたセシリアは、動画の場面がどこかすぐに理解できた。——一週間前の、クラス代表を決めようとしていたHRの物だったのだ。

セシリアの発言から始まり、次第に一夏との喧嘩、静流が仲裁に入るがセシリアはそれを押し退けて決闘騒ぎに発展し、クラスメイトたちが一夏が「ハンデ」の話をしたときに笑つたこと、止めに千冬が静流を参加させたことまでアップしたのだ。

「何ですの、これ!？」

『さあな。でも流石にこれを聞いた政府も結構頭に來ているつて話。いやあ、笑つちやうよねえ。だつて男が弱いか言つたのに、結局その男に不意打ち食らつてポコポコにされたつて、いやあ、傑作だなあ』

ルイの言葉にセシリアはキレた。

「あなたに何がわかるつて言うんです!? ISを乗っていないあなたに!!」

『ISに依存している阿呆が何吠えてるの?』

そこから始まる二人の喧嘩は、様子を見に来たテイラン家の執事が現れるまで続いた。

—— I S 学園の最高責任者は男だ

その事実を知る者は世界でも本当に上の、大統領やそれに類するレベルの立ち場にいる人間しか知らない。学園で知っているのは生徒会長のみである。

その立場に座る男、轡木十蔵はモニターに映る重役たちの殺気を帯びた視線を浴び続けていた。

—— もつとも、そんなものが実際に遭ったとしても十蔵にとっては小雨程度だが『……………貴様、本気で言っているのか?』

一人がそう言うのと、十蔵は笑みを浮かべて答える。

「ええ。何か問題でも?」

『当たり前前だ!! 舞崎静流は重大な I S 条約違反を犯した! それを裁かず、我々が提

案したのを「一週間の出向」で済ませるだど!? 我々を馬鹿にするのも大概にしろ!」

『そうですわ! あなた、自分が何を言っているのかしつかり理解していますの?』

イギリスとアメリカ、その代表の二人が騒ぎ始めたのを聞いた十蔵は吐き気を催した。

一人は自分の国の代表候補生が、もう一人は女尊男卑が故の言葉であり、十蔵も理解はしている。

だがそれよりも、優先するべきことがあるのと十蔵は思っている。

十蔵から見ても、静流と千冬の戦いは千冬の方が上だ。だがそれはあくまで、ほんの少しの間だけだと思っている。そう、十蔵はいずれ静流が千冬を超える、と。ISの面でも、生身の面でも。

(まったく。面倒なことをしてくれる)

十蔵だけは既に気付いたことがある。

——舞崎静流は、既に世界に対して絶望している

おそらく、静流が慕っていた「高間晴文」が植物人間になっただけなら、襲った人間を潰すだけで済んだだろう。その後は中学までの心持で女を見下さず、これから織斑一夏をライバルとして、篠ノ之箒と仲が良いまま歩んでいたはずだ。だが、彼の親代わりだった祖父母が殺され、家も焼かれたことでそれはなくなっただけと言わなければならな

い。

実際、十蔵も用務員としての仕事をしてきた時に知ったが、静流が訓練をしている時の目は殺気が帯びている。それを知らなければ十蔵も静流が内に秘めた思いも気付くことはなかった。

「ええ。少なくともあなたの方よりも現状を十分理解しています」

その言葉にどんな意味があるか。

だが十蔵の考えていることは決して間違つてはいない。事実、静流があのような行動に出たのは女を——女尊男卑を潰すためだ。

だからこそ、ここで「実験動物」として渡した場合の報復を十蔵は恐れていた。

『だったら、今すぐ舞崎静流をこちらが指定する研究所に寄越しなさい！』

「……………」

それを聞いた十蔵は内心でため息を吐いた。

「あくまでも、一週間の出向という形です。そこを譲る気はありません」

『あなたねえ！』

十蔵の頑なな態度に激昂する女性議員。そんな険悪な雰囲気の中、一人の議員が待ったをかけた。

『——別にいいのでは？』

左から青・白・赤のトリコロールの国旗で表示された場所から、男性の声が漏れる。
『ちよつと、それはどういう意味よ!?!』

『貴様、同じ欧州にいる身として何も感じないのか!?!』

『確かに今回の舞崎君の行為は問題視する事案です。ですが、だからと言ってすぐに実験場送りというのはどうなのでしょうか?』

すると十歳の通信端末が鳴り響く。「失礼」と断りを入れ、少し離れて電話に出た。

「菊代か。悪いがまだ会議中だ。後に——」

『すみません。急を要する事だと思ったので。……その、先週の一組のHR内容が音声のみが外部に漏れていたようです』

「どういふことだ!?!」

思わず大声を出したしまった十歳は取り繕うに咳払いをする。

『……何か問題でもありましたかな?』

先程の男の音が尋ねるように言ったが、十歳は静止のために手を挙げるだけだった。

『一応、削除前に知らせておこうと思ひまして』

「……そうだな。そうしてくれ」

そう返した十歳は電話を切ると、再び椅子に座る。

『一体どうしたのかね?』

「……学園にとつて少々、問題となる事態が起こつただけです。まあ、大した被害ではないのは確かですが」

そう言つて十蔵は笑みを作る。

しばらくすると、十蔵が言わんとしたことが理解され、イギリス人の男性は断りを入れて通信を切つた。

—— 酷い揺れ

激しい振動を感じながら、少女はそう思う。

だがどれだけ愚痴を溢そうとも彼女の要望は聞き入れられないことは、少女自身が知っていた。

しばらくすると揺れが収まり、彼女が入れられた箱の扉が開かれた。

「……おいおい、マジで連れてきたかよ」

「上の命令だからな。要望通り、まだ未通の者を連れてきた」

男性二人の会話が少女に届く。誰かがよじ登り、また揺れを感じた少女は男が近付いてきたのを察した。

「タグを見せろ」

言われた少女は自分の首に巻かれた革の首輪に着けられたドッグタグを、檻の中から差し出す。

それをバーコードリーダーで読み取った男性は何かを指示すると、新たに別の男性が二人現れ、少女が入られた檻を持ち上げた。

「しっかし、よくもまあ、あんなガキを出すようになったな」

「どうやら失敗品らしいからな。出品者も処分に困っていたらしい」

「でも何であんなの何だよ。どう見ても仕込まれてないだろう？」

「そればかりか、つい最近まで施設で経過を見ていたようだ。それとああ見えても15歳だぞ」

そんな会話を聞こえても、少女は何も言わなかった。

ただ少女は、これから自分がどうなるか理解している。男の人を用意され、その男の精液を女を使って採取し、施設の人間に渡す。連れてこられる前、不要になって嘲笑した女性の研究員がそう言っていたのを彼女は覚えている。

(……………もう、いいや)

彼女にはもう、生きる希望なんてなかった。

何度も任務に失敗し、何度も殴られ、蹴られた彼女はとうとう失敗作という烙印を押され、こうして目的がわからない施設に連れてこられたのだ。

ただ希望があるとすれば、その男性が酷い人ではない場合だろう。

(……………そんなわけ、ないか)

突風が吹き、彼女のドッグタグが風の方向へと流される。

そこには謎の文字列が書かれていた。

——c—0036、と

第10話 達観少年

翌日、一年一組の教室は静まり返っていた。

朝早く、友人たちがいるというのに誰一人として話そうとしない。理由は昨日の動画のことだった。

昨日の動画。何者かが流した一週間前のクラス代表を決めるHRのほとんどすべてをインターネット上の動画サイトにアップした。どうやら投稿者自ら拡散を希望したらしく、今では様々なSNSにアップされている。もはや止められるようなものではないのは確かだろう。幸いなのは、ここにいる全員の実名が晒されていないことだろうか。

だがそんなことはどれだけ言っても無駄だ。あの会話をすべて知っているのはこのクラスにいる人間のみであり、一組の中に裏切り者がいるということなのだから。

ちなみにこの騒動を知らないのは、普段からインターネットに触れない人間ぐらいだ。そう、例えば——篠ノ之箒もその一人である。

(……何故、こんなにも空気が重い?)

教室に入ってしばらくすると、彼女はふとそう思った。

昨日、静流から話を聞いて色々考えたが、納得ができる答えが見つからず、気が付けばベッドで寝ていた。

時間を見ると既に鍛錬をする時間はなく、急いで身支度をして食堂で食事を摂った後に来たので、一夏は完全に放置。それほどまで、箒は相部屋である彼を気にかける余裕がなかった。

少しして、ドアが思いっきり開かれる。

「……はあ……はあ……じ、時間は……」

スマホの画面で時間を確認した一夏はホツとため息を吐く。そして中に入ってしばらくすると、箒と同様の反応を示した。

二人は一人の生徒を挟みながらどういふことかと思見を交換しようとしたが、誰かが入ってきたことで中断する。セシリアであり、どこか疲れた風だ。

そして最後に真耶が入るがクラスの雰囲気は一向に良くならない。だが真耶は構わず言った。

「皆さんにお知らせがあります。一年一組のクラス代表は、織斑一夏君に決まりました」
「……………はい？」

何も聞かされていなかった一夏は思わず声を漏らす。

まさか自分になるとは思っていなかったのだ。そもそも、昨日の戦いは静流の乱入に

よって流れたはずだと、少なくとも一夏はそう思っていた。

周りの生徒も同じような思いなのか、信じられないと言わんばかりに真耶を見る。

「あの、先生。あの試合って結局有耶無耶になったんですよね？ だったら何で俺がクラス代表になつているんですか？」

当事者と言うこともあり、一夏が質問すると一組の生徒——特に一夏がクラス代表になるのを良しとしない生徒は頷く。

真耶はあらかじめそう質問が来ると思ったのか、出席簿の中に入っていたらしいメモを出して言った。

「織斑先生が言うには、仕方なくだそうです」

「……し、仕方なく？」

「はい。オルコットさんも舞崎君もクラス代表として人格に問題があるということ、仕方なく織斑君になったそうです。で、でもほら、一の字でまとまっていますし、一繋がりでいい感じですね！」

励ますつもりで真耶はそう言った。

だが生徒全員が顔を引き攣らせる。当然だろう。自分たちのクラス代表がよもや消去法で決まろうなどとは考えていなかったからだ。

「待ってください！」

一週間前の時のように机を叩いて立ち上がるセシリア。全員が注目したタイミングで彼女は話を始めた。

「わたくしが人格に問題があるとは一体どういうことですか!？」

「——そういうところだと思っただけ」

いつの間にそこにいたのだろうか。

全員が声が出した方へと視線を向ける。後ろのドアに静流がおり、セシリアのことは気にせず平然と自分の席に歩いていく。

「待ちなさいな！」

セシリアは静流を止めようとするが、容易にセシリアの妨害を避けて自分の席に着くと何かを探し始める。どうやら探し物が見つからなかったようで、何故か満足気な顔をして席を離れる。

そして今度こそ止めるつもりなのか、セシリアは妨害しようとするが、静流との技量の差が平然と回避した。

「止まりなさい！」

「あ、そうだ。良いこと教えてやるよ」

そう言っただけで静流は足を止め、ドアを背にして堂々と言った。

「あの会話を動画サイトにアップしたのは僕だ」

瞬間、その場にいる全員が固まる。

だがすぐに復帰して立ちあがり、クラスに存在する女尊男卑の思想を持つ生徒たちが静流に詰め寄ろうとした。

「——そこまでだ！」

前方でそんな声が上がると、教室にはいつの間にか千冬がいて、生徒たちを睨みつけている。

千冬の姿を確認したセシリアはすぐに詰め寄った。

「織斑先生、どうしてわたくしが候補として外されなければならぬのですか!? 確かに、あの時は言い過ぎたかもしれませんが。現に、織斑さんはわたくしをあと一步まで追い詰めるほどの実力を発揮しましたわ。それは認めましょう。ですが、人格まで否定される謂れはありませんわ！」

そう叫ぶセシリアに対して、千冬はため息を吐く。そして言葉を紡ごうとしたが、それよりも早く静流が言った。

『『傲慢すぎるだろ、この女』、『実はビッチとかじゃね?』、『あり得るかもな』、『お嬢様の危険な遊び w w w』……まあ、君の評価は概ねこんな感じか。ねえ、どんな気持ち? 担任に人格を否定されて、周りからは傲慢ドリルビッチと称されて、挙句織斑に負けそうになるわ、不意打ちとはいえ俺に殺されかけるとで散々なイギリス代表候補生さ

ん。……って言っても、所詮は素人に対して喧嘩を売ることしかできない雑魚だろうけど」

静流の言葉を聞き、殺気を出しながらセシリアは静流に近付く。そして躊躇いなくピントを打とうとした瞬間、その手が静流に掴まれた。

「わ、わたくしの手を汚らわしい手で触らないで！」

「……………ああ、そう」

あつさりと手を離してセシリアを解放した静流。そして彼は平然と教室を出て行くうとするが呼び止められた。

「待てよ、静流」

一夏だった。

静流は足を止め、怠そうに一夏を見る。

「何の用？ 僕、そろそろ行かないといけないんだけど」

「それってどこに……………じゃない！ それよりもだ！ 昨日なんで試合に乱入したんだよ！？」

そう叫ぶ一夏に対し、静流はため息を溢して教室を出ようとする。

それを止めようと千冬は声をかけようとするが、それよりも早く一夏が言った。

「逃げるなよー！」

だが静流は歩みを止めることなく外へと向かう。それを追う一夏は後ろから静流の肩を掴んだ瞬間、それを弾かれた。

「——っ！」

痛みを感じて自分の方に手を戻す一夏。静流は何事もなかったかのように教室を出て校門に向かうと、其処には迎えの車なのか黒いリムジンが止まっている。

リムジンの前に二人の人間がおり、その内の一人と顔見知りだった静流は声をかけた。

「……お久しぶりですね、武藤さん」

「久しぶり。……まさか、このような形で君と会うことになるとはね」

「別に。聞いた話では一週間と言う制限が付いていますし、僕にはトンファーがありませんから」

そう言うって静流は長袖に隠していたらしい自分の得物を見せた。

話は少し前にさかのぼる。

急にそれなりに豪華な部屋に呼び出された静流は、自身を学園長と称した「轡木菊代」から言い渡された。

「急ですが、あなたにはこれからIS委員会直属の研究所に行ってもらいます」

「……………」

静流は無言だった。

すぐに返事を出さない静流に対して、菊代もまた沈黙する。

(……………申し訳ないけど、これもまたあなたが起こしたこと。行ってもらえないわ)

菊代には、女尊男卑の思考がない。古い時代の人間と言うこともあるが、身近に「女が強い」と思わせない存在がいるからだろう。それに静流の行動にも理解がある。あのような目に遭えば、普通ならもっと早い段階で暴れてもおかしくはない。それどころか、まだクラスが健在だということに驚いている。

「……………返事は？」

「その前に質問、いいですか？」

拳手をしながら静流は尋ねる。「何か？」と菊代が言ったのを聞くと、次々に質問を浴びせた。

「武器や筋トレ用具などの持ち込みは可能ですか？」 後、その敷地に体を動かすことが

できる場所は？ ランニングや本格的な器具などあればその情報を。後、ATMや売店は……パソコンの支給とか、そういうのはありますか？」

「——ちよ、ちよつと待っててください」

まさかの質問量に菊代は焦った。

(し、質問って……そこなの……!?)

予想外のことに焦り、冷静に分析する。

(武器や筋トレ用具の持ち込みは……いいのかしら？ そもそも武器って彼が持っていたトンファーよね？ 他にあるの？ それに体を動かす場所は……流星にあるわよね？ ATMやコンビニは完備していたかしら……?)

中々答えてくれないからか、静流は応接用と思われるテーブルの上に逆立ちをして、その場で腕立て伏せを始めた。

その姿にとうとう唾然をしてしまい、その場に固まってしまう。

「あの、答え、まだですか」

「ちよ、ちよつと待ってね？」

そう答えた菊代はすぐに十蔵に連絡する。受話器の向こうもさつきから自分の予想外の質問をされているからか、どこか落ち着いていない感じだ。

すべて聞き終えた菊代は受話器を置く。その音が聞こえたからか、静流はテーブルか

ら降りた。

「そうね。一応、トレーニング用具はあまり持ち込まない方がいいかも。武器はあるなら持って行って。ほら、この前のこともあるし。あと、少し離れた場所にコンビニがあるから、そこでATMとか使ってください。パソコンの支給は現地の人と相談して、ね？」

「わかりました」

そう言つて静流はそのまま出ようとする。それを見た菊代は慌てて止めた。

「待ちなさい」

「? ……何か?」

呼び止められたことで静流は驚き、警戒しながら菊代を見る。

「……あなたは何も思わないのですか」

「何がですか?」

「今回のことです。普通ならば、乱入をしたと言えどこちらもISを装着していた。だつたら一週間の地下牢での拘束に、反省文を書かされるだけで済むことです。それが出向とはいえ、IS委員会直属の研究所に入るのですよ? なのにあなたは、何の異も唱えず平然としている。それは——」

「すみません。至極興味がなかったので」

そう答えた静流はドアを開けて部屋を出た。

その後、部屋で荷物の整理をし終わった後に教室に忘れ物がないかを確認し、現在に至る。

「君が舞崎静流君だね」

そう言つて正勝の隣にいた女性は静流に手を伸ばす。

「会うのは二度目だけど、面と向かつて話すのは初めてだね、私は——」
女性の言葉を無視して静流は運転席のドアを開けて中に入った。

「つて、おい！ 何で運転席に——」

「僕が運転します。僕は僕以外の人間を信じられないので」

「いやいや、君は運転免許証を持つてないだろう？ ならば流石にそれは許可できない」

「……………チツ」

舌打ちをしてドアを開け、渋々外に出る静流。そのまま後ろの席のドアを開けて中に入った。

「……………なんか、図々しいよね」

「あなた方女に比べれば随分マシな方だと思えますけど？」

「私個人では否定したい気分だ」

だが女性——戸高満も今の世界のことを考えれば大きく否定できないので、ため息

を吐いてそのまま運転席側のドアを開けて中に入る。それを見た静流はドアを開けて上に乗った。

「……………舞崎君」

「女性の隣なんて死んでも嫌です」

「……………もしかして、私のことを女尊男卑だと思っていないかい？」

「もちろん。今回、武藤さんが連れてきたのも実は僕を車内で殺すためでしょう？」

「いや、彼が君を送ると聞いてね。同行するはずだった操縦者に交渉して変わってもらったんだ」

胸を張る満に正勝はため息を溢す。

「もっと言えば、彼が興味を持っている君と話がしたいってのもあったが、やはり彼と一緒にいることが大切だ。大体、三回くらい告白していて全部振られ、前も何度か酒と薬を盛って部屋に連れてきたのに、もう少しというところで目を開けられたんだ。もっとあるんだが、聞くかい？」

「……………」

静流はまた少し考え、ドアを開けるとすぐに満の顔を掴んで握る。

「舞崎君！」

「あなたが持っている武器を全部出してください。無事に届けられたなら、返します」

「わかった」

すぐに返事した満は少し重いアクセサリーと、グ○ツクの拳銃を差し出した。

それを見た正勝は止めようとしたが、満がそれを止める。預かった静流はそのまま反対側の席に座った。

「これで信用してくれたかい？」

「完全に信用する奴なんていませんよ」

だが少しは信用したらしく、静流はそのまま座席に体を預ける。

「では、出発するよ。……ところで、君の荷物は？」

「既に後ろに入れていきますので、ご心配なく」

ルーズリーフとファイイル、そして筆記用具と着替えぐらいしか入っていない鞆を思い浮かべながら、静流はそう言った。

少し離れた場所で、その車を監視する姿があつた。

「目標、指定されたポイントを通過しました」

静流たちが乗る黒いリムジンを監視しながら、左後部座席に座る女性が通信機を使ってどこかに報告する。

すると通信機の向こうから「そう」と返される。

『そのまま監視を続けなさい。気取られていいのは、ランデブーポイントに到達する辺りで、よ』

「わかりました」

そう答えた女性は通信機を置き、自分の手首にかけている緑色のブレスレットを見る。

本来ならそれはアクセサリという扱いだ、計測器で測ればすぐにわかることだがそれはI Sの待機状態だった。

「……す……殺す……あのゴミ、絶対に殺す！」

女性の隣で息巻くのは、先程I S学園から追い出された教員だった。

I S学園の体制は変わりつつある。

男性I S操縦者の登場により、従来あった男を見下す雰囲気無くそうと言う動きがあった。本来なら理由を付けなければ見逃されるはずの権力による訓練機の貸し出し取り消しなんて状況報告さえすれば何事もなかったように日常が進む。だが、今回に限って

はそうならず、彼女はあっさりと辞めさせられたのだ。

当然、彼女だつて十分に努力し、この学園に入った。だがそれは、いつも通りのことをしただけで終わりを告げたのである。

その女性の荒れようを見て、運転席に座る女性はため息を溢す。

(……私、もう止めたいなあ)

彼女は別段、男に対して何か恨みを持つているわけでもない。もつと言えば、この組織だつて友人に誘われて入っただけだ。それがどういふことか、男性IS操縦者を殺しに行くという話になった。

(………本当、人間関係を築くのつて面倒……)

心からそう思つた女性は後ろから指示され、仕方なく車を発進させる。

決して自然体に、それでいてただ同じ道を走つていふかのように走らせる。

(………この任務が終わつたら、絶対に組織を抜けるんだ)

そして普通に大学に通つて、普通に人生を謳歌しよう。そう心に決めた運転手は、後ろから不穏な空気を感じながら車を操作する。



そこはまだ出番がないからか、電気が消されて辺りは暗い。

その空間の端の方から光が灯り、その光は移動しながら入り口にたどり着くと触手を伸ばしてパネルに触れた。

—— 本当に行くの？

別の場所から同様だが色が違う光が灯る。

—— もちろん

触手を伸ばした光は相対する別の光にそう言った。

—— 私には義務がある。あの人を不幸にした罪を償い、あの人を守る責任が

パネルでの操作が終わったのか、光はドアの前に移動するとほんの少しだけドアが開

き、
光は外に飛び出した。

第11話 女たちの強襲

車の中で、僕はただ隣に座る国家代表の話をスルーして説明書を読んでいた。

その説明書は殺される前にお祖母ちゃんからもらったものの中に入っていたもので、そこには渡されたトンファアの機能が書かれている。

「でだ、男として、女にどういったアプローチをされるのが良いかぜひ聞かせてもらいたい」

「……………はい？」

唐突にそんなことを言われた僕は、思わず一人分を開けて隣に座る女性——戸高満代表の方に顔を向ける。

「男は女にどんなことをされるのが嬉しいんだ？ 私は今、恋をしているんだ。できればこと細やかに、教えてほしい」

「……………誰に？」

「彼にだ」

そう言つて戸高さんは武藤さんの方を見る。運転しているからこそこつちを見ないが、おそらく泣きそうだろう。

なにせ相手は国家代表——つまり国の顔だ。そんな人間相手に惚れられては色々迷惑だろうに。

「諦めればいいんじゃないですか？」

「嫌だ」

「だそうですよ」

「頑張ってくれ、舞崎君。彼女がどうなるか、君の腕にかかっている」

「勝手にかけないでくださいよ」

しかし意外だな。まさかIS操縦者が男に恋をするなんて。お笑いか？

「IS操縦者が男に興味を持つのはおかしいかい？」

「ええ。何か企んでいるとしか思えませんね」

「それは誤解だ。操縦者の中にも男に興味を持っている者はたくさんいる。何だつたら

君にも一人紹介しようか？」

「結構です。政府の息がかかった者を信用できるわけがない」

そう突っぱねるとどこか悲しそうな視線を向けてくる。そんな目で見られるのは不快だ。

「……確かにそうだな。君がされたことを考えればそう答えるのは当然か。で、誰にする？」

「人の話を聞いてましたか？」

「聞いていたさ。その上でどんな子が好みかなと思ってね」

差し出してくる小型端末を見せてくる戸高さんをジト目で見る。

「……何をたくらんでいるんですか？」

「女の子一人紹介したら、武藤さん攻略に力を貸してもらえるかなあ……と」

「だったら国家代表を辞めれば良いじゃないですか？」

「それができたなら苦労はしないさ。というか、今さらながらどうして「かつこいい」という理由だけでIS操縦者になってしまったのか」

「どうやらこの女性はまだ権力云々には興味がないらしい。」

「だが油断はしない方がいいな。ISはこちらにあると言えど、いざとなれば抵抗してくるだろうし。」

「……………すまない、舞崎君。そろそろISを彼女に返してほしい」

「……………ああ、そういうことですか」

鏡を出して後ろを確認すると、どうやら招かれざる客がいるようだ。だが、それがどうした。

「今はまだその時ではありませんね。気取られる前にもう少し先に進んでください」

「しかしだな——」

「何も一台だけということはないでしょうしね。今は気取られないようにしてください」

そう指示すると、意図を読んでくれたのかそのまま進める武藤さん。

確かに今すぐ撒いた方が賢明だろう。だが、それでは今回の作戦を指導している奴を潰すことはできない。

「随分と落ち着いているね」

戸高代表がそう言ってくるが、その原因は女にもあるんだけどね。

「ええ。僕の周りは喚くことしか知らない害獣しかいませんので」

そう答えて僕はトンファーを準備した。

どれだけの時間が経過しただろうか。

しばらく進み、ほとんど誰もいなくなった道路を走っていると、前の方に検問をしていた。

「……これを渡しておきます」

ISの待機状態を渡す。彼女がそれを受け取ると同時に僕は銃口を戸高代表の眉間に向けた。

「ただし、今ここで起動するといふのなら射殺します」

そこだけは譲るつもりはなかった。

「誓うよ。それだけは絶対にしない」

「……………」

とはいえ、そろそろ仕掛けてくるだろう。僕は銃を降ろして、戦闘態勢をとる。

検問に差し掛かり、車を停止した武藤さんは応対を始めた。

「失礼。車の中を調べさせてもらう」

「それは困る。我々は急いでいるんだ。すぐに道を開けてもらいたい。ほら、これが証明書だ」

武藤さんが書状のようなものを出す。するとそれを受け取るふりをして、警察官が車のドアキーを開けた。

すると僕がいる左側の後部座席が無理やり開かれ、拳銃を向けられる。

「——さようなら」

——ゴッ！

トンファーをぶつけた。そして左手で拳銃を抑え、軽く力を入れて奪う。もちろん、その際にトリガーをひかれないように逆の方から引くのは忘れない。

「この——」

「先に仕掛けたのはそっちだ。覚悟をしてもらいます」

まだ動くそいつの顔を踏み抜き、奪った拳銃を車の中に放る。

車から離れ、動く茂みの方に走ると足元が爆発した。



—— やった

その罠を仕掛けた女性は爆発した場所を見て不敵に笑う。

この辺り一帯にはいくつか地雷が仕掛けられており、静流はその内の一つを踏んだのだ。

片足を失い、悶え苦しむ姿を想像しながら爆発箇所に向かうと、後ろから殺気が放出

されたことでその女性は後ろを向く。

——何で!?

五体満足で存在する静流の姿を見た女性は体を強張らせる。

「舐めないでくださいよ」

宙に浮いた状態で回転し、踵落としを脳天に見舞う。

ダメージを与えると同時に自身も離脱し、近くの木の枝に着地した。だが、枝は折れ、落下する。

「やっぱり、昔みたいにするにはできないか」

静流は小学校の時を思い出していた。

母を切り、しばらくした時に静流はクラスメイトの男子全員を敵に回したことがあった。その時、まだ子供だった彼らは口で先に殴らせてそれを理由に制裁を加えようとした。ある意味、彼らの作戦は上手く行っただろう。

——静流の逃げ足の早さ、そして凶暴さを加味していれば

笑う男子をたった一発で倒し、次に「誰が来る?」と無表情で言ったのだ。誰からも来なかったこともあって、挑発なのかもう一人——それも当時のスクールルカースト最上位の人間を潰したのである。それから、男子総出で狙われたのである。そしてすぐに逃げ出した静流は木に登り、登る際に砂を持ってきていたので上からかけたり草を落と

したりと、残忍なことをし、危なくなったらどうにかして降りるか、近くの木に移動して嘲笑った——そんな少年が今まで隠してきた牙を出したらどうなるか。

——ろくなことにならない

何故、I S学園の要注意人物リストとして警戒されなかったか。それは、武藤正勝が情報操作したのだ。

それをしたら間違ひなく上から色々と言われるだろうが、彼なりの誠意であり、このような有事の際の対策でもあった。

そのことを知ってか知らずか、静流は次々と女たちを気絶させていく。

「なんなんだ、この男?!」

「怯むな! 相手はたった一人だぞ!」

静流は落ちて奪ったアサルトライフルを手にして増援らしい車に向かって撃った。幸い、殺すつもりがないのかタイヤを撃ちぬくだけに留まっているが、制御できずに何台かが近くの林に入って爆発する。

「待て、静流君! そんなことをすれば死人が——」

「それは運がないだけでしょ。タイヤだけにしてあげているだけなんです。そこから先は僕に喧嘩を売ったことでも後悔すればいい!」

そう断言した静流は逃げ惑う女たちの間を縫うように走り抜け、応戦しようとする女

の一人を殴り飛ばして運転席に乗る。すぐに操作方法を把握してアクセルを踏み、発進した。

「あの男、正気か!？」

一人がそう叫ぶ。彼が向かったのは施設。——つまり、彼は自分の死期を早めようとしている風にも取れるのだ。

ただ一人、武藤正勝はそうと考えていない。

(彼は一体、何を考えている……)

正勝は、今回のことで静流が脱走を考えているのではないかと思っていた。だが予想は反してそのまま突っ込んで行ったのだ。

一度、満を呼んで静流を追おうか考えた瞬間、一台の車が猛スピードで走っていった。「ああもう、なんなのよ!」

一人の女性が叫ぶのを見て正勝は行動に移す。その女性を掴んだ彼はすぐに床に叩きつけるように寝かした。

「な、何よ!？」 男が私にこんなことをして許されると——」

「対有事特殊処理班。その所属がどんな権限を持っているのかわからないわけではないだろうか?」

それを聞いた女性は息を呑み、正勝が尋ねようとしたことを察したのか話し始めた。

「わからないわよ。ただ、後から追って行った子は最近までIS学園で教員をしていて、あの男を陥れたからってことで退職処分になられたって嘆いていたわ」

「…なるほどな」

状況を把握した正勝はすぐに無線機で満に連絡しようとした。しかしそれよりも早く、満のほうから通信が入る。

『マズいぞ。今彼の車と別の車が接触して大事故が起こった。女性の方は無事のようにだが、彼は……』

悪報だった。それを聞いた正勝は地面を殴る。

『いや待て、無事だ——マズい。女が武器を——』

「すぐに追う。足止めしろ！」

そう言って正勝は車に乗り、発進させた。

——ガシャンッ!!

後ろに拳銃が落下する音が響く。

立花は静流を過小評価していた。それもそのはず、静流はさつきまで爆発を起こした車にいて怪我を負ったのだから。外からもマズいとわかる血の量を見て勝てると踏んだ彼女はすぐに殺そうとした。だが、すぐに気配を察知した静流は的確に立花の手を蹴ったのである。

——ゾワツ

全身に寒気が走る。今すぐそこから逃げなければ。そう思った彼女は背を向けて走り去ろうとするが後頭部を掴まれてコンクリートに叩きつけられた。

「……ずういぶんといきがつてくうれたじゃねえかあ……」

それは今までと違った。これまで彼女は何度か攻撃されたことはあったが、それでも静流は冷静でいた。

だが声のトーンで今までと違うことを察した彼女は未だ掴んで離さない静流に声をかける。

「も、もういいでしょ！ 離して！ 離してよ!!」

「なあんでさあ。何で俺がテメエみたいなドブスゴミブタの言うことを聞かなければならねえんだよ。身の程を 知れよ！ ……ブタアツ!!」

宙に放られ、飛び蹴りを食らわされる立花。見事に顔と腹を蹴られ、これまで感じな

かった痛みに悶え苦しむ。

「おら立てよ。テメエらは強いんだよ？　強いんだよねえ？　だつたら立つて反抗しろよ！！」

ボールを蹴るように蹴飛ばされた立花の意識をはつきりしているが、動けなかった。心が、精神がはつきりと折れてしまったのだ。

「あーあ、つまらない」

そう言つて静流は銃を取り、立花の体をまさぐつた。そして目当ての物を見つけた彼はそのまま踵を返して歩いていく。だがそれも、ほんの数十歩進んだだけだ。

——限界

静流はI Sを除けば腕つぶしが強いだけの普通の人間だ。これまでかなりの苦勞を強いられてはいたが、致死に至る傷はまだ味わつたことはない。おそらく自身でもマズいことには気づいてはいただろうが、まだ大丈夫だと過信し体調管理を怠つた。

「……随分派手にしたようだね」

近くに満が降り、うつ伏せに倒れた静流を仰向けに返す。

すると車が事故車を避けて少し二人を過ぎた場所で停車し、中から正勝が現れた。

「大丈夫、とは言えないな。今すぐ彼を向こうに連れて行きます。乗せてください」

「いいのかい？　向こうに引き渡せば即実験となるかもしれないが——」

「有処」の名を出せば、それも遅らせることはできるでしょうね」

その言葉を聞いた満は途端に顔を青くする。

「……そうか。出したのか」

「ええ」

「対有事特殊処理班」——この組織は日本内に密かに存在する暗部組織の一つで、主に内部の問題をその名の通り処理することに特化した組織である。個々がISを持たずに一個大隊を壊滅させることができるほどの実力者であり、敵に回せば例え女権団と言えどISを出さなければ勝てないくらいだ。正勝はその一員であり、彼もまたこれまでに幾度となく地獄を乗り切ってきた猛者である。

「ともかく、今は彼の治療が最優先です。戸高さんは後方から追手が来ないか監視をお願いします」

「…わかった」

満は頷き、ハイパーセンサーを起動させた。



目を覚ますと、そこは知らない天井だった。

腕には点滴が付けられていて、近くには無防備に座って寝ている戸高代表がいる。

「——目が覚めたか」

「……武藤さん。ここは一体どこですか？」

「君が所属する研究施設の部屋だ。君にはここで暮らしてもらう」

そう言われた僕は上体を起こすと、くぐもった声がドアの向こうから声をかけられた。

『失礼します』

ゆっくりとドアが開かれる。俺も、そして武藤さんも現れた相手を見る。猫背で背が低い男性らしいが、白衣を着ていて怪しげな雰囲気を放っていた。

「こんばんは、舞崎君。おかげんはいかがでしょう？」

「……………良好ですよ」

「だとしても無理はなさらず。先程まであなたは多くの血を流していたのですから」

「それに、無理して僕という実験動物に死なれては満足のいく実験もできない、というのが本音でしょうか？」

未だに名乗らない男性に俺は尋ねると、とぼけた風に男性は言った。

「一体何のことでしょうか？ 私にはさっぱり——」

「この際、本音で言っただけです。どうせあなたも、ISを動かしたい人間でしょう？」

すると男性は笑顔を見せ、言った。

「なるほど。随分と賢い子どもですね。ここに来るまであなたが仕込んだのですか？」

「いや、私は何一つ説明していないさ」

「それくらい気付きますよ。今日まで馬鹿な奴らに殺されかけましたし」

「なるほど。中々面白い人生を歩んできたようですね」

心の底から面白がっているらしいその男を睨むと、何かに気付いたのか話し始めた。

「そう言えば、まだ自己紹介をしていませんでしたね。私は月読研究所の所長「灰澤つくよみ」はいざわ

博^{ひろし}」です。以後お見知りおきを」

「舞崎静流です。ご存知でしょうか」

一礼すると用事があるのか、「ではまた」と言つて下がり、ドアを閉めてどこかに行つた。

「君には大変なことだろうが、これからここで過ごしてもらおう。いざという時はこの番号にかけてもらえればいい」

そう言つて名刺を押し付けするように渡された。

「では、私もそろそろお暇させてもらおう。戸高代表、そろそろ帰りますよ」

武藤さんが声をかけるが戦闘で疲れているのか起きる気配を見せない。

僕は空気を読んで横になり、布団を被った。

「これで大丈夫でしょう。さあ、早くキスをしてあげてください」

「……冗談だろうか？」

「大丈夫です。僕は何も見なかったし聞かなかった。交渉は車内をお願いします」

「……わかった」

そう言つて戸高代表を担いでどこかに行った。あれ、絶対わざとだ。

(……色々、大変なんだな)

少し武藤さんに同情して横になると、モニターブルに見覚えのあるケースを発見す

る。思わず罨かどうかを確認せず開けると、そこには使い慣れたトンファーが収まっていた。

「……………そう言えば、片付けてたっけ」

だとしても、衝突した衝撃で破壊されたと思っただけ、どうやらそうではなかったようだ。

そのことに心からホツとし、僕はケースを抱えて眠ることにした。……………決して、抱き枕の代用ではない。



灰澤博は静流と別れて自分の部屋に戻った後、静流のカルテとさっきの状態を思い出していた。

(特に改造された痕跡もなし……なのに、あの異常な回復速度は一体どういうことだ……)

彼が持つ資料にはドイツ語でこう書かれていた。

——生死を分ける重体

だというのに、静流は一日と待たずして起きており、平然と会話をしていたのだ。

——これは要観察ですね

資料をしまい、彼はある場所に電話をかける。彼の野望を叶えるために。

第12話 銀髪の少女

翌朝、目を覚ました僕は雨だったのでランニングの代わりに筋トレをしていると、ドアをノックされたので立ち上がってから返事をする。

「失礼します。おや、もう起きていたのですか」

「ええ。朝は早い方なんです」

「なるほど。体調の方はもうよさそうですね。早速今日から皆さんに挨拶したいのですが、よろしいでしょうか?」

「ええ、大丈夫です」

「わかりました。では、風呂の設備などは自由に使ってください。掃除もさせることはできますが?」

「そうですね。トイレや風呂場の清掃をお願いします。自室の整理は私がしますので」
「では、そのように伝えておきましょう」

「そう言い、部屋を出て行く。とはいえ、着替えはあまり持ってきてないんだよな。
(……もう少し持って来れば良かったか)」

「そう思いながらも、風呂に入ってシャワーを浴びる。昨日のこともあって本当は風呂

に使ってリフレッシュしたいが、わがまま言ってもらえないか。

「今日からこの施設で働くことになった舞崎静流君です」

灰澤さんに紹介される。前に人たちは好奇心の視線を飛ばしてくる。

「ご紹介に預かりました。舞崎静流です。趣味はトレーニング、特技は戦闘。中学の頃は周りから喧嘩を売られることが多かったので、面倒でしかたが↑面倒でしたが、番を張っていました。ここではどのような形で役に立てるかわかりませんが、よろしくお願ひします」

一礼して顔を上げる。それでも周囲からの観察姿勢は崩されなかった。他には簡単な朝礼をして、解散となる。

「さて、ここからは施設の案内となります。そうだ、クロニクルは？ 彼女はどこかね？」

「あの子なら、今日は確か医務室で検査だと聞いていますが」

おそらく秘書と思われる女性が灰澤さんにそう説明をすると、漫画のように「ムムム」とうなり始める。

「仕方ありません。舞崎君、今日は周りの邪魔にならない程度に見学しておいてください。後で私にレポートを出すように」

「……………わかりました。入る時は灰澤さんの許可を得ていることは知らせておいた方が良いでしょうか?」

「そうですね。念のためにこちらからも連絡を入れておきます」

そう説明するとすぐに移動する。後ろでは秘書らしき女性が僕に一礼すると、すぐにそこから立ち去る。……………おそらく、顔を上げた時に睨まれたのは気のせいではないだろう。

(……………行くか)

ため息を吐きつつ、僕はこの中の施設を一回り見学することにした。

「……あ、紙切れた」

思わずそう呟いてしまった。

あらかじめ新品のメモ帳を持ってきていたけど、どうやら足りなかったらしい。

「どうしました?」

「いえ、なんでもありません」

空いてるスペースを探してメモを取る。どうしよう。まだ3つめだというのにメモ帳の紙がすべて切れた。

(これは予想外だった……)

最初のはI S工場……確か、装甲開発部だ。その次は武装開発部。つまり、どツボに嵌ってしまったわけだ。

僕は元々開発系の仕事に就くつもりだったのだ。それに、一応本格的な勉強はI Sに触れてからだだが、元々機械系に関してはものすごく興味はあった。それ故にメモを取りすぎたのである。

——ピピっ

アラームが鳴り響く。どうやらもう時間らしい。

「すみません。時間なので私はこれで失礼させていただきます」

「ああ、確かにそうですね。ほかの場所でも頑張ってください」

男性職員にそう言われ、僕は一礼して部屋を去る。……とはいえ、このままだとメモができないので部屋に余っているノートがないか探しに向かう。

——ドンッ

急いでいたこともあり、誰かとぶつかってしまった。

反射的に、以前の癖で倒れそうになった相手の腕を掴む。

——相手は少女だった

おそらく中学生……いや、下手すれば小学生でも通じるかもしれない身長に幼さが残る顔。赤……いや、紅色に近い両の瞳に銀色の髪が特徴的だった。……なんというか、幻想的である。

「ごめん。大丈夫?」

軽く力を入れ。相手を立たせる。

「……………ありがとうございます。大丈夫です」

そう言つて彼女は落ちた書類を素早く拾つてその場から去る。……まさか、ずっと施設育ちで男に対する免疫はあまりない、とか言わないよね?

(そうだ。僕も紙を取りに行かないと)

やることを思い出した僕はすぐさま部屋に向かう。

そして紙を手に入れた僕は、さっきの女の子のことを考えていた。

(…………可愛かったな)

つて、何を考えているんだ俺は。

頭を振って考え直す。相手は女。僕の敵だ。

「失礼します。見学に来ました」

何度もそう言い聞かせながら、僕は新たな研究施設に入って見学する。ともかく今は見学をしてレポートをまとめなければならぬのだから。

時間はあっという間に過ぎた。おそらくそれぞれの場所でアラムの設定をしていなければ時間を忘れて次の場所に遅れるくらいにだ。

僕は施設見学後のレポートを作成した後、灰澤さんに提出してから自室でトレーニングをし、食堂で食事を摂った後はトンファアの整備をする。それが終わった後、風呂に入って読書をしていた。

(…………そろそろ寝るか)

時刻は既に11時を過ぎている。少し面白かったので時間を見るのを忘れていた。電気を消して辺りを暗くしてから寝ようとすると、何故かドアが開く音がした。

(……何だ?)

僕は素早く枕の下に隠したトンファーを手にし、いつでも戦闘に移れるように片膝をついた状態で構えた。

何かがこつちに向かってくる。そう感じた瞬間、僕はそこに飛び出し、トンファーを振り下ろした。

「ひっ!?!」

——ガンッ!

床にぶつかっただのを感じた。外した様だ。

「何の用か知らないけど、僕を殺すつもりなら容赦はしないよ」

——ドン

何かが壁にぶつかった音だろう。僕はそこに向かってトンファーを振ったけど、間髪で回避された。

「待ってください! 私はあなたを殺しに来たんじゃありません!」

「女か。生憎、僕は女が一番信用できない」

「な……何でもしますから。あなたの身の回りのことも……その、必要なら……え、エッ

ちなことも……！」

「その必要はないよ。君はここで——」

——バンツ!!

勢い良くドアが開けられ、懐中電灯が照らされる。灰澤さんはもちろん、屈強な人たちが僕らを見ていた。

「……なるほど。そういうことですか」

灰澤さんは何か知っているようだ。僕は彼が人払いをしてから電気をつけたので、改めて僕に近付いて懇願した女を見た……って、この子は——

「……君は朝ぶつかった……」

「……こ、こんばんは」

間違いない。何故か布を一枚着ているだけだが、あの時の少女だ。

その少女は、泣きながらも僕に笑顔を向けてそう言った。

「すみません、舞崎君。実は彼女、あなたのために用意した女の子です。今日一杯まで検査して、サプライズとして用意したのですが……」

「目論見が外れたところが、僕の警戒心が強いためにこんなことになったと?」

「……はい。正直なところ、君を舐めていました。つい先日まで一般人だったので夜中に女の子に布団を忍び込ませて青少年向けの小説みたいな展開にしたかったのです」

遊び心でなんてことをしているんだ、この人は。

ため息を吐いて僕は侵入してきた女の子を持ち上げて渡そうとするが、

「ああ、ちなみに彼女は君のペットとして今日からここに暮らすので」

「……………はい？」

今、この人はなんて言った？

「彼女は君のペットです。あなたがしたいことを彼女に要求することができます」

「……………いや、ちよつと待つてくれませんか？ 流石にこんな子供に何を要求するんですか」

「彼女の使い道は色々ありますよ。君だつて男である以上は溜まるでしょう？」

「……………それ、本気で言ってます？」

「ええ」

流石は研究所と褒めるべきだろうか。こんな幼気のある少女をあらうことか犯せと
言うか。どう見ても小学生——

「ちなみに彼女は年齢的に言えばあなたと同一年だつたはずですよ。そして、ただの人間じゃありません」

「……………ただの人間じゃ…ない？」

改めて彼女を見る。確かに、この世のものとは思えないほど整っている顔だが…………。

「彼女は遺伝子強化素体と呼ばれる、遺伝子の状態で改造された人間なのです。要は、あなた以上に実験動物なわけですよ」

……………そういえば、そんな作品があったな。

(とうか、遺伝子改造技術ってISができる前からあったのか……………)

ISが発表される前は、至って普通の技術力程度だったと聞いている。ほとんどがガラパゴス携帯であり、スマートフォンは普及したばかりなので持っている人はそこまでいなかったと聞いている。だから遺伝子改造技術なんて夢のまた夢かと思っていた。

(……………この発言からして、ここは領いた方が良いんじゃないか?)

もしここで僕が「必要ない」と言った場合、彼女はそのまま連れられて大変な目に遭うのではないかと。そう思った僕は、心を鬼にして言った。

「なるほど。確かにそんな化け物なんて人間なんて言いませんね。大方、彼女の首巻かれているチョークも……………えっと、すみません。もしかしてこれって本物の首輪ですか?」

「ええ。似合うでしょう?」

そういう問題じゃない!

思わず叫びそうになったけど、なんとか我慢した。

「そうですね。中々のセンスだと思います」

どうしよう。彼女に対して不幸にするつもりだったのに、どう考えても僕が不幸になっっている気がする。

「あ、そうそう。彼女の首輪に付いているネームプレートにあなたの名前を登録すれば、彼女は君のペットとして登録されます」

「……わかりました」

「では、私はこれで」と灰澤さんは部屋を出て行く。しばらくして僕はその場に膝をついた。

改めて彼女を見る。綺麗な銀色の髪をしていると思っただが、よく見れば少し汚れている。……というか、どこのお涙頂戴の劇場かわからないけど、布を纏っているだけだった。

「……服と下着は持っているのか？」

「………持ってません。私はこのままの状態じょうたいで研究所けんきゅうじょに連れてこられていましたから」
「持っているならそのまま風呂に入れようと思っただが、ないなら仕方な………えっと、さつき会った時は検査着を着ていなかったか？」

「……あの時は、私の身体を検査するためなので」

つまり、検査が終わったからこそうちの服を着せられたわけか。

僕は財布とトンファアを携帯して彼女の前に座る。さつきの影響か、少女は震えてい

る。僕は気にせず彼女の首輪に付いている電子タグに触れると、彼女の情報が表示された。その中で「name」の欄を見つける。

「……えっと、「クロエ・クロニクル」で良いのか？」

「……はい。変な名前、ですよね？」

「僕はそう思わないけどね。少なくとも君がちゃんとした身なりをすれば名前負けはないと思うけど」

「master」の欄を見つけた。そこをタッチすると投影されたので僕はそこにローマ字で自分の名前を書いて登録する。

購買場に向かおうと考えたけど、流石にこの時間は開いていないはずだ。

（仕方ない。付け焼刃だけどやるしかないか）

僕は持つてきていた裁縫道具を鞆から出すと、クロエに風呂に入って体を洗うように言った。



クロエはシャワーを浴びながら、これから起こることを考えていた。

(……やっぱり、私は食べられるんですね)

自分の秘密をあつさりばらされ、それ以後の反応を変えた静流を思い出す。目は捕食者そのもので、どう料理しようか考えているそれだったが、実際はばれないようにしている静流の技術だ。

元々、彼女もその準備はしていた。だが、いざ自分が得意としていた隠密スキルをあつさりとは看破されただけでなく、容赦なく攻撃された時の恐怖はトラウマものだったのだ。

(……あまり、痛くないのがいいな)

静流のものを借りて洗い終わった彼女は外に出ると、白いシャツ(男物)と女兒デザインパンツが置かれていた。

(……………これを着ろ、ということでしょうか?)

少しばかり、静流の趣味に対して嫌悪を抱いたクロエはそのまま出てくると、振り向いた静流にドアを閉められる。

「……………出してください」

「その前に服を着てください」

まるで懇願するように言う静流に、クロエは内心驚いていた。

「何故、そう言うのですか? 私は——」

「大方、僕の遺伝子情報を得るためなんだろう? でも、そういうのは僕は興味ないから別に放置してもいいんだけど、放置して虫でも湧かれたら迷惑だから」

その言葉に、クロエは少し離れて体から水分を拭い、服を着た。



今度は服を着てくれたことに僕は内心安堵している。

(……………さつきは言い過ぎた気がする)

まあ、虫が湧かれたら本気で迷惑なんだけど、それでも僕から見れば彼女はそんなものと縁がなさそうな風貌だった。僕の友人に萌えにうるさい男がいるけど、彼女の今の姿を写真に撮って送ると、間違いなく「そいつを寄越せ！」と言ってくるに違いない。それほど彼女は美しかったのだ。……強いて言えば、胸が小さいのが残念なんだけど。

僕は彼女の手を引いて抱きしめてベッドに入る。

「……………興味ないんじゃないのですか？」

「そうだね。君にどうこうするつもりはないよ。でもこうでもしないと君は処分されるだろうし、そういうのは後味が悪いから協力するだけだよ。手を出すつもりはない」

さつきから彼女から何か違和感を感じていたけど、今ので確信した。——彼女は既に絶望している。

僕はそんな彼女に「希望を持って」なんて言える程の人間でもないし、それよりも彼女

の事を知りたくなつた。

(明日も早いんだ。ともかく寝よう……)

この時、僕は初めて女性から感じるフェロモンを「気持ち悪い」ではなく「良い匂い」と思った。

第13話 百獣の複合王

翌朝。僕はトレーニングがてら購買場が開いているかを確認してから部屋に戻り、寝ていたクロエを起こして再度向かった。

「子ども用の女もののパンツねえ。それならこれはどうだい？」

典型的なおばちゃんって感じの店員がそう言つて奥から何枚か出してくれる。

「ありがとうございます。後は……意外と物がありますね？」

「ここにいる研究員は中々家に帰らないからねえ。でも、その子は所長から支給された子だろうか？ 何も自費じゃなくてもいいと思うけどねえ」

「名義は僕になつているので、それに彼女みたいな女の子に何かを買い与えることに抵抗はありませんので」

女尊男卑だったら、即刻捨ててるけど。

「若いのにしつかりしているねえ。ところで服は？ 今なら割引価格で販売するよ」

「ありがとうございます。じゃあ、大量に」

そう言つて僕はクロエを連れまわして色々な服を買わせる。

「ところで、所長からこういうのも必要かもしれないって言われたんだけど」

「……………ナース服ですか。メイド服はありますか？」

「あるよ。これだね。あと何で注射器や白衣なんかがあるかはわからないけど、渡しておけって言われてね。作業着も……持てるかい？」

「ええ。これくらいなら」

気が付けば、金がたくさんあるとはいえかなり買っていた。

筋トレだと自分に言い聞かせながら持つていると、クロエが尋ねてきた。

「……………どうして、私にそんなことをするんですか？」

どうして、ねえ。特に考えたことはなかった。でも、理由を作るとするな——

「君が僕の奴隷だからだろうね」

「……………ならば、相応の事をすれば良いのではないのでしょうか？ あなたに殴られたりするくらい、私にとっては何の苦もありません」

「……………僕はそうは思わないけどね。身分が下だからって理由で殴る趣味はないし、そんなことでストレス発散なんて何が楽しいのか疑問だよ。大体、それは実力がなければ、実力があってもいつか抜かれるのではないかという恐怖から来る理論だから」

「……………どういうことですか？」

「じゃあ聞くけど、君は暴力を振るって来る人に反抗する？」

「……………しません。そんなことをしても、返されるのが目に見えています」

「勝てるなら話は違いますが」と答えるクロ工に俺は頷いて言葉を続けた。

「あくまで僕の推測だけど、彼らは自分たちに逆らわせないように躑居をしているんだよ」
「……躑居、ですか？」

「ヒトは今でこそ、社会の頂点に立っているけど何の準備もせずに野生の動物に挑まない。ライオンやチーターみたいなタイプにはね。つまり僕らは昔からは「危険物」として植え付けられているんだよ。今は女が強いつてことになっているけど、僕はただ利用するためにそうしているだけに過ぎないと思っている」

「……利用、ですか？」

「そう、兵器として」

するとクロ工の顔が暗くなる。もしかして地雷を踏み抜いたのだろうか。

「マスターは、よくそこまで理解していますね。一般の方と聞いていたのでつきり考えが至らない人間かと思っていました」

「陰謀論好きな奴がいてな。ここまでの知識は彼がいたからできたことだ」

いつも忙しくてあまり話には入ってこれない奴だけど、一体どこでそんな知識を仕入れているのかと聞きたいぐらいに詳しい奴がいた。ちなみにそいつは孤児院で暮らしていて、休みは年下の子どもたちの相手をしている。

「でも僕は、そういうのが嫌いだからこうして買っているわけだ。それに君が女尊男卑

の気がないってのもある」「……………女尊男卑なんて、抱ける方が幸せなんです。……………何もわかってないから」

どこか寂しそうにするクロエ。僕はまさしくその通りだと思った。

でもまさか、あんな形で返してもらえるなんて思いもしなかった僕は、結果的に得をすることになる。

「つまり、あのゴミ女……………セシリア・オルコットがIS学園に来た理由っていうのは最新鋭機のデータ収集がメインなわけね」

「そうなんです。特に今、EUでは主要国を中心に『イグニッション・プラン』というものが実施されていて、ティアーズ型はイギリスの中でも筆頭候補に立っているんです」

数日が経ち、トレーニングを終えて風呂を出た僕はクロエに話を聞いていた。

彼女は常識離れしているとところはあれど、ISに関しては知識が豊富なので読書代わりに彼女の話を聞いている。

「ですが、酷い話ですね。仮にも国の代表候補生の身分であろう人が素人に喧嘩を売るばかりか、他国まで侮辱するなんて」

「どつちにしろ、負ける可能性が高かったからとある男女の討論を動画サイトでアップしておいた」

「……………それくらいはする必要はあるでしょう。確か彼女はイギリスでも唯一のBT適性値A+という最高ランクを叩き出していると理由で選ばれたはずです。射撃が得意というのも相まってでしょうね」

「よく、そんなことを知っているね」

「……………あまり自慢できることではありませんよ」

少なくとも僕は今のクロエは凄いと思うけどね。博識だし、こうして僕が持たない知識を補ってくれる。

「舞崎君、少しいいかい?」

「何でしょうか?」

昼休みに勉強していると、職員の一人在声をかけてきた。

「灰澤所長から伝言。2時間後にトレーニングルームに来てほしいって」

「2時間……………14時30分に向かえばいいですね?」

「うん。それくらいにお願ひ」

「わかりました」

それからしばらくして、僕らはトレーニングルームに来た。

周りにはあまりクロエを連れまわして欲しくないのか、彼女を睨むように見る。僕だけが中に入るように言われたので少しだけ待ってもらおうように言ってから頭を撫でて入る。

「それで、僕に何をしてもらいたいんですか？」

『これからあなたには、あるものと戦ってもらいます』

IS訓練に設けられたトレーニングルームに2つのドアがあり、僕の前にあるドアから何かが入って来た。

「……………よくファンタジーもののゲームに出てくるキメラですか？」

『よくご存知で。あなたには、こいつと戦ってもらいます——やれ』

黒い毛に赤い瞳。蛇の尾に悪魔の翼を持つ四肢の獣は灰澤さんがそう言うや否や僕の方に飛び掛かってくる。タイミングを見計らって、僕はキメラの顔を踏み台にして上へ飛んだ。すると、そいつは炎を吐いた。

幸いなことにそいつは僕がいる場所に吐いたので回避に成功するけど、これでは迂闊に上には飛べない。

『どうです？ いかにも複数の中学校を占めたあなたでも、このような化け物の相手には生き残れまい！』

「何でノリノリなんですか？」

突っ込みを入れるが返事はない。僕は立ち上がってトンファーを出し、突っ込んだ。

キメラが僕に向かって爪を振り下ろすけど、それを回避して顔に棒を叩きつける。だがキメラはすぐに左前脚で僕を殴り飛ばした。なんとかトンファーで受け止めて防御した。

「この試合、僕が勝ったら何か言うことを聞いてくれますか？」

『何ででしょうか？』

「僕が帰る日、彼女も僕と一緒にIS学園に連れて帰らせてもらいます」

すると周りから笑い声が飛び交う。——けど、笑っていられるのも今の内だ。

僕は地面を蹴るように移動しながら——トンファーの持ち方を変えて引き金を引いた。すると先端部分からスパークが走って光弾が飛んだ。

「まだまだ」

引いては離し、また引いてを繰り返して連続で発射する。マニュアルを読んでいただけ、お祖父ちゃんはどうしてこんなものを作ったんだろう。今は助かっているけど。

キメラは怒りを露わにして上に飛んで僕に向かって飛びかかってくる。僕はそれを

回避するが動きが早いキメラに迫られた。

——キッツ!!

キメラの爪と左のトンファーが交差する。咄嗟に防いだけど、トンファーがちぎれてどこかに行くことはないらしい。そして、固まっている状態は僕にとって都合が良かった。

僕は右手に持つ方でスカイアッパーを顎にぶち当てた。唐突のことに目を白黒させるキメラ。その隙に僕は目に何度も攻撃する。

『何をしている?! 確かに殺すなどは言ったが手加減するなどは言っていないぞー!』
「ねえ、降参しなよ」

上で騒ぐ灰澤さんを無視して僕は言葉が続ける。

「それとも君は、これ以上無駄な戦いに身を投じて、ただ僕を楽しませるための人形に成り下がるのかい? まあ、別にそれでもいいかもしれないねえ。だって僕は強いんだから」

今の僕にとって、目の前の敵は未知の敵であると同時に実験台に過ぎない。何故って

——人間じゃないから例え死んでも心が痛まないんだ。

「さあ、どうする? 上にいるご主人様に従ってただ僕のサンドバッグになる? 別に

僕はいいよ。だって僕、これまでまともに本気を出したのってあまりないんだよね。だ

から——僕のストレスの吐け口になつてよ」

するとキメラは僕に向かつて火の玉を飛ばした。僕はそれをトンファーに付いていくたくさんのボタンの一つを押して高速回転させることで疑似的なバリアで弾き飛ばした——キメラの方向に。

キメラは慌ててその場から回避する。どうやら火は嫌いなようだ。

「何だ、ちゃんと嫌いなものがあるんだ——余計に楽しくなつてきちゃった」

僕は右トンファーをキメラがいる場所に振り下ろす。キメラは咄嗟に回避したけど左トンファーをガンモードに切り替えて引き金を引き続けた。すると、エネルギーが溜まっていき僕と同じくらいの大ききになる。それをキメラに向かつて放つとキメラは大きな翼で体を操って回避した。さつきまでキメラが背を向けていた壁の一部がはじけ飛び、礫がキメラに降り注ぐ。僕はすぐさま下に行き礫の一部を蹴り飛ばしてキメラに直撃させ、礫を伝つてキメラがいる場所へと昇る。

「君はこれを耐えられるかい？」

——三連続十字斬り^{サザンクロス}

連続チョップの応用技として僕のレパトリーにある技をトンファーで行う。勝手が違うけど僕はすんなりとそれができた。さらにその時に僕のトンファーからは刃が出ていたのでキメラが血飛沫を飛ばす。

僕は着地時の勢いを殺すために回転して着地、そして今度は組み替えてバスターブレード状にする——が、カメラに異変が起こった。段々とサイズが縮小され、小さな猫のサイズになった。

あれから僕とクロエは所長室に連れて行かれた……正しくは、僕に追隨する形でクロエが来たと言うべきかもしれない。

猫サイズになったキメラは現在、少しだけあるクロエの胸の感触を味わっている。

「それにしても、生体関係に特化した研究所はキメラすら生み出すんですね。正直空想の産物だと思っていましたよ」

「ヒトは相応の業を負っているものですよ。さて、さっきの戦いを見て思っていました。が、まさかあなたが常日頃から兵器を携帯しているとは思いませんでした」

「僕だつてまさか自分のトンファーにあんな機能があるなんて知りませんでしたよ。それよりも、一体どういふことなんですか？ どうしてあのキメラは萎んだんです？」

おそらく僕の友人がキメラに切れるかもしれないほど羨ましいらしいシチュエーションにいるキメラを指しながら尋ねた。

「人が全体に力を行き渡らせた場合、その分は大きくなることはご存知ですか？」

「……………聞いたことがあります」

「その力の応用ですよ。特にその猫は様々な改造を施されていましてね。以前とは違ってそれだけの力を持ちながら通常の動物と同じくらい生きることが出来る。いや、それ以上かもしれません。ですが、それは夢だったようです。あなたが強いことは知っていましたが、まさかヒト族に後れを取るとは思いませんでした」

「どうやら灰澤さんは心の底からため息を吐いているようだ。」

「それにしても、あなたの戦闘の才能は素晴らしい。どうです？　我々が全力であなたをサポートしましょう」

「お断りします」

「何故ですか!?　今のままではあなたはいずれ限界がやってくる。我々はお約束しましょう。いずれ織斑千冬にも生身で勝てることもね」

「……………論外ですね」

僕も心からため息を吐いた。

「あの女には僕の力のみで勝ちます。あなた方の介入は必要ありません」

戦いは、自力で勝つてこそ意味がある。同じ人間が相手ならなおさらだ。

「では、これで失礼します。キメラはこちらで保護しますので」

「……………飼いを知らないくせに?」

「それはこちらで何とかしますよ」

「……………それと、彼女を欲する理由はなんですか? あそこでは了承しましたが、是非お聞

かせ願いたいものです」

「やだなあ。そんなの、見たらわかるじゃないですか」

可愛いは正義って、誰かさんが言っていた。

もつとも、理由は他にある。ISに詳しいのもそうだけど、何よりも彼女は機械についても詳しい。あと、女尊男卑じゃないことのポイントが高い。

「わかりませんね。あなたのことですから、我々が彼女を提供した真の目的は理解しているでしょう?」

「僕から遺伝子データ……………精液を欲しているのでしょうか? 彼女という女を使って。ですが、残念なことに僕は彼女をそういう風には見ていませんので」

言うなれば妹、だろう。もしかしたら僕はクロエを「もしかしたらいたかもしれない妹」として見ているのかもしれない。

「では、失礼します」

僕は所長室を出て自分たちの部屋に戻ると、早速会議が始まった。

「……………目下、問題は食事だな」

「……………ですな」

キメラは一体何を食べるのか。そもそも、どうやって意思疎通をするのか凄く気になる。

大見得切ったのは良いけど、確かに僕らではどうしようもない。

(でも、未だに信じられないな)

最初、本当に化け物と対峙していた気分だった。生き残るぞ、と。おそらく立ち向かう主人公とかは大体そんな思いでそこに立っていたのだろう。

「……………ところで、どうしてマスターは私を求めたのですか？」

考え事をしていると、クロエは唐突に質問してきた。

「迷惑だった？」

「そうではありません。ただ、私はあなたも知っている通り、研究員たちの駒です」

「そんなのは関係ない。君が欲しいと思ったからああ言っただけだ」

……………まったく。僕は甘いな。

ついこの間まで向かって来る女を平然と潰していた僕が、たった一人の少女に対面したことまで甘くなるなんて。

(……………悪い気はしないけど)

じつと、キメラの方を見て考え込むクロエの頭を撫でる。彼女の顔は赤くなつたのを見て僕は少し幸せを感じた。それほど、彼女には性的なことに以外にも価値はある。

「……………とりあえず、猫缶でも買つて来る」

「私が行きます。マスターは部屋でお待ちを——」

「いいよ。クロエはその子と遊んでな」

財布を持つて僕は部屋を出て購買場へと向かおうとすると、後ろから声をかけられた。

「舞崎君、ちよつといいでしょうか？」

「……………何の用ですか、灰澤さん」

さつき別れたはずの灰澤さん。彼の手には資料がある。

「……………いえ。引き取つてもらう以上、餌とかの情報に渡そうと思ひましてね」

「てつきり連れて行くかと思ひましたよ。クロエはともかくキメラが世に出るのはマズいでしょう？」

「そう思ひましたが、突然変異種とでも言つておけばどうにかなるでしょう」

保健所とかに引き取られないかとても心配なんです……。

「それにあのキメラからは十分にデータを採取することはできました。ここでこれから

起こる悲惨なことを見るよりも、あなたたちのように明るい若者の手助けになるならばいいことです。それとこれを」

そう言つて、灰澤さんはポケットから猫缶を取り出した。

「しばらくこれを食べさせていたら、大層気に入りましたね。経過も悪くないので、是非ともと思ひまして」

「……ありがとうございます」

見ると、その猫缶はコンビニでも見かけたことがあるものだった。

「あれでも既に10年は生きていますが、今までまともな症状が出たことはありません。なので予防接種はむしろしない方が良いでしょう。では、私はこれで」

そう言つて灰澤さんは去つて行く……と思つたら、僕に言つた。

「ところで、実際彼女とはどこまで行つていらっしゃるんですか?」

「どことまで行つてません! つていうか全然行つてません!」

僕は全力で否定した。

IS学園に帰るまで、今日を除いて後2日。だけど——物事は上手くいかない。

第14話 失ったもの、手に入れたもの

『テスト終了。舞崎君、指定位置にISを待機させてください』

「わかりました」

トレーニングルームに現れた台座が指定位置らしく、ハイパーセンサーからの情報を頼りに着地する。

今日は研究所での最終日であり、本来なら2日休みのはずが休日出勤を強いられる연구원たちに申し訳ないと思いつつも僕はISを着地した。昨日からPICの設定をマニュアルへと変更させて練習しているけど、それなりに慣れてきた。

打鉄から降りた僕はトレーニングルームを出るとクロエがカメラと一緒に近付いてくる。

「お疲れ様です、マスター」

「ありがとう」

持っているボトルを受け取って水分を補給する。

「いやあ、助かりました。ここで開発したはいいですが、肝心のIS操縦者がいなくて困っていたんです」

「いえ。こちらでもIS操縦の訓練ができたので。むしろありがたいですよ」

僕らは今日、ここを立つ。その準備は既に終わっていて、夕方に来る迎えを待つ間に開発した装備のテストを行っていた。

一度シャワーを浴びさせてもらおうと思いつながら、僕ら3人は所長室へと向かっている。

「しかし、もう1週間ですか。早いものですねえ」

「確かに。この一週間は本当に色々ありましたね」

一番の収穫はクロエと一緒に連れていけることだろう。彼女は知識の宝庫と言っても過言ではないほど、僕にISのことを色々教えてくれた。それに、可愛い。できることなら一生監禁して外の空気を吸わせたくない。それほど彼女には感謝している。カメラを自分の胸に抱いて静かに喜んでいる様はまさに絵になる。

「今こそ、私が用意したナース服が必要になる瞬間だと思っておりますが」

「やっぱりそういう意図だったんですね」

「そうです。ちなみに白衣は同じ用途で使う物です」

「それは間違ってますよね!？」

カメラの一件があつてからだろう。僕ら男性の心の距離は縮まっていた。

「ところで、よく職員がクロエの同行を認めてくれましたね」

「確かに当初はそう言った反発はありましたが、「あなた方は舞崎君と同じロリコンなんですな」と言うのと大人しくなりました。それにここは既婚者が多いですからね。浮気すれば即離婚です」

「それもそうだ。じゃあ、彼女の今後の人生はちゃんと世話しますよ」

僕と結婚……は難しいだろう。できればそこまで行きたいなって思うけど。

せめてちゃんとした人と結婚してもらいたいと思う。

「ははは。その言い方だと、まるであなた自身は彼女に興味がないようですね」

「他の男に渡すとなると、まず僕に勝てるかどうかですよね」

「一気にハードル上がりましたね」

それは僕も思った。一応、これでもかつては3つの中学の番を張っていたほどだ。

（僕が織斑君並のイケメンなら、少しは自信を持てたかもしれないけど……あ、無理か）

どっちしても後ろ盾が無いから無理か。

内心笑っている、僕らがいた場所が揺れた。

「地震……」

「いえ、これは……お二人とも、今すぐこちらに——」

——ドオンッ!!

後方で爆発。僕はトンファーを出すと、さつきまで僕が纏っていた打鉄が現れた——
操縦者と共に。

「……どうして」

「所長。あなたは殺しません。私の目的は——その男です!!」

——ドオンツ!!

今度は別の場所!?

ともかく僕は壁に回避して飛び上がる。

「やっぱり、あなたは女権団ですか」

所長秘書にそう言うと、僕は左トンファーをガンモードにして撃った。

だけど秘書はそれを回避してクロエに接近——しかしそれはキメラの炎で相殺された。

「不用意に攻撃するとは、どうやらその女はただの肉塊としか思っていないようですね」

「クロエ、逃げる!」

近接ブレード《葵》を展開した秘書は僕に斬りかかる。僕はそれを回避して再びクロ

エがいる場所へと移動する。

「すばしっこいですね!」

「僕の取り柄の一つですから」

クロエは僕の近くにいて離れない。

「僕のことはいいい！早くそいつと共に逃げて！」

「ですが——」

「君に死なれることが困るんだ!!」

少し迷ったらしいクロエは、ようやくそこから離れて逃げ始める。

秘書は最初から僕にしか興味がないようで、僕の方に集中する。

「この、ちよこまかと!!」

横薙ぎ、縦裂き、次々と僕に迫る。それを何とか回避していくと、通信が入ったのか、秘書は顔を逸らした。そして怪しげに笑う。

僕の背筋に悪寒が通る。すると、足元から炎が上がった。

——させない!!



その車の中はとても静まっていた。

同乗している運転手の武藤正勝、そしてその隣に座る更識楯無はどうすればいいのか
と
思っている。原因は2人の後ろの座っている人物だ。

「私は聞いてなかったんだけどね、どうして君が乗っているんだい？ 織斑千冬」

「私もお前がいるとは知らなかったがな、戸高」

にらみ合う二人。それぞれが殺気をむき出しにしているため、前にいる二人にとって溜まったものではない。

先程のセリフも研究所が近くなってきたことでようやく絞り出したほどで、どれだけ
お互いがお互いを嫌っているのかを正勝と楯無は十分に理解した。

比較的大きな研究所が見えてくると、いち早く異変を察知した満が窓を開けてそこか

ら飛び出し、ISを展開して正勝に通信を送る。

『何か異常が起こっているみたいですよ。先行します』

「お願いします、戸高代表」

『……………こういう状態でも、名前で呼んでくれてもいいのに』

楯無も千冬も満を見習って同じように飛び出していった。

満は先行して様子を伺う。

研究所は半壊しており、火の手が燃え上がっている。少し離れた場所ではISが展開されており、満に気付いた狙撃手が撃つて来た。

「舐めるなよ……………私を！」

日本に限らず各国に存在する国家代表は多くても3人。モンド・グロツソでは大体2人をトーナメントに選出し、一人はどちらかが体調不良などで欠席した場合の補欠として扱われる。楯無の場合はその補欠部分に該当し、満は2人の内の1人となる。それ故かなりの戦闘力を持っており、敵のように素人に近い射撃など回避することなど造作もない。

「こちら戸高、襲撃グループと思われる一団を確認した。これより制圧を開始する」

『了解しました。織斑と更識は施設内の生存者を探してくれ』

『了解した』

『わかりました』

正勝の指示に2人が返事を返す。満は下に降りようとした時、誰かが外に出てきたのを確認した。

「織斑、そつちに舞崎君を確認した」



目を覚ました僕は、奇跡的に五体満足であることを確認してすぐにクロエを探す。

辺りはほとんどが破壊されていて、それを見るたびに僕の中で不安がよぎる。

(お願い……お願いだから、絶対に無事でいて……)

藁にもすがる思いとはまさにこのことだろう。外に出ると、辺りは燃えていた。

不安に駆られながら、それでも僕は探し回った。絶対にいる。必ず生きていると信じながら。

——でも、現実是非常だった

あるものを踏んだ僕は、恐る恐るそれを確認する。見つけたのは見覚えのあるドッグタグだった。

まだシステムが生きていて、どうやらさつき踏んだ時に起動して名前が出ている状態だった。

——クロエ・クロニクル

そのタグの持ち主の名前が刻まれている。でも僕は——
「……まだ……まだなんだ……」

生きてる。そう思って辺りを探し回る。

どれだけ移動したんだろう。気が付けば、僕はまた研究所の入り口に移動していた。

「舞崎！」

聞き覚えのある声。でも誰の声だったか思い出せない。

「舞崎!!」

急に触られる。僕は反射的にその手を払うと、もう一度掴まれた。もう一度抵抗して振り払い、相手を見るとそこにいるのは意外な人物だった。

「織斑先生、どうしてここに……?」

「迎いの車に同乗していてな。何か騒ぎがあったようだから急行するとこの様だ。いずれ救援も来る。それまでひとまとめに——」

「女の子は見ませんでしたか!? 銀色の髪をした女の子なんです! その子は——」
「……どういふことだ?」

何故か織斑先生は職員を睨みつける。そしてため息を吐いてどこかに通信すると少し言いにくそうな顔をした。

「先程、更識にも確認を取ったが、どうやら見ていないようだ」

「……そう……ですか」

……何で……僕に専用機がないんだろう。あればこんな風に……クロエが死ぬことなんてなかったのに。

(……ああ、そうか)

結局、やっぱり、この世を支配するのは力つてことか。

——僕は……いや、俺は甘かったんだ

生身さえ強ければどうにかなる。そう思っていたけど違う。結局は暴力。ISが無ければ、その人の主張は通らない。あの女たちの主張が通るのはそういうことだろう。

——欲しい？

どこからか声が聞こえる。どこかわからないけど、僕は右を向いた。

そこには黒い髪の、クロエと同じくらいの少女がいた。

「……………何が？」

「あなたの力。あなただけの力が……………欲しい？」

段々と、段々と近付いてくる少女。僕は不思議と嫌悪感を示さなかった。

「……………欲しい」

「その力を持ったら、どうするの……………？」

——そんなの決まってる

「潰す」

「何を？」

「女を。そして思い出させてやる。——所詮、女は男に付き従う生き物ということを」

「……………そう。じゃあ、これを使って」

少女は僕にクリスタルを渡して消えた。僕はそれを握ると急に光り始めてすべて理解した。

——今宵、僕は俺に成る。たった一人の男を潰すために燻らせたもう一つの姿を見せてやる



その頃、上空では満がまだ戦闘を続けていた。

いくら彼女の技量が高くとも、相手は連携で満を戦闘不能にしているので苦戦を強い
られている。

「死ね！ 裏切り者！」

「国家代表のくせに男に恋をするなど!」

迫る近接ブレードを脚部に仕込んでいるナイフで受け止めて抑え込もうとするが、もう一人のせいで上手く抑えることができない。抑え込んでいた女から離脱して体勢を立て直そうとするとハイパーセンサーに警告が入る。

〔警告! 所属不明 I S が接近! 警告!〕

逃げ出すよりも早く、その機体が現れる。

「また増えるのか……………」

「……………下がっている」

「その声、まさか——」

——舞崎君?!

声をかけようとした満。だがその前に目の前の機体はいなくなり、接近してきていたブレードを持つ打鉄とすれ違い、反転した。

「なっ、何だお前は——」

「——消えろ」

メイスが展開され、折れたブレードを持つ打鉄の操縦者の頭部にぶつけ、

「……んのおおお!!」

アサルトライフル《焰備》を撃ちながら近づいてくるラファール・リヴァイヴの操縦

者にメイスを投げ、当たったのを確認した所属不明機は抗う打鉄の操縦者の顔を容赦なく殴った。

「女の敵となるのね、ISを使っていないながら——」

「アンタのせいで……アンタのせいでクロエはああああ!!」

絶対防衛を発動させ続けたことにより、打鉄のシールドエネルギーが切れて動けなくなる。それを確認した静流は打鉄を離して落下させた。

「男の分際で、ISを使うからそうなるのよ!」

秘書はグレネードを放り投げる。それが静流の前に接近するが当たらず、秘書の前に静流が現れて踵落としを食らわせた。

「その人に触れるな、男風情が——」

すると秘書の前から静流の姿が消え、ラファール・リヴァイヴの後ろに現れてウイングスラスターを腕いだ。

「お前たちが……お前たちみたいなのがいるから……」

メイスを展開して背骨に攻撃する。ISの保護機能がなければ間違いなく砕けて死亡する攻撃であるため、絶対防衛が発動してシールドエネルギーが一気に消滅し、ラファール・リヴァイヴは保護機能以外のシステムが停止する。

「隊長!」

「よくも仲間を——」

一体どこにいたのか、施設の方から現れた打鉄2機。そちらに向かつて静流は機体に向け、エネルギーを充填——発射した。

エネルギーの放流に巻き込まれてシールドエネルギーが一気になくなり、2機共落下していく。

「……………何なのよ……………何なのよあなたは!？」

「とづくに知ってんだろ、俺のことは」

メイスはいつの間にか消えており、静流の両手には拳銃が握られていた。

「男の分際で!!」

秘書は鞭を展開して攻撃を仕掛けるが、静流は敢えてそれを掻い潜って実力差を見せつける。

「いの——」

鞭の先端が後ろから迫り来る。静流は先端に向けて銃口に向け、引き金を引いて軌道を逸らした。

「消えろ」

もう一方の銃で秘書の目に銃弾をぶち込む。ISには絶対防御があるとはいえ、威力までは相殺しきれない。

痛みに悶える秘書に容赦なく弾丸を放ち、機能が停止するまで何度も何度も撃ち込んだ。

やがて秘書が纏っていた打鉄も落下し、着地すると打鉄から放り出される。

「に、逃げないと——」

「——どこに行くつもりだ？」

目の前に現れた静流。彼はすぐに秘書の顔を掴んで後頭部を近くの木に叩きつけた。

「や、止めて！ 私が悪かったわ。だから——」

だが静流は容赦なく腹部に蹴りを入れ、顎に掌打を叩き入れ、目を潰す。

「止めて……お願い……」

やがて謝罪が懇願に変わるが、それでも静流が止まることはない。

「安心しろ」

秘書の右腕を取った静流は、流れるように親指を折った。

「お前の仲間も、同じようにしてやるから」

「……いや……止めて……なんでも——あああああああああああッ

「!!?!??」

懇願も謝罪もすべて無視、手の指をすべて捻じ曲げ、両腕を折り、足を折ろうとした

時に何かが近付いてくるのを感じた静流。周りを警戒しつつ秘書の右足を折った。

「そこまでにしろ、舞崎」

「……千冬様……」

「ああ、これで最後だ」

——バキッ!!

左足を折った静流は秘書を捨て、ハイパーセンサーを起動させて命令する。

「ここを襲った他の機体の場所を知らせろ」

「一体どうするつもりだ」

「どうだっていいだろ」

別の場所に移動する静流を捕まえようとした千冬。だが静流は容赦なく千冬の喉を突き、怯ませる。

その隙に静流は別の場所に移動し、何かを探している女性を見つけて攻撃した。

「お前は——」

女が反応するが、腹部を攻撃して吹き飛ばす静流。倒れた女性は立ち上がって静流を襲うがそれよりも早く静流は腕を振り上げて女性の腕を切断した。

「何で……」

「俺のトンファーは仕込んでいるからな。ほら、抗え——よ！」

腹部を突き、女性が倒れたのを確認した静流は両足を折って悲鳴を上げさせる。その

隙に顎を砕いてI Sを回収し別の場所に移動した。そして——最後の一人の前に移動する。

「……………舞崎静流……………この異端者め！」

迫り来る拳を回避する前にトンファーを回し、先端から飛び出した鎖が付いた鉄球を女の頭部に直撃させた。

「——!!」

さらに鼻の骨を折り、腹部に蹴りを入れて両腕の骨を折ってI Sを回収した。

「まったく、ぞでは——」

「無様なものだ。女尊男卑の思想を持たずに大人しく過ごしていればこういう風にはならなかったのに……………死ねよ」

腹部をもう一度蹴り、耳を切断し、目を潰す。ひたすら暴行を加えた。だが、決して彼女らを犯すことはしない。いや、そうする価値がない、感じられないのだ、静流には。徹底的に自由を奪った静流はそのまま放置し、灰澤氏と合流した。

「舞崎君、大丈夫ですか……………?」

「ええ。後は国会議事堂と女権団の本部を爆破して、そいつらの一族すべて血祭りにあげるだけなので」

灰澤は顔を青くした。

これまでの無邪気さと冷静さが同居した雰囲気は完全になくなり、ただ冷徹に、相手を処分することしか考えていない——裏の顔に変わっているからだ。

「……………彼女は——」

「おそらく死んだんでしよう。僕の巻き添えを食らって。これが落ちていましたから」
灰澤にドッグタグを見せる静流。だがすぐに回収してポケットに入れる。

「……………舞崎君」

「一週間ぶりですね、武藤さん。今回の襲撃者を全員無力化しておきました。それと、回収したＩＳは返還する気はありません」

躊躇いなく答えた静流。だが正勝は何も答えずに目を閉じる。

するとヘリコプターの音がしはじめ、上から次々と装備を揃えた男たちが現れ、整列する。

正勝が指示をすると武装した男たちは森の中に入っていく。

「ＩＳはいずれ回収させてもらうことになる。こちらとしても、君が持っているＩＳを含めて調査しないといけないのでね」

「……………じゃあ、壊しても良いですか？」

「政府の言葉を代弁するなら「ダメに決まっているだろ」。私個人としてはぜひ壊してもらいたい。ただし、君はしばらくここで待機だ」

そう言われた静流は今すぐ逃げ出そうとするが、正勝に抑えられて戦いが始まった。

第15話 立場逆転

あの後、複数人の人に止められた俺らは戦いを止め、そして僕がしてきたことを知られた時は何故か凄く怒られた。いや、今も怒られている。

「確かに、お前の気持ちは理解しないわけでもないが、やりすぎだ。無力化するのに骨や指を折る必要はない」

「じゃあ、どうすればよかったのさ」

敬語は捨てて話をする。目の前の相手には不要と判断した。

「相手は規制されているのに関わらずISという力を行使した。そんな危険人物をただ縛って放置だなんてとてもできないよ。ただでさえ、以前のことがあったんだから俺がしたのは当然の事とも言える。それとも何？ アンタは俺に黙って死ねと？ 男なんだから女に従えと？ 冗談じゃない。どうして俺がISを使わなければ男に喧嘩も売れない雑魚に媚びを売らなければならないんだよ」

「……………だからと言って、お前は喧嘩を売られたら相手に暴力を振るい続けるのか？」
「時と場合によってはね」

まあ、今回ののは物凄くムカついたから仕方ない。むしろ結局1人しか腕を飛ばせな

かったからな。

「もう帰っていいですか？ 凄く疲れたので今すぐ寝たいんですよ」

何せあの場で事情聴取を受けた後にIS学園でもう一度事情聴取と来た。正直そろそろ眠い。

「……………良いだろう。今回の事の顛末は一応は聞かせてもらっているからな。しかし、あの時に使用したISを明日に調べるといふことは忘れるな。場所は追って通告する。それと鍵だ。部屋は以前の場所を掃除はされているが、配置は変わっていないはずだ」
「そうですか。わかりました」

鍵を受け取った俺は部屋を出てそのまま向かう。

途中、何人かとすれ違つて本気で驚かれた気がしたけど、反応する気分じゃないから全員スルーして部屋に入り、荷物をそのまま先にシャワーを浴びる。終わったら携帯電話を充電してベッドに入った。

凄く、手持無沙汰に感じた。

(……………ずつと、腕の中にいたんだっけ)

最初はそのぽを向いた形で、でもそれは2日目からはお互い向き合つて一緒に寝ていた。買ったパジャマが意外にマッチしていて、凄く可愛かった。

目的もわかつていた。俺の遺伝子情報を手に入れるために来たってことぐらい察し

ていた。でも、それでも俺は一緒にいることが嫌じゃなかった。知らないことを教えてくれた。IS操縦のコツも教えてくれた。だからあの施設でISを動かした時もかなりうまくできていた。

——疲れたのは、あくまで名目だった

あの場所で、今にも泣きそうだった。

「……………クロエ」

もう彼女はいない。そのことを噛みしめながら俺は枕を涙で濡らした。どうにもならないと後悔しながら。

部屋を引越すことになった。

荷物を纏めて台車に乗せて移動する。既に授業は始まっているけど、あんなことがあったのと急な引越しのためにもう1日休みをもらえた。荷物が学園に来たときよりも増えているのは、施設にあった俺とクロエの分も引き取ったからである。

「ここが、今日からお前が暮らす部屋だ」

「……………本気、ですか？」

俺は改めて尋ねると織斑先生は「仕方ないだろう」とため息を吐く。

「確かに問題ではある。だが、私ぐらいしかいざという時に対処ができないからな」

「……………あの機体で暴走なんてされたら、素人にしか相手をできないオルコットさんには無理ですしね」

「いや、そういうわけではないだろうが……………」

本人がいないところで嫌味を言う。織斑先生は困った顔をするが、俺は何度でも過去を掘り返してやるつもりだ。

「でも、実際難しいからあなたの部屋に住むことになるんでしよう？」

「……………それもあるが、今日から更識がモンド・グロツソの強化合宿のために不在になるんだ」

そもそも、どうしてこうなったのかと言うと俺が施設で暴れたことが原因だった。

どういう経緯で手に入れたのか俺にも詳しくわかつちやいないが、いつの間にか俺はISコアを手に入れていた。女たちから奪ったISは全部で4機。それらはすべて回収されて、いざ俺を展開しようとしてこれまたいつの間にか手に入れていた指輪を念じて展開しようとしたが、何故か展開されない。どういふことだと俺と織斑先生があーだ

こーだと話し合っている内に指輪からクリスタルが現れ、指輪が割れてしまうという謎の現象が起こる始末。

実はそれはISコアであり、調べてみればなんと新たなコアだったという。壊れてしまった以上は仕方ないということで急遽打鉄の予備パーツで機体を組みあげて俺の専用機とした。実はそうしたのは理由があり、織斑先生や山田先生、そして自称生徒会長あの怪しい女に国家代表も呼び出して触れさせたのに反応しないと言う謎現象が起こったのである。当初は機体の調子が悪いのではという話があつたが、組み替えて見ても同様の現象が起き、また、既存のコアを抜いてそのコアを入れても同じ。ただ、何故か俺だけは普通に使用できるので俺はデータ収集のために専用機を持つことになったのである。まさしく専用機持ちならぬ専用コア持ちとなり、いつ暴走しても対処できるように、織斑先生と一緒に暮らすようになったわけだ。

「まあ、こうした方が楽に見つけることができますからね」

「……何をだ？」

「女尊男卑の女ですよ。僕らが一緒に住んでいることがわかれば、アイツらのことですから全面的に僕を責めるでしょう？ その時に問答無用でどこかを潰せば裏に誰がいるか遠慮なく話すはずですし、攻撃をしてきたら誰が上かを叩き込めばいいんですから」

今からそれができると思うとワクワクしてくる。

「……………襲撃した奴らだがな、全員が入院を余儀なくされた。中には杖が必要な奴までいたそうだが?」

「何も思いませんよ。文句なら僕ではなく、馬鹿な政策をしたアホ役員や屑豚共に言ってもらいたいですね」

「そうだ。オルコットも女尊男卑なんだからさっさと退場してもらおう。いつ潰そうかな。」

「……………舞崎、これ以上はもう止める。向こうが喧嘩を売ってきてても酷い怪我を負わすな」「何故です?」

「そんなことをしたところで無駄だからだ」

「無駄じゃありませんよ。僕の気が少しだけ晴れます」

「そうじゃなければ暴力なんかもしないのに。」

「大体、最初からクラスメイトもオルコットも、そしてあなたも気に入らないんですよ。大して実力がない雑魚に素人に喧嘩を平然と売るアホ。とどめにすべての言動に注意を入れない蛆虫。こんなの、僕じゃなくても普通に怒りますけど。大体、統計から考えて500人以下しか男より強くなれない機体が使えるからって何が凄いですかね?」

「……………舞崎」

「それに兵器を使つて女が男より強いって言うなら、戦闘機に爆弾詰めて投下したら普通に男でも女に勝てることを証明できますね。それとも実際に男が女に勝てる証明をこの学園でしましょうか？　むしろそっちの方が良いかもしれませんね」

そう言ううと織斑先生は俺を可哀想なものを見る目で見てきた。

「……………言いたいことはわかりますよ。でもね、こつちは大切なものも果たしたかつたことも奪われたんですよ！　俺にはあるんです、ここにいる全員を、女を選別し、女尊男卑を根絶する権利がね！」

クロエのように、そして篠ノ之のようにそんな思考を持たない女だっていることは理解している。けど、それが誰だかわからない。ならわかつている奴いはいはすべてを黒として消した方が良くに決まっている。

「……………言いたいことはわかった。だが、そんなことはしないでくれ」

「今は、ですが。向こうが余計なことをしてきたらその時は容赦なく潰します」

そう言った僕は、さつきから気になっていた白い布を取つ払つた。

「……………おい」

「何だ？」

「この山は、何だろな？」

そう尋ねると、織斑先生は顔を逸らす。

「さあな」

「……………じゃあ、この下着を火種にして——」

「ちよつと待て！」

素早い動きで俺から下着を奪った織斑先生。俺はその隙に部屋のチェックを始めた。

「……………織斑千冬」

「先生と呼べ」

「うるせえよ喪女。こんな墮落したもんでよく生きていけるな。スタイルが良くてもこれじゃあ嫁の貰い手なんてなくなるわ」

ちよつどアラームが鳴る。その発音音は織斑先生からだった。

「時間か。私は授業に出る。舞崎は大人しくしているよ」

「……………そうだな。こんな汚物の集合体なんて相手にしている暇はないし」

「……………それは言い過ぎだと思っぞぞ？」

まったくもって言い過ぎじゃないんだな、これが。

「ほら行け。さつさと失せろ。あ、先に鍵」

「……………性格が変わりすぎじゃないのか？」

「気にするな。俺は気にしない」

俺に鍵を渡して部屋を出て行く織斑先生。俺は早速掃除を始めた。

「……………何だ、これは」

「そう言えば言ってなかったな。俺は中学から一人暮らしをしていたから必然的に家事スキルはそれなりに高いと自負している」

風呂から出た後、帰ってきた織斑先生が部屋の状況を見て啞然としている。なにせ、集会や仕事がなかった時はいつもゲームか家事をしていたからな。これくらいのこと
は朝飯前だ。

「それと、これはスーツのクリーニング代だ」

「ちよつと待て。代えのスーツは残っているのか!？」

「全部出した。……………って嘘だからそんな悲壮感漂う顔をするな。ちゃんと比較的状态
が良い奴は残している」

そう言うのとホツとする織斑先生。

しかしさつきまでの部屋と打って変わって綺麗すぎる。流石は俺だな……………と思う

ほどに部屋の一角だけでなく、部屋全体が汚かった。特に風呂場なんて赤カビだらけだったからな。

「ちなみにビールは全部捨てたから」

「なんだと!？」

「……冗談だ。だが、ある程度は位置を移動させている。そろそろ料理をしておかないと俺の勘も鈍るだろうしな。……大体、何で料理器具が一つもないんだよ。本当は男じゃないのかと思いい始めているんだが」

「ちゃんとした女だ。下着もスーツも女ものだろう」

「……そうだな。アンタの下着を見ても全然そう言った感情は芽生えなかつたけどな」

そう言うのと何故かショックを受けた織斑先生。いや、当たり前だろ。

「……………まったく。何をどうすればこんな奴が生まれるんだ。僕には理解できない」

「そうは言うがな、私はこれでも忙しかったんだぞ?」

「下着を適当にタンスに放り込んで、重要書類を床に落とすほどか?」

「……………事故だ」

「嘘はまともな物をつきましよう」

そう言うって俺はエプロンを着けて食事の用意をする。その間、織斑先生には重要書類と思われるものの書類の整理をしてもらっておく。

「できましたよ」

「食事ができたので盛り付けてから声をかける。」

「ほう。今日は唐揚げか」

「嫌いか？」

「いいや。いただきます」

唐揚げを一つ食べると、織斑先生は何故かショックを受けた顔をする。

「……………世の中の男子はみんなこうなのか？」

「何がですか？」

「一夏も…………織斑もそうだが、その友人も料理ができてな」

「別にそういうわけじゃありませんよ。僕は一人暮らしでしたから自然とこうした技ができるようになっただけです。あと、ここにいる時ぐらいいは肩肘張らなくても良いですよ。ここにいる時は世界的に有名な織斑千冬さんでも、ただのダメ女ですから。それとも、敢えて「千冬さん」と言った方が良いですか？」

すると何故か顔を赤くする織斑先生。もしかして、そう言われる経験がないとか？

「……………こんな光景を見られたら、間違いなく勘違いされるな」

「そうですか？」

「そうだ。傍から見たら今の私たちは夫婦にしか見えないぞ。特に舞崎は身長が高いか

らな。老け顔、と言うつもりはないがそう取られても仕方はないだろう」

「そう言われても正直困るんだけどな。」

「そもそも、俺は織斑先生とそういう関係を持つつもりはない。」

「下らないことを言う前に、さつさと食って風呂呂に入れ。というか何で寮監の部屋に風呂があるんだよ。アンタの弟が聞いたら泣くぞ」

「……………否定はしないな」

「さつさと食べ終わった俺は食器を片付けて勉強を始める。」

「そうだな。……………しかし少し早くないか？ もっとしつかりと噛め」

「ちやんと噛んでるっての。アンタは俺のオカンか。……………いや、あの女はそんなことを言わなかったな」

「そうなのか？ ……そう言えば舞崎の両親は——」

「俺を捨ててどっか行ったから興味ねえよ。考えてみれば奴らの自業自得だしな。心配もしちゃいない」

昔は世の中を、そして女尊男卑になった原因であるISを恨んでいた。でも今は違う。女尊男卑はISという力を持ったことで助長した女たちの思考であり、ISは悪くない。……………それどころか、今まで手を抜きすぎた。

どれくらい勉強をしていたんだろう。気が付けば夜10時を過ぎていた。喉を乾い

ていたから外の自販機に買いに行く。

織斑先生の姿はない。そういうえば、さつき書類を忘れたから校舎に戻るとか言つてたな。

鍵を閉めて廊下に出ると、消灯時間は過ぎているのにちらほらと外に出ている生徒がいた。俺の姿を見た何人が不思議そうに見てきたが全員無視して屋上に向かう。

(普通の学校なら、屋上は閉鎖されているって聞いてたけどそうでもないみたいだな)

そもそも、わざわざ寮の屋上に行く生徒もいないのだろう。俺は休憩も兼ねて夜風に当たつて星を見る。買ってきたコーラを飲んでみると、冷たい風がくすぐったく感じた。

「……………星が綺麗だ……………」

あの研究所も近くにそれほど建物がなかったこともあつて綺麗だったけど、IS学園も地図で見ればそれほどではないけど、体感からしてかなり本州とは距離がある。そのこともあつて綺麗だと思つた。

(……………クロエにも、見せたかつたな)

夜に屋上で愛を語り合う、か。そこまでの事は結局してないし、俺は彼女を連れて何をしたかつたんだろう。

(勢いで言つてたけど、後のことは考えてなかつた)

おそらく、学園の前で門前払いを食らっていたかもしれない。そして守衛をボコって無理やり侵入……いや、無理か。そもそも迎えに来ていた人員が車に乗るギリギリだったし。

まあでも――

――キンツ

咄嗟にトンファーを出して銃弾を防ぎ、左トンファーの持ち手を弄って右トンファーに接続。外部接続式のスコープを取り付けて、飛んできた銃弾から相手の位置を見る。

「――とりあえず、痛い目見とけよ」

光弾が飛んでいく。相手は銃が暴発して咄嗟に顔を逸らしたは良いけど手はそうではなかったので叫ぶ。

その声で人が集まって来たので、俺は部屋に戻った。

――例え、ここで「舞崎静流にやられた」と言われても、悪くても停学だろうから

第16話 切れた彼は制御が効かない

翌日。朝食を済まして歯を磨き終わった俺は制服に着替えて外に出る。織斑先生はさっさと言ってしまったので鍵は俺が閉めることになっている。

「あ、マッキーだ〜」

「しмайに俺のあだ名に「チョコレート」が増える気がしてならないんだけど」
「それは気のせいだよ〜」

寮監室から少し歩くと、見覚えがある女生徒がやってきた。

「今日から登校するの〜」

「まあな」

「……そんなに警戒しなくても、私は君に手を出さないよ?」

制服の下に仕込んでいるトンファーに気付いたらしい女。俺の中で警戒レベルを上げる。

「驚いた。見た目に反してよく気付いたな」

「とか言って、私たちに全然心を開かないくせに〜」

周りが驚く中、俺とその女生徒は教室に向かう。すると、前の入り口は誰かが防いで

いるので後ろから入ることにした。

「何格好つけてるんだ？ すげえ似合わないぞ」

「んなつ……!?!? なんてことを言うのよ、アンタは！」

どうやら織斑の知り合いらしい。俺は席に着いて机に突っ伏すと、暴力の音が聞こえた。そして前の方でいつもの出席簿の音が聞こえたけど、誰か余計なことをしたのだろうか？

「起きろ舞崎、HRだ」

「寝かせてくださいよ。朝は凄く弱いんです」

「……いつも5時起きだと聞いていたが？」

「昨日は寝れなかったんです」

そんな会話があつて、織斑たちはようやく俺の姿に気付いたらしい。その後少し騒ぎになったけど織斑先生の餌食になった人は自業自得だと思つた。

「——もう静流がいねえ!」

そんな声が廊下に響く。そこまで大げさなことか?

大体、こつちが眠いのには休み時間に妨害するなつて言うのに。篠ノ之のフォローが無ければ俺はおそらく織斑をボコつていただろう。

「ねえ、ちよつとアンタ」

「何?」

「あ、いや、ごめん」

だったら話しかけるなよ、チビ助……つて言つたら怒られるだろうから我慢しよ。向こうから喧嘩を売ってくる分には構わないが、こつちから喧嘩を売つたらややこしいことになるのは目に見えている。

適当な場所に座ると、入り口の方がうるさくなる。まったく、誰がうるさくしている……かなんてことは聞かなくていいか。いつもの奴らだし。

「なあ静流、いつ戻つて来たんだ?」

「待ちなさいよ一夏! そいつよりアタシを優先しなさいよ!」

何で許可なく僕がいる場所に座るかな。わけがわからないよ。

「……………」ところで織斑君、君はどうしてそう厄介事しか持つてこないんだい? 素人潰しの次は歩く警報機を連れて歩くなんて正気じゃないと思うけど?」

「警報機って、鈴はそういうんじゃないぞ。うるさいのは否定しないけど」

「否定しなさいよ！」

「リン？ 魔法使いってここにはいないでしょ？」

「……何の話だ？」

アニメを見過ぎて話が合わないってのは寂しいよね。

「そういえば、アンタって二人目よね？ 研究所に入ったって聞いたけど戻って来たんだ」

「元々1週間だけだったからね。ところで君は？」

「凰鈴音、中国代表候補生よ」

「へー」

適当に返事をして僕は昼食のペペロンチーノを食べた。

「アンタ、もしかしてアタシに興味ないとか言わないわよね？」

「代表候補生ってアホがなる役職でしょ？」

「待ちなさい！ それはさつきからわたくしのことを言っていますの！」

うるさいな。どうしてこう代表候補生ってうるさいのしかないのだから。

「君以外に一体誰がいるって言うんだい？ それとも何？ 自分は特別だから何を言っても大丈夫とか思ってたの？ だから日本を侮辱したんだ……弱いくせに」

「何ですって!？」

「たかが500機もない兵器を扱えるからって良い気になるなって言ってるんだよ。大體、ここにいる大半が生身で男に戦いを挑んだら9割が剥かれて犯されて終わりですよ。ああ、それが怖いから兵器を持ち歩いているんだっけ? 逆らったらズドン?」

怖いねえ、女って」

わざとらしく馬鹿にする口調で言う。オルコットの顔は怒りでみるみる赤くなった。「わたくしは……そんな人間では……ありませんわ……」

「はいはい。よく我慢できました。だから大人しく称号を受け取って座っていきましょうね」

渋々座るオルコット。俺は食事を再開すると何とも言えない顔で織斑とリンという女の視線に気付いた。

「アンタ、すつごく鬼畜よね」

「そう? 僕はまだまともだと思っただけ?」

「いや、性格変わりすぎだろ」

何故か引かれているけど、まあ元々こんな性格なんだがな。

「で、君は一体誰なの? まあ大して興味ないけどさ」

「凰鈴音よ。よろしくね」

「その呼び方だと中国？」

「そ、その代表候補生」

「へー」

一瞬、凰の眉がひくついたのを見た俺は内心笑った。

「で、そろそろ君たちの関係を教えてもらいたいんだけど。さつきから後ろの2人は気になってるみたいだし」

「ただの幼馴染だよ」

「こいつにとってはそうなんだということとはよくわかった。

「？ 何睨んでるんだ？」

「なんでもないわよ！」

「ところで、幼馴染と言えは……」

「確か、篠ノ之さんとも幼馴染だったよね？」

「ああ、箒が引越して行ったのが小4の終わり、鈴が転校してきたのが小5の頭なんだ」

「……それって幼馴染っていうのか怪しくないか？」

「で、中2の終わりに国に帰ったから、会うのは1年ちよつとぶりだな」

「へー。じゃあ、代表候補生になってまだ1年しか経ってないんだ。凄いね」

「? 何でそうだってわかるんだ?」

「そうじゃなかったら君は「代表候補生」って単語は知ってたはずだよな?」

すると凰さんは信じられないと言う顔をしていた。

「アンタ、馬鹿!?!」

「止めてあげなよ、凰さん。織斑君が馬鹿なのは今更なんだから」

織斑君は何かに刺された表情をする。

「じゃなかったら、後ろにいるオルコットさんにI S勝負での決闘を受けてハンデはいらないって言わないよ」

「し、仕方ないだろ! あの時、その……」

「まあそうなる僕も馬鹿だったよね。最初からI Sじゃなくて生身にして戦っておけば、今頃四肢のどこかを千切って障害者としての生活を送らせることができたのにさ」

「やっぱり静流、性格変わってる!?!」

だから元々こういう風だったの。

「ならば、その減らず口を今すぐ閉ざさせて——」

「いい加減にしておけ」

内心舌打ちをして現れた教員に目を向ける。

「どうしたんですか、織斑先生」

「なに。どこかの阿呆共が喧嘩を始めようとしているのが見えたからな」

「だつてさ、オルコットさん」

「どう考えてもあなたでしよう！」

「この場合、どちらも指す」

「酷いですよ織斑先生！ 僕がこの考えなしの女大好きクソビッチと同列だなんて！」

「上等ですわ！ 今すぐここから排除してあげます！」

「止めておけ、オルコット。ISならともかく生身じゃお前じゃ無理だ」

そんな言葉が織斑先生から飛び出したので、全員が固まった。

「わたくしはイギリスでちゃんとした訓練を受けています！ 一般の方に後れを取ることはありませんわ！」

「……………舞崎が一般という尺度に当てはまるなら、確かにオルコットの方が上かもしれないかな。だが校内で、まして食堂で人を殺させるわけにはいかん」

やだなあ、それじゃ僕がオルコットを殺すみたいじゃないか。

女尊男卑を駆逐する方法なんていくらでもある。その一つとして、女を精神崩壊させればいいんだから。

「オルコット。少しは考えてみる。今までの言動はどう見ても舞崎がお前を挑発するために行っていることだ」

「ですが、言って良いことと悪いことがありますわ!」

「まあ、確かにそうだよねえ。10年経ったのに未だにISは男のロマンすら成しえていないクソ兵器なんだし、女が男を見下すなんてクソワロスだよねえ?」

合体機構を作れつてのは言わないけど、せめて可変機体ぐらいは作っておけとは思
う。

「なん……ですって?!」

「だってそうじゃない。君つてとある筋から聞いたけど未だにビット兵器と自身を同時に扱えないんでしょ? それで男を見下すなんて筋違いというか、むしろ滑稽だね」
「だから止めろつて言ってるだろうが!!」

出席簿をトンファーを仕込んでいる袖で受け止める。

「……………そんな。わたくしですら見切れないその攻撃をあつさり」と

「そう? この人はどう見ても手を抜いているよ。どういいうつもりか知らないけどね」
「警告だ!」

ふーん。警告なんだ。

「仕方ない。今回は引いてあげるよ。僕のせつかくの食事に血が入ったら嫌だし」

「そうしておけ。ああ、それと私は今日遅くなるから先に寝ててくれて構わん」

「何言ってるの。こっちは最初からそのつもりだよ」

「……そうか」

少し残念そうにしながら食堂を出て行く織斑先生。俺も席に着くと、全員が信じられない風に俺を見た。

「なあ、今のつてどういうことだ？」

「オルコツトさんが僕に勝てない話？」

「千冬姉がお前に遅くなるつて伝言したことだよ!!」

何をそんなに慌ててるんだ？ ……ああ、そう言えば言つてなかつたな。

「別に。今僕は織斑先生と同居しているからだよ」

何でもない風に言つた俺はペペロンチーノを食べると、食堂に嵐が巻き起こつた。

「うるさいな。高がそれくらいで騒がないでよ」

「いや、異常だから！ 何でアンタと千冬さんが同居してんのよ!？」

「まあ、色々あるんだよ」

一応、専用コア持ちのことは伏せているようには言われている。言う必要性もないし、言つたところで余計な騒ぎが生まれるだけだろうしな。

「しかしそんなことを言つても良かったのか？ 舞崎にそんな気持ちはないとしても、騒ぎになるのは間違いないのでは……もしかして」

「ご名答だよ、篠ノ之さん。これから来るだろうねえ。サンドバッグたちが」

女子の噂が広がるのは早いだらうし、思い上がった奴らがこれからたくさん来るだらう。そうなれば狩るのは容易い。

「……なあ、静流」

「ん？ 何？」

「……千冬姉と暮らしているってことは、まさかそういうこぐべらぶあ!!」

おつといけない。反射的に織斑をぶつ飛ばしてしまった。でも仕方ない。だってこいつ不名誉なことを言ってきたんだから。反省も何も無い。

「いきなり何するんだよ!!」

「ごめん。つい気持ち悪い光景が浮かんでしまつて反射的に殴つた」

「気持ち悪いって……」

「安心しなよ。僕は教師に手を出すつもりはないし、手を出すなら同じタイプで言えば篠ノ之さんか、教員のくくりで言えば山田先生辺りが安泰だと思つているから」

本当は、クロエみたいなのが好きだから胸は控えめの方がいいかもしれないけど。

いや、あの子は別格なんだ。元々「仲良くしていますアピール」のために抱き着いてたけど、凄く抱き心地良かったし、着せ替え人形としても重宝していた。

「な、なあ……何を言っているか!？」

顔を赤くする篠ノ之。そう言えばこいつ耐性がなかったんだな。

「あくまで織斑先生と同系統の女っただけで例に挙げただけだ。他意はない」

「……それはそうだが、何もこんなところで言わなくても……」

「凰さんとはかくオルコットさんはどれだけ家柄が良くても本人が異常なのであり得ない。そもそも、男が嫌いだと言っている時点でよほどの物好きじゃないと血は続かないから、オルコット家は近い内に潰えるだろうね。もしくは下らない男と結婚するかぐらいかな。それとも、どこの馬の骨ともわからない男の精子を腹の中に入れる？ プライドが無駄に高い君の事だから無理だろうし、そんなことをすればどんな噂を立てられるのか想像に難くないだろうけど。ねえ、オルコットさん」

攻撃するのを我慢するオルコットを馬鹿にしつつ、俺は席を立った。

「じゃあ、僕は先に行かせてもらうよ。精々毒を吐けばいいんじゃない？ 他国を侮辱して不意打ちに対抗できなかった哀れな代表候補生さん」

そのまま食器を戻して俺は食堂を後にした。



「せ、セシリア……」

氣遣うように声をかける一夏にセシリアは「大丈夫ですわ」と告げる。

「ところで篠ノ之さん、確かあなたは入学前の舞崎さんをご存知でしたわね。あの人はいつもあんな感じでしたの？」

「……………少し、元に戻ったと思うがな……」

箒はそれだけ言って口をつぐむ。セシリアに静流のことを言うべきか否かで迷ったのである。

言った方が良いと思うが、同時に言ったことで静流のことでセシリアが同情してくれるかの保証がない。

「そんなことよりも、私はそろそろはつきりしておきたいのだがな」

そう言って箒は鈴音に視線を向ける。

「え？ アタシ？」

「そうだ。お前は一夏の何なのだ？」

「そうですわ！ 事と次第によつては唯ではすみませんわよ！」

（……意識が逸れてくれて良かった）

ホツとする筈。これでいいと、他に共有するべきではないと自分に言い聞かせる。それがセシリアを、そして静流を守る術なのだ。

すると筈の携帯電話から着信音が鳴った。

「すまない。少し席を外す」

そう断り、食堂から出た筈は通話ボタンをタッチして電話に出た。

「もしもし。……ああ、卒業式以来だな」

おそらく、筈を良く知る一夏や千冬が見れば驚くほど安堵を浮かべる筈。もつとも、他人から電話がかかってくることに一夏は既に驚きを露わにしていたが、セシリアも鈴音もそれには気づかなかつた。

「ちようど良かった。少し聞きたいことがあるのだが……そうだ。舞崎についてだ』
『もしかして、とうとう篠田さんは舞崎君との関係について考えるようになったの？』

少し楽しむように電話の相手は言う、筈はすぐに「違う」と否定する。

「あ、いや、すまない。そのだな……実は私が知る舞崎とは少し逸脱してしまつてな」

『……………それって、暴力的ですぐに喧嘩を売る感じ?』

「そうだ」

『……………それは中学初期の頃の舞崎君だよ。当時は凄く荒れててね。舞崎君に反抗する人を片つ端から潰してはずつと授業をサボってたの。元々荒れてた中学校だったから、教師たちも保身に走ってしまつてね。でも、その時はまだマシだったと思う。酷い時は授業中でも目を付けられた女子は犯されてたつて話だから』

「……………舞崎が大将だった時はそんなことはなかったのか?」

『うん。凄く平和だった。というか、舞崎君と喧嘩した人のほとんどが更生してたから』
それを聞いた箒はしばらくフリーズした。

「ちよつと待て。何故更生した?」

『なんか、車に轢かれて死にかけたらしいよ。いち早く舞崎君が助けたりしてたけど、その時に「あーあ、もう少しでゴミが消えてなくなつたのに」ってほとんどの人が言われてたつて』

思わず箒はセシリアの方を見た。

(まさか、オルコットにもそうするつもりか?)

可能性はなくはない。いや、むしろ高い。

箒はもう一度、あの時の事を思い出す。

「女尊男卑を狩る為」……か」

『……………それ、舞崎君が言ってたの?』

「あ、すまない。……………確かにそう言っていた」

『それで、篠田さんは止めるつもり?』

「……………そのつもりだ。私は、舞崎がこれ以上他の生徒に嫌われてほしくない」

箒も自身が周りと上手く行っていると言えるほどではない。だが彼女は静流のことをもつと見てもらいたいと思っているのだ。何故なら今この学園で唯一、静流の良いところを深くまで知っていて、自分しかできないと思っている。

『……………止めた方がよいよ』

「何故だ」

『確かに篠田さんは強い。でも、舞崎君はもつと強い。私、お姉ちゃんがいるんだけどね? お姉ちゃんにカツアゲされている時に助けてもらったことがあるの』

「……………どうなったんだ?」

『お姉ちゃんには私に二度としなくなつた。ううん。むしろ女権団から抜けて普通の生活を送ってるわ。お母さんもそう。舞崎君を貶めようとしたけど無理だった。私と言うクラスメイトがいたから手を抜いてくれたけど、聞いた話だと素手でバットを受け止めて握り潰したみたい』

——素手？

それをできる人間を知っている筈だが、だからこそ自分がしようとしていることが無謀ではないのかと思いはじめた。

第17話 ひたすらボコる放課後

「接近戦の訓練？」

「ああ。今度クラス対抗戦があるんだろ？ そのために俺と一度戦ってほしいんだよ。

セシリアはその……」

「……ああ。そう言えばオルコットさんって近接が全くできないんだっけ？」

俺の奇襲にすら対抗できないぐらいに。

近くでオルコットが俺を睨むけど、睨み返すと疎みあがった。よっわ。

「わかったよ。確かにデザート食べ放題というものは僕個人でも惹かれる物があるからね」

「ホントか!?! やった!」

予約がいっぱいだから利用させてもらうだけだ。

そんな会話があり、俺は同じ打鉄を装備している篠ノ之の姿を見ていた。

「……何だ？」

「いや。ただ本当に篠ノ之さんが現代人が疑わしくなってきたんだよ」

「それはどういう意味だ？」

「打鉄が似合いすぎてね」

まさかここまでだとは思わなかった。

「くつ……。まさかこんなにあつさりと訓練機の使用許可が下りるだなんて……」

「理由によつたら可能でしょ。聞いた話だと、3組や4組はもつと下りてるって話だけ
ど？」

「ふ、不公平ですわ！　というかあなたもここにいますの!？」

「オルコットさんが弱すぎるから」

激昂するオルコットを内心笑いながら、織斑の方に改めて向く。

「さてと。ところで織斑君の武装に銃はあるの？」

「いや、この《雪片式型》だけだ」

「…………織斑君、それ本気で言ってる？」

「本気だぞ」

俺は思わず頭を抱えた。あり得ない。いや、冗談じゃない。

「織斑君、ちよつとステータス見せて」

形的に仕方がないとはいえ、織斑に密着する。男に密着する趣味はないが仕方がな

い。

クロエに教えてもらった方法を使つて中身を見ると、ありえない事実を見た。

「拡張領域を全部使つて単一仕様能力に使つてるとか、この機体クソ仕様じゃん」

「いや、それは言い過ぎだろ」

「少なくともそれは僕なら使えるかもしれない代物だよ。とても君のように戦いに慣れていない人間に渡す機体じゃないってことは確かだ。これじゃあ、今度のクラス対抗戦は捨てた方がいい」

事実を言つたつもりだが、どうやらそれは織斑の琴線に触れたらしい。

「いくらなんでもそこまでじゃないだろ」

「だったら、僕と戦つてみる」

「……舞崎」

篠ノ之が心配そうに俺を見てくる。どうやら好きな人は殺されたくないようだ。

「いや、大丈夫。ちよつと軽く捻るだけだから」

「なら、良いんだがな」

ホツとする篠ノ之。彼女のおっぱいが少し揺れたように見えたのは気のせいではないだろう。

「言つたな！ 絶対にギャフンと言わせてやるぜ！」

「まあいいけどね」

俺たちは距離を取る。……つていうかオルコットは何も言つてこないんだな。

「行くぜ！」

先制をかける織斑。俺に近付いて唯一の武装《雪片式型》を横薙ぎするが、それを回避して股間を蹴った。

顔を青くする織斑を押し倒した俺は馬乗りになり、織斑の顔面をひたすら殴る。たまに振られる《雪片式型》を腕で払い、容赦なくシールドエネルギーがなくなるまでひたすら殴り続けた。

「いっつつ………」

「舞崎さん、いくらなんでもあんまりですわ……」

「そう？ 別にこれくらい普通でしょ。大体、今のは織斑君がどれだけ非力かを確認するためであつて、戦い方にどうこうケチつける時間じゃないでしょ」

それに大体、これくらいなら昔はよくしていた。

「そ、それはそうですが」

「大体、オルコットさんもそうだけど機体ポテンシャルすべてを引き出せていないから僕程度にも負けるんだよ。さて、織斑君。君の急所がどうなろうか知ったことじゃないけど、無事かい？」

「あ、ああ。まだ痛いけど。っていうか何であんなことをしたんだよ！」

「もう一回食らつとく?」

「いえなんでもありません」

そう言って逃げる織斑の気持ちはよくわかる。されたら凄く痛いから。

「大体、殴っただけで騒ぐなよ。本当ならメイスで殴ったりするのが良いんだから」

「いや、だからって急所蹴りは——」

「言い方を変えると、メイスで急所をフルボッコ」

「俺が悪かったよ」

顔を青くする織斑の気持ちは本当によくわかる。

「じゃあ、次は篠ノ之さん。やろうか」

「ああ。そうだな」

「お待ちなさい! 次はわたくしと織斑さんの番ですわ!」

「じゃあこういうのはどうか? 篠ノ之さんとオルコットさんのタッグと織斑君と俺の2対1対1で戦うのは。篠ノ之さんはISは初心者だろうからオルコットさんがフォロワー。織斑君は3つからの攻撃を回避する練習。僕は乱戦で戦える。それぞれにメリツトはあるよね? まあ、篠ノ之さんには無理を強いるけど」

「構わん。私を舐めるな」

「舐められるのは織斑君にだけ、だよね〜」

「貴様!!」

顔を赤くする篠ノ之。やだこの子、むつつりです。

「さて、適度にヘイトが溜まったところで始めようか」

こうして俺が主導権を握った八つ当たりが始まった。

「じゃあ、今日はこれでおしまい」

「あ、ありがとうございます………」

俺以外の全員が大の字の状態で倒れている。そんなに激しいことはしていないつもりなんだけどな。

「みんな、もつと鍛えようよ。いくら何でも疲れすぎだよ」

「……いや、静流が異常すぎるんだろ」

「そう? これくらい普通だよ。それに君のために弾幕が張ったからそんなに疲れてな

いだけ」

酷い時は複数に囲まれた時もあった。なんとかかそれも撃退したけど。

「じゃあ、僕は先に上がるよ」

そう言つてISなしでピットに昇つた俺は先に更衣室に入る。俺が着替え終わった（とうか上に着終つた？）時に2人が現れる。

「ちよつと待つてくれよ静流。一緒に帰ろ——」

「いーちか！」

どうやら俺はお邪魔虫だろうな。そう思つたので外に出ると、

（あーあ、わかりやすすぎ）

殺意が所々からあふれ出ている。おそらく俺を殺しに来たんだろう。俺も気を遣つて森の中に入る。

「……………ここなら良いだろ。出て来いよ雑魚共」

——カサツ…パシユツ

咄嗟に俺は腕部分を上げて回避する。

「かわした!？」

「見え見えなんでね」

トンファーを出して上に振ると少し移動して女が地面に落下した。

「この——」

もちろん、殴ることを忘れない。

女がのたうち回るので腕を折り、足を折ってその場に放置する。

「この悪魔！」

「俺の家族を奪ったお前らが言うことか？」

チエーンを飛ばして女を引っかけてこっちのフィールドに呼び込んでひたすらボコった。

「……………ふざけているのか、お前は」

「ふざけてねえよ。事実を書いたまでだ」

そう言つて俺は胸を張ると、織斑先生に怒鳴られた。

「……………なら、お前が書いたこれを読みあげてみる」

「……………はあ。「女尊男卑思考を持つ女は漏れなく生産性がないため、生かしても無駄なの

で即刻殺す方がいいと思います」だろ?」

「だろ? じゃないだろうがこの馬鹿が!!」

職員室だと言うのに大声で怒鳴る織斑先生。

「織斑先生、もう夜ですよ? 確かに発情する時間だと言っても限度がありますし、どつちかと俺は山田先生の方が好みです」

「誰が発情しているか!!」

「とりあえず落ち着け。話はそこからだ」

宥めたというのにかつてないほど睨んでくる織斑先生にため息を吐く。

「というか実際そうだろうが。女たちが男を見下し始めたことで出産率は今も低下し続けているんだし」

「私は今回の件は向こうに非があるから反省文だけで勘弁してやると言ったが、それに対する回答がこれか!!」

「向こうにしか非はないだろ。だって使ったのは実銃に鉄パイプだぜ? しかもこっちは撃たれているのに反省文を書かせるなんて酷すぎる。あ、でも流石に腕と足を折ったのは間違いだったか」

さつきから山田先生が驚いたり震えたり安堵しているが、たぶん次の言葉で逃げ出すに違いない。

「だって指を折っても固定すれば慰みものにできるが、折れてたら豚の餌行きだもんなあ」

「貴様には反省と言う文字はないのか?!

「だからちゃんと反省しているじゃないですか。世界がするべき反省はそちらに、俺がするべき対処の反省は今ここで言ったでしょ?」

すると織斑先生は頭を抱える。おそらくこれは心から呆れているのだろう。

「大体、こっちは殺されかけてんの。それなのに停学止まりとか意味がわからないんだが」

「普段の行いが良い生徒だからな。それに……いや、これは言う必要ないか」

あーどうせ圧力がかかったとかそういうことだろうな。どうでもいいが。

「ところでもう部屋に帰っていい?」

「……………ああ、もういい帰れ。ただし後でちゃんとした反省文を書くように」

「了解。織斑先生がモテる可能性が限りなく0に近い理由を書いておいてやるよ」

職員室から急いで外に出る。すると予想通りに織斑先生を慰める声や俺を罵る声が聞こえてきた。

まあ、あんまり興味ないし寮へ向かっていると、見覚えがあるツインテがエントランスで足を抱えて座っていた。

俺はあることを思いつき、エントランスにいる人に声をかけて画用紙とペンと紐を借りて「ご奉仕します。拾ってください」と書いて首にかけて、

「何をすんのよ!」

案の定叫ばれたので、少し下がる。

「いや、ちようどいいカモがいたから」

「だからってこんなことを……って何よこれ?!」

「今の君を見て思いついたんだ」

すると嵐は顔を赤くして俺に言ってくる。

「この変態! 恥を知らない!」

「何に? もしかして「ご奉仕」でエッチなことでも考えたの? 僕はメイド的なことを

考えたんだけど」

「サイッテー!!」

「え? 待つて? 僕が考えたのは一般的に貴族とかに仕えるガチな方のメイドだよ

?」

さらに顔を赤くする嵐。大体、俺がこんな子供みたいな奴に本気で惚れるか。女は胸じゃないが、クロエは雰囲気が大分で、時折見せる子どもっぽい仕草が可愛くて

……

「……………なんかムカついてきたな」

「それはこつちのセリフよ!」

「それで君はどうしてここにいたんだい?」

女に対する殺気を抑えて風に見ると、言いくそうにする風。これはトラブルの予感だな。

「まあいいや。じゃあ僕はこれで」

「待ちなさいよ——」

彼女の首に足を寸止めする。

「何?」

「……………その、話を聞いてもらいたくて」

「いいよ。どうせ織斑君と喧嘩をしたとかでしょ」

だってそんなの興味ないし。そもそも俺は織斑がどうなるうか知ったことじゃない。

「何でわかつたの!?!」

「だって彼が無神経だからね。どうせ「貧乳」とか「チビ」とか怒らせたんでしょ」

「それってアンタが思っていることよね?」

「僕に限だと「貧乳」とは言わない。「チツパイ」と言うんだ」

そう言えばクロエのは見たことなかったな。そもそも裸って最初ぐらいでその時も

まともに見てなかったから。

(やっぱり再起不能にすれば良かったな)

骨を折るのは生ぬるい。やるなら徹底的にだ。

「とりあえず話を聞いてよ」

「僕は君の保護者でもなんでもないからパス。不満があればカウンセラーにね」

そう言つて僕は反省文を書き上げるために自分の部屋に戻つた。

今、実は凄く後悔している。

粋がった女をボコつた日に練習したのが少し問題だったらしく、俺はさも当然と言わんばかりに織斑の練習に参加を義務付けられているのだ。一度「じゃあ僕はこれで」と言つて帰ろうとしたらオルコットに怒られた。理不尽である。

なので俺は、今日も同じ手法で帰ろうとしていた。

「じゃあ、僕はこれで」

アリーナ前で別れようと声をかけると、オルコットが俺に怒る。

「いい加減にしなさい！ あなたは一夏さんが負けてもいいと言うのですか!？」

「冷静に考えたら、勝つ確率が圧倒的に低いじゃないか。僕が白式を持っているなら名前が近いこともあつて少しはテンション上がつて可能性は上がるけど、織斑君だよ？」

「……それは暗に俺じゃ勝てないってことかよ」

「織斑君。冷静に考えてみよう。君ははつきり言つて雑魚だよ？」

「そこまで言わなくても良いだろ!？」

「じゃあ、僕と戦つた勝敗を言つてみなよ」

「……全戦全敗です」

はい、よくできました。

そう。何度か織斑と戦つたが奴は俺に1勝もできていない。しかも、どれも一方的に負けている。

「でしょ？ 訓練機の僕にすら負けているんだから、はつきり言つて勝ち目は薄い」

「グツ……でも、やってみなきゃわからないだろ!」

「私からも頼む。力を貸してもらえないだろうか」

「え?」

篠ノ之が俺にそう頼むと、織斑とオルコットが意外そうに篠ノ之を見た。

「何だ？」

「いや、まさか箒がそんな言い方で頼むって思わなかったから」

「頭を下げるなんて……」

「2人は勘違いしているようだが、舞崎は言動でかなり損をしているが本当に話せばわかってくれる奴だぞ？」

そう言ってくれることは素直に嬉しいな。でも、とりあえず気になったので俺は篠ノ之を連れてその場から離れた。

「今の頼み方は少し問題がある」

「そ、そうなのか？ 問題ないと思ったのだが……」

「うん。頭を下げたのは良いんだけどね。おっぱいの揺れが足りない」

「……………はい？」

篠ノ之が固まったが、とりあえず続ける。

「前にも言ったけど、男は胸が揺れただけで反応する変態だほとんど。もし織斑君がホモなら話は別になるし僕はアレを達磨にして放置しないといけないけど、見る限り少し意識はしているみたいだから、今後彼にお願いをしたら胸が少し開いて目立つ服にしたら興奮はするんじゃないかな？」

「そ、そうか？」

「それは絶対に間違いないはず。ホモならダメだけど」

そんな会話をして戻ろうとすると、既に2人はそこにいなかった。

篠ノ之が俺の腕を引っ張って中に入ると、ピットでは意外な顔がいた。

「ここは関係者以外立ち入り禁止ですわよ!」

「アタシは一夏の関係者よ。だから問題なしね」

大ありなんじゃないか。次の対戦相手でもあるんだし。

「で、一夏。反省した?」

「へ? 何が?」

「だ、か、ら! アタシを怒らせて申し訳なかったなーとか、仲直りしたいなーとか、あるでしょうが!」

「いや、そう言われても……大体鈴が避けてたんじゃねえか」

俺は篠ノ之の肩を叩いて理由をぎつと聞くと、どうやら嵐は以前、織斑に告白まがいのことをしていたらしい。まがいと云うのは、内容が「毎日酢豚を食べてくれる?」という告白をしたからだそうだ。そりやあまがいだろうな。

ただ、織斑はそれを「おごってくれる」と思っていたようだ。アホだろ。

「じゃあ何? 女の子が放っておいてって言ったら放っておくわけ!」

「おう 何か変か?」

「変かって……ああ、もうっ！」

少しばかり風に同情する。

「謝りなさいよ！」

だからと言つてこの発言はないだろ……。どれだけアタシ至上主義だ？

「だから、何でだよ!? 約束覚えてただろうが！」

「あつきれた。まだそんな寝言言つてんの!? 約束の意味が違うのよ、意味が！」

でもまあ、織斑にストレートに告白しない風にも原因はあるだろ。流石にそこは反省する必要がある。

そこから2人はヒートアップ。今度の試合で勝つたら負けた方になんでも1つ言うことを聞かせられるという賭けに出て、織斑が勝つたら説明を要求すると風は顔を赤くして答えを濁す。それをどう受け取ったのか、「止めるなら止めてもいい」と言つたので風が「謝る練習でもしておけ」と言い、お互いが「馬鹿」と、そして罵倒をはじめ、しまいには織斑は、

「うるさい、貧乳」

そう言つた。それは彼女にとって禁句だったはず——

——ドガアアッ!!!

何かが爆発したような音がし、ピット全体を揺らす。見ると風はISを右腕と肩部分

を展開していた。

「言ったわね……。言つてはならないことを、言ったわね！」

「い、いや、悪い。今のは俺が悪かった。すまん」

「今のは!?! 今のもよ!! いつだつてアンタが悪いのよ!」

そんな傍から聞いていたら頭が痛くなることを風は言つた。

「ちよつとは手加減してあげようかと思つたけど、どうやら死にたいらしいわね……。

いいわよ、希望通りにしてあげる。全力で叩きのめしてあげるわ!」

そう言つて風は出入り口の前に立つと吹き飛んだ——いや、俺が蹴り飛ばした。

「……………随分とふざけた行動に出てくれたな、豚女」

高がその程度のことにはISなんか使いやがつて。

「え、静流?」

「待て舞崎、今——」

俺は篠ノ之の制止を無視して飛び出し、風に踵落としを食らわせた。

相手が代表候補生と言うなら国が後ろにいるだろう。だがそれがどうした。

「な、何——」

何かを言おうとしている風を口を蹴つて黙らせ、左足で彼女を蹴り上げて頭上に浮いたところを右足で壁に叩きつけた。

「止めろ静流！ それ以上は鈴が！」

後ろの外野を気にせず、高が口喧嘩ごときでISを使った屑に制裁を加えていると、心配がしたので左腕を上げて受け止める。

「……篠ノ之か」

「悪いが、お前を止めさせてもらおう！」

そう言つて篠ノ之はどこに忍ばせていたのか、予備の木刀で俺に攻撃してくる。凰から視線を外してそれを回避し、俺も本気で篠ノ之に仕掛けた。

「しかし驚いたな。てつきりアンタは俺を見逃すと思つたが」

「確かに、お前がされたことには同情する。だが、だからと言つてあそこまでされて止めない奴などいないさ」

「OK、上等！」

篠ノ之の木刀を瞬時に弾く。左の方はあっさりと飛んで行つたが、右は保持か。流石は全国大会優勝者——だが俺の邪魔をするならかつての友人とはいえ潰すだけだ。

「止めろ！」

顎を砕きに行こうとしたところで乱入者だ。俺は少し距離を開けると間に白式を展開した織斑が入つて来た。

「いい加減にしろよ静流！ 何でこんなことをしたんだよ!？」

「篠ノ之はついで。凰に関しては自業自得だ」

「何で——」

「生身の奴に対してI Sを使ったからに決まってる」

「だからって攻撃してもいいのかよ!? それに鈴は女の子なんだぞ!」

「それがどうした?」

俺と織斑とじゃ考え方が根本的に違う。

I Sは兵器だ。だがその兵器は使い方によつては相手を生かすことはできるが、殺すこともできる。そんな奴を生かす必要なんてないのが俺の考え方だ。だが、織斑はフェミニストなんだろう。だからこそ、さつき異常な行動をした凰を庇う。

「どうしたって……」

「別にテメエを殴ったぐらいならテメエが悪いから傍観するつもりだったが、今回ばかりは話が別だ。奴が二度と動けなくなるまでボコる」

「ふざけるな! そんなことをしたら鈴が可哀想だろ!」

「……………可哀想? 何か勘違いしてねえか、お前」

俺は凰に鎖で引き寄せツイインテの片方を持つ。

「こいつは今ここでテメエの横にI Sで攻撃したんだ。そんな奴を生かして何になる? 今すぐ殺すか男の性処理道具として使うのが普通なんだよ! こいつはそれだけの

ことをした！ オルコットはまだそれをしていないからここまでしてねえだけだ。やった瞬間いつでもIS諸共操縦者を再起不能にするけどな！」

「でも俺たちは無事なんだぞ！ ならそこまで——」

「そうかい」

俺は凰を蹴り飛ばして壁に叩きつけ、出入り口の方に向かう。

「悪いが友達ごっこもこれまでだ。後は勝手にじゃれとけや、ゴミ共」

そう言ってピットを出た俺は部屋に戻った。

第18話 VS アンノウ

あの後、俺の所業が教員にばれてクラス対抗戦まで自室謹慎を食らうことになった。本来なら懲罰房に入るべきものらしいが、篠ノ之とオルコットの証言によつて「最初にISを使用した嵐にも問題がある」ということになったらしい。クラス対抗戦までなのは、全員提出のレポートがあるからだろう。中にはそれだけなのは温いだろうという声も上がったらしいけど、それはどうでもいいか。

「……………さて、終わりっ」と

課題をすべてこなした俺は、早速趣味の時間に入る。

元々ここに来たのは、ISの技術を知ることだ。そのため時間があればプログラムの勉強や整備の勉強もしている。それをしていた時に織斑先生には驚かれたが。だからアンタの弟とは違うんだっての。

勉強中、大体放課後になって少しした時間にドアがノックされた。

「——静流、話がある」

……………この声、織斑か。

昨日の今日で現れるとは、対抗戦も近いというのに暇なのだろうか？

俺はイラつきながらドアを開けると、そこには怒りを見せている織斑とオルコット。そして少しいるのが嫌そうな篠ノ之がいた。

「何の用だよ」

「昨日のことだよ」

「……ああ、あれね。まさかそんなことだでここまで文句を言いに来たのか？」

「悪いかよ」

「ああ。やつぱりアホだなと思う」

すると織斑が胸倉を掴んで来た。篠ノ之は驚いていたが俺を見てきたので織斑が掴めたことより織斑に掴まれた俺に驚いているのかもしれない。

「良いのか？」

「何が？」

「そうやって馬鹿みたいに俺を掴んでいて良いのかって聞いてんだよ」

「何を言ってる——」

俺は織斑の手首を握ると、急に織斑は苦しみだした。

「ぐわあああああッ!!」

「一夏さん！ あなた、今すぐ彼を離しなさい!!」

「無防備に腕を晒したこいつの自業自得だな」

「何を——」

織斑の腕を離すと、織斑はその場に崩れる。

「これに懲りたらとつと失せて、弱者同士傷を舐めあつておけ。所詮そんなことしかできななんだからな」

「な……何で、お前は女の子に暴力を振るえるんだよ」

唐突にそんな質問をされた俺は内心驚いていた。

「織斑、お前は入学する前に何かされたか？」

「………なにもされてねえよ。されたらそれこそ——」

——プツ

俺は思わず噴いた。ホントか？ あり得ねえ……こいつ。

「じゃあお前は、何も知らないくせにあんなクソ臭いセリフを吐いていたのかよ」

「何が！」

「俺の家族を守る」って奴だよ」

それを言うのと織斑の奴は顔を赤くした。

「………悪いかよ」

「ああ、頭が湧いているとしか思えねえな」

素に戻ってそう言ってやると、織斑は再び怒りを露わにした。

「俺は今まで千冬姉に守られて来たんだ！ だから——」

「日本語間違えてるぞ。今までじゃなくて今もだろ」

何言ってるんだ、こいつと思っっていることを伝えると、呆けた。

「何言ってるんだ……？」

「大体、最初から何もかも間違えてんだよ。そもそも疑問に思えや代表候補生。向こうはISを使用して、こつちはただ殴っただけだ。……って、わかってなさそうだから話を変えてやる。織斑、人を銃で撃つたらどうなる」

「……死ぬだろ」

「ISで人を撃つたら？」

「そりゃあ死——」

ようやく気付いたらしい。俺はため息を吐いた。

「こんな例え話をしなければ気付かないのかよ。……まあ、日和っていたらこんなもんか。俺もISのことを勉強する意味を深く考えていなかったし」

ただ、将来はISに匹敵する機動兵器を作りたいとしか考えていなかったからな。

「つまりそういうことだ。凰は人に向けてその兵器を撃つた。おそらく祖国に伝わって、場合によっては既に国に連れ戻されている……っってもういない」

「待ってください、一夏さん！」

織斑の後を追うオルコット。だが篠ノ之はまだ行かなかった。

「…お前も行かなくていいのか？」

「……………少し悲しくなってるな」

「……………とりあえず中に入れよ」

長話の予感がしたので、俺は篠ノ之を中に入れて水を用意し、彼女の前に出した。

「悪いな。部屋にある奴でスポーツマンに差し出しても問題ないものを出させてもらった」

「いや、いい。ありがたかったです」

篠ノ之は水を少し口に含んだ。

「しかし驚いた。お前の事だから、てつきり織斑と一緒に行くと思った」

「私だって物の分別はつけているつもりだ。…………それに、私は舞崎に謝らねばならんところがある」

「……………あつた、か？」

「昨日、私は攻撃しただろう？」

「いや、それはお互い様だ」

俺も潰そうとしたし。

「それでもだ。私は、完全には言わないがお前が悪くないと思う」

「……………そう言ってくれるのはありがたいが、良いのか？ 俺と話をしたらクラスでハブられるぞ」

ただでさえ、何があつたか知らんがコミユ障なんだから。

「確かに、今日は大変だったがな。嵐が怪我したことで登校しているかもしれないと2組がクラスに来たり、事の顛末を知った1組はヒートアップして、今すぐ舞崎を絞めようと動く者もいた。織斑先生が止めたが、間に合わなかつたらここに来ていたのかもしれないぞ」

「……………織斑先生が別の意味で犠牲になるな」

明日から下着が無くなるという意味で。

「……………私には、どうしてこうなったのかわからない。姉さんはどうして、ISなんか開発したんだろうな」

「いや、当初の目的は一般的だと思うぞ」

そう言つて俺は本棚から「IS誕生の秘話」という本を出して、最初の方のページを見せる。

「ほらここに、「私は宇宙に行きたいからISを作った」と本人は語っているが……………」つてな」

「だとしたら、何故あれほどの力が必要なんだ。既存の兵器を凌駕する力が……………」

拳を握る篠ノ之。冷静に考えてみると、篠ノ之みたいな女がアニメなんか見ないか。

俺はテレビとBD/DVDデッキの電源を入れる。チャンネルを合わせてアニメのDVDを入れて再生すると、ロボットが戦闘を繰り返すシーンに移った。

「何だこれは……」

「ISに兵器を超える威力の武器を搭載した理由だよ。俺は、2つの理由からISに武器を搭載したと思っている。1つはこういったデブリ……ようは宇宙のごみを除去するため。そしてもう1つは、いざという時のための護身用だ」

「……護身用？」

「そもそもISは宇宙用の機体だが、宇宙は本当に広がっていて何があるかわからない。もしかしたら、なんちゃら船団のようやスペースコロニーのように宇宙には既に人が住んでいる可能性もある。そいつらがもし友好的じゃなく、宇宙を荒らしている海賊や戦争大好きな国家ならどうする？ 大人しく捕まってひき肉になる？ それとも好きでもない奴らに体中をまさぐられる？」

想像したのか、篠ノ之は顔を引き攣らせた。

「そこまで篠ノ之の姉貴が考えたのかは別だが、パツと考えられるだけでもそれだけのことはあるんだ。あの兵装にも納得がいく」

まあ、それを考えたのは帰ってきてからなんだけどな。

「……舞崎、そこまで……」

「別にお前の姉貴を理解しようとしたわけじゃないが、可能性はなくもない。問題は性格とデモンストレーションをしなかったことだな」

そう言つて俺はノートパソコンを開いて某有名な動画サイトを開いて見せる。その映像は10年前に篠ノ之東がISを発表した時の様子が映し出されていた。

「科学者つてのは、成果と課程を見せられ、自分たちで証明することで初めて事象を理解する人間だ。だがこれじゃあ、ISが本当に通常兵器を凌駕する存在かどうかは理解できない。ましてや彼女は当時は確か15だろ？ そんなものは所詮子どもの戯言と捉えられてもおかしくはない」

「……………」

少し篠ノ之には理解できなかった？ そう思つて顔を見ると、何故か彼女は泣いていたのだ。

「篠ノ之？」

「すまない。ただ、今までここまで理解してくれる人がいなかったのにな」

これくらい、少し考えればわかると思うが……。

そう思っているとドアが開いた音がした。

「舞崎、課題の提出時間はとくに過ぎて……何だこれは」

「さあな」

それが俺の、心からの本音だった。

なんとか篠ノ之を泣き止ませ、俺の部屋にしばらく来ないように言って自室に戻らせる。

それからしばらくしてクラス対抗戦当日。俺は人目を避けて外で試合観戦ついでに寝ていると周りから殺意を飛ばされる。しかし、温い。もっと本気出せよ。

(そういうえば、結局あの後には言えなかつたな)

篠ノ之東は468個目からISコアを作成していないが、その理由はなんとなくだがわかつている。たぶんだが、おそらく今の世の中に嫌悪したのかもしれない。ISを兵器として見る今の世界に。

俺もISは兵器だと思っているが、元々は宇宙開発用のもの。操縦者のことを思つて自分の技術力をふんだんに使った結果が今のこれで女が助長し世界のバランスの崩壊

したことを悔いているなら開発しない説明はつくが。

(その本意は本人のみが知る、か)

まあ、そんなことを考えていても仕方がない。今はレポート用に試合観戦でもするか。すっげえつまんねえけど。

(やっぱり戦いは、自分がしてこそだよなあ)

他人の何を参考にすればいいのかわからない俺はそんな感想を抱く。織斑と凰が最初に戦っているが、結局對抗戦に間に合っているんだから文句言うなよ。叩きのめした骨は折ってないというのに。

(にしても、凰は凰で奇妙な兵器を使うな)

見えない砲弾は厄介だな。まあ、距離を詰めるかあのチビが動く挑発でもすれば行けるかもしれないが。

なんて思っていると、急に大きな音がしてIS学園が揺れた。

(なんなんだよ)

急に砂煙が舞い、俺はレジャーシートを盾にガードする。

収まったと思ったら、これまた敵ついのが現れた。

(全身装甲だがVアンテナはなし。量産タイプか？ 指揮官タイプの角はなさそうだが……)

ともあれ、何かが来たのは確かだ。周りから悲鳴が上がるが誰も対処しない。
(……だが、少し興味は湧いてきた)

どこの誰かわからないが、おそらくこういったイベント中に俺が将来有望の操縦者・
技術者候補をさらいにきたのだろう。すぐに救援が来る気配がない。

「ちよつと！ どうにかしなさいよ！」

近くにいる女が俺にそう命令してくる。

「テメエがしろよ」

「何だよ！ アンタは専用機を持つてるじゃない！」

「今は女が強いんじゃないのか？」

そう言うとその女は怒鳴って来た。

「良いからとつと行きなさい！」

「……………嫌なこつた」

「何ですって!?!」

「嫌だと言ったんだ。何で日頃から威張っているお前らが行かずに、降りかかってくる
火の粉を払っているだけの俺が行かなければならないんだ。立場をわきまえろよ。こ
ういう時に行かずにテメエらはいつ活躍する？ いつ役に立つ?」

「良いからさっさと行きなさいよ！ 私たちが死んでも良いの!?!」

「別に良いけど」

そう答えると、信じられないと言う顔をされた。

「ふざけないでよ……まだ私は生きれるのよ!？」

「それがどうした」

はつきり言つて、アンタが……いや、学園の生徒がどれだけ生きれるかなんてどうでもいい。それにそもそも——

「……まあいいや。その代わり死んでも俺は「自業自得」としか言わないからな」

集まつてきていた女を押し退け、打鉄を展開した。

「わざわざ待つてくれたな。もう攻めてきて良いぜ」

「何言つてんのよ! 私たちがまだ——」

騒がしい外野は放置して、俺は手を挙げて挑発した。しかし何故か動く気配がしない。

(……まさか、生徒を生かすつもりか?)

そつちの方が個人的にありがたいが、正直なところあのノロマ共を待つていたら時間がない。こつちから動いて誰もいない場所へと移動する。

すると所属不明機は俺の後を追つて移動をした。

(随分と律儀や奴だな。乗っている奴の顔を見てみたい)

そう思いながら俺は海の上に出る。ここなら不安なのは格納庫っぽいところだろうが、ISが壊されて困るのは俺ではなく女なので問題ない。それに、向こうも撃つて来た。

(良い出力だな。オルコットの機体よりも出力は上か)

前にした模擬戦のデータと今のビームのデータを比べる。俺の知り合いは「ビームコーティングされた盾を持たない時点で雑魚」とISを酷評しているが、未だにそれに匹敵する防衛兵装はないな。

(だからこそか……ますます解析しにくくなった)

俺は回避に徹しながら誘導する。火薬庫が近くなる、どこよりも安全な場所へとだ。

目の前の敵を撃墜するのは決定事項。だが、落とす場所を間違えたら解析できない。打鉄という低速機体のハンデを背負っている今の俺にとって、目下武装並びに機体の強化は必須なのだ。

(目標は、機体の損傷をできるだけ抑えての無効化か)

俺は思わず口角を上げる。今はなんとか回避しているが、相手の技量が高いのか回避できる部分が限られ始めている。おそらく誘導されていると考えるべきか。

(なら、これ)

俺は盾を展開し、ばら撒かれるビームを回避しつつブーメランのように投げた。ブーメランと違うのは戻ってくるのを考えていないが。

ともかく、相手のビームを途切れさせた俺は、相手の懐に飛び込んで大型ブレードを展開して振り抜いた。

「——え？」

そう、振り抜いた。どういふことかブレードは俺の予想を反して振り抜かれたのである。

本来ならあり得ないことだ。ISには絶対防御と言う物が存在しているので致命傷と判断された攻撃に当たれば発動してぶつかって戻ってくる。

相手の左脇から下はそのまま重力に逆らわずに落下する。俺はすぐに打鉄に嘖き出している物が何かを確認させると「オイル」と出た。

「……………そうか。最初から手加減する必要がなかったんだ」

だとしたら、さっきは何故攻撃しなかったんだ？ いや、今はいい。今は喜ぶんだ——人が残っていないかったことに。

(さあ、行くうか)

喜びを露わにし、俺はメイスを展開して頭部側面に攻撃を加える。ビームを放つて来た所属不明機。盾が破壊されたが、それでもまだ動ける。

「人形風情が!!」

跳ね返る力を利用して、俺はそのまま回転して胸部に叩きつける。すると機体の体勢が崩れ、チャンスとみた俺はそのまま叩きつけようとしたが残っている右腕で殴り飛ばされる。

「油断した……」

メイスを支えにして立ち上がると、所属不明機改め無人機は近接ブレードを展開して接近してくる。そして、振り下ろされたので俺はメイスで受け止めた。

「たぶんお前は強いんだろうな……でもな、残念ながら戦いに興じている時間がない」
メイスを離して俺はすぐにメイスを足場にして空中に舞う。ブレードでメイスを叩きつける形になった無人機の切断した腕の方に移動した俺はすぐさま右腕を突っ込んだ。

「見つけた」

固体掴んだ俺は無理やり元あった場所から引き抜くと、無人機から感じた機械の鼓動がダウンしていくのを感じた。

俺は無理やり突っ込んだことで壊れた腕から、予想通りの物ができてきて安堵する。

(……形が違うな)

教科書に「I S コアはそれぞれ形が違う」と書かれていたことを思い出しながらコア

を見てみると、すぐに自分がすべきことを思い出して機体を解析しようと手を伸ばすと、銃弾が飛んできた。警告が飛ばなかったのは俺がロックされなかったからだろう。

「……何のつもりだ？」

「今すぐその機体から離れなさい。機体は我々が回収するわ」

ISを装備した女が5人。打鉄が3機、ラファール・リヴァイヴが2機だ。しかし打鉄1機は見慣れない装備をしていて、大型ライフルが俺を狙っている。

「断る、と言ったら？」

「実力行使で止めさせてもらおうわ」

「……そうか。なら、やってみろよ」

すると何故かISを装備した女が全員驚いた。

「あなた正気？ 私たちは1年生の代表候補生や織斑君とは違うわよ？」

「どうせそこらにいる女と変わらない。それだけは確かだろうが。そもそも展開の早さからして、俺がこの機体を再起不能になるまで待ってた奴らが何勝手に所有権を主張してんだよ」

「……………随分とふざけているわね」

「…私に任せろ。黙らせる」

そう言ってブレードを展開した女が迫って来たので、俺はそいつの首を《チェインシ

ザーで掴んだ。

——さあ、第二ラウンドの始まりだ

第19話 食い違う意見、現れる魔物

『うおおおおおおおッ!!』

画面の外では再起動をさせて動かした自分の機体が放つビームに飛び込む一夏の姿が映し出される。

そして機体の中枢が破壊され、動かなくなったのを別のカメラで確認した女性は白式の稼働率を見て息を吐いた。

「まあ、今のいつくんならこれくらいが限界かなあ」

誰に言うわけでもない独り言が辺りに響く。そしてとあるディスプレイを見ると彼女が送り出したもう一つの方も同様に機能停止になっていたのを見て、その女性はもう1人に言った。

「あれれー? もう終わったのー?」

『すみません、束様。無理やりの方法で機能停止に追い込まれました。ですが、面白いことが起こっています』

「なにになにー?」

「束」と呼ばれた女性は空中投影型のキーボードを叩いて操作すると、もう1機の近く

で今まさに戦闘が起ころうとしていた。

「アツハハー。彼にとつちやとてもマズい状況じゃない」

『……私はそう思いませんが』

「どうして?」

『相手の機体はどれも訓練機。しかも状況的にマ……彼の物を横取りしようとしている。いくら敵が同じ学園関係者とはいえ、相手が女なので結果的に彼の敵意を煽っているだけに過ぎません』

「じゃあ、君の見解はもう1人が勝つと?」

『圧勝、で』

そう答えられ、束はもう1人を馬鹿にするように言う。

「いくら何でもそれはもう1人を過大評価しすぎでしょ」

『……では、見ていてください』

通信相手は自信満々にそう言う、先陣を切った打鉄の操縦者は捕まった。



捕まえた女の首に隣接しているであろうチェーンソーを稼働させる。それだけではなく、俺は頭頂部から地面に叩きつけた。

まるでカエルが潰れた声を上げるその女性。だが俺は続けて何度も叩きつけ、周りにも恐怖を植え付ける。10回ほど叩きつけた後は適当に開放して飛ばした。

「……………あなた、本気なの？」

「それは俺がアンタらの要求に答えないことか？ 残念ながら本気だ。当たり前だろう？ 俺はテメエらを信じてないんだから」

もつと言えば、かつての同好会員に「機体作りは自分でやれ」と言われたこともある。そりゃあ、プラモは自分で作れるがISは自分で作るのはかなり難しいだろと突っ込んだが、今はそのアドバイスが凄くありがたいし、何よりもそうすべきだと思ったんだ

が、言ったところで笑われるだけだし黙っていよう。

「これだから男は……」

「そう言つて男を見下した奴を、俺は何人病院送りにしたっけな」

「ふざけないで！ こつちはその機体を回収するように言われているのよ!!」

「あつそ。じゃあ、死ねよ」

そう言つて俺はメイスを展開して投げた。しかしそれは回避されてしまう。

「今すぐ包囲。鳥籠で迎げ——」

大型ライフルを持つ教員の銃を破壊。そして俺はラファール・リヴァイヴ使いを鎖で巻き、引き寄せて地面に落とす。

「この——」

「おっと、撃つていいのかねえ」

引き寄せたラファール・リヴァイヴの女を盾にする。

「卑怯だぞ!!」

ブレードを構えた打鉄の女がそう叫ぶ。俺はそれを聞いて口角を上げた。

「あーあ。まさかここまで女が馬鹿だとは思わなかった」

そう言つて持つている方のラファール・リヴァイヴの女を地面に叩きつけて後頭部にグレー・スケール《灰色の鱗殻》を当てて連射すると行動不能になった。これで障害持ちになったら万々

歳だろう。

「…………むづい」

「どうして…………どうしてそんなことができるのよ……………あり得ないわよ」

「そりゃあ、散々似たようなことをされたからな」

要は、意趣返しと言う奴だ。

「それに、こっちは複数を相手にしているだけじゃなく強くなるチャンスすら奪われそうになっているんだ。抗って当然だろ」

「何が強くなるチャンスよ！」

「そうよ！ 似たようなことをされたからって、やっていいわけないじゃない!!」

行動しない教員。すると、吹き飛んだはずの教員が俺の方に向かって飛んできた。

「死ね、ゴミが!!」

《チェインシザー》を再展開してタイミングを合わせて振り下ろす。咄嗟に判断してブレードを盾にしたままではよかったが、《チェインシザー》はレンチ型の打突兵器でもあつたのか、打鉄の操縦者は倒れた。

「……………男の……………風上におけ——」

まだ動けたので、もう一発お見舞いしておくのと動かなくなつた。機能停止になつてい

るから無事だろう。死んでくれても良かったんだけどな。

「待ってくれ」

ライフルを持っていた打鉄の教員は両手を上げて言った。

「この場は私たちが引く」

「何で!?!」

「どうしてよ。私たちが束になれば——」

「黙れ」

どうやら冷静な奴がいるらしい。全員問答無用で破壊………とやりたいところだが、ここは大人しく聞いてやろう。

「ここはこちらが引く。だからその代わりに、その2人を回収させてほしい」

「断る」

「待ってくれ。こちらは2人を回収したいだけだ」

「なにせアンタ以外が納得していないみたいだからな。それに俺は女と交渉する気はない」

信じられないと言わんばかりの顔をした。そう、その顔が見たかった。

「ふっぎけてんじやないわよ!!」

我慢できなかったのか、ラファール・リヴァイヴの女が突っ込んできた。俺はそいつ

を叩き潰そうとした瞬間、体を捻って俺の急所を狙って来る。

「悲鳴を上げなさい、このb——」

——グシャツ!!

即座に足元にいる女を踏みつける。するとそいつからもカエルを潰したような声が漏れた。

「隙あ——」

メイスを投げて残っている打鉄の操縦者も黙らせ、《チェインシザー》で怖いことをしてきた女の顔を潰しにかかる。

「待って……待ってくれ! いや、待ってください! もう降参します! その機能停止した機体も差し上げます! だから——」

「今更遅い」

《チェインシザー》で挟んだラファール・リヴァイヴを痛みで復帰した打鉄の操縦者を叩きつける。《焰備》で迎撃しようとしたようだが、同士討ちになった。

「止めろ……止めろ!!」

《焰備》で攻撃してくるが、打鉄とラファール・リヴァイヴを掴んだレンチを前にして突っ込む。だが隊長格である故に冷静だったのかそれを避けた。だけどこの行為までは理解できなかったようだ。

——無理やり、軌道を変えて叩きつけられることは

3機同時に地面に叩きつける。俺の打鉄の各所からも悲鳴が上がり始めるが、それでも構わず俺は2機を挟んで痛めつけつつ、最後の1機も叩きつけた続けた。



「……何だ、これは」

アリーナでの騒動が終わり、先行させた学園の部隊から通信がなかったこともあってその場を居合わせていた布仏虚に任せて捜索に出た千冬。どうして彼女が出なかった

と言うと、襲撃はアリーナ内でも起こったからである。

ほとんど同時にアリーナにも侵入したタイプの機体は一夏と鈴音、そして間に合ったセシリアによって倒され、その機体の回収が終わった後に外の生徒を避難し終え、戦っている静流の援護、その後に機体の回収を支持していたが、通信回線が開いた後にうめき声が聞こえたのですぐさま彼女が向かったわけだが、そこには悲惨な状況が作り出された。

——急行した教員チームが、倒れていると言う状況を

千冬はすぐに医療班を呼び出し、指定ポイントを送信すると近くにいるかもしれない静流を探す。戦闘を今も継続している様子はなく撃墜されたかと考えるが、

「……………生……………」

近くで倒れている教員の1人が体を起こした。

「しっかりしろ。何があった……………」

「……………男子……………機体を……………回収……………妨害……………」

それだけ眩くと、再び気を失う教員。

(ちよつと待て。まさかこれをアイツ1人が作り出したというのか……………)

今の言葉だけではわからないが、ともかく千冬は医療班が来るまでその場を待機。合流した後すぐに静流の搜索を始めた。

（広範囲に索敵しているというのに、何故見つからん）

千冬に支給された打鉄特式は、千冬の意見を取り入れて開発された機体だ。本人は戦っていることが性に合っていると自覚しているが、それでも有事の際の指揮を任されているため、通信機能と索敵機能が強化されている。

「……どいだ……どいにいる……」

無意識に呟く千冬。するとレーダーハイパーセンサーに表示されたレーダーに機体反応を確認した。

（距離からしてギリギリ敷地内といったところか）

IS学園の敷地は、ISが自在に飛び回ることを想定しているので、かなりの広さがある。確かに静流の考えた通り、時間はかなり稼げるだろう。

実際、千冬がその場にたどり着いた時には、静流はかなりの情報を抜いていた。

「見つけたぞ、舞崎」

しかし静流は千冬の声が届いていないのか無視し、作業に没頭している。

「舞崎。聞こえていないのか、舞崎！」

「……………うるさい。何の用？」

静流は千冬の視線を向けず、ひたすらデータを吸いつつ構造を観察していた。

「単刀直入に言う。その機体、そしてお前が吸い出したデータをすべて回収しに来た」

「……………ふーん」

そう答えるが、静流は吸出すのを止めない。

「理由を聞こうか」

「おそらく、その機体には未知のデータが組み込まれている。独立稼働もしくは遠隔操作、どの技術もまだどの国も開発されていない」

「へー」

興味なさげに返事をし、静流は「それだけ？」と聞いた。

「博識なお前なら既にわかっているだろう、私が言わんとしていることが」

「つまり、その技術を俺が持っているその後ろ盾の有無関係なく狙われるから捨てろって？」

「そうだ。これはお前を守るための——」

「——そんな簡単な嘘、まさか俺に通じるって本気で思ってたの？」

馬鹿にするような顔を見せた静流はパソコンを閉じた。

「嘘ではない。私は——」

「確かに守るためではあるだろうけど、同時に俺に君の弟以上に力を手に入れて欲しくないんだろ」

「何を言っている。そんなわけ——」

「だったら邪魔しないでよ。こいつは俺のものだ。俺が倒して手に入れた。例えアンタだろうと渡すつもりはない。これはチャンスなんだ。俺がもつと早く、そしてこの命のために死んでいった人たちに報いるため、そして俺を襲おうとする奴を潰すために力を入れるチャンスだ」

「だから自分を危険に晒すのか!? それは先程の言葉と矛盾している!」

「だから何?」

真顔でそう答えた静流は千冬を睨んだ。

「この世界で、今の状況で一体誰を信じられる? こんな殺意に溢れている学園で何を信じられるって言うんだ? 女なんて………気に入らない奴が現れたからって、本人や親族を簡単に殺せる奴らなんて信じられるわけねえ! 俺を気に入らない奴なんて、殺してでも被験体として手に入れたい奴なんていっぱいいる! 俺が女を潰す前からは! そんな奴らが蔓延っているこの学園でできることは限られている。だから俺は力を手に入れるんだ! 俺が俺であるために! こんな下らない兵器で歪んだ秩序をぶち壊すためにな!」

「そんなことをしたら、お前は——」

「とつくに狙われているんだ。だったら、10や20増えたところで大した手間じゃない」

——だつて全員、潰すんだから

この時、千冬は察した。目の前の存在は周りを壊すことでしか自己を確立することができないのだということ。それはまるで自分の親友——篠ノ之東そのものであることを知る千冬はなんとしても止めようと決意した瞬間、彼女の足は竦んだ。

——何故、女尊男卑思想を持った教員がクビになったのか

その実行者である存在が、現れた。現れてしまった。

1歩、また1歩とその存在が近付いてくる。そしてその存在が気配を見せた時、静流はすぐに後ろを向いた。

「……何で、こんなところに男が？」

「舞崎静流君、あまりわがままを言つてはいけませんよ？」

「アンタに何がわかる？」

——俺の気持ちなんて、誰にもわかるわけがない

その言葉に出そうとした瞬間、静流は空を飛んでいた。いや、飛ばされていたというのが正しいだろう。

気が付けば自分がISを使わずに飛んでいることに驚くが、反射的に腕をI O字型に組んで防ぐ。

「ほう、中々いい反応だ」

どうやって飛んだのか、静流と同じ高さに現れた初老の男性は静流を蹴った。何とか着地した静流。しかし、2度も食らった攻撃に倒れそうになる。

「舞崎！ もう良いでしょう、轡木さん！」

「……確かに、と言いたいところですが相手は「エアリアルオーガ」と言われた札付きの不良です。残念ながら、もう少し攻撃を加えた方が良いでしょう」

「……随分と、懐かしい名前を出してきたな」

エアリアルオーガ。それはかつての静流の二つ名である。

静流が暮らしていた地域は中学と高校が荒れていて、特に名が通った不良には必然的に二つ名が着いた。そして静流はI Sを使用できたことが判明する前から空を舞い、壁を使って空中戦を行っていたこともあってそう名付けられていた。

「大人しく、彼女の言うことに従いなさい。彼女の言うことは正しいですよ」

「ハッ！ お断りだ。大体、何で好き好んでこんなクソみたいな学校にいる男の言うことなんざ聞かなきゃいけねえんだよ」

「……それに関しては概ね同感ですよ」

予想外の言葉に驚く静流。そんな彼に構わず初老の男性は言葉を続けた。

「ここに居る教員も生徒も、本当に教育がなっていない。人殺しの兵器をスポーツと勘違いしておきながら、権力に溺れて平気で男性を扱き使う。本当に哀れとしか思えませ

ん。まあ、織斑先生や山田先生のようにまともな人もいることにはいますが、その他の生徒はほとんどがハズレです。どいつもこいつも、弱すぎる」

その言葉を吐いてすぐ、男性を中心に乱気流が起こった。

「ところで、舞崎静流君。あなたにはそれなりに期待していますが、私を楽しませてくれますか？」

「随分と言ってくれるな。テメエ、裏の人間か？」

「確かに裏に精通してはいますがね。ちゃんと表の役職に就いていますよ」

静流はすぐにその場から飛ぶと、地面が抉られる。

「良い反応です。流石はたった1日で3つの学校の長を潰した男だ」

「いや、それとこれとは関係ないだろ。アンタに比べたらあの3人は明らかに小物だ」

そう言つて今度は静流が仕掛ける——が、静流はすぐに察した。

——自分とこの男とは、かなりの差があると

先に仕掛けたのは静流。しかし男性が静流の懐に入つて素早く拳を叩き込んだ。

しかし攻撃はそれだけに留まらない。1発1発が重い連撃を食らわせていく。

「轡木さん、止めてください！ それ以上は舞崎が——」

だが轡木と呼ばれた男性は止まらない。そして最後の1発を溜め、放った。

それを諸に受けた静流は100mは飛び、動かなくなる。

「……………まだ、あなたはトラウマを克服できていないようですね」

轡木は千冬の手を見ている。彼女の手は震えており、また全身は蛇に睨まれた蛙のように動かない。

彼女がまだISで活躍する前のこと、千冬は噂を聞きつけて十蔵に戦いを挑んだことがある。そしてさっきの静流のように殴り飛ばされ、同じように動けなくなっただころか気絶した。

「しかし、どうやら彼は違う様だ」

千冬は何かに怯えるように後ろを振り向く。そこにはボロボロになりながらも立っている静流の姿があった。

「……………俺の目的……………その障害になるというなら……………お前を、殺す」

以前から、静流の体育の成績は周りから抜きん出ていた。男と女では体力に差が出るのは当然とはいえ、IS学園の生徒は運動神経が高い女が集まる場所。一夏は全体的に中間くらいだが、静流は全クラス含めてもトップである。特に、100mの記録が世界レベルの女子に匹敵する10秒66を出した時は千冬は驚いたほどである。

今、それすらも超えるほどの速さで轡木に接近した静流は飛び蹴りを放つが、轡木は難なく回避——したつもりだった。彼の服が破れ、血が出てくるまでは。

「……………まさか」

流石の轡木もこればかりは驚く。彼は戦闘のプロであり、今まで何度も死線を潜り抜けてきた猛者であり、何度も今の攻撃を近いところから回避し続けてきた男である。その男にかすらせることができた者など、彼が一端レベルになった頃にはいなくなっていたほどだ。

「さあ、続きを——」

そう思つて轡木が後ろを向くと、バランスを崩したのか転がり続ける静流の姿があった。ようやく止まつたかと思うと、全く動かなくなる。

「……………文字通り、最後の一撃だった、ということですか」

この時、男性——I S 学園理事長を務める轡木十蔵は心のどこかで確信していた。

——この男は、自分たちと同列になる、と

第20話 うごめく気配

学園の地下50mに位置する場所。そこは密かにランク付けされている教員でもレベル4級の権限を持つ関係者しか入れない隠された空間があった。機能停止した2機のI Sの解析が進められた。

静流から機体を回収した千冬は2時間経った今も、真耶に解析を任せて2つの映像を見ている。1つは一夏の戦闘映像。そしてもう1つは静流と無人機の映像だった。

静流の戦闘はアリーナ内じゃなかったこともあってか、映像は限られたものだけ。しかしそれだけでも千冬には静流の操縦技術、そして如何に勝負に慣れているのかが理解できた。そして十蔵の言葉によって明かされた「エアリアルオーガ」という二つ名。これだけでも千冬は自分の弟ではなく静流に白書を渡すべきだったと後悔している。そして同時に、一夏と静流の決定的な差を感じていた。どうしても埋められない差。それは——生き残る意思である。

『織斑先生』

インカムから真耶の声が響く。

「どうした?」

『あのI Sの解析結果が出ました』

「どうだった?」

『はい。どちらも無人機です』

映像で静流が腕を突っ込んだことでまさかとは思っていたが、やはりかと千冬は思う。

『ただ、だとしたら1つ問題が』

「何だ?」

『舞崎君が倒した無人機からコアが見つかりませんでした』

その言葉に千冬は目を開く。

「それは確かか?」

『はい。織斑君が倒した機体からは残骸が見つかりましたが、舞崎君の方からは破片すら見つかりませんでした』

I S コアはとて固く、人の握力で握り潰すことはほぼ不可能。それも握り潰すことに限定すればI Sすら難しいほどだ。一夏が破壊できたのも武器を使用したからである。

「わかった。ただちに聞き出す」

I S コアを複数持っているとなると、ますます世界から狙われることになる。1つは

もちろん、あわよくば両方手に入れようとする人間が現れてもおかしくないからだ。

「ああ、それと破壊されたコアはどうだった？」

『……それが、登録されていないコアでした』

——やはり、か

心当たりの顔を思い浮かばせながら、千冬は部屋を出ようとしたが、

『でも、良いんですか？ 彼のことについては用務員さんに任せるように言われていますか……』

「いや、あの人はコアの事は知らないからな。今後のために知らせておく必要がある。だが念のために山田先生は機体を回収した場所を探してくれ」

『わかりました』

考えてみれば、静流は運ばれる前に倒れてしまっていた。もしかしたらあそこの周辺に落ちているかもしれないと思った千冬は真耶にそう指示した。



目が覚めると、視界に知らない天井が映った。

俺はすぐさま体を起こして周りを見ると、カーテンで視界が限定されている。

「——あ、起きた？」

その声のすぐ後にカーテンが開かれた。俺は目をこすり、改めてカーテンを開けた女を見る。

そいつの身長はとても小さく、見た目はどう見ても中学生……下手すれば小学生とも取れる。

「誰だテメエは」

「あの祖父にやられてそこまで口を利けるのはいい傾向だけど、打撲が酷いから今は休んでなさい」

「祖父？　じゃあアンタはあのジジイの孫なのか？」

「そ。実年齢は今年で16」

「……………で、いい歳こいてお医者さんごっこか？ 生憎俺はそんな趣味に興じるつもりはないが」

医療食を食べさせられる趣味はない。そのつもりだったんだが、その女は何を考えたのか顔を赤くして捲し立てた。

「残念、これでも私、彼氏いるの」

「だとしたらそいつは随分と大変な頭の病気を抱えているようだな。よもやこのご時世で女と付き合うなど」

「……………あなたの友人だと思うけど。「桂木悠夜」って知ってるでしょう？」

……………あのド変態のクソ引きニートプラモ職人が。

しかし、この女も奇特な奴だ。まさかあの変態と恋愛関係に発展するとは思っても――

「おい待て。さつき今年で16って言つてたよな？ どうして高校生がこんなところで白衣を着ている？ 保健委員か？」

「そうね。まあ、私は天才だし、将来は工学系の免許と合わせて取るつもりだから医療技術の勉強も兼ねてここにたまにお邪魔しているのよ。免許はないけど、簡単な手当てぐらいならできるわ。それと、あまり動かないように。祖父の攻撃を受けて立ち上がった

だけじゃなく飛び蹴りを放つなんて正気じゃないわよ」

そう言われたが、そんなのできたんだから仕方ないだろ。

「にしても、あなたって意外と外傷ないよね。ドーピング？」

「失礼な。そんな金があるならもつと有意義なことに使う」

「そういえば、似たようなことをユウ君は言つてたわね。そんな金があつたらプラモデル代につき込むって」

あれと同じレベルで語られるとか、凄くダメーヅが来る。

「そんなことより、今は何時だ」

「もう17時よ。にしても凄いわね。機密扱いになつてるけど、あなた、侵入者を単機で撃破した上に教員を単独撃破したんだって？ 軍なら勲章モノじゃないかしら」

「そうか？ あれくらい誰だつてできるだろ」

「いや、訓練機でできる人つて織斑先生か山田先生くらいだと思うけど……」

「……山田先生が？」

あのどう見てもひ弱な女にそんな器用なことができるとは思えないがな。

「たぶん驚くと思うけど、山田先生は元代表候補生で、その時には「銃^{キリング・シュールド}央矛塵」つて呼ばれていたほどなんだから」

そうは驚くが、とてもあの教員が二つ名を持つ奴に見えないがな。

不良にとって二つ名というのは自信に繋がる名であり、強さの象徴でもある。もつとも俺は自分の二つ名を気に入ったことはないが。

……つと、こんな話をしている場合じゃなかったな。

俺はベッドから降りようとすると、ジジイの孫娘に抑えつけられた。

「ちよつと！ 今は体を休めないでダメよ！」

「んなことよりジジイを潰す方がよっほど大事だ」

「だから、そんなことをしたら今度こそ死ぬかもしれないのよ!？」

死か……。それはまだ早いな。

「……………仕方ない。向こうから来ないなら大人しくしておいてやる」

「…何でそんなに偉そうなの?」

それに関しては性格だから仕方ない。

とはいえ、あのジジイを野放しにする気は毛頭ない。いつか必ず、老衰で死ぬ前に殺……さずとも戦えなくはしてやる。

そう決意を固めたところで、ドアがノックされて返事も聞かずに入ってきました。

「失礼します。あ、静流。大丈夫なのか?」

「……………何しに来たんだ?」

「お見舞いだよ。まさか俺たちみたいに静流も襲われていたなんて思わなかった」

むしろ襲われる確率はお前よりも高いし、ここ数か月で何度も命の危険があったんだがな。

「し、失礼する」

篠ノ之、そしてオルコットと嵐も入って来た。

「聞きましたわ、舞崎さん。まさかあなたが他人を救うなんて思いませんでしたわ」

「そうよ。ホントクラスメイトに聞いた時はびっくりしたわ」

「……………そのクラスメイトに聞いてないのか？ 最初は戦うのを渋ったんだがな」

「「え……………」」

代表候補生2人が固まり、信じられないと言う顔をする。

「ちよ、渋ったってどういうことだよ?!」

「文字通り戦う気はなかった。まあ、メリットを見出したから戦ったが。大体、この世に

聖人なんてものは存在しない。それが真理だ」

そもそも、女を守る男なんて今では希少価値だぞ。織斑みたいな世間知らずか、守る対象が好きなのかのどちらかだ。ちなみにクロエがピンチだと察知したなら、まず諸悪の懇願を潰してバックを吐かせてせいも潰す。思い出すなあ。昔、麻薬を販売していた奴を絞めて、それを販売していた組織を警察に知らせたつけ。

「……………なんとなく、そんな気がしていたんだがな。だが守ったのだろうか？」

「結果的にはな。大体、その機体の情報を手に入れられると思つたからそうしたのに戦い損だ」

「何言つてのよ。それが力を持つ者の義務よ」

「そうですね。力を持っているのに弱者を救わないなんて信じられませんわ!」

「ホント、代表候補生つて脳内お花畑しかいないのかよ」

まあ、今まで命なんて狙われることなんてなかっただろうからそんな考えを持つているんだろうけど。

何か言いたそうな顔をしている代表候補生ズを睨むと、2人は震え始める。特に嵐なんて直接攻撃を食らっているからその震えはすさまじい。

「まあまあ、議論はそこまでにしてよ」

「……えつと、君は?」

「轡木朱音。8組の生徒よ」

「へー。俺は織斑一夏。よろしくな」

「ごめん。私、弱い人には興味ないの」

バツサリ切つたな。まあ、悠夜が彼氏なんだから当然と言えば当然か。

「……いずれ強くなつてみせるさ」

「あ、ISの強さは興味ないからね。大体、生身で強い人にしか興味ないし、ここで言う

とギリギリ篠ノ之さんぐらい?」

篠ノ之は剣道の全国大会で優勝しているからな。当然と言えば当然か。

「待ちなさいな! IS操縦は生身の強さにも通じるものが——」

「でも2人は単独で集団を壊滅させたことをないでしょ?」

それをしている奴って、かなり限られてくると思うんだが……?」

「そ……それはそうですが……」

「そういうアンタはしたことあるの?」

「ないよ? だから憧れるじゃない。たった1人で100人近いグループを壊滅させる程の実力を持つ人って」

それは祖父からか、それとも父からか。ともかく轡木はとても特殊なものが好物の様だ。

「……そろそろ帰っていいか?」

「あ、うん。あ、でもお祖父ちゃんが会いたいって言ってたからもう少し待ってて」

「え? おじいさんがここで働いているのか?」

男がいることに驚いているのだろう。織斑は質問すると、轡木は頷く。

「そんなことより、さつさと帰った方がいいんじゃないの? っていうか待つならもうひと眠りしたい」

「そうだな。では我々もこれで失礼する」

そう言つて篠ノ之に一体そんな力があるのかと聞きたいくらい、織斑を引つ張つて行つた。代表候補生の2人もそれに続き、

しばらくして入れ替わりでさっきのジジイが入ってくる。

「ご機嫌いかがですか、舞崎君」

「さつきウザい奴らが来たのと、そしてアンタで超最悪だ」

「そうですか？ 仲が良さそうでしたが」

「冗談だろ？ あんなお花畑と友人だとか、自らの首を絞める行為でしかない。それに、ここにはそんなつまらない話をしに来たわけではないだろう？」

「ええ」

邪悪な笑みを浮かべる。いつの間にか孫がいない。

「今回の報告ですが、まずあなたが所有していた口座に50万円を振り込みました」

「……………はい？」

今、凄い額が聞こえた気がするんだが……気のせいかな？

「50万です。一学生には余りある額かもしれませんが、振り込ませていただきました」

「何で!？」

思わず叫んでしまった。このジジイが言ったことは俺にとってとても信じられない

ことだったからだ。

「動機がどうあれ、あなたが他の生徒を助けたことに変わりありません。しかし、その後に教員を潰したのは問題視し、50万です」

「……それで、俺から吸い出したデータを買い取ろうってか？」

「いいえ。機体は回収させていただきましたが、データはそのままお使いください。残念ながら我々にあなたからデータを奪う方法はないので」

「なるほどな。確か、そのためにオルコットや凰のような最新の機体を持つ候補生がいるんだったか？」

「ええ。その通りです」

でもそれってそんな解釈で良かったのか？

少し不安になったが、今は黙っておこう。俺に有利に働いているのは確かだからな。

「ところで、あなたは今回の襲撃者は誰だか考えていますか？」

「篠ノ之束。もしかしたらアメリカ辺りが無人機開発に成功した可能性はあるかもしれないし、他にも天才がいるかもしれないが可能性としては70%は彼女だと思ってる」

「そうですか。なるほど、悠夜君に聞いた通りですね。喧嘩が強い上に頭も回る。今後もその調子で頑張ってください」

そう言つてジジイは立ち上がり、こちらに背を向けながら「お大事に」と言つて部屋を出る。

俺は近くにあつた携帯電話を取つて、ある番号に連絡した。しばらくのコール音の後に相手が電話に出る。

「お久しぶりです、武藤さん。少しお願いがあるのですが——

——手っ取り早く、命がけの戦いをして経験値が溜められる場所を紹介してくれませんか？」

とりあえず、目下するべきことは俺自身の戦闘力のアップ。そして最新技術を使った機体のレベルアップだ。



静流が自己のレベルアップを決意している頃、とある研究施設では本当ならあり得ないことが起こっていた。

『レイレイの言う通りだったよ。まっきーの戦闘力は高い。たぶん家に入ってもかなり
の位に着くんじゃないかな?』

「それは困るな。まあでもたぶんお嬢様が散々邪魔しちゃってるからおそらく好感度は信じられないくらい下がっちゃっていると思うから大丈夫かな」

本来なら別の人間が座る席にはまだ高校生くらいの男が座っている。その男は先程から自身の携帯電話で誰かと話している。

『でも、万が一ってことがあるよねー』

「それはないない。今はまだ大人しい方だけど、エアリアルオーガは邪魔されるのが一番嫌いだから。それに、いざとなったら僕が静流を消しちゃうしね。だって僕は、君はもちろん、簪に現当主様、そして虚お姉ちゃんをいただくつもりだから」

『わー、けだものー』

「君たちが魅力的なのが悪いんだよ。そして辛いなことに、僕にはそれをする力もある。近い内にI S学園に行くよ。そのための力も権力も手に入れたからね」

『楽しみにしてるよー』

「うん。じゃあね」

そう言つてその男は通話を終わらせて改めて自分の前に跪かされている女性を見下ろす。

「一体、これはどういうことよ!？」

「どういうことも何も、あなたが無能で、技研そのものが第三世代の技術がないから提供したらこうなっただけですよ。そうじゃなければ、高校生になっただけの僕に「所長」の座を奪われることも、こうして男は2人にそんな格好をされることもないのでは?」

その言葉に女性は歯軋りをして睨みつけるが、少年は全く動じない。それどころか抑えている男たちがその少年に恐怖をするほどだ。

「こんなこととして、ただで済むと思ってるの!？」

「これはこれは……随分と怖いことを言いますね。まあ、あなた程度の存在を消そうと思えば楽に消せるんですが」

嘲笑いながらそう言ったその少年を、どうにかしようと思える女性。

「彼女を離してあげなさい」

すると少年はそう言うのと、男たちは驚いた。

「構いませんよ。その方があなたたちも良いでしょう?」

男たちは渋々離す。女はすぐさま近くにあったガラスの灰皿をひったくって少年の頭を割ろうとした——が、

——ガシッ

少年は素早く女性の手を掴んで受け止める。

「な、何で……」

「あなたは性格はともかく技術屋。そんな人が武器にするにも端末は使わないと踏んでいました。まあもつとも、あなたの攻撃スピードは遅すぎて、これくらいなら他の鬼でも余裕で止められるどころか最悪の場合は全身骨折なんて洒落にもならないことをしますが。これでわかったでしょう? 女が男に身体能力で勝てない。勝てるとするなら、一般人相手に何かを習っている女が攻撃した時でしょう。大体、ISが出てから女性たちが優遇された時点で察してくださいよ」

次第に灰皿を握る力が弱まり、離してしまったのでそのまま落下するが少年がそれを受け止めた。

「僕はあなたの所業に怒っているんですよ。別に織斑一夏君の機体開発を受け入れるの

は研究所にとつてもプラスになるので構わないのですが、代表候補生の機体開発を凍結させたのはいささかやりすぎましたね」

「し、仕方ないじゃない！　だつて白式は難しい機体で、第二を使つても解析が進まなくて——」

「もう一度言いますが、それはあなたの方が無能だからでしょう？」

その言葉が刃へと変わり、女性に突き刺さる。

「そう、ここにいる人間はすべてが無能だ。だから僕のような子どもがいきなり所長になるんですよ？　ああ、僕が所長になったので、打鉄式式の凍結は解きます」

——だつて、不要でしょう？

少年が浮かべるその笑みはとても邪悪で、非難されていた研究者たちは口をつぐむ。

「僕は基本的に怒りませんが、今回ばかりは別です。よもやあのような雑魚を優先させてあのように可憐で美しい少女のチャンスを潰したあなたを許す気はない。とはいえ、僕の二つ名に「鬼」はあれど、僕自身はあまり鬼ではない。なのであなたにチャンスあげましょう」

「……チャンス、ですつて？」

「そうです。これを」

そう言つて少年は封筒を渡す。

女性はそれを受け取り、中を開けると辞令と書かれた紙が出てきた。

「ふざけないでよー」

すべてを呼んだ女性がそう叫び、紙を叩きつけた。

「ふざけてません。むしろ優遇していると言つて良いでしょう。本来なら淘汰されるべき遺伝子を処理されずに後の世に残せるのですから。それに、これはあなたが美しいからこそ提案したことです。まあもつとも、僕が恋い焦がれ、欲する彼女らとは天と地どころか大気圏ギリギリからマグマだまりぐらいまでの差はありますが。もつと言え、あなたの存在がミジンコ程度ならば彼女らはまさしく神と言つて差し支えない存在だ。ああ、それと僕のは不要ですよ。何故なら僕の性を慰めるべき女性は彼女らのみです。それが気に入らなければ出て行くか、そのどちらです」

事実上、それはクビだった。何故ならその紙には——職員の疲れを取るための処理道具になることを書かれていたからだ。

……ちなみにその紙をひっくり返し、尚且つ火で炙ると「クビ」という文字が出てくるだけでなく、實際渡したのはダミーであり、本当の辞令は巧妙に隠されている。

それに気付いた女性はその後少年を訴えようとしたが、少年の手の物によつて彼女が裏で行ったことが明るみに出てしまい、また少年の罪状は「なかつたこと」として消されたのである。——早坂零司の手によつて。

第2章 荒ぶる少女と秘める少女

第2-1話 ただ、自分を鍛えるために……

「舞崎、大丈夫か？」

部屋に帰ると、織斑先生が俺を見て尋ねてくる。

今、俺の目は腫れていて、頭に包帯が巻かれている。

「ああ。なんとか倒したが、むと……知り合いに「これ以上は戦うのを禁止」って言われて帰ってきた」

「お前が内閣府のSP育成部門に出入りしているのは知っている。あそこはそこまで無茶なことはしていないと聞いたが？」

「全員に喧嘩を売った。それだけだ」

それだけ言ううと俺は着替えを持って風呂に入る。身体を一通り洗って出ると、心配そうに織斑先生は俺を見ていた。

「気にするな。俺は気にしない」

「いや、だからと言ってこれは流石にやり過ぎだろう!? アイツらは一体何を考えている!？」

「俺が頼んだんだ。本気で殺しにかかってこいつてな」

頼んだ、というよりも喧嘩を売ったが。

しかし、改めて俺がいた世界がちっぽけだと思いきらされた。世の中には強い奴らがたくさんいる。それは認めざる得ない。……もつとも、認めてなかったのかと聞かれれば首を横に振るがな。

「本当に大丈夫なのか？ その、何か手伝いぐらいするぞ」

「……別に必要ねえよ。技術を取られて織斑の方に転用されても困るしな」

そう言うと言葉に詰まる織斑先生だが、俺は構わず寝ることにした。

IS学園の女は弱すぎて話にならない。それはすぐにわかった。

唯一耐えていたのはダリル・ケイシーと言う女だが、ルールをなんでもありに変えた瞬間に胸をこすらせたら周りが騒がしくなったのでそれを潰すことから始めた位である。

「何で本命の総合格闘部があんなに雑魚揃いなんだ……」
思わずそう呟いたほどだ。

総合格闘部は言うまでもなく打撃や絞め技などなんでもあり……なのだが、IS操縦者を育成する機関の生徒であるというのにほとんどが在籍していない。全部で15人程度だった。あまりにも少なすぎて笑えた。

次に剣道部に言つて、入部したい旨を伝えると竹刀を渡されて部一番の生徒と戦うことになった。制服でということだったので遠慮なく竹刀を持つと、何故か降参した。後から篠ノ之に聞くと、竹刀は20kgの重さの物だったらしく、持てない俺を見て笑おうと企んでいたようだ……が、俺は日頃から鍛えていたのでそれくらい余裕で振り回せるので軽く振り、拳匂竹刀で遊んでいたのを見て全員が肝を冷やしたらしい。それくらいで肝を冷やすなよ。俺が知る変態引きニートなんてな、近くにあつた鉄球で球速100kmを出したんだぞ。それに比べたら温い温い。それも含めて後から思い出したんだが、引きニートが完成間近のプラモを持ってきて作っていたのを見たいじめっ子が遊んで壊したらしい。持って来たのが悪いと言えばそれまでなんだが、奴にしてみればかなり大事なものだつたらしく、教卓で腕を折りかける寸前だったようだ。それに切れないじめっ子が轡木を誘拐。人質にして呼び出し、殴ろうと陸上部から拝借した鉄球を使い、罫を仕掛けた。ドアを開けたら飛んでくる仕組みの奴である。それをあの引きニ―

トは受け止めてプロ野球顔負けの綺麗なフォームで投球。IS技術のおかげで顔にぶつけられた奴の顔は元に戻ったが、100kmのスピードで食らったのが鉄球なので、当時は顔が陥没したそうさ。おそらく股間を殴られた忍者に苦無を投げられて後頭部に刺さっても死ななかつた男のように骨が丈夫だつたんだろう。

閑話休題

続いて訪れたのは柔道部。俺は柔道のルールを全く知らず、知っているのは例の投げ方ぐらいだ。まあ、何をしたのかと言うと案の定入部テストというのを受けた。IS学園は比較的体型が綺麗な奴がほとんどだが、強そうなオーラを放っていた……のだが、おそらく柔道のように払って倒すタイプの技には弱いと思つたのだろう……うん。そうだろうな。これも後から知つたんだが、大外刈りという技で倒そうとしたらしいのだが、逆に返してやると首を痛めたそうさ。そして敵討ちと言わんばかりに現れた女生徒に某推理マンガで見た一本背負いをする、つい離してしまい、壁に背中が叩きつけられたそうさ。

さらに空手部に行つて顔を殴つたら動かなくなり、陸上部に行つたら短距離、長距離どちらも勝利し、ついには運動部の全部活が出禁となつてしまった。まだテニス部とか向かつたら案の定出禁である。

それを伝えると武藤さんは引き笑いをしていたが、自分が育つた場所に連れて行つて

くれた。そこで10人いたが辛くも勝利を納めたのだが……

「……まさか、ここまでだとは思わなかった」

辛勝なのにそんなことを言われても、何の自慢にもならないと思う。

そして翌週、俺は武藤さんに怪しげな場所を紹介された。

「……………」は？」

「聞いたことぐらいはあるだろう。地下闘技場だ」

「………そんなところに高校生を連れて行っていいのでしょかね？」

「おそらくダメだろう。……だが、それはあくまで10年前の話だ。ところで君は格闘技は見るのか？」

「……………見ませんね。というか、見たことがありません」

ボクシングのリングのような場所を見ながら記憶を漁る。古い動画でならあるが、最近はおリンピック以外では全く見ない。

「女性優遇制度が出てからというものの、女性の強さを誇示させるためか喧嘩まがいのボクシングなどの放送は全面禁止となった。実際、ボクシングの試合会場も数が限られているし、それらは大抵女性が優先される。それに関してはよく言われるよ。政府はどうして男の自由を奪うようなことをしたのか、ってね」

まあ、ボクシングをしている女性ってあまりいないイメージがあるほどだしな。

「それ故に、地下闘技場が男性の憩いの場として提供され始めた、と」

「過激なものと、そうでないものが別になるようになってきたが、地下に潜ってからというものの過激じゃないの基準が武器を使うか使われないかになってしまったな」

観客席から中心の闘技場が見える。真ん中では怖そうな奴が弱い者いじめをしているようだ。

「やれ！ やれ！」

「雑魚を蹴散らしてしまえ！」

うわあ。流石は地下と言ったところか。

レフェリーが割って入り、試合が中断。そして判決で怖そうな顔をした男の勝利となった。

「なるほど。過激じゃない方はヤバいと思ったならレフェリーが止めるのか」

「ああ。殺しが発覚したら流石に問題なんだね」

「そうか。まあどちらにしても俺はもう1つの方にするよ」

俺がしたいのは命のやり取り。それでもしなければあのジジイを倒すことはまず不可能だろう。

「止めておいた方が良くない。もう1つの方では選手生命が容易に絶たれるのはよくあることだ。君がそんなことになったら——」

「そうでもしなければジジイに勝てねえ。そんなのは俺自身が許せねえよ」
「ジジイ……まさか、轡木十蔵に会ったのか？」

何故だから知らないけど、武藤さんは顔を青くする。

「だったら尚更止めておいた方が良くない。あの人は化け物だ」

「……………なら、その人に勝ったら俺が強者の証拠になるだろ」

そうなればもう、容易に俺に攻撃してくる奴なんていなくなる。さらに言えば俺はI
S操縦者だ。俺を恐れ、平伏す奴らが多くなる。そうなればもう……俺をどうこうし
うと考える奴らは出て来なくなる。そしたら……俺は真の意味で自由だ。

「だからこそ、こんなところで尻込みしているわけには行かないんだよ！ やるなら過
激の方だ！ そうじゃなければこんなところに来た意味はない！」

「……………随分と軽視してくれるじゃねえか」

思わず説得することに夢中になっていたらしい。俺は後ろを振り向くと、さっきの怖
い顔をした男が立っていた。

「おいガキ、さっきから随分と俺たちを舐めた発言してくれたな。そんなにテメエは強
いのか？」

よく見れば、周りは俺を睨んでいる。どうやらさっきの発言をよく思っていないよう
だ。

「そうだな。少なくとも、弱い者いじめして楽しんでるアンタよりかは」
「なにいい？」

「おい！ ……すまない。彼はまだあなたの實力を知らないんだ。だから大目に見てやってくれないか？」

武藤さんが慌てて謝るように言った。

「ほう。なら、ここで社会勉強をしていくのも一興だよなあ？」

「待ってくれ。彼は世界にとって重要人物だ。怪我をさせてもらっては困る」

「……………」

武藤さんの言葉を聞きながら、俺は考えていた。

俺にこのおっさんの實力があんなものじゃなかったとしたら？ ならば、少なくとも女共が弱すぎて鈍った身体を起すことはできるのでは？ 流星にあのジジイ程のオーラは感じられないが、それでも幾分かマシだろ。

そう考えた俺は挑発した。

「おっさん、強いのか？」

「当たり前だ。俺を誰だと思ってる？」

「雑魚」

「……………ほう？」

はい、単細胞。まあ、雑魚で単細胞の織斑よりかはマシか。

「すまない。彼は——」

「じゃあ、俺のリハビリの相手をしてよ」

「ちよつと待て！ 勝手なことを——ましてや相手はこの闘技場のチャンピオンでもあるんだぞ?! そんな人をいきなり相手をするなんて!?!」

「ここに連れて来たつてことは、遅かれ早かれこのおっさんと戦わせるつてことだろ。だつたら早い方が良い」

「……まあ、そうだが。確かに君は強いかもしれないが、だからと言って彼を……過激の方でも上位に食い入る強者といきなり戦う必要は——」

武藤さんはさらに顔を青くした。たぶん、俺が「良い獲物を見つけた」とでも言いだげに笑っているからだろうな。

服を着替えた俺は、オープンフィンガーグローブとヘッドギア、マウスピースを装着

してリングに上がる。

「待ったぞガキ。精々俺の攻撃に耐えるんだな」

「……………はいはい。期待しないで待つておくよ」

開始のゴングが鳴り、男は先にジヨブを打つて来た。それを回避したが今度はラツシュ。それも回避した俺は左手を上げて挑発した。

「もつと本気出せよ。止まって見えるぜ」

「そうかい。なら様子見はもう良いなア!!」

動きが早くなった。一気に距離を詰め、俺を殴つてくる。回避したつもりだったが、かすつてしまった。そしてその回数は次第に多くなる。

「どうした! 様子見ばっかしていると倒れちまうぞ!」

「なるほど。この場で戦つて勝利を納めるくらいには強いようだが、その程度か」

とか言いながら、結構合格ラインに届いていると思うがな。流石は男。学園の雑魚豚共と全然違う。

そのことに喜びを感じた俺は思わず笑みをこぼしてしまう。それをどうとつたのか、男は切れて殺意をむき出しにした。

「上等じゃねえか。だつたらテメエを殺してやらあ!!」

——へえ

俺はすぐに勝負をつけることにした。

まず男の股間を蹴り、その勢いのまま空中に飛ばす。

「俺を殺す……?」

次はロープ。伸縮性のあるそれに乗って、跳んだ。

「なら殺してみろよ」

空中で体を捻って蹴り飛ばす。

「生きてたらの……話だな!!」

マットに着地。10・00は軽いな。

「……あー、生きてる?」

返事はない。ただの屍のようだ。

しかし俺自身に驚いた。生身じゃほとんど負けたことがないからそれなりに強いと

思ってたけど、60kgはありそうな奴を場外に蹴り飛ばすとは。

レフェリーが男に触れると、大きく叫んだ。

「きゅ、救急車!!!」

この後、武藤さんに怒られたことは言うまでもない。

「まったく。君と言う人間は手加減を知らないのか！」

「いや、向こうが殺すつて言ったから……」

だから本気で相手して潰れただけなのに。

口を尖らせていると、武藤さんの電話が鳴った。

「もしもし。……そうか。わかった」

簡単に終わらせて電話を切る。一体何だったのだろうか？

「先程、さっきの人が意識を取り戻したそうだ」

「何だ。てつきり死んだかと思った」

思いつきり椅子と激突しているから無い話ではないだろう。

「少しは悪いと思わなかったのか？」

「全然。だけどもあ、それなりにには楽しめたし、リハビリにはなったかな」

………だけどもまだ足りない。あのジジイを倒して強さを証明しないと……。

「君はどうしてそこまで強さを求めるんだ？」

武藤さんがそんな質問をしてくる。俺は一度嘆息して口を開いた。

「これ以上、失いたくないからな。俺を倒すこと自体が無駄だとすれば、余計な血は流れないだろ」

ただしこの場合、敵は含む気ないがな。

しばらく黙った武藤さんだが、やがて昼飯時だと言うことで近くにあつた定食屋に入ることにした。五反田食堂つとところらしいが、武藤さんのお気に入りの店らしい。

中に入ると若い店員がいて、テーブル席に案内してくれた。

「注文は何にしますか？」

「私はカレイの煮つけで」

「……………じゃあこの、肉野菜ハチニ炒めデラックスと付属の白米を大盛りで」

「わ、わかりました……………」

店員は驚きながらも注文を取り、伝えに行く。

「良いのかい？ どう見てもボリユームがありそうだけど」

「別にこれくらい普通ですよ。色恋にうつつを抜かしているバカ女共じゃないんだし」

織斑先生と同居している利点の1つでは、たくさん食べても引かれないし怒られない点にある。食堂のおばちゃんはたくさん食うと嬉しがるが、何故か知らないが生徒や教員は切れるんだよな。食事くらいたくさん食べさせろよ。

「……………やっぱり、あそこでは苦労しているのかい？」

「そりゃあもう。雑魚はわめくしゴミはうるさいし。食事はたくさん食うなどのことを考えろだの、何度か寮の窓諸共海に叩き落としたい衝動に駆られましたよ」
「……………よく耐えてるね」

「その件だけで、勲章はいただきたいほどです」

我慢勲章なんてあれば、の話だが。

苦笑いする武藤さん。すると先に食事が運ばれてきた。

「カレイの煮つけです。もう一つの方はもう少し待つてね」

「わかりました」

女尊男卑になってから、店員でも相手が男なら見下す奴がいるというのに、ここはそうでもないようだ。……案外、外面が良いかもしれないだけとかかもしれないが。

「では先にいただきますとしよう」

「そうしてください。俺はもう一つの方が楽しみなので」

ボリユームがある食事が来るのを今か今かと楽しみにしていると、店の入り口が開いた。女の子が現れた。

「お母さん、お兄たち呼んで来たよ」

「そう？　じゃあ蘭は先に食べちゃって」

「はい」

そう言ってあらかじめ用意されていたらしい食事があるとところに女の子は座る。しかし何故か不機嫌の様だ。

暇だったこともあつて適当に眺めていると、女の子と目が合った。向こうが会釈してきたので、こちらでも軽く会釈すると……何故か殺気が飛ばされた。

「お待ちどうさま。注文の品を持ってきました」

そう言われて俺の前に肉が大量に入った皿とごはんが入った茶碗が置かれる。俺はその量に思わず目を輝かせた。

「あの男、どうやらあの量に挑戦するらしいぞ」

「食い終わったら我々の拳を思い知らせるか」

「蘭ちゃんとアイコンタクトを取った罪、贖わせてくれるわ」

「無様にげろを吐いてのたうちまわるといい」

おやおや、物騒な連中もいたもんだ。

気にせず俺はご飯を一口、そして肉と野菜を口に放り込む。かなり美味しくて噛みながら楽しんでいると、引き戸が開かれた。

「うげ」

「ん？」

……うん？

どこかで聞いたことがある声がした。

「何？ 何か問題でもあるの？ あるならお兄だけで外で食べても良いよ」

「聞いたか一夏。今の優しさにあふれた言葉。泣けてきちまうぜ」

……いち、か？

俺はゆっくりと首を回す。そこには、俺が見知った顔があった。

「し、静流!」

「!??! 織斑、どうしてここに?!」

!! 外出先で偶然出会ったが、せめて出会うのは篠ノ之の方が良かったと思うのは、彼女との付き合いが長いからだろう。そんなことをふと、思った。

第22話 まさしく絶対選択肢

どうしてこうなったのだろうか。

俺は何故か席を移動し、見ず知らずの子どもを含めて5人で食事をしている。場が重い空気で支配されているというのに、ただ一人織斑だけは平常運転だった。

「蘭さあ」

「は、はひっ?」

「着替えたの? どっかでかける予定?」

「あつ、いえ、これは、その、ですネ……」

……………何でこいつ、平然と話しかけるの。

もつと言え、俺より居心地が悪いのは武藤さんだろう。本人も「どうしてこうなった?」という顔をしている。

「ああ! デート?」

「違いますっ!」

こういうのは俺たちにとって相変わらずの風景だ。まるでわかった上でやっているのかと聞きたいぐらいだ。

「い、いめん」

「あ、いえ……。と、とにかく、違います」

「違うっつーか、むしろ兄としては違つてほしくもないんだがな。なにせお前そんな気合の入れたおしやれをするのは数か月に1回——」

すぐさま、女の子が兄と思しき人物の顔を掴んで握る。凄く痛そうな顔をしているが、あれくらいならそこまで痛くないだろうに、大げさだな。……………いや、よく見ると呼吸も止めているのか。高度な技だが、家族にすることではないだろう。さつきから何か会話をしているが、それが果たして呼吸を止めるほどの物か疑問だがな。

「仲良いな、お前ら」

「はあ!？」

どう見てもそれはないな。やっぱり織斑つて馬鹿だろ。

「食わねえんなら下げろぞガキ共!」

「く、食います食います」

現れたのは、大体60ぐらいの男性。筋肉がかなり発達しているようだが、実力はどれくらいか気になるな。

「……………ところで、2人は一体……」

兄貴の方が恐る恐ると言った感じで尋ねてくる。そう言えば、織斑に誘われて駄々こ

ねられるのが面倒だったから来たけど、自己紹介はまだだったな。

「俺は舞崎静流。2人目の男性IS操縦者だ。で、こっちは俺のボディガードをしている武藤。IS学園の外に出るから、一応着けてもらってるんだ」

「武藤だ。よろしく」

咄嗟に吐いた嘘に順応してくれる武藤さん。政府関係者がこんなところにいたら面倒になる可能性があるからだ。

「え？ ボディガード？」

「……って言っても、兄の友人で昔からの知り合いだったからな。遠くで見守るより話が合う人として近くにいた方が色々と便利なんだな」

驚く織斑たち。まあ、ラフな格好をしているからそうだとは気付かなかったんだろう。

「それで、君は？」

「俺は五反田弾。こっちは妹の蘭だ」

「よろしくお願いします」

礼儀正しく頭を下げる蘭ちゃん。

「……待てよ。2人目の男性IS操縦者ってことはIS学園に通っているのか!？」

「ああ。不本意ながらな」

「でもいいじゃねえか。周りは女ばかりで選り取り見取り。俺だったら留年してでも通い続けてえよ」

「……………まあ、考えは人それぞれだしな」

実際は、見えないところで女を潰しているって知ったら彼はどんな顔をするんだろうか。

「えつと、静流……………でいいか？」

「ああ」

「じゃあ、静流も知ってるのか。一夏のファースト幼馴染と再会したって言ってたけど」
「……………ああ。彼女ね。知っているよ。箒って変わった名前だけど、胸が大きくて背筋が伸びているから余計にスタイルがよく見える女だ」

かなり褒めたこともあって、織斑は信じられないと言わんばかりの目で俺を見た。

「何か？」

「いや、まさかそこまで箒のことを褒めるなんて思わなくて…………」

失礼な。俺だって褒める時は褒めるっての。

「そうそう、その箒と同じ部屋だったんだよ。まあ今は——」

「お、同じ部屋!?!」

何故か……………というのは野暮だな。取り乱した蘭ちゃんは立ち上がった。

「ど、どうした？ 落ち着け」

「そうだと落ち着け」

どうやらこの家では蘭ちゃんの方が弾よりも格が上のようだ。というか妹に睨まれただけで縮こまるなよ。

「い、一夏、さん？ 同じ部屋っていうのは、つまり、寝食を共に……？」

「まあ、そうなるかな。ああ、でもそれ先月までの話で、今は別々の部屋になってる。つて、そう言えば何で俺たち今も同じ部屋じゃないんだろうな」

「さあな。どうせ学園で揉めてるんだろ」

俺の場合は、いつコアがああの時の姿を展開して暴れ出すかわからないから未だに織斑先生と同じ部屋ってだけだが。

「い、一か月半以上同……居していたんですか!？」

「ん、そうなるな」

武藤さんがいつの間にか俺から距離を離している。騒ぎに巻き込まれたくないか、俺に遠慮したかどちらかだろうな。言っておくが、こいつの鈍感具合はもはや神の領域だぞ。

「……………お兄。後で話し合いますよ……………」

「お、俺、この後一夏と出かけるから……………ハハハ……………」

「では夜に」

何故話し合う必要があるのか？ まあ、家庭の事情かもしれないな。

「決めました。私、来年I S学園を受験します！」

さつき蘭ちゃんが立ち上がる時に椅子が落ちたが、何もなかった。しかし、今の蘭ちゃんの言葉に弾が立ち上がると何故かおたまが飛んできた。

「え？ 受験するって……何で？ 蘭の学校ってエスカレーター式で大学まで出れて、超ネームバリューのあるところだろ？」

そんなところを蹴ってI S学園を受験するとか頭大丈夫かと尋ねてみたい。

「大丈夫です。私の成績なら余裕です」

「I S学園は推薦無いぞ……」

何故それを男の弾が知っているのか聞いてみたくなった。

「お兄と違って、私は筆記で余裕です」

「いや、でも……な、なあ、2人共！ あそこって実技あるよな!」

「……あるな。I Sに触れて動かすっていうのが。まあ、早々にやられなければ筆記で良い点数を取っていたら合格できると思うがな」

「でもあれって、適性が無い奴はそこで落とされるって話だぞ」

俺の説明に珍しく織斑がフオーロした。すると蘭ちゃんは何故持っているのか聞き

たくなつたが我慢してポケットから出された物を見る。

「げえっ!？」

「……………適性Aか」

「問題は既に解決済みです」

「これは問題だな。一体どうやって彼女がそれを手に入れたのかわからないが。

「それって希望者が受けれる奴だっけ？ 確か政府がIS操縦者を募集する一環でやつ

てるっていう…………」

「はい。タダです」

近くで何か上機嫌で言っているじいさんは放置しておこう。さつきから武藤さんも何とも言えない顔をしているしな。

「で、ですので、一夏さんにはぜひ先輩として指導を…………」

「ああ、いいぜ。受かったらな」

安請け合いをする織斑に俺は呆れた。何も知らないんだな、こいつ。まあ、俺もあまり人のことは言えないが。

「お、おい蘭！ 何勝手に学校変えることを決めてんだよ！ まあ母さん!」

「あら、いいじゃない別に。一夏君、蘭のことよろしくね」

「あ、はい」

さっきの店員がそんなことを言った。……てつきり長女かと思つたが、まさか母親だとは。

「はい、じゃねえ！」

1人相撲をしている五反田弾。このままでは彼の行動は無駄に終わるな。

「ああもう、親父はいねえし！ いいのか、じーちゃん！」

「蘭が自分で決めたんだ。どうこう言う筋合いじゃねえわな」

「いやだつて——」

「何だ弾、お前文句あるのか？」

「……ないです」

……そろそろいいいか。

ちようど食べ終わつたし、俺は口を挟むことにした。

「もう諦めろ、五反田弾。所詮適性が高いだけの、最終的に男に回される家畜が入学するってだけのことだ」

途端に空気が固まつた。いや、凍つたと言うべきか。

小学校の頃は中学生を相手によく使つた挑発技をここで使うとは思わなかつたが、それも一興だろう。

「デメエ、今なんて言つた」

「ただのビッチが学園に入学する準備を進めたただけだって言ったんだ。文句あるか？」

「お、おい静流!?! そんなことを巖さんに言ったら殺されるぞ!?!」

「ああ。その心配はねえよ」

だって俺、強いし。

そんなことを思っていると、俺ら以外の最後の客が会計を頼んだ。気のせいか、俺に殺気を飛ばしていたように思うが……たぶん気のせいだろう。

「さて、ムードが程よく冷めたところで、アンタらの無能さを露見させてやろう」

「舞崎君」

「大丈夫。こういう手合いには慣れてるさ」

さっきまで離れていたはずの武藤さんが俺に対して警戒し、近づいてきていた。

「だがその前に」

俺は織斑を気絶させた。

「い、一夏さん!?!」

辛うじて食事の上に倒すということはなんとか回避した。

「さて、話を続けるが——」

「待ってください！ それよりも救急車を——」

「ただ気絶しただけだ。それともこいつが起きていた時に君がこいつに恋をしているこ

とを話しても良かったのか？」

そう言うのと五反田蘭は顔を赤くし始める。

「まあ、俺はそもそも織斑と恋愛し続けるのは難しいからさっさと諦めた方が良いと思うがな」

篠ノ之はともかく、適性がAだとしてもこいつとの恋愛は避けた方がいい。

「他人の恋路を邪魔する奴は馬に蹴られて死ぬばいいって言葉、ご存知ですか？」

「知ってるさ。まあ、邪魔したところで馬如きに後れを取るつもりはない。それよりもだ、お前は本当にISという兵器を学ぶ覚悟があるのか？」

「あります。私は優秀ですし——」

「では言い方を変えるか。じゃあお前は、ISを使って何がしたい？ ただそこで暮らしている人間を殺し続けるか？ それとも男をISという力で従わせたいか？」

「ひ、人を殺すって……そんなの、できるわけないじゃないですか!？ それにそんなことをする人なんて——」

「俺は何度か殺されかけているけどな」

その言葉に兄妹、そして後ろにいた母親は顔を青くした。

「まあ、驚くのは無理ない。俺も最初はそう思っていたが……女権団とはそういうものだ。だがもう、君はIS学園に行かざる得ないな」

「……どうしてですか。さっきまで止めておけって言ってたのに……」

「君のIS適性が「A」だからだ。学園でも数多くいるわけでもないその適性をなんとなく受けた試験で出したんだらう？ 実際、女や政府から女権団や代表候補生に勧誘されたこともあるだろう」

五反田蘭はゆっくりと頷いた。

「そもそも、簡易適性試験自体がそう言った有望な操縦者を集めやすくする目的があつて行っているものだ。君はもつと慎重になるべきだな。君のその行動で家族が不幸な目に向かっている。家族の幸せのために自分が茨の道を歩むか、自分のために家族を犠牲にするか、よく考えて決断しろ。日本政府は所詮庶民に苦難を強いるゴミなんだから」

「……その言い方はいささか不本意だがな。合っているから言い返せない」

合ってるんだ……。

まあ、ISを動かせると知った瞬間に殺そうとする連中を優遇した奴らだしな。

「そろそろ、武藤さんも正体を明かしたらどうだ？」

「え？ その人って……まさか政府関係者？」

五反田弾が立ち上がって妹の間に割って入る。

「ああそうだ。私は政府の関係者が少しばかり特殊な部署にいてね。今は主に男性IS

操縦者の護衛や女尊男卑を振りかざす女性でも酷い人の鎮圧を行っている」

「こういうものだ」と言つて名刺を差し出す武藤さん。俺にも改めて名刺をくれた。

「……「対有事特殊処理班」？」

「近々、アンチケースという名が着く予定だ。言うなれば、ISの出現に伴つて露見した女性の過度な行動を咎めることができる、日本政府の女尊否定派に組織された特別対処班だ。3年前から発足して、私もそこに在籍している。高間晴文、今は寝ている男もそこに所属していた」

「……あの男が所属していた？」

「ああ。あの男の仕事は君と言う異分子の監視並びに矯正だ。君の経歴上、組織には最適な存在とされてきたが性格が幾分行き過ぎていたのでその矯正のために派遣されていた。形的には解雇になっていたが、今でもあの男の席が残されている」

「……俺がその組織に相応しい？」

「イマイチ実感がわかない。だが、それで何で俺が矯正される必要があつた？ ……それに、」

「女性の鎮圧、ということはいざという時は武力行使も？」

「本当に最後の手段だがな。そこに所属している全員が一定のレベルの強さを——」

急に言葉を切る武藤さん。つまりそれつてそのの部署に行けば、俺はもつと強くなれ

る可能性があるってことか……。

「武藤さん、どうして地下闘技場という場所ではなく最初からその部署の一番強い奴を見繕ってくれなかつたんですか？」

「人数、少ないんだ」

「だとしても武藤さんがいますよね？ 何故です？ というかあの人のとの関係をばらしていいですか？」

その言葉が利いたのだろう。武藤さんはため息を吐いて言った。

「いくら君が強いと言っても、私の方がまだ上だと思っっているからだ」

「……………なるほど。だったら今すぐ表出る」

そう言うため息を吐く武藤さん。最初は様子見だが、それが終われば一気に仕留めてやる。

「この話が終わってからな。さて、五反田蘭さん。あなたは今、人生の分岐点に立っている。まずは宣言通りIS学園に入学する道。だがこれはISに関する基礎知識を習得する必要があり、適性があれば学力が低ければやる気がないとみなされてしまうだろう。場合によっては道中に誘拐されて解剖や強制的に子どもを残される——つまり、行為を強制される」

「……………そいつは随分と穏やかじゃねえな」

「ですが、可能性としてはなくはない話です」

「I Sの研究じゃ身寄りのない子供が次々と実験台にされているって話だ。男女構わずにな。もっともこれが今の女が選択した世の中だろうよ」

クロエが言っていた話の中には、VTシステムというものが存在している。それは今は各国で使用も研究も、言うなれば全面的に関わることを禁止されているって話だ。完全とは言わないがある程度の実現は果たしていたのだが、搭乗者が次々と死亡または障害を負っていくものらしい。

「次に、女権団に入って保護してもらおう方法。だが、あまりこれはお勧めしません」

「何故です？ 蘭は女なのですからむしろ好待遇かと……」

「雑魚だから」

「舞崎君、それじゃわからないだろう。確かに、考え方によってはその方法はありませんが、女権団に入った場合は男との恋愛は完全に禁止されています。娘さんのように男に対してもそう言った感情を抱けるのは肅清の対象になります。かつて私は肅清された女性を見たことはありませんが、とても口から語れるものではありませんでした」

当時のことを思い出したのか、顔を青くする武藤さん。よほど見るに堪えない光景でも見てしまったのか？

「それと女権団は時折、肅清の一環として彼を襲っています。その任務に駆り出された

場合、娘さんの命は保障されません」

「その小僧はそんなに強いのか？」

じいさんがそう尋ねてきたので答えようとしたが、武藤さんが先に言った。

「エアリアルオーガ、その言葉はご存知でしょうか？」

「知らん」

「……ちよつと待ってくれ。この人があの三鬼の内の一人なのか?！」

どうやら五反田弾は知っていたらしい。というか今はそんな呼ばれ方されているのか。

「そうだ。先程も一人、病院送りにしてきた」

「……嘘だろ」

「おい弾、一体どうしたつてんだ？」

「だから、この人は大分前から色々と伝説を築いている人だよ！ 不良でありながら不良を矯正し、女尊男卑を物ともせず女共を潰しまわっている！ しかもそれだけじゃない。俺が知っている話だと、この人は不良でありながら学力も高く、常に学校の上位の名を連ねている人で、彼に教えてもらえば難しい志望校を難なくこなした天才だ！」

「いや、俺よりも頭が良い奴なんてたくさんいるからな」

大体、中学生レベルの勉強なんて授業を聞いていただけでわかるし、わからなければ

教師に聞きに行けばいい。まあ、最初は驚かれたけどな。

「すっげえ。握手してくれ……いや、してください！」

「いや、それはマジで勘弁してくれ」

……まさか、そこまでテンションを上げられると……対応に困る。

「でも、ただの喧嘩屋でしょ？ それにその話はここ2年位は聞かなかつたし」

「参考までに言っておくと、最近では代表候補生をボコつたな。確か嵐なんとかつていう奴」

「「え………」」

まるで知り合いの反応をする兄妹。若く見える母親が尋ねてきた。

「それって、鈴ちゃんのことかしら？」

「たぶんな。身長が低くて、胸が無いツインテール」

そう説明すると、その場の空気が悪くなった。

その後、俺たちは店を出て空き地で戦い、ボコボコにされたがかなり有意義だったことは確かだと言うことは間違いない。

第23話 過密すぎるクラス

「やっぱりハツキ社製のがいいなあ」

「え？ そう？ ハツキのつてデザインだけって感じしない？」

「そのデザインが良いの！」

「私は性能的に見てミューレイのがいいかなあ。特にスムーズモデル」

「あー、あれねー。モノはいいけど、高いじゃん」

頭の中で今日行われるテストのことを考えていると、そんな会話が聞こえてきた。廊下にいる俺にそんな会話が聞こえてくるということは、どうやら奴らは廊下側の端で話をしているらしい。

（そういえば、今日からISスーツを申請できるんだったな）

俺には関係ないことなのでとつくに忘れていたが。

ちなみにISスーツは肌表面の微弱な電位差を検知することによって操縦者の動きをダイレクトに各部位へと伝達するスーツらしい。それを装備していたら小口径拳銃の銃弾程度ならば完全に受け止めることができるらしい。……その前に動きを合わせ掴めばいいだろうというのが俺の談だ。もっとも、いざって時のためにあの研究所で

作られたオーダーメイドのISスーツを着ているが。

教室の中に入ると、俺の前の席で女子が集まって密談していた。

「ねえ、聞いた？ あの話」

「聞いた聞いた」

「学年別トーナメントで優勝すれば、織斑君と付き合えるって話でしょ？」

……また変な噂が流れているみたいだな。

まったく、女というものは変な噂が好きなようだ。そして100%、本人に聞いていない。

内心ため息を吐きながら今日の放課後に行われるテストに備えようと椅子を引くと、揃って肩を震わせた。

「ま、舞崎!? いつからそこに……」

「さっきだよ。ここは俺の席だからいてもおかしくはないだろ」

聞かれたくないなら、別の場所で噂を流せよ。

「……まさか、さっきの話も——」

「もちろん、バツチリ」

そう言うといきなりつかみかかってきた。

「忘れなさい！ 今すぐ！」

「むしろどうでも良いがな。そんな下らない噂でも流しているんだったら、もつと有意義な会話でもしてろよ」

にしても全然怖くない。IS学園の女のレベルは低すぎて話にならないな。

しばらく教本とにらめっこしていると、クラスの空気が変わった。

「諸君、おはよう」

「お、おはようございますー!」

俺の同居人にして、1年1組の担任である織斑千冬が現れた。そう言えば、あの女と戦って前は負けたが、今はどうだろうか。元々使い慣れていないトンファーだったから、生身だと勝てるかどうか知っておきたいんだがな。

「今日からは本格的な実戦訓練を開始する。訓練機ではあるがISを使用しての授業になるので各人気を引き締めるように。それぞれのISスーツが届くまでは学校指定の物を使うので忘れるな。忘れた場合は学校指定の水着で訓練を受けてもらうが、それすらも忘れたら下着でももらうことになるので、晒し者にされたくなければ忘れるな」
まあ、忘れたら取りに帰るくらいはしてもらいたいものだ。下着姿で出て来られたら、間違いなく俺は警察に連絡する。

(……：そういえば、学校指定の水着や体操服って紺色スクール水着にブルマなんだよな) とある引きオタ変態ストーカーがそれを知れば、彼女に強要しそうだと思った。とい

うか、未だにあれに彼女がいるなんて信じられん。

「では山田先生、続きを」

「はい」

すると山田先生はどこか嬉しそうに……というか楽しそうな顔をして教壇に上がった。

「今日はなんと転校生を紹介します！ しかも2名です！」

俺は驚くよりも早く耳を塞いだ。窓ガラスがカタカタと音を立てていることから、おそらくみんな大声を出しているからだと推測できる。

（そもそも、何でクラス分けねえの？）

普通、同時期に転校生が来るなら別々に分けるはずだ。もしその転校生が専用機持ちならばなおのこと。特に1組は俺を含めて既に3人の専用機持ちが存在している。そろそろ他のクラスだって欲しいだろう。

叫び終わったのか、ドアが開かれて2人が入ってくる。その内の1人を見て俺は思わず立ち上がった。

「……どうした、舞崎」

「………いえ、何でもありません」

座りながらも、俺の思考はパニックになっていた。いや、ちょ、どういうことだ？

何でクロエがここにいる？　アイツは殺されたんじゃないのか？　と、そんな思考がグルグルと回る。

「シャルル・デュノアです。フランスから来ました。この国では不慣れなことも多いかと思いますが、みなさんよろしくお願いします」

簡潔な自己紹介が行われる。今はそんなことはどうでもいい。早くもう片方の自己紹介を――

「え？　男？」

……男？

わけがわからない。金髪はどう見ても女だろう。

「はい。こちらに僕と同じ境遇の方がいると聞いて本国より転入を――」

案の定と言うべきか、女子たちは騒ぎ始めた。

「男子！　3人目の男子！　しかもこのクラスに！」

「美形！　守ってあげたくなる系の！」

「地球に生まれて良かったー!!」

――ガンツ!!

思いつきり机を蹴り上げて空気を壊した。

「黙れ」

ん？ 今声が重ならなかったか？ と思つたら織斑先生も同じ風になっていた。

全く。高が男が来ただけで鬱陶しい。俺から見れば女だがな。後でズボン脱がすか。

「皆さんお静かに！ まだ自己紹介が終わつてませんから！」

今この状態において金髪はどうでもいい。問題はもう片方の方だ。

もし銀髪の名前が「クロエ」ならば抱き着く。あと授業をサボつてでも仔細を聞き出す。

「……………」

話せよ！ 黙るなよ！ とういかさつきとしろよ！

にしても、あの黒眼帯は映画に出てきそうだな。

「……………挨拶をしろ、ラウラ」

「はい、教官」

……………ラウ、ラ？ クロエじゃなくて？

「ここではそう呼ぶな。もう私は教官ではないし、ここではお前も一般生徒だ。私のこ

とは「先生」と呼べ」

「了解しました」

いや、待て。もしかしたら姓が「クロニクル」かもしれないな——

「ラウラ・ボーデヴィツヒだ」

最後の希望が潰えた瞬間だった。よし、頭を切り替えて勉強しよう。

教科書を持って続きを頭に叩き込んでいると、前方では乾いた音が響いたので教科書を下げる。

「私は認めない。貴様があの人の弟であるなど、認めるものか」

……クロエはそんなことは言わないから、これは確定だな。

内心ホツとしながら、俺は再び教科書を上上げる。前の方で変なやり取りがされているが関係なさそうだ。

その後、織斑先生からの指示が終わって俺たちは行動に出た。金髪？ 知らんな。

「遅いー！」

持つて来た教科書を読んでいると、前の方で織斑先生が叫んでいる。そして一発が鳴り響いているところを聞くに、織斑がまた余計なことを考えていたのかもしれない。

気にせず本を読み続けていると、後ろの方で音が響いた。さつきからオルコツトと

凰が騒いでいたので、それだろう。

「それと舞崎、今すぐ本を読むを止めろ」

「……………はいはい」

「はいは一度だ！」

「うーい」

怠いので適当に返事して、本をウエストポーチにしまおう。ちなみに午前中にぶつ通してIS訓練を行うので水分補給は各自自由に取っておけだそうだ。

「では、本日から格闘及び射撃を含む実戦訓練を開始する」

「はい！」

しっかし、大人数だな。これだけの数がいれば流石に練習相手にはなるだろう。

「まずは戦闘を实演してもらおう。ちょうど活力が溢れんばかりの十代女子もいることだしな。凰！ オルコット！」

「な、何故わたくしまで!？」

「専用機持ちはすぐに始められるからだ。いいから前に出ろ」

ぶつくさと文句を言いながら前に出る2人。だが、織斑先生が何か言ったことで突然やる気を出した。

「やはりここはイギリス代表候補生、わたくしセシリア・オルコットの出番ですわね！」

「まあ、実力の違いを見せるいい機会よね！ 専用機持ちの！」
どうせ織斑に関して耳打ちしたんだらうな。わかりやすい。

「それで、相手はどちらに？ わたくしは鈴さんとの勝負でも構いませんが」
「ふふん。それはこつちのセリフ。返り討ちよ」

「慌てるな馬鹿共。対戦相手は——」

すると上の方で何から風が切るような音がする。

俺はすぐに打鉄を展開して飛翔。飛んでくる奴の顔を掴んで止めた。

「あ、ありがとうございます！」

「何をしている。そんな体たらくだから生徒に舐められる」

「は、はい……」

本当にわかつているのか、この女は。

とはいえここでこれ以上話していても無駄なだけだ。

「さて、お前たち2人は山田先生と戦ってもらう」

「え？ あの、2対1で……？」

「いや、流石にそれは……」

「安心しろ。さっきのは少し計算外だったが、お前たちならすぐ負ける」

その挑発は効いたようで、2人はすぐさま戦闘態勢を取った。

「では、はじめ！」

号令を聞いた3人は飛翔する。俺はハイパーセンサーのみを展開して試合観戦をすることにした。

「手加減はしませんわ！」

「覚悟しなさい！」

「い、行きます！」

……とりあえず、山田先生が勝つことに賭けよう。機体スペックはブルー・ティアーズ、甲龍の方が上だが、ラファール・リヴァイヴの場合は――

「さて、今の中に……デユノア、山田先生が使用しているISの解説をしてみせろ」

「あ、はい。山田先生の使用されているISはデユノア社製『ラファール・リヴァイヴ』です。第二世代開発最高後期の機体でありながら、そのスペックは初期第三世代型にも劣らないもので、安定した性能と高い汎用性、豊富な後付武装が特徴の機体です。現在配備されている量産型ISの中では最後発の物でありながら世界第三位のシェアを持ち、七か国でライセンス生産、十二か国で正式採用されています。特筆すべきはその縦の簡易性で、それによって操縦者を選ばないことと多様性役割切り替えを両立しています」

言うなれば、俺が装備している打鉄とは違って一番手、遊撃、後詰めなど、装備に制

限がない。打鉄の場合は「撃鉄」という長距離狙撃パッケージが存在するが、実のところ単機での攻撃力は低すぎたりする。……よく俺は教員や所属不明機を潰せたな、と今更ながら知った時は驚いていた。

などと考えていると、第三世代機チームは山田先生に負けた。

「くっ、うう……。まさかこのわたくしが……」

「あ、アンタねえ……。何面白いように回避先読まれてんのよ……」

「り、鈴さんこそ！ 無駄にバカスカと衝撃砲を討つからいけないのですわ！」

「こっちのセリフよ！ 何ですぐにビットを出すのよ！ しかもエネルギー切れるの早いしー！」

「……………連携取れていない時点でどっちもどっちだろ」

わざと聞こえるように言っていると、どちらも俺を睨んでくる。

「舞崎の言う通りだな。舞崎、本来ならこの2人はどのように動くべきだったか指摘してみろ」

「まず、最初の時点で山田先生の機動パターンの解析。その後に凰を前衛、オルコットは狙撃を中心にビットを2基展開した後、狙撃とビットの連携で武装の破壊をメインとした牽制。その間に凰は手数で攻めて考える隙を与えさせないようにする。それで撃破できなければ単純な実力不足じゃないんですか？ 基本、俺のスタイルは相手の精神か

ら全身を折っていくものなのでよくわかりませんが」

山田先生が悲鳴を上げる。そんなことで悲鳴を上げなくてもって思うのは俺だけだろうか。

「まあ、最後の大口に見てやろう。さて、これで諸君にもIS学園教員の実力は理解できただろう。以後は敬意を持って接するように」

じゃあ、あの5人は俺以下ってことになるのか？ 大した連携を取らずに負けていたが。

「専用機持ちは織斑、オルコット、デュノア、ボーデヴィツヒ、舞崎、凰だな。専用機持ちを含めた8人のグループで実習を行う。各グループリーダーは専用機持ちが担当しろ。では分かれろ」

だと言うのに、女子は一直線に織斑とデュノアの方に移動した。

「織斑君、一緒に頑張ろう！」

「わかんないところ教えてく」

「デュノア君の操縦技術、見たいなあ」

「ね、ね、私も良いよね？ 同じグループに入れて！」

……………あいつらは自殺志願者か？ わざわざ暴力教師の前にそんな醜態をさらすなど、ただの無謀だ。

ただまあ、こればかりは暴力を振るったところで自業自得だろう。

「この馬鹿者共が……出席番号順に一人ずつ各グループに入れ！ 次にもたつくようなら今日はＩＳを背負ってグラウンドをひたすら走らせてやるからな！」
すぐさまグループに分かれる女たち。

「最初からそうしろ」

まったくもってその通りだ。無駄だと思つて抗うなど愚の骨頂だというのに。

「……………やったあ。織斑君と同じ班。名字のおかげね」

「……………うー、セシリアかあ……………さつきぼろ負けしてたし…はあ……………」

「嵐さん、よろしくね。後で織斑君のお話し聞かせてよ」

「デュノア君、わからないことがあったら何でも聞いてね！ ちなみに私はフリーだよ！」

「はあ。まさか舞崎と同じクラスだなんて……………ついてないわ……………」

俺だつてこんなお遊戯をやらされる羽目になったんだから付いていないと言つても過言じゃねえな。

ちなみにボーデヴィツヒの所は全くと良いほど会話をしていない。あの小さい体からとんでもないプレッシャーが放たれているからだろう。しまいに「俗物が！」とでも言いそうだな。あの人、眼帯してないけど。

「ええと、いいですかー。これから訓練機を1班1機取りに来てください。数は打鉄とラファール・リヴアイヴがそれぞれ3機ずつです。好きな方を班で決めてくださいね」
……一応、聞いておくか。

「んで、どっちがいいんだ？」

「どっちでもいいわよ。さつきと取りに行きなさいよ」

俺を睨みながら、胸が大きい金髪がそう言った。ため息を吐いて残っているのを取りに行く……つもりで向かったらまだどっちも残っていたのでラファール・リヴアイヴをもらっていくことにした。

「————いつてえ!?! な、何だ何だ!?!」

どこかで馬鹿が騒いでいるが、気にせずそのまま運んでおく。……意外と重いが運べない程ではないな。

確か、2組もいるんだっけ。他の班は1組からしうだから、ここは2組からしておくか。

「じゃあ、この班は2組からやる。まず誰がやる?」

だが一切の無視される。いや、ここは指定した方が良いのか?

「……………じゃあ、悪いけどそのアンタ、先にやってくれない?」

そう言っ指定したのはさつきの金髪巨乳だった。

「は？ 何でアタシがやらないといけないの？ っていうかき、アンタ男のくせに生意気なのよ。それに前にうちのクラス代表をボコっておいてよく平然と——」
ウザくなつた俺は、その女を殴り飛ばした。

第24話 これでも家事全般大丈夫

「テメエはグラウンドでも走っている。さて、つまらん奴は放っておいて、次はお前だ」
「ちよつと、何でテイナを殴ったのよ!？」

「女を殴るなんてサイテーよ!!」

「……………とりあえず、黙らせるか。」

俺は先に叫んだのを蹴り飛ばし、2人目を殴り飛ばした。

「何か勘違いしているようだが、ゴミ共」

「やれやれ。だから女というのは困る。」

「今、俺たちが使っているのはISという兵器だ。一歩間違えれば死ぬ可能性もある代物を前に、あまつさえ指導員である俺に刃向かうとはな。身の程を知れ」

俺はトンファーを出して女たちに殴りかかろうとしたところで場所を変えて後ろからの攻撃を受け止める。

「何の用だ？」

「やり過ぎだ。これ以上は見過ぎせん」

「じゃあ、指導員を交代してくれ。あの豚3匹は蛆虫でありながら俺に逆らったゴミ共

だ。これ以上の躡ができないのならば、アンタが担当しろ」

「……………はあ。わかった。貴様は——」

「俺は今日のテストに出るんでな。その勉強でもするさ」

そう言つてウエストポーチから教科書を出して読むことにした。

「死ね！ この腐れ男が!!」

後ろから怒号が飛んできて、どこから持ち出したのかナイフを出している。俺はそれを瞬時に見抜いたので、後ろ回し蹴りを首に食らわせた。本来ならそのまま下に叩きつけるべきなんだが、この腐れ女を殺して俺に前科がつくのは面白くないので、首を痛める程度で済ませてやる。

「……………無駄に反抗して俺の勉強時間を奪うだけでなく、雑魚の分際で俺を殺そうとするとはな」

もつとも、それだけで終わらせる気はないが。

「良いことを教えてやる。俺が2組のクラス代表をボコつたのは下らん痴話喧嘩にISSを持ち出したから無効化しただけに過ぎない。そして貴様は兵器を前にしているのに女尊男卑を見せた余裕から遊びでやっていると判断した。だから殴つたが……………文句あるか?」

「あるわよ！ アタシの美しい顔が台無し——」

「テメエはただ無駄な脂肪をぶら下げている豚だろ」

金髪女の動きが固まった。

「まだ何もわかっていないみたいだな。このまま成り代わる兵器が出ない場合、IS操縦者はこの前の騒動のようにいずれ前線に出て戦う運命にある。そこで自分以上の力量を持った相手と戦ったら捕虜として捕まるに決まっているだろう？　そこで女がどうなるか、言わなくてもわかるな？」

「そ、それは……………」

「まさか、女性が優遇されているからそんなことがないと本気で思っているのか？　頭が湧いているとしか思えないな。あの変態引きオタニートが聞けば「これだから非オタは屑なんだよ」と言うだろうな」

「いや、アンタの交友関係おかしくない？」

冷静に突っ込まれたが、仕方ないだろう。あいつに勧められた奴はすべて見たり遊んだりしたんだから。…………まあ、日頃から組み立てるようなアホとは違ってそこまでハマらなかつたが。

「ともかくだ。覚悟もない、遊びでやっている屑が俺の時間を奪ってんじゃねえって言いたいんだが…………死ぬか？」

俺はトンファーをガンモードにして銃口を向けた。

「……撃てるもんなら、撃ってみ——」

——ガンツ!!

耳元に銃弾がかかるかかすらないかの場所に撃つてやると、目の前にいる奴は公衆の面前で漏らした。

やっと解放された。

あの後、俺の大立ち回りは流石にマズかったのか、反省文を言い渡された。そして明日から謹慎である。

とりあえず昼飯にしようと思つて屋上に来た。いざとなればそこから飛び降りてショートカットもできるからだ。(※良い子も悪い子も決して真似しないように)

で、なんとなく屋上に来たら、織斑と篠ノ之が「はい、あーん」をしていた。

「あ、これでもしかして日本ではカップルがするっていう「はい、あーん」っていうものかな? 仲睦まじいね」

デユノア、お前空気読めよ。

「だ、誰が！ 何でこいつらが仲良いのよ!？」

「そ、そうですわ！ やり直しを要求します！」

「行為にやり直すも何もないだろ」

思わず言ってしまった。

「お、戻って来たか」

「アンタねえ、限度つてもんを知らないの？ うちのクラスはアンタを殺そうって目の

敵にしてるわよ」

「そっか。徒党を組んで俺が満足するならばいいんだがな」

だがそれは無理な話だろう。所詮女はそんなものだ。

「いや、満足するって……」

「何だったら、お前から俺の情報を流しておいてくれ。あ、俺は向こうがISを使わなければこつちも使う気はないから。ただし、どっちにしても精神崩壊をさせるぐらいはするがな。なあ、オルコット」

「……………そ、そうですわね」

「当時のことを思い出したのか、顔を青くするオルコット。そんな奴の手にはサンドイツチが入ったバスケットが握られている。」

「お嬢様だから料理は無理だと思っていたが、意外にできるんだな」

「ええ。料理は淑女のたしなみですから。舞崎さんもおひとつどうぞでしょう？」

「そうだな。お手並み拝見ということでもらうか」

「あつ」

そう言つて俺はバスケットからサンドイッチを手に取ると、それを口に運ぶ。ふむふむ。この味は……………そうか。なるほど。

俺は呑み込んで、オルコットに尋ねた。

「オルコット、このサンドイッチはちゃんと味見をしたか？」

「していませんわ。だって、一夏さんにたくさん食べてもらおうと思つて——」

すぐさまオルコットの口に拳を突っ込み、サンドイッチを適当に掴んで口の中に無理やり入れて咀嚼。近くにあつた蓋が開いた紅茶のペットボトルを無理やりぶち込む。うむ、白目を剥いて倒れているな。

「ちよ、静流!?! 流石にそれはやり過ぎだろ!?!」

「まあ待て。こういう時は……………セイっ!」

腹部を刺激して無理やり食わせたサンドイッチを吐き出させる。(※本当に真似をしてはいけません) 出したのはもちろん、ビニール袋に入れてオルコットの隣に添えた。

「……………はあ……………はあ……………死ぬかと思ひましたわ」

「良い夢、見れたか？」

「ええ。無くなつた両親に会つたような……じゃありませんわ！ よくもこんな仕打ちをしてくれましたわ——」

もう一度無理やりサンドイッチを入れた。今度は紅茶をぶち込まない。また気を失つたので目覚ましビンタで起こしてやる。

「……………は……………」

「驚いたか？ テメエはこんな殺戮兵器を織斑に食わせていたんだ。よくそれで好かれようと思えたな。人としてあり得ないと言いか言いがない。ましてや味見をしないなど、料理人にあるまじき行為だ。テメエは一体どうやってこれを作った？」

「それは、黄色が足りなかつたので砂糖とマスタードを——」

俺はバスケットをひつたくつていつでも使えるようにライターを取り出してすべて焼却処分にした。

「そんな！ わたくしの手料理が!？」

「料理に調和が実現されていけないものなど、料理と言わない。すべてゴミだ」

とはいえ、流石に1つだけ残している。というのも——そろそろ来るからだ。

「貴様らあ!! 一体何をしているんだ!？」

テンションが趣味がトライアスロンという筋肉ダルマっぽいのは気のせいだろうか

？ いや、性別以外は大きく変わらなにか。

「ちよūdいところに来ましたね、織斑先生。まずはこれをどうぞ」

「ん？ これはサンドイッチか？ いや待て。学園内で焚火など持つての外だ!!」

「その前にこれを食べてください。理由はすべてこれを食べからです」

「……………」

俺からサンドイッチを受け取った織斑先生は一口食べると、バランスを崩した。

「……………なんだ……………これは……………」

「オルコット作のサンドイッチ……………いや、普通の調味料を使ったはずの薬物兵器です」

まあ、化学薬品を使うどこかの天然女子高生よりかはマシだろうが、ともかく酷い味だった。味覚を殺すことに特化した最終兵器とでも言うべきだろう。ともかく酷い味なのは間違いない。

「故に、すぐさま焼却処分を実行しました」

「……………わかった。今回だけは大目に見てやるが、あまり問題は起こすなよ。それとオルコット、貴様は料理の一切を禁じる」

「え？ そんな……………」

「まず貴様は、料理というものを学習しろ」

「織斑先生も似たようなものでしょう？」

ついでに一言を添えておいてやる。すると織斑先生の殺気が濃くなった。

「ともかく、オルコットは料理禁止だ。舞崎、後で覚えていろよ」

「上等だ。テメエを這いつくばらせてやる」

さて、問題はそれをどこでやるかだ。

「そんな……料理で胃袋を掴ませることができないなんて……」

打ちひしがれるオルコット。ザマアとしか言いようがない。

「……………ねえ、舞崎君っていつもこんな感じなの？」

「……………いや、どつちかっていうときつきみたいに暴力で解決するのがほとんどだ」

「……………むしろ私は久々に見るな。調理実習の時にふざけていた女子を何とも言えない

圧力で抑えつけていたことがあったほどだ」

「……………いや、何をしたのよその女は」

後ろでひそひそとそんな会話が聞こえてくる。

「そうだ。オルコット、作り過ぎたからこれをやるよ」

そう言うて俺はタッパをオルコットに渡そうとしたが、オルコットはプライドからか首を横に振る。

「施しなんていりませんわ」

「そうか。そうなるときつきみたいに無理やり突っ込む「わかりました！ 食べますわ

「……そうかい」

一緒にスプーンも渡す。そして俺は俺で自分の分を開けた。

「チャーハンですわね」

「中国の料理ね。それにしてもアタシが知っているのと違う——」

「チャーハンはやり様によつては応用が利くからな。昨日は唐揚げだったからその残りを具材にしてみた」

オルコットは説明している間に一口食べている。そして勢いよく立ち上がった。

「な、何ですの、これは!？」

「なあ静流、俺も一口いいか？」

「好きにすれば？」

そうした方がオルコットも喜ぶし。

すると織斑は何を思ったのか、オルコットが口を付けたスプーンで食べた。

「……………美味しい」

「ちよつと、アタシも頂戴よ」

「勝手に食えつての。デュノアは？」

「ほ、僕もまあおうかな」

そう言つて2人はそれぞれ同じスプーンで食べた……どうでもいいけど、お前ら間接

キスとか気にしないのか？

「なにこれ、信じられない」

「…お、美味しいね。もしかして家が料理屋とか？」

「中学の頃は一人暮らしだったからな。必然的に色々とすることがあるんだよ。まあ、チャーハンなんて初心者料理だから誰にだって上手くできるけどな」

しかし、初心者の料理と言っても奥が深いもので、こなせばこなすほど上手くなっていくのだ。まあ、やりやすい点から見ても初心者の料理ってだけなんだが。

「ま、負けましたわ。まさかズボラな舞崎さんにこんな差を付けられるなんて……」

「ええええええッ?!?!」

そんなに意外か？ 少し傷ついた。



放課後、職員室で千冬は伸びをする。今、彼女は先程終わった整備室使用許可テストの採点していた。

「織斑先生、採点の進捗はどうですか？」

「滞りなく。次の最後の1枚です。……これは」

名前の欄を見る。「舞崎静流」と書かれていた。千冬は静流がこのテストを受けることを知っていたからわざと明日からの謹慎にしたが、まさかランダムで割り当てられるテストの採点でイレギュラーの生徒が当たるとは思わなかった。

「どうしました？」

正面に座る2組の担任「エレナ・ニーラン」が千冬に声をかける。

鈴音のこと、そして今日の朝に起きたティナ・ハミルトンの一件で何かとお世話になっており、エレナにはできるだけ2組の生徒が静流に攻撃を加えないように動いてもらっている。もつとも、それは静流を守るためではなく、2組の生徒を守るためだ。

今、千冬に「一夏と静流、どっちが優れた人間か」と問えば、千冬は間違いなく「静流」と断言するだろう。そして静流は既にそう言われるほどの状況を知り、立ち回っている。本来なら2年の時点で整備科を選んだ生徒が5月に入る前に自動的に許可される通過儀礼だけのテストを、1年のこの時点で受けるのもその表れだ。そしてそれを理解できるほど、静流はこれまで激動の時間を過ごしてきた。

小学生の時から母親を殺しかけたことから両親に捨てられ、父親の実家に引き取られた静流はそのことを弄られ、一夏と同じく物理的に鎮めてきた。その生い立ちや行動から最初、千冬は「一夏にそっくりだな」と内心思ったが、対処方法、内容など全く違っていったのだ。

一夏はあくまで、内容としては軽い喧嘩として留まっていた、収まっていた。しかし静流は上級生が兄にいれば駆り出され、報復をされていたがそれすらも教室というフィールドに呼んで潰し、何人も入院させている。幸い、もう数cmで怪我をしていたかもしれないという衝撃を、女にも食らわせている。中学の時点で青少年の世界に疎かった千冬すら聞いたことがある不良校を入学数か月でまとめ上げ、高校生すらも配下にして遠出するなどの不良行為を繰り返した。それもある日を境にパツタリと止んだが、被害者の中には有名なヤクザの組長の孫すらも半殺しに、構成員の半分を入院させたほどだ。そのことはその孫が悪かったのか組長自ら謝罪をしたという噂も聞いた。だがそ

れでも授業をサボることはなく、長期休暇の宿題もすっかりと終わらせ、テストでは常に上位に入っているほどだ。実際、静流自身が進学を目指す生徒と不良を分けるように校長に打診し、不良たちの進捗具合を自ら進んで見るなどの行動をしていたほどらしい。

そんな真面目と暴れん坊（なんてレベルではない）が同居したような感じの静流が本気を出した場合、身体的に優れている女たちが通うIS学園の生徒でも敗北は必須。現に静流が一時期通っていた施設を強襲した女性たちは入院し、喧嘩を売った生徒は大怪我を負う被害が出ているのである。仮に2組の生徒が静流に攻めたとしても、むしろ混戦だからこそ死人が出るのではないかという不安が千冬にはあった。

だが、中には謹慎が4日だけではないかという声も教員の中では上がったが、それには理由があった。静流の場合、謹慎はほとんど意味がないのだ。出された課題を1日で終わらせ、他は授業分の勉強や開発関係の勉強を行うから、むしろ静流にとって授業に出す方が苦行である。

「ニーラン先生、この採点をお願いします」

文章問題に差し掛かり、千冬ほどの実力者ではないが、開発関係の知識も明るいエレナに採点を頼む。しばらくして彼女は「決まりましたね」と言った。

「今月の合格者は、たったの2名……布仏本音、そして舞崎静流です」

今月から毎月1度行われるそのテストの最初で、その2人のみが合格した。
ちなみに、エレナが静流関係で手伝ってくれるのは、彼女自身が以前の犠牲者の1人
だからである。

第25話 抜かりない

謹慎が開けた俺は、放課後を早速ISの練習時間に当てた。本当は打鉄を改造したいけれど、アイディアがまとまっていけないのでそれは後にしよう。

「なんとなくわかるでしょ？ 感覚よ感覚。……はあ？ 何でわかんないのよ馬鹿！」

「防御の時は右半身を斜め上前方へ5度傾けて、回避の時は後方へ20度反転ですわ」

近くでは織斑に教えている代表候補生が2人いるんだが、片方は新人類とかエックスなんちやらとかならば理解できそうな言語で、もう片方は逆に難しすぎて理解が追いついていないようだ。

「一夏、ちよつと相手してくれない？ 白式と戦ってみたんだ」

傍からその様子を見ると、デユノアが織斑に試合を申し込んでいた。織斑はこれ幸いとばかりにデユノアと試合するが、為す術なくやられてしまった。

「やはり、一夏にも射撃武装が欲しいところだな」

「だったら、篠ノ之は技術者を目指せばいいんじゃないね？」

「何故だ？」

「技術者で織斑の機体の専属整備担当になったら、相談とかこつけて2人きりになれて、

場所によつてはできるだろ?」

そう言つてやると、篠ノ之は顔を赤くし始めた。

「ば、馬鹿者! そんな不埒な考えでどうする!」

「そもそも不埒なものぶら下げて、ISスーツだけにいるお前ら女の方がよっぽど異常だと思ふけど」

「こ、これは正装なのだ! あくまでも! 正装だ!」

顔を真っ赤にして怒る篠ノ之に、俺は内心ため息ついた。

「まあ、実際これだけ露出が多い格好でうろつかれたら、男は嫌でも意識はするんだけどな」

「……舞崎でも意識するの?」

「じゃあ聞くけど、お前は犬が交尾していても興奮するか?」

「……舞崎にとつて、女とはそういう風に見えるんだな」

「というか、逆にあまり感じなくなつたな。一時期離れていた時に凄いのを見てたから」
いや、ホント。あそこまで可愛いのは中々いないと思う。最初はぎこちなかつたけど、3日目くらいから甘えてくる姿とか、写真を撮つておけば良かったと本気で思つた。せつかく、せつかくIS学園で一緒にいられると思つたのに。

「……ホント、女の半数が死滅してくれればいいのに」

「物騒なことを言わないでくれ」

……つと、気が付けば織斑とデユノアがピットの方に移動していた。俺も面白そうだから話に入ることになろう。

「ええとね、一夏がオルコツトさんや嵐さんに勝てないのは、単純に射撃武器の特性を把握していないからだよ」

「そ、そうなのか？ 一応わかっているつもりだったんだが……」

「うーん、知識と知っているだけって感じかな。さっき僕と戦った時もほとんど間合いを詰められてなかったよね？」

「ま、元々織斑は動きが単調な上に武装がブレード一本じゃあ、火器豊富なラファール・リヴァイヴにや逆立ちしたって勝てるわけないしな」

「じゃあ、シャルルと一度戦ってみろよ。シャルルは手ごわいぞ」

「別にいいけど。さて、やるかデユノア。ISを解除しろ」
「何でだよ!？」

デユノアではなく織斑に突っ込まれた。いや、俺は――

「別に相手は男なんだから殴っても問題ないだろ。まあ、女だろうと気に入らなければ殴るけど」

「いや、女を殴っちゃダメだろ」

「悪いが俺は男女を差別しない性差廃絶主義だ。それに今は女の方が強いんだろう？
だったら問題ない」

「大アリだ！」

あー、もう。煩いな。

「いいか織斑。今の世界情勢じゃ「従順」「美少女」「性格神」じゃなければ女とは言わ
ない。確かに生物学の上で「女」と言っている奴らは総じて子供を産めるが、すべてメス
と言つても過言ではない。もしくはベツトだ」

「いや、それはいろいろとおかしすぎるだろ!？」

「……違うな。正しくは「子供を産む生物」か」

「もはや言いすぎだ!!」

なんだこいつ。情緒不安定か？　もしかしたらしばらく女と一緒に過ごしてきたか
ら、違う意味で疲れているのかもしれない。

「いい加減にしろよ静流。いくらなんでも批判しすぎだ」

「強いと謳っておきながら大した実力もない奴らなどまともに同族して扱う気になれな
い。なるのは立場を弁えられるか、男をある程度認めることができる奴らだ。ましてや兵
器を使って上だとほざく奴など論外だ」

篠ノ之はそれができるから、今も友として受け入れている。もし暴走しようものなら

容赦なく潰すがな。

「まあいい。仕方がないからＩＳで相手してやる。いくら生身で強くても所詮はＩＳで弱ければ話にならないからな」

「……だつたらさつきの間答はいらないだろ」

「それもそうだな。さてデュノア、覚悟はいいか？」

「僕だつて負けるつもりはないよ」

俺は打鉄を展開して、完全展開したラファール・リヴァイヴと対峙する……ん？ 「カ
スタムⅡ」？

「デュノアのラファールは改修機か？」

「うん。僕は男だから、信頼性のある機体を僕の戦いに合せて調整したんだよ」

「なるほどな。ならば先に装甲の発注を済ませておけ。神に祈る時間ついでにその分もやる」

「必要ないよ」

挑発のつもりか、嘲笑うような顔をするデュノア。……おっと、その前に。

「悪いがデュノアの公開処刑をするので場所を開けてくれ！ 巻き込まれたいならば構わないがな！」

「公開処刑って何!? 僕何をされるの!？」

「……………言うと思っているのか？」

言ったらそのフラグが壊れそうだから自重するんだがな。

「——その前に、私の用事を済まさせてもらおう」

別の方向からそんな声が聞こえた。この声はラウラ・ボーデヴィツヒか。

「……………いきなり出てきて何の用だ？」

「織斑一夏、そして舞崎静流だったな。貴様らも専用機を持っているならば私と戦え」

「嫌だ。理由がねえよ」

「順番ぐらい守れ。先にミンチになるのはデュノアだ」

「……………僕がミンチになるのは決定事項なんだ……………」

デュノアの眩きを無視しておく。

「貴様にはなくても私にはある」

「だから順番は守れと——」

「貴様がいなければ教官が大会2連覇の偉業を成し得ただろうことは容易に想像できる。だから私は貴様を、貴様の存在を認めない。そして舞崎、貴様は教官と同室だそうだな？ 部屋を変わるといふのなら特別に見逃してやる」

……………教官っていうのは……………織斑千冬のことか。どうやらあの女を慕っているみたいだが、部屋を汚くすることに長けている奴のどこがいいのかわからない。

「また今度な」

「ふん。ならば——戦わざる得ないようにしてやる」

そう言つてボーデヴィツヒは右肩に装備されているレールカノンを起動させ、織斑に向けた。

「一夏!」

少し離れているデユノアはすぐに織斑のところに向かう。だが俺は織斑とボーデヴィツヒの間に割つて入るだけにした。

——ガッ!!

撃ち出された砲弾を受け止めることには成功したが、今のでマニピュレーターがいくつかイカれた。

「静流!」

「貴様、どういうつもりだ? まさか教官にその男を任せられたとでも言うのか!」

「……………冗談じゃない。俺は例え織斑が死んでも「ざまあ」と心から笑えるさ」

「酷いなそれは!」

「だが、悪いがまともに避難も終わっていない状況で発砲する奴を潰すのが俺の趣味であり誓いでな……………死にたいか、クソチビ」

「その言葉、そっくり返してやるぞ。貴様も返答次第では潰すつもりだったからな」

「おお。怖い怖い」

俺はあえておどけてやる。馬鹿にしていると感じたのかボーデヴィツヒは俺を殺そうと接近する。

『——その生徒！ 何をやっている!?』

唐突にスピーカーから声が飛んだ。

「……ちつ。今日は引こう」

「何だ。お前のことだから愛する教官とやらを取り返すために俺を消すのかと思ったぜ」

「絶対防衛が邪魔するのな。ISがない時にするとしよう」

そう言って去っていくボーデヴィツヒ。……おい軍人。一般人を殺す宣言していいのかよ。

内心で突っ込んでいると後ろから織斑とデユノアが近付いてきた。

「大丈夫か、静流？」

「ああ。だが要反省だな。今度の奴は砲弾も受け止めることができる奴に変えておかないと」

「……………あのね、舞崎君。普通、砲弾は回避する物だと思うけど……」

怖い何かを見るような目で俺を見るデユノア。まあ、確かに回避した方が安全だが、

あそこで受け止めていなければより被害が大きくなっていただろう。たぶん信じてくれないが、実は少し計算が入っている。

「まあいいや。俺はもう少しやっていくけどお前らはどうする?」

「僕は一夏に銃を教えるよ。体験したら少しはマシになるだろうし」

「別に良いけど、あんまり仲良くなりすぎるなよ。掘られるぞ」

「え!?!」

その意味をどう解釈したのか、篠ノ之とデユノアは顔を赤らめる。織斑は「何を?」と言っているからどうやらわかっているらしい。

どうなるか内心楽しみながら、俺はある目的のために一足先に部屋に……と、その前に先に整備室だな。

そう思いながら中に入り、俺はさっさと終わらせることにした。

「今戻ったぞ」

「アンタはどこ亭主だ」

そう突っ込みながら、帰って来た織斑先生に「おかえり」と返す。

「……何をしているんだ、お前は」

「今度の学年別トーナメントに向けてちよつと、ね」

画面の中ではボーデヴィツヒの戦闘映像が流れている。……が、これはあくまでもフエイクだ。

「……やはりお前は勉強熱心だな」

「たぶん聞いているとは思いますが、弟子が暴走しかけていた」

「ああ、知ってる。お前が奴の強行を止めてくれたらしいな。すまなかつた」

「別にいいさ。世の中には命の危険もないのに平然と人を殺そうとする奴らもいるんだから、それに比べたら可愛いもんだ」

実際、ボーデヴィツヒの行動は可愛いものだ。わざわざ正面から潰そうとしてくれるんだからな。……あの屑共と違って。

「ところで。舞崎、お前はデュノアのことをどう思っている?」

「ああ、あの金髪のことか?」

「……たくさんいるんだが?」

「冗談だ。別になんとも思っちゃいねえよ。あの程度なら大した脅威じゃないし、アン

タぐらいの実力者なら捨て置いて問題はないと思うけどな」

まあ、今もなお評価は下がりつつあるけど。

実際、俺の所に来るとしたらスカウトぐらいだろう。なにせ物理的に敵を潰せる I S 操縦者なんてそういないし、心配するだけ無駄というものだ。

「…………お前がそう言うなら別に良いがな。だが、デュノアには警戒しておけ。奴は危険だ」

「…………危険度で言えばどつちかと言うとボーデヴィツヒだろ。アイツ、俺がアンタと同じにしていることを羨んで俺を殺すことを宣言していたぜ」

「……………今度会ったら説教だな」

「その必要はねえよ。それとも俺があんな雑魚にやられるとでも思ってたんのか？」

「相手は曲がりなりにも軍人なんだが…………？」

「そう言っても大したことねえよ。女の階級の何を信用できる？ 精々、胸の大小で好みに分かれる程度だろ」

なんて言いながら、俺が実際に聞いているのは違うものだった。

『特記事項第二十一項、本学園における生徒は在学中においてありとあらゆる国家・組織・団体に帰属しない。本人の同意がない場合、それらの外的介入は原則として許可されないものとする。つまり、この学園にいれば、少なくとも3年間は大丈夫だろ。それ

だけ時間があれば、なんとかなる方法だつて見つけられる。………本当は静流にもこのことは伝えておいた方が良いかもしれないけど、必然的に千冬姉に伝わるしなあ。そんなことになったら、シャルルは強制送還されるかもしれないし………」

『……一夏、ありがとう……』

物の見事に女性を落としている織斑。流石歩く女コロリ。中々褒められない手腕である。

そう。つまり俺はずっと、織斑の服に仕込んでおいた盗聴器から2人の会話を聞いていたのである。………まさかデュノアもあんな、ボデイソープの替えがないという理由でバレるとは思わなかっただろう。あまりの間抜けっぷりに思わず大声で笑いそうになった。

とりあえず、このデータは保存しておこう。良い脅迫のネタになる。ただし、身体で払ってほしいというのは逆にこっちの首を絞めるのがオチだ。

(………後は、使いどころだな)

それを誤れば、これはただの無駄な会話となる。しっかり使わないと。

「それとだ、舞崎。お前はボーデヴィツヒのことを知っている風だったが、知り合いか？」

「そうだな。ラウラ・ボーデヴィツヒが遺伝子強化素体と書いてアドヴァンスドと読む

ぐらいには知っているかな」

俺はすぐさまトンファーを出して迫って来た木刀を受け止める。

「久々の手荒い歓迎だな」

「……それをどこで聞いた？ 場合によっては流石の私でも庇いきれんぞ」

「………隠していてもしょうがないから言うが、前に俺が行つてた研究所で渡されたんだよ。おそらく俺の遺伝子情報を確保するために、な。手段は言う必要があるか？」

「………大概腐ってるな」

「でもまあ、仕方ないんじゃないか。今のところ、ISを動かせるのって俺とアンタの弟ぐらいだし。どうかして採取したいっていうのが全世界の本音だろ」

俺は武藤さんに守られているからそこまで大きな騒ぎになつていないが、実際にそれを望む声が上がっていたらしいからな。冗談じゃない。そんなことをしたら俺は——
——本気で研究所を潰しに行くだけだ。

ほとんどの確率でないだろうが、もし俺が遺伝子データを提供して、作られたその存在が様々な実験を強制的に受けさせられて恨まれるなんてことになったら俺が嫌だしな。勝てる気がしない。

「………だが、できるだけあまりそう言ったことは口外するな。できるだけラウラのことは——」

「言いふらすつもりはねえよ。俺は自分にメリットがないことはしない主義なの」
「……なら、良いんだがな」

少し怪しみながら俺を見る織斑先生。俺はその視線を回避しながら、とりあえず今俺自身はどう動いて手に入れた情報で立ち回ろうかと考えていた。

第26話 同類扱いしてんじやねえ

(さて……………どうするか)

シャルル・デュノアが男装してただけという弱みは握ったが、問題はこれをどういう風に公開すればいいか、だ。……………いや、これって直接会社に乗り込めばいいんじゃないか？

この状況で簡単に武藤さん辺りにばらしたところで、俺にメリットはない。ただ敵を追い出せるっただけだ。それじゃあ意味がない。

そう思いながら気分転換も兼ねて食事するために部屋を出る。しばらくは向こうも慰め合って恋愛関係に発展するかどうかだろう。

(……………このまま会社に送りつける……………いや、同じだ。もっと利益があることをしないと……………)

例えば、周りよりもアドバンテージになるようなことだ。何か……………何かないだろうか……………。

「ん？ どうした舞崎。何か迷い事か？」

「篠ノ之か……………ところで何だそれは」

「ああ、これは実家にいる叔母さんに送ってもらった真剣だ。銘は「緋宵」。かの名匠・あかるぎょう明動陽晩年の作だ」

「へー……………」

刀つて、全部一緒じゃねえの？ いや、重さとかって差はあるかもしれないけどさ。

「舞崎はそういうことに興味ないのか？」

「まあな。俺のメインは銃と格闘だし、剣持つても破壊する方向で戦うからなあ」

「こう言つてはなんだが、サーベルとかのただのロングソードとかはゲームとかでは使
うが、個人的には一気に敵をぶっ壊せる方が好きだ。」

「そ、そうか……………」

「まあ、こういうのはどこまで行つても価値観が合致するかどうかからなあ。でも柔よ
く剛を制すつてわけじゃないが、トリツキーな戦いをしてる奴は知ってるな」

「……………舞崎の戦いもかなり癖があると……………って、何をしている!?!」

突然何かに気付いたような反応をする篠ノ之。見ると、織斑がオルコットにエスコ
トされる形で一緒にいた。

「あら、箒さん。これからわたくしたち一緒に夕食ですの」

「そ、それと腕を組むのとどう関係がある!?!」

「あら、殿方がレディをエスコートするのは当然の事です」

「というか織斑、こいつさつきまでデユノアと一緒にだつたんじやないのか？　いない間にバレたらこつちが困るんだが。」

「そ、それならわたくしも同席しよう。今日の夕食は少々物足りなかつたのでな」

「あらあら箒さん、1日4食は体重を加速させますわよ」

「ふん。その心配は無用だ。先程実家からこれを送ってもらつた。今日も後で居合の修練をするから何も問題はない」

自信満々にそう言う篠ノ之。居合いでカロリーがそんなに消費されるのか少々疑問だが、その疑問は俺が剣術とか一切やったことがないからだろうか。……まあ、銃で撃つ姿がかっこいいと思つた俺が言うのもなんだがな。

「騒ぐのはいいけどさ、どうせ平行線なんだしさつきと行こうぜ。こんなところに油を売つて食堂が閉まつていたなんてオチは嫌だしな」

「それもそうだな。ほら、行こうぜ」

織斑の声で篠ノ之は織斑の腕を取つた。

「箒さん、何をしてらつしやるのかしら？」

「男がレディをエスコートするのが当然なのだろうか？」

「2人共、歩きずらいんだけど」

2人に織斑は抓られたが、それは自業自得だな。フオローする気にもなれない。……

まあ、最初からないけど。

全く。どうしてこうなったのやら。

——学年別トーナメントで優勝すれば、男子と交際することができる

いつの間にか男子ひとくりにされているが、それはいい。来たら精神を折るまでだ。じゃなくてだな。

俺は内心、目の前にいる女剣士……もとい、篠ノ之に呆れていた。

「篠ノ之……………」

「い、言われなくてもわかっている！ ……………しかしだな——」

「いや、そうじゃない。そうじゃないんだ。もう一度確認するが、お前は「学園別トーナメントで優勝したら付き合ってもらおう」って織斑に言ったんだな？」

「……………そうだ」

体をもじもじさせながら答える篠ノ之に俺はため息を吐いた。

「……………詰めが甘いな。まあ、お前にしては善戦した方だと言うべきか。だがよくそんなことを言おうと思つたな」

「……………そうでもないかと勝てない気がしてな」

「後、せめて恋愛的な話だと言うことをストレートに言えば完璧だったかもしれないけどな」

「……………」

とはいえ、流石に篠ノ之の性格的には無理があるか。

実際、今のようには体はともかく精神的には堅物な彼女には駆け引きなど難しいだろう。

「で、話を戻すが、まさかお前は俺に勝つ気なのか？」

「……………え？」

予想外だったのか、驚いて風を俺を見る篠ノ之。俺は髪の毛をかいて答えてやる。

「悪いが俺は戦闘に関してはお前よりも場数を踏んでいる。どんな奴だろうと手を抜くつもりはないし、何よりも俺は女を恨んでいる。今度のトーナメントだって全員を再起不能に追い込むつもりだ」

「……………」

まあ、普通ならそういう反応を取るよな。

だがこれは俺の本音だ。今更変えるつもりはない。

「それと、1つ忠告しておく」

「何だ？」

「知っていると思うが、トンファーはまだ使い慣れていない。織斑千冬と戦ったあの時が俺の全力だと勘違いするなよ」

そう言つて俺は教室に戻ろうとすると、砲弾を放つた問題児の声が聞こえてきた。

「何故こんなところで教師などをしておられるのですか!？」

「どうやら近くに織斑先生とボーデヴィツヒがいるようだ。2人はこつちに気付いていないようだ……たぶんあの担任は俺らのことには気付いているようだな。」

「……どうした？」

「さあな。ともかく今は黙つてろ」

そう小さな声で指示すると、篠ノ之は頷いた。

「何度も言わせるな。私には私の役目がある。それだけだ」

「このような極東の地で何の役目があるというのですか!!」

「………ヨーロッパ人つてさ、極東を否定する風習でもあんのか？」

別に愛国心とかないけど、素直に気になつた俺は吐き出しそうになつた言葉を飲み込む。

「お願いです、教官。我がドイツで再びご指導を。ここではあなたの能力は半分も生かされません」

「ほう」

「大体、この学園の生徒など教官が教えるに足る人間ではありません」

「何故だ？」

「意識が甘く、危機感に疎く、ISをファクションかなにかと勘違いしている。そのような程度の低い者たちに教官が時間が割かれるなど、間違っています」

——ほう

織斑先生から殺気が放たれる。が、その前に俺が出た。

「そこまでにして——」

「チビの割には随分と賢いじゃねえか。見た目相応の思考ではないようで何よりだが、1つ間違っていることがある」

「……貴様、いつの間に。それよりも今の話を聞いていたのか？」

「まーな。で、今の話を聞く限り、テメエは俺もその「意識が低い者たち」に含んでいるようだな」

そう言いながら俺は自然に奴に近付いていく。

「そうだ。事実だろう？ 貴様も——」

どうやらこの頭にしっかりと刻んでやらないといけないようだな。

俺はボーデヴィツヒの頭部を掴んで握った。

「流石は女だ。揃いも揃って随分とバカげた頭をしている。図に乗るなよ、女風情が」

「き、きさま……なにを……」

「待て舞崎！ それ以上は——」

「どいつもこいつも調子に乗りやがって。俺が女と同等だと？ 反吐が出——」

咄嗟に腕を引くが、どうやら遅かったようだ。親指がかすつていて血が出ている。

「舞崎!？」

「……2人共、そこまでだ。これ以上は——」

俺は構わずトンファアを展開し、血が付いたナイフを持つボーデヴィツヒを攻撃する。

それをボーデヴィツヒはナイフを左に持ち替えて受け止めるとISを展開して俺を止めた。何故か驚いているが、止まっているのは右側だけ。すぐさま左のトンファアを投げる。ブーメランの代わりだが、それを察したのかボーデヴィツヒはすぐさま後ろを向くと俺の右側も自由になった。

部分展開をしているようだが、その場合は展開している部分は防御が発動する。だから俺はボーデヴィツヒの身体に蹴りを入れる——つもりだったのか、ボーデヴィツヒ

を庇ったのか織斑先生を蹴っていた。

「教官！」

「千冬さん！」

「……私は無事だ。それよりも時雨、お前はすぐに保健室に行つて指を止血しろ」

「……うわ。意外に出てるな」

かすっただけ、だと思つたがどうやら少し深かつたようだ。

俺はすぐに患部を抑えて保健室に向かつた。



千冬はラウラに向き直る。するとラウラは恐る恐るといった感じに千冬を見る。

「やってくれたな、馬鹿者。ISを校舎内で展開するなど、何を馬鹿な——」

そこで千冬は、ラウラが自分を見ていないことに気付いた。

「おい、ボーデヴィツヒ」

ラウラの肩を掴んだ千冬。するとラウラは何か怯えるように頭を抱えてしゃがんだ。

「……ラウラ」

「!? じ、自分は一体……」

「……大丈夫か?」

思わずそう尋ねてしまう。

千冬は少し前、とある事件がきっかけで一夏を日本に置いたまま日本を離れ、ドイツ軍で教官をしていた。本来なら日本の代表が他国の人間を強くする行為などあつてはならないが、彼女の場合は篠ノ之東と交友を持っていることもあり、そう言った自由も認められていた。そこでラウラと出会ったが、当時のラウラよりも今はかなり酷い。

(……そんな馬鹿な。ラウラは現役軍人だぞ!? それをこうも簡単に怯えさせるなど、あり得るわけが……)

——ズキッ

千冬は急に腹部に衝撃が走ったことですぐに座り込む。

「千冬さん！」

箒は慌てて駆け寄る。

「……きよ、教官………」

「お前の処分は……後で伝える……今は教室に戻っている。……箒、お前はボーデ
ヴィツヒと一緒に戻れ」

「……わかりました。……夏にも、黙っておきます」

そう言つて箒はラウラを連れて教室に戻る。

千冬はその場で少し休み、立ち上がつて教室に向かった。

(……油断した？ いや、おそらく今のは舞崎がラウラを……まさか)

——あの時は、手加減していたのか？

千冬は今、知りかけていた。

確かに4月の千冬との戦いは決して手を抜いていたわけではないが、だからと言つて本気ではなかったことに。

彼女——ラウラ・ボーデヴィツヒには4つの目的があつた。その内2つは上から言われたということもあつて乗り気ではなかつたが、最後の2つに關しては別だ。

そして今、本来なら隣に座っているはずの生徒がいなくてもあつて、内心安堵して
いた。

(……………何故、私は安堵している……………?)

その答えは半分出ている。しかし認めたくなかつた。

(……………こんなところで、立ち止まっては行かないんだ)

織斑千冬を再びドイツの教官に戻す。そして、その弱点であり足を引つ張る存在である織斑一夏を抹殺する。

だがそれよりも、何よりもまずすべきことができた。できてしまった。

(……………舞崎静流を、殺す……………)

——だが、できるのか?

ラウラは当初、ISを使って倒すつもりはなかつた。ISを展開したことに後から驚いたほどだ。

これまで I S を使って暴動を鎮圧してきたこともある。制圧してきたこともある。つまり、I S を使うことに關しての裏側を見てきていたのだ。なのに、自分は今まで一般人だった男にあつさりとして I S を展開し、使用してしまった。生身の人間相手に。それだけじゃない。自分は、身の危険を感じてしまった。捕まったことで女の捕虜にありがちなこと——いや、それ以上の殺意に逃れたい一心でだ。

(……………勝たなければ……………)

もう、当初の目的なんて彼女は忘れていた。

ただ、あるのは舞崎静流に対する恐怖。織斑一夏など比べものにならないほど——それだけじゃない。おそらくこの学園内のどの人間よりも強い存在を倒そうという目標。

聞き出し、相部屋の権利を譲る。そんなことはもう、彼女の頭に存在しない。あるのはただ、静流に対する殺意のみだ。



まさか、縫うことになるとは思わなかった。

おそるべしサバイバルナイフ。しばらくトレーニングはお預けかもしれないな。とりあえず、足の重りを10 kgに増やすとするか。そうすれば多少はマシだろうし。

(……仕方ない。IS操縦は控えるか)

そう思った俺は教室に戻ると、ボーデヴィツヒと視線が合った。

何故か俺を睨んでくるが、もしかしてさっきのことが応えたのかもしれない。俺は無視して自分の席に座ると、ボーデヴィツヒの隣に座る偽男子がポツリと言った。

「……何でこの席、殺伐としているんだろ」

いや、こいつが悪いし。自業自得だし。

と、妙に子どもっぽいい訳を内心して授業の用意をすると、あまりにも視線がウザかったので荷物を持って席を立つ。

「待って。どこに行くの？」

「別にどこだっていいだろ」

偽男の言葉を適当に返して俺は教室を出た。

というか、勉強ぐらい静かに……じゃなくて、大人しくさせろよ！ この怪我のせいで、まともなことってあんまりできないんだからなあ!!

第27話 同類との再会

放課後になり、勉強を中断した俺はランニングしていた。やっぱり最適な場所は部屋に限られるな。昼飯とかも自分のタイミングで用意できることがやっぱり大きい。

なんて、普段では考えられないことを頭に浮かべていると、女子が目の前を通って行った。

(……………たく、危ない……………は?)

1人だったら考え事が嫌がらせか、もしくは進路などで考えているかぐらいだとなんとなく思えるが、それがほとんど全員で、その中に織斑とデユノア、珍しく篠ノ之も混じってれば何かあるのかと思ってしまうだろう。

どうやら全員が第三アリーナに向かっているらしい。俺は適当に女の肩を掴んで問いただすと、どうやらボーデヴィツヒが凰とオルコット相手に戦っているようだ。

俺はすぐさま第三アリーナに向かうと、確かに珍しい組み合わせで戦っていた。

(以前よりかは連携が取れているが、ボーデヴィツヒの方が優勢か)

俺からすればどちらも弱い、この学園の基準からすれば強い部類に入るオルコットと凰。そのコンビに圧倒できるということはかなりの実力者なんだろうということは

理解できるが、所詮はISだしなあ。世界最強の兵器と言っても、バリアに守られている戦いなんぞ何が良いというのやら。

(……そろそろ終わるか)

機体性能の差も相まってボーデヴィツヒの勝利だと思つた俺はオルコットの不意打ちに驚きながらも笑つた。だが、しばらくして煙が晴れると無傷だったらしいボーデヴィツヒが姿を現した。

「終わりか？　ならば、私の番だ」

瞬時加速で2人に接近したボーデヴィツヒはワイヤーブレードで2人を捕えて武器も展開せずに拳のみで攻撃する。……というよりも一方的な暴虐だな、あれは。

(……まあ、少しはマシか)

俺は打鉄と同時に銃を展開してワイヤーブレードを切断した。今更ながらこの手の芸が生きているというのはかなり複雑な心境である。

「そこまでだ、ボーデヴィツヒ」

「ふん。見学はもう終わりか？」

「まあな。つていうか他人の戦いなんて見学するのは好きじゃあねえんだよ。クソ詰まらねえしな」

別にプロを否定するつもりはないが、プロ野球を見ていてもつまらない質だ。そんな

ことをするなら自分でプレーした方が何倍もおもしろい。そういう人間なのだ。

「だからまあ、簡潔に言うて選手交代つて奴だ」

「……そうか。それは好都合だ!!」

ボーデヴィツヒは瞬時加速で接近してきて何かを振り下ろしてきた。それを回避して蹴り飛ばす。

「おいおい。せめて後ろの2人ぐらいは逃がしてやれよ」

「必要ないな。所詮、この世界は雑魚から消えていくものだ!」

「じゃあ、テメエからだろ!!」

するとまた動きが止まる。そしてボーデヴィツヒの手首辺りから出ているビームサーベルみたいなものに攻撃されて絶対防御が働いてシールドエネルギーが大きく減った。

「やはり敵ではないなっ! この停止結界の前では生身で強い貴様とて有象無象に成り下がる!」

それは事実だった。回避しようにも体が全く動かなくなり、接近戦で痛めつけられる。俺が接近戦を得意とすることは理解しているのだろう。対して俺は奴の言った「停止結界」というものについて何も知らない。

「……………全く。面倒な隠し玉だな」

銃でボーデヴィツヒを撃つと、向こうは手を出して銃弾を制止させた。

「そんなものが効くか！」

「止まるのかよ。………つたく」

反転してまだ中にいるアホ2人を掴んでピットの方に放り投げる。そして咄嗟に身体を捻って砲弾を回避した。

「馬鹿が。雑魚など放っておけばいいもの!!」

「なんだって俺は優しいからな。まあ、単に俺の戦い方に巻き込んで余計な非難を避けるためってのもあるが」

「その甘さが、命取りだ!!」

瞬時加速で接近してくるボーデヴィツヒ。俺はそれを上に回避して実弾が装填されている銃を展開した。



その頃、一夏たちはセシリアらが放られた場所へと移動していた。シャルルの案で、一先ず助けられた2人を介抱しようという話になったからだ。静流は狙ってそこに投げたのか、一夏たちがいた場所から近いピットに向かって投げられていたため、すぐに駆け付けることができた。

「鈴！ セシリアー！」

「——大丈夫。打ち所が良かったから。でも今はあまり騒がないことをお勧めするよ。まあ、君の仲間が死んだところで僕らには大したダメージがないけどね」

一夏は驚き、箒はすぐに警戒する。

「誰ですか？ IS学園は関係者以外は立ち入り禁止ですが」

シャルルがそう言うと、鈴音から手を離れたその人物は3人に向けて言った。

「僕はその関係者だよ。年は君たちとそう変わらない……いや、同じ年か」

「あり得ません」

「あり得るんだなあ、これが。ほら、これが証明書」

そう言つて未だに名乗らない謎の人物は何かを放つた。

それを器用に受け取つたシャルルはそれがIS学園から発行されたIS学園の入場許可証だと確認する。

「ごめんなさい。まさか本当に許可されているなんて」

「まあ、警戒することは良いことだよ。じゃあ、返してもらうね」

するとシャルルの手から何かに奪われるようにカードが無くなる。

「安心してよ。僕は君たちの機体には興味がないから。白式のデータは既にあるし、ラファール・リヴァイヴのデータもとつくの昔に収集済み。というか僕も男の子だから弱い人には興味ないんだよねえ」

「何?」

「僕が興味あるのは、僕が欲しい女とそこで戦っている舞崎静流を含めたごく一部。君たちは名前は知つてるけどまだ僕が興味を持つ範疇じゃないかな。だって僕、篠ノ之東は凄いやと思うけどそれだけだしね」

「……それは、言い過ぎ」

一緒にいた少女に言われて舌を出す存在X。

(……まるで姉さんみたいだな)

箒は同じような感性を持つ姉のことを思い出す。箒の姉である篠ノ之束もごく一部の人間を除いて他人に関心を示さない人間だからだ。

「そこで僕の存在に疑問を抱く前に、この雑魚2人を保健室にでも運ぶのが先決じゃない?」

「雑魚って…2人は強いぞ」

「そう感じるのは君が弱すぎるからだよ。いや、君もまた、ISという力に溺れている人間だからか。馬鹿だねえ。ISの力に頼ったところで真の強者になれないってのに」

「何を言ってる——」

突如、爆音が一夏たちを襲う。気になった3人は中を見ると静流が膝を付いていた。

「……静流」

一夏は立ち上がってISを展開しようとする、空気が抜けた音がした。

「織斑、篠ノ之とデュノアの3人でその2人を運べ」

「千冬姉!」

「学校では織斑先生だ」

呆れながらそう言う、未だに名乗らない存在Xが千冬に言った。

「織斑千冬、まさか行く気ですか?」

「そうだが、貴様は誰だ?」

「通りすがりの研究員ですよ。じゃあ、無謀なあなたに忠告しておきます。介入は逆効果ですよ。むしろ2次災害を呼ぶだけです」

「……………ありがたく受け取っておくが、生憎私はこの方法しか知らないのにな」

「じゃあ、ISは付けることはお勧めします。そうじゃないとあなたという死体が増えるだけです。もしくは上級生ですかね」

だが千冬は近接ブレード《葵》を持った状態で下に降りておよそ人間の動きとは思えない程の早さで駆ける。その様子を見た存在Xは言った。

「織斑一夏君、君たち姉弟つてもしかして物凄く馬鹿なの？」

「そんなわけないだろ!？」

「でもさ——」

一夏は誘導されるまま外に目線を向けると、千冬が静流に投げ飛ばされていた。

(……………まさか、……………まで相性が悪いとはな)

内心、相手の技術力に賞賛を送りながら自分の力不足を嘆く静流。それもそのはず、静流の戦闘スタイルは肉弾戦であり、牽制に爆弾やナイフを投げてはいるが通じないのだ。

(…だがまあ、これくらいの逆境はいつも潰して来た。こんなところで諦めてたまるかよ)

しかし、未だ静流は停止結界を突破する方法を見出していない。どうしようかと悩んでいたところに千冬が現れた。

「両者そこまでだ！ 直ちに試合を中止しろ！」

——あ？

千冬が現れていたことに驚いたが、何よりも静流は千冬が言ったことに驚いていた。

「勝手に湧いたかと思っただら何言っただ、アンタは」

「そのままの意味だ。これ以上の試合の続行は認めない」

「はあ!？」

「交代の時間だ。この続きは学年別トーナメントで着ける」

「ふざけんな！ そんなものこそ後だろうが！」

「——ちようど良かったではないか」

ラウラの勝ち誇ったような言葉が静流の耳に届いた。

「んだと?」

「貴様の劣勢は明らかだ。それがこのような形で決着が着くなら貴様も本望だろう。何せ黒星が付かないのだからな」

その言葉が引き金になったのか、静流は千冬を掴んで後ろに放った。

「貴様、教官に何を——」

その光景を見たラウラは責めようとするが、跳び蹴りが放たれてしまいまともに食らう。

綺麗に入ったが故にラウラは意識を手放しそうになったが、静流の絶叫と共に殴られて上に飛ばされた。

「ざけんじゃ——ねえ!!」

ラウラはすぐさま体勢を戻して攻撃しようとするが静流の姿は既がない。

「凶に乗るなよ」

「きゃ——」

ナイフで抉るように刺されたため、レールカノンが使い物にならなくなったのですぐさまパージするラウラ。

「どいつもこいつも勝手な事ばかりか言いやがつて」

爆弾を投げつけ、ばら撒き、一気に破壊しながら怒鳴る静流。

「家畜風情が……弱者風情が!!」

そして大型メイスを展開して投槍の要領で投げた瞬間加速で接近。

「IS使わねえと男に勝てないゴミ共が!!」

停止結界——アクティブ・イナーシヤル・キャンセラーを発動してラウラは受け止めたが、それを静流は無理やり奪って叩きつけた。

「見下してんじゃねえ!!」

さらに瞬時加速して正拳突きを叩きつけた。その時、静流の打鉄がアラームを鳴らす。

「右腕部装甲、並びに両脚部装甲が負荷により損傷。これ以上の戦闘の続行はお勧めしません」

「ふざけんじゃねえぞ欠陥兵器が! この程度のことではばりやがって! これだからメス豚主導は軟弱すぎて話にならねえ!」

そもそも、静流の戦いは我流の上にとても激しい動きが多いためISでの戦闘には不向きだ。アメリカには既に「ファンク・クエイク」という肉弾戦向けの機体が開発されているが、それを除けば肉弾戦をできる機体は全くと言っていいほど存在していないのだ。それもそのはず、元々ISは武器を使用しての戦闘を重視されているからである。静流は銃を扱うことは人並み以上にはできるが、それでも主体は肉弾戦であり、トン

フアーの使用は3月末からだ。さらに言えば、静流の身体能力は千冬並でありとても普通のISでは性能を発揮することができないのだ。千冬が適性が低いながらも機体性能を引き出せるのは長年の経験からである。

「きつさま——」

「るせえ!!」

腹部を思いっきり殴られたことにより、ラウラはノックダウン。ISが解除された。

「……………クソが。完全に不完全燃焼じゃねえか」

「いやあ、でも女の割に善戦した方じゃないかな? AICで苦戦する君を見るのは中々見物だったけどね」

途端に静流の動きが止まり、ブリキ人形が発する音が聞こえてくるかのように動いて声が出た方を向いた。

「久しぶりだね、静流」

「……………何でテメエがここにいる。変態ハーレム志向」

「この後行われる機体開発の主任だからさ」

「……………」

静流は自分の頬を抓ったが、痛みがあるためこの一連の出来事が夢じゃないことを理解した。

「そうか。腐っていると脳内では理解していたが、日本はここまで腐敗していたか」

「待って。それじゃあまるでその腐敗の中で権利を勝ち得たって本気で思ってる!?!」

「そうじゃないとこの現状は理解できないっての」

「まあ、実力の差を見せつけて追い出したのは否定しないけどさ」

それを聞いた静流は大きなため息を吐いた。



早坂零司。俺が知る中で一番の天才と言っている人間だ。

だが同時に邪魔な相手には一切の手心を加えないサイコな一面も持っていて、ありとあらゆる手段で相手を封じるか潰すところがある。戦闘力的に言えばある条件下においても3番目であり、主に知略に飛んでいるタイプの人間だ。……まあ、俺ら3人中で低いっただけで一般水準に照らし合わせたら普通に強いんだけどな。

そのため、矢面に立たずに俺と悠夜が討ち漏らした相手を倒していくタイプの人間だが、スタイルは銃や大砲といった射撃型。なのに移動速度は常人よりも高く、極めていって感じた。俺が2回目でオルコットに勝てたのは何度かこいつと手合わせしていたところが大きい。

また、こいつの思考は機械工学はもちろんだが女に対しても差が出ていて、幼馴染全員を前々から全員落とすと本気で宣言していたほどだ。昔は家族以外の女に入れ込むのか理解不能だったかな。

「……………冷静に考えれば、お前の場合はそれが可能だしな」

「そーそー。やろうと思えば全学者が平伏すレベルでね」

「……………」

こいつは一体どこで知ったのかと聞きたくなるくらい濃い謎を平然と集めてくる。知らない奴は「何を馬鹿な」と一蹴するぐらいのものをだ。

「そういうわけで、勝負もついたわけだし退いた退いた。あ、ついでにそのチビも持って帰ってね」

「……………相変わらず扱い酷いな」

「静流の彼女ならともかく、そうじゃない存在に対して何で敬意を払わないといけないのかわからない。エリートって言っても所詮雑魚だしね」

その意見には同意するが。

仕方ないのでいつの間にか倒れているボーデヴィツヒと織斑先生を担いでピットに戻った。そして俺は学年別トーナメントまで謹慎することになった。

第28話 開幕！ 学年別トーナメント！

あの騒々しい展開から半月ほど経ち、とうとう6月の最終週を迎えた。

その月曜日を迎え、IS学園は活気づいていた。

(……………本当に増えてやがる)

織斑先生のおかげでオーバーホールされた打鉄のステータスを確認しながら学園内のフォルダに存在する武装を確認していると、前から聞いていた通りに武装の種類が増えていた。倉持技研からIS学園でテストしてほしいという体で俺に合いそうな奴を送ってくれたらしい。……正直、助かった。

「しかし、すごいなこりや……」

「3年にはスカウト、2年には1年間の成果の確認にそれぞれ人が来ているからね。1年には今のところ関係ないだろうけど、トーナメント上位入賞者には早速チェックが入ると思うよ」

「ふーん、ご苦労なことだな」

「珍しく意見があったな。こんなところで女を漁る暇があるなら俺に合った機体の作成をとつとと始めろつての。税金の無駄遣いだ」

「……………」

冗談を含めて言ってみたが、どうやら奴らには刺激が強すぎたみたいだ。

「冗談だ。流石においそれと機体を用意できないことぐらいは理解している」

「……………」でも、確におかしいよね。舞崎君ぐらいの実力者なら専用機は用意されてもおかしくないはずなのに……」

「所属かどこかで揉めてるんだろ。なあ織斑、お前の姉貴の友達に天才がいるだろ？」

そいつに特別製のI Sを作成するように言ってくれ」

「そんなの頼めるわけないだろ」

だろうな。というか絶賛行方不明中の科学者においそれと連絡できるわけないだろうし、何よりも元からI Sを作ってもらおう気はない。

「静流、絶対に箒にそんなことを言うなよ」

「言うか。っていうかそもそもI Sを使用すること自体が逃避だと思ってる俺がそんなことを頼むわけがないだろ」

「……………」そのことなんだけど、あの時いた君の友人は強いのか?」

…ああ、そう言えば早坂に会ってたんだけ?

「そうだな。条件を加味しなければチームで2位。加味すれば3位だな。諜報に長けているが、何よりも奴の武器は装備開発力だ」

「装備開発力って？」

「エアガンやスタンガンの改造。他には鉄バットにセンサーを内蔵して体力を知る機能を付けたりとかな。3年前の時には戦闘よりもそっちの方が光っていたがな」

実際、団体戦となると指揮は奴に任せていたしな。

立ち上がってウォーミングアップをしに行こうと移動すると、急にドアが開いた。

「失礼。こちらに舞崎静流がいると聞いてやって来たが——」

「武藤さん!？」

まさか来るとは思わなかったので心から驚いている。

「大体1か月ぶりか。停学を食らったそうだな」

「俺としては退学でも良かったんですけどね」

「あまりそう言うな。確かにIS学園は特殊だが同情はするがな」

俺たちが談笑していると、織斑とデュノアは意外そうな顔でこっちを見ていた。

「すまない。挨拶が遅れたな。私は日本政府に所属する武藤正勝だ。織斑君も久しぶりだな。…そして君がシャルル・デュノア君、だったな？」

「お、お久しぶりです」

「シャルル・デュノアです。日本の政府の方がどうしてここに……」

「……………ちよつと仕事でな」

あ、これはあの国家代表関係か。そう言えば俺が襲われた時も無理やりねじ込まれて一緒に行動する羽目になったと嘆いていたな。

「それで舞崎君とはどういう関係なんですか?」

「彼がISを動かした時に少しな。それ以降はちよくちよくと会っている」

信じられないと目で訴えてくる織斑に言ってやった。

「武藤さんは生身で俺よりも強いからな。それにコネもあるからトレーニング施設にも自由に出入りできる」

「おいおい。私は便利屋か?」

「でもここにいたらそういう所に入りにくいし本気で身体が鈍るんですよ。特に織斑千冬は忙しすぎて時間取れないし、他に強い奴はいないし、ISはISですぐに部位が損傷しますし」

愚痴を溢すと苦笑いをする武藤さん。すると彼は何か気付いて画面を指した。

「ところで、画面が切り替わっているけど確認しなくていいのかい?」

言われて俺たちはすぐにディスプレイの近くに移動して内容を確認する。織斑とデユノアはまた信じられないような目で俺を見てきた。

(まあ、驚きはするはな)

『学年別トーナメント 第1試合』

舞崎静流 ラウラ・ボーデヴィツヒ VS 織斑一夏 シャルル・デユノア

しかし俺にとっては幸運でしかない。タッグ方式だと言ってもゲームと違ってフレンドリファイアができるのだから、全員まとめて潰すことはできるはずだ。

そのことを考えながら、俺はさらに打鉄の設定を弄った。

少し時間が経ち、今俺は殺伐とした雰囲気漂うCピットにいる。

「まさか貴様と組むことになるとはな」

「精々足を引つ張るなよ」

「馬鹿言え。それはこちらのセリフだ」

どう考えても俺のセリフだと思っただがな。

「言っておくが、織斑一夏は私の獲物だ」

「何指図してんだ雑魚が。あのアホに絶望を与えるのは俺の役目だ」

「あ？」

「何だ?」

「というか、雑魚風情が俺の戦い方に指図してんじゃねえよ。」

「——朝っぱらから何をしているんだ、お前らは」

「きよ、教官!? おはようございます!」

「ああ、おはよう。それと「織斑先生」だ……お前ら、試合前だぞ。少しは気を引き締めろ」

「そう言われてもなあ。決勝まで勝ち残ったらアンタと戦えるっていうなら頑張るけどさ。こんな出来レースを真面目にやるのはアンタの弟ぐらいだぞ」

「貴様! 教官に対して失礼すぎるぞ!!」

「大体いつもこんな感じだけど?」

「そもそもこの女に体裁を取り繕う必要なんてない。」

「貴様!!」

「ボーデヴィツヒ。そこまでにしておけ。これ以上は私たちの問題だ」

「ですが!!」

「……まあ、言動から誤解されることは多いが、こいつはかなりの努力家だ。謹慎中に勝手に外に出てトレーニングしたり、総合格闘部などに喧嘩を売ったりと自分の成長に關して評価を落とすことを厭わないがな」

「……こんなクソ校に評価されても困るんだが？」

まあいいや。そろそろ時間だし先に行くか。

打鉄を展開して先に出ると、向こうも出てき始めていた。

(さてと、精々抗ってくれよ)

なにせ最初の専用機持ちコンビだ。これを突破すれば早坂のお気に入り以外は専用機持ちはいないしな。結局あのコンビは試合に出れなかったようだし、何より向こうは片方がこつちと同じ訓練機だからハンデだろうしな。



「1戦目で当たるとはな。待つ手間が省けたというものだ」

「そりやあ何よりだ。こっちも同じ気持ちだぜ」

一夏とラウラがそう言い合うと、ほとんど同じタイミングでカウントダウンが始まり、「0」になると同時に一夏が飛び出した。

「おおおっ!」

「ふん……」

ラウラが右手を突き出してAICを発動させて一夏を捕まえた。

「開幕直後の先制攻撃か。わかりやすいな」

「そりやどうも。以心伝心で何より——」

一夏は驚きを露わにした。何故ならラウラの後ろから静流が巨大なメイスを振りながら現れたからだ。

「一夏!」

「遅い!」

ラウラはすぐにAICを解除して離脱しようとするが、それよりも早く静流はラウラごと一夏を殴り飛ばした。

だが静流はそこで動きを止めずにすぐさま武装を展開、引き金を引くと同時に銃口から連続してレーザーが射出された。

「何でレーザー兵器が!?!」

「これが訓練機の特権って奴だ!」

そう叫びながら静流はレーザーを連射させた。

専用機は性能が訓練機とは違って底上げされているが、その反面武装は各国の物を使用することが義務付けられている。IS学園に所属する専用機持ちのほとんどが機体及び武装のテストを行い、且つ他国に情報を開示させないために派遣されている場合がほとんどだからだ。

だが学園に直接送られた武装は全校生徒に開示されることが多く、静流はそこから武装を移動させて使用しているのだ。

「貴様アツ!!」

「テメエの不可思議なバリアの弱点はとつくの昔にわかってんだよ!」

迫ってくるラウラに対して素早くレーザーの出力を上げて迎え撃つ静流。その時2人に連絡が入った。

『何をしている! この試合はタッグマッチだぞ!!』

「うるせえババア! 引っ込んでろ!」

「貴様! 教官に何たる口の利き方をしている!？」

「生憎俺は4歳以上は守備範囲外なんだよ!」

その言葉にどこかの誰かが傷ついたらしいが、それを全く知らない静流は容赦なくラウラに攻撃した。

「シャルル、大丈夫か!？」

「僕はね。それよりもどうする? あの状況はチャンスだと思うけど」

元々、2人は学年最強筆頭の2人が相手と知った時にかなりショックを受けていた。それもそのはず。同じ専用機持ちでありコンビを組んでいた鈴音とセシリアを倒したラウラに、そのラウラに気持ちを切り替えただけで圧倒的な勝利をした静流が相手なのだから。唯一の救いはどちらもお互いの事をよく思っていないことだろう。そこに唯一勝機があると見た2人は最初から同士討ちしてくれることを願っていた。

「もちろん行くぜ! シャルル、援護を」

「わかった!」

一夏が先行し、シャルルがそれに続く。狙いはラウラだった。

決して過小評価をしているわけではないが、2人はA I Cを脅威と取ったのである。

「うおおおお!!」

「チイツ!」

ラウラはA I Cを起動させて零落白夜を発動させながら突っ込む一夏を停止させる。だがその後ろから進行方向をズラしてシャルルが現れて撃つたことでラウラは解除して離脱を選んだ。

「！ まさか——」

「ボサツとしてんじゃねえよ」

何かに気付いた一夏だが、それよりも先に静流が蹴り飛ばした。

「一夏！」

追撃でガトリングガンを撃つ静流の弾丸の雨から一夏を庇うシャルル。

「悪いシャルル！」

「大丈夫！ それよりもボーデヴィツヒさんを！」

「わかった！」

すぐさまそこから離脱してラウラに向かう一夏。静流はシャルルにも攻撃しながらラウラ、そして一夏に向かってレーザーを発射する。だが一夏は回避してラウラには直撃した。

A I Cはあらゆる動きを停止させる機能を持つ。だがレーザーなどの光線には操縦者の力量も含め防ぐことが難しいため、ラウラは回避することに徹しているのだ。しかし今回の場合は一夏の接近とレーザーの攻撃が同時に来たため反応が遅れたのである。

「貴様らッ! 謀ったな!!」

そう叫びながら瞬時加速で接近し、一夏を吹き飛ばしたラウラ。そしてさらに接近してシャルルを、そして静流を攻撃しようとした——が、

「馬鹿言ってんじゃねえよ」

少し早く瞬時加速した静流が先に攻撃していた。

重い衝撃がラウラの腹部に直撃する。

「グガアッ?!」

とても女の子が出していい声を上げたラウラはそのまま吹き飛ばされた。

「どうやらお前は認識できていないからなあ。立場をわからせてやる——ぜ!!」

さらに瞬時加速で接近した静流は先程攻撃に使ったものをまたラウラの腹部に添えず、一度消してアツパーで殴ってから再度展開して攻撃した。

「あれは《灰色の鱗殻》……じゃない?!」

顔を青くするシャルル。そこから少し離れた場所では誤った使い方をした同類に対して顔を引き攣らせている少年がいたらしい。

その少年に調整している機体の操縦者が声をかけた。

「……あれ、何?」

「《マグナムバンカー》。本来なら銃型なんだけど、サブオプションとしてパイルバン

カーとしても使えるようにしていたんだ。女の子じゃ流石に無理だと思って封印してたけどね」

「……………余計なこと、しすぎ」

そんな会話がされている頃、静流は全弾撃ち尽くしたことで動かなくなつたラウラから離れてレンチとチェインソーが融合している武器《チェインシザー》を展開した。

「し、静流、お前…………」

「安心しろ。こいつが前にしていたようなことまではしてない」

「だからって……………」

「そんなことよりもだ、気張れよ？　ここから先は数の有利なんて関係ない。俺という強者の蹂躞が始まるんだ。精々抗え、ゴミ共」

静流がそう宣言した時だった。

ラウラの悲鳴が辺りに響き、シユヴァルツエア・レーゲンが形を変えていく。

「え？」

「一体何が…………？」

突然の変貌に驚きを露わにする一夏とシャルル。だがそんなことは静流には関係ないのか2人に攻撃を仕掛けた。

「ちよっ!？」

「待ってくれ静流! 今それどころじゃねえ!!」

「降参宣言か?」

「違う!」

「だったら戦え。それがここのルールだろ」

瞬間、静流の後ろに何かが現れブレードを振り下ろした。

「静流!」

《チェインシザー》の柄が斬られる。だが、そこに静流の姿はない。

「一夏! 上!」

いち早く気付いたシャルルの言葉に従った一夏。そこには短剣を両手に一本ずつ展開した静流の姿があった。

静流は同時に両腕を振り下ろして攻撃する。そこまでの早さについていけなかったのか、謎の機体は地面に倒れる。

「……………すげえ」

一夏は思わずそんな声を漏らす。

とても信じられなかったのだ。ISは360度の視界をハイパーセンサーで映しているが、操縦者は視界外の情報を得ることは難しい。だが静流は後ろから迫ってきた敵の攻撃を回避して逆に攻撃したのだ。

「何だ？ 新キャラか？」

思わずそう口走る静流。 謹慎中、彼はずっとゲームをしていたのでその癖が出てきているのだ。

立ち上がる謎の機体。 その姿はとても現役時代の織斑千冬に似ていた。

第29話 狂者、激突

静流がその姿が現役時代の織斑千冬だとわかったのは、謹慎中に参考としてISの動画を見ていたからだ。

それはいつかISで織斑千冬を潰すために予習として見ていただけだが、本人にとってこの状況はまさしく好機だった。

(……って言っても贗物だろうが、そこは今は置いておく、と)

静流の方にブレードが振り下ろされる。それを回避して爆弾を放った。

「うおお……って、ええ!？」

自分が飛び出した時に投げられるとは思わなかった一夏は動きを鈍らせる。すべて落とした織斑千冬に似た物が一夏に迫って攻撃した。

「——ラァッ!!」

瞬時に移動して回し蹴りを放つ静流。だが素早く対応されて離脱した。

「待ってくれ!」

もう一度攻めようとした静流の前に一夏が割り込んだ。

「何だ?」

「頼む！ アイツは俺にやらせてくれ！」

「却下だ」

無理矢理一夏を押し退けた静流は攻めようとするが、それよりも向こうから攻めてきたため一夏を持って回避する。

「邪魔だ織斑。引つ込んでろ」

「頼む！ こいつは、俺がやらなくちやいけないんだ！」

「……………そう言えば、まだ試合中だったな」

「え？ 流石にこの異常事態は——」

——ドンツ!!

太ももを《マグナムバンカー》で攻撃され、一夏は膝を付く——前に静流はとんでもないことをした。

「じゃあな」

「待て！ それは本当にゴベブバツ?!」

股間にある男の象徴に打ち込み、一夏を黙らせる。少しして泡を吐いているが敢えて目を逸らした。

「一夏!?! 一夏あつ!!」

少し反省しながら静流は戦闘態勢に入る。その後ろではシャルルが一夏を連れてそ

こちら移動していた。

「さて、待たせたな。始めようか、偽桜」

静流が偽桜と命名した相手が雄たけびを上げる。静流は突っ込み、偽桜も同じ行動を取った。

接触する瞬間、偽桜は雪片を振り下ろすが静流はそれを容易く弾いて蹴りを返す。脚部にはブレードが装備されていて、偽桜は少なからずダメージを受けているだろうがその素振りは見せない。

『舞崎、今すぐ離脱しろ。後は我々がする』

「引っ込んでろ」

『何?!』

「足手まといは下がらせろ。邪魔だ」

手首から爪を展開して雪片を受け止めながら突然通信してきた千冬にそう返しながらも、静流は攻撃を止めない。

瞬間、偽桜の姿が消えた。

(……上か!)

上に向けて銃を展開から引き金を引く一連の動作を素早く行なった。偽桜は回転して銃弾を弾き、瞬時加速で静流の後ろを回って攻撃して飛ばした。静流は壁に叩きつけら

れる。

(…………洒落にならない強さだな)

そう思いながらも、静流は笑顔を浮かべる。彼にとって好敵手——いや、サンドバッグが現れてくれたからだ。

(本当は時間をかけて戦いたいが……あまりそうも言つてられないか)

笑みを浮かべた静流はピットから次々と現れる訓練機を見ながらまた雄叫びを上げた偽桜を見て静かに唱えた。

「全装甲量子化。シールドバリアーを全身に再展開。スロットセットCを使用する」

「その判断は危険。賛同できません。その場合は3撃しか耐えません。また、武器を使用した場合の反動が身体を——」

「御託はいい。さっさとしろ」

【ですが——】

「何なら、今すぐお前を解除してやろうか。俺は生身でだつてあの存在と戦うつもりだぜ？」

脅しのもつもりだろうか、勝ち誇つた笑みを浮かべてそう言った。

偽桜が迫り、静流に向かってブレードを振り下ろす。だが手ごたえがなく、偽桜はすぐに探したが後頭部に衝撃が走つてまた地面に叩きつけられた。

「ふー。やっと楽になった」

そう言いながら静流は屈伸を始める。

その姿はIS相手には不釣り合いだ。装甲が両手両足以外はなくなっており、服装は黒いデニムパンツに白いシャツ、その上に袖なしのカーディガンベストが装備されている。両手両足に装備されている装甲も見た目は手袋とスニーカーにしか見え、一見すればこれからデートに行くような格好だが、それが静流にとつての戦闘服だった。

「特別サービスで本気を出してやるよ。感謝し——ろ!!」

そう言つて偽桜に接近する静流。偽桜も接近して横薙ぎにブレードを振り下ろすが、静流は偽桜の頭部を蹴り飛ばしていた。

「焦った。泥か。てつきり人を殺したのかと思つたぜ」

飛び散つた物を確認して安堵する。その間にブレードが迫つてきたが刀身を蹴り上げた。

「早い早い……が、俺の方がもつと早い」

すると静流の姿が消え、偽桜は上に蹴り飛ばされていた。

だが偽桜と言つても元は千冬のデータであり、そう一筋縄では行かない。次々と来る死角からの攻撃をいなしていく。そしてとうとう、女たちにとつて恐れていた事態が起きた。

「雪片が!？」

固体だったはずの雪片が折られ、静流の後ろに飛んだ。その間にも攻防は続くも偽桜が一方的にダメージを受け始める。

「とどろ——なっ!？」

咄嗟に回避した静流の顔は驚愕を浮かべていた。偽桜の折ったはずの雪片の破片が後ろから襲い掛かってきたからである。これで復活したと宣言するかのように偽桜は静流に瞬時加速で接近した。

凶刃が静流の首に迫るその時、光景を見ていた全員が驚愕した。

——ドサツ

偽桜の中からラウラが飛び出したのを、エレナ・ニーラン教員が受け止めた。

「……褒めてやるよ偽桜。お前は俺のほんの少しとは言え本気を出させたんだからな。だが、終わりだ」

次第に偽桜は形を崩していき、大きな円を作って動かなくなつた。その中央にはコアがあつたので静流は回収しようとした瞬間、泥が静流に襲い掛かる。

(……ちようどいこ)

静流はコアを上にとけると同時に打鉄を展開。泥が静流を覆つたと同時に突然のことにも呆然としていた千冬はすぐに静流の救出を指示する。

泥が徐々に打鉄の中に入っていく形態を変化させる。全員が警戒をするが静流はコアをキャッチしてエレナに放った。

「おいデュノア、とつとと出て来いよ。まだ決着はついてないだろ」

「……………あの、試合は中止なんだけど」

「……………え？ マジで？」

静流の質問に教員らが首を縦に振ったので、静流は本気で悔しがった。

私は闇を知っている。だが、これは私の知る闇ではない。

(……………ならば、これは何だ？)

闇に、そして影に生きてきたラウラ・ボーデヴィツヒ。なのに彼女はそこにいるだけで悪寒を感じていた。

まるで触れてはいけないタブーに触れてしまったように。ただ、悪寒を感じるのである。

「……………何だ……………何なんだ、この寒気は……………」

途端にラウラの周りが黒一色からどこかの家が変わる。女……………妊婦が包丁を持って子どもを抑えつけていた。

「……………アンタなんか……………生まれて来なければ良かったのよ!!」

そう言つて女は包丁を振り下ろす。だが、そこであり得ないことが起こつた。

迫り来る包丁を受け止めた少年は女の動揺した瞬間に奪い取り、肩を斬りつけたのだ。

かなり挟られているのか痛さに悶絶する。子どもはそんな女の姿を見て動揺し、深呼吸をして電話した。

場面が変わり、先程の子どもが男に叱責されていた。

「この疫病神が!!」

思いつきり殴られたのか、子どもが倒れる。

「出ていけ、悪魔が! お前のせいで2人がどうするつもりだったんだ、この人殺しが!」

教育のために叩く親はどの時代でも少なからず存在する。しかしこれはもうその領域ではなかった。完全に私怨で子どもにも暴行を加えていた。

「……………僕だって……………怖かった……………殺されると……………思つて……………」

だが、男は容赦なく子どもを殴る。子どもはその腕を掴んで噛んだ。

「ッ!? ……このガキ!」

瞬間、子どもはまたあり得ないことを起こした。近くにあった物を掴んで男の足に思いつき刺したのだ。

突然のことではわけがわからなかった男。だが、その隙が子どもにとってチャンスとなった。

「——おい、何の音——」

ドアが開き、老人が入ってくると言葉を失った。それもそうだろう。何故なら子どもが椅子を男の椅子を叩きつけていたのだから。

「静流! 何をしている!」

「……………何の用? 今僕は大人を消すのに忙しいんだけど……………」

「……………忙しいって」

老人は恐怖した。だがそれはラウラも一緒だった。

また、場面が変わった。

どこかの事務所のようなところでガラの悪そうな大人たちが悶絶していた。

「…………このガキ…………いい加減にしろ！」

1人が立ち上がってナイフを出して刺しに行く——が、少年は軽くないなして殴り飛ばした。

「……………やっぱり、大人って弱いな」

「だから、先に行くなって……………もう終わってるし」

別の少年が1人入ってくる。

「早坂か。遅かったな」

「君が早いんだよ。薬はこれで全部？」

「さあ？　後は警察に任せるよ。もう興味ないから」

そう言つて暴れたと思われる少年はどこかに行った。

それから、ラウラは繰り返し様々な場面を見せられた。どれもこれも少年がただ勝ち続けるだけの映像。もはや敵なしと言つてもいいほどだが、その勝利はどれも悲しいものだった。

だが1つ、今見ているものは違った。

——大人に、少年が蹂躪されていた

以前倒したと思われるバイク集団に乗せてもらってどこかに行こうとする少年たち。だが彼らは既に目を付けられていたのだ。

高速道路上に突然現れた大人たちに次々と捕縛されていく子どもたち。ただ一人、いつも勝っている少年だけは最後まで抗っていた。

「……………大人のくせに……………ISなんか支持したゴミのくせに……………」

そう呟くと少年は次々と大人たちを倒していく。

そして最後に現れた車から男が1人降りてきた。黒スーツに仮面を付けているその男が現れると撤退命令が下り、仮面男と少年の一騎打ちが始まった。

「大人なんか……………死んでしまえ!!」

そう叫んだ少年は回転しながら仮面の男に踵落としを食らわせようとするが、仮面の男がそれを受け止める。同時にコンクリートで作られた道路にクレーターができた。

「……………ならば」

次の手を打とうとした少年。だがそれよりも早く、仮面の男が消えて少年をひたすら潰した。

「——もう止めろ!!」

ラウラは思わず叫んで起き上がる。

「いや、まだ私は何もしていないのだが……」

「……きよ、教官……」

「学校では織斑先生だ。……まあいい。それよりも大丈夫か?」

「……………」

ラウラは沈黙を返す。千冬は嘆息した。

「……………ここは、保健室ですか? 一体何が……?」

「……一応、重要案件である上に機密事項なのだがな。VTシステムは知っているな?」

「はい。正式名称はヴァルキリー・トレース・システム……。過去のモンド・グロツソの

部門受賞者の動きをトレースするシステムで、確かあれはアラスカ条約で現在は禁忌扱

いされているのでは?」

「そうだ。だがそれがお前のISに積まれていた。巧妙に隠されていたがな。操縦者の精神状態、機体の蓄積ダメージ、そして何よりも操縦者の願望が揃うと発動するようになっていたようだ。今、ドイツ軍に問い合わせているが近い内にIS委員会から強制捜

査が入るだろうな。……それと、国からお前の帰還命令が下った」

先程まで普通に話していた千冬がどこか言いにくそうに事実を話した。

「……帰還命令、ですか？」

「ああ。帰ればどうなるかわからない。だが、ろくな目には合わないだろうな」

その言葉にラウラは顔を青くする。それを見た千冬は提案した。

「……何だったら、私が直接そうしなくてもいいように掛け合おう。ISは返還するこ
とになるが、お前は無事でいられる」

一瞬嬉しそうにするが、ラウラは心が沈んでしまう。

「……少し、考えさせてもらえませんか？」

そう答えたラウラに対し、千冬は「それもそうだな」と答えて言った。

「今日はゆっくりしている。良い返事を期待している」

そう言って千冬は保健室を出る。ラウラはそれを見送るところつむいてしまった。



「……………つまり、俺たちが負けたと?」

「はい。ただ、勘違いなきよう。あなたがではなくボーデヴィツヒさんの不正物所持のためですよ。まあ、あのようなものを見せられては誰もあなたをいさめることはできないと思いますよが」

「……………そんなにおかしかったか、あれ?」

「私か、もしくは日本政府内のある部署の人間だけでしょうね。君は以前、そこを一戦交えたとか?」

「……………おかげで全身骨折したけどな。右腕以外」

そんな話ができるのはIS学園内ではたぶん轡木十蔵その人のみだろう。つていうか、

「そろそろ突っ込むが、何でアンタがここにいる!？」

「何か問題でも?」

「:いや、後片付けとか、そういうのがあるんじゃないの?」

「ああ。基本的にそういうのは妻に任せています。先程までIS委員会の対応をしていましたから。全くあのゴミ共。完全に怯えきっていたな。VTシステムをあそこまでボコれば誰だってそうなるか」

擬態が完全に取れている轡木十蔵に俺は笑った。

「で、俺に失格になったことを知らせに来たのか。生身で戦えない奴が多いとこうなるから困りものだよな」

「その諸悪の根源が何を言うか」

「ごもつとも。ところで頼みがあるんだけど」

にしてもそろそろ暴行来るんじゃないか?

「何だ?」

「どうせ今回の不祥事であの女はドイツに呼ばれてるだろ? それに同行していいかとな。あ、パスポートならちゃんと持ってる」

「俺をまだ働かせる気か?」

「大丈夫、大丈夫。フランスには俺1人で行くから」

ため息を吐く轡木十蔵だが、頭を振って言った。

「本来なら立場的にも止めるべきなんだろうが、仕方ない。護衛に関してもこちらから手配しておく。明日で良いな？」

「もちろん！ さっすが！」

「どうせ例の件だろう。今は生徒会長が合宿期間でいないし、試合は続行させるからこつちも手一杯なんぞな。ただし、できる限り問題は起こすな」

「かーしこまりー！」

いやあ、これで何とかフランス旅行を凶らずともできるようになった。

俺は思わず笑みを浮かべる。

「じゃあ、今から早速準備するから」

「……………はあ」

さっきまで気絶していたとか信じられないくらいに、俺は全速力で寮に戻った。

第30話 忘却した目的

「わかりました。ではよろしくお願いします」

そう言つて俺は電話を切りガッツポーズをした。

交渉の席は設けることに設定した……が、

「デュノア社長とはフランス時間でこれから3日後に会うことになりました。なので先にドイツに行きたいと思います」

「ドイツに続いてフランス旅行だなんて……パスポート持ち歩いてて良かった!!」

「……………」

「……………はあ」

幸い、あのジジイは先にドイツに行くようにとセッティングしてくれているので予定通りだ。

「……………舞崎、何故貴様らがドイツに行くことになつてゐる?」

「お前の……………つていうか軍の監視だな。あと証言」

「……証言?」

「俺も意味わからんシステムと戦つたからその証言して来いってよ。巻き込まれたんだ

からそれくらいしろってな」

乗り込みながらそう説明してやる。

今回乗るのはＩＳ学園が所有するVIP用のジェット機だがジャンボじゃない。と
いうか、小型機に近い。

それに俺とボーデヴィツヒ、そして戸高満に武藤さんが護衛として同行する形となつ
ている。だがまあ、ここは空気を読んでボーデヴィツヒと同室になるが。

護衛と言つても人が襲つて来ることはないだろうし、来ても俺が率先して出るから何
の問題もない。

「俺とこいつでこっちの部屋を使うので仲良くどうぞ」

「是非そうさせてもらおうよ」

「待て。それはあまりにも非効率的な——」

「大丈夫。襲つてきたら四肢を腕いでおくから」

ぶつちやけた話、護衛なんてあまり必要ない。だが狙われてややこしいことになつた
ら面倒なので2人程同行してもらっているのだ。他国にいるって言つても日本の国家
代表と問題起こしたくないだろうし。

ドアを閉めて鍵もかけると、普通にしているボーデヴィツヒに突っ込みを入れた。

「全く嫌がらないんだな」

「……私も、貴様と話がしたかったからな」

俺は近付いて自分とボーデヴィツヒの額に手を当てる。

「何だ？」

「……熱はなさそうだな」

「私は元氣だが？」

「いや、あんな気持ち悪いことを言われたら誰だって正気を疑うだろ」

今まで殺し合いに近いことをしていたし。

「……まあな」

「……ま、少しはマシンになったみたいだからついでに言っておくが、俺は織斑千冬とは確かに同室だがあくまでも暴走の危険性があるからだ」

「……暴走？」

「まあ、ISの方に少しばかり異常があつてな。詳細は省くが戦闘力が高い織斑千冬と一緒にしておけば大丈夫という下らない理由からだ。それに年上には興味ないしな」

どうせなら年下の方が良い。……もしかして、クロエに惚れたのは背が低かったからか？

「ともかく、お前が考えているようなことは一切ない。というかそんな趣味はない」

「……教官は綺麗だと思うが？」

「まあ、それなりにだが……色々と致命的だから女性としては見れねえよ」

未だに女性に家事をすることを求める男性は多いだろうしな。

「ま、自分を助けてくれた奴に入れ込む気持ちは理解できるが精々恩師程度と思っておけよ」

「……お前にはそういうのはいたのか？」

「一応な。殺されたけど」

祖父母がそれにあたるだろうけど。

「にしても、随分と大人しくなったな。あの時の殺意はどこ行つた？」

「……今思えば、私は随分と馬鹿なことをしたと思う。勝負は最初に戦つた時に着いていたというのにな」

「あれだけ訓練をこなしてきたのに素人に負けると思つたら気持ちはわからなくもない。……ま、今は大人しく寝ている」

「……そうだな。言葉に甘えさせてもらう」

そう言つてボーデヴィツヒはシャワーを浴びる準備をし始めた。……ここだけ聞けば俺たちが淫らな関係と取られるだろうが、残念ながら俺個人はボーデヴィツヒに対してそんな感情は抱いていない。……ほとんど同じ体型をしてたクロエのことが好きな時点で色々と終わっているかもしれないがな。

場所は変わってドイツ軍本部。ボーデヴィツヒだけは別室に移動させられて俺たちは待合室みたいところで待機していた。

そこで俺はあくびをしていると、武藤さんに注意される。

「あまり姿勢を崩さない方がいい。君のことを観察している人間がいる」

「だったらさせておけよ。俺は別に構わないしな」

「……………こつちが構うんだがな」

日本人として存外な振る舞いはしてほしくないってことだろうか？ 俺個人としてはあんな奴らと同列として扱われることを考えると吐き気がするのだがな。

なんて考えていると、気配が1つ……いや、先頭を歩いている奴のせいで気付くのが遅れたがあと1人いるな。

「初めまして、ミスター舞崎。こんなところに何の用かしら？」

「……………誰だアンタ」

「私？ 私はドイツの国家代表をしているデボラ・グラウンよ。で、こつちがあなたのクラスメイトの部下のクラリツサ・ハルフオーフ。まあ、もしかしたらクラスメイト」だった」になるかもしれないけどねえ」

突然現れた女性が威圧感を出しながらそんな発言をする。

「まあ当然と言えば当然か。ドイツ軍の少佐があんな危険なシステムを持ち歩いていたとなれば問題だしねえ」

「……………あれってそれほどのモノだったのか」

「そうさ」

「……………だとすれば期待外れだな」

思わずため息を吐くと、他の奴らが信じられないという顔をした。

「どういうことかしら？」

「悲しいことに、ほかの国の代表はあれ以下なんだろう？ だとしたら、操縦者として大成したところで虚しいだけだから、やっぱり当初の目的通り適当に卒業しようかなって思っただけだ」

さて、調味料としては十分かな。

ところで武藤さん、固まってるんで落ち着こうぜ。この程度の相手ならアンタでも倒せるだろ。

「……………いい度胸じゃない。あなたがそれを言うに値する人間か、今から試してあげるわ」

「……………何で？」

「ISですよ！ 偽物ごときを倒しただけで天狗になつてあなたを叩きのめしてあげるわ！」

……………ああ、この人もそういう人種か。

何でわざわざISなんかで戦おうとするのだろうね。

「雑魚発言乙」

「は？」

「本当に俺と戦いたいというなら生身で来いよ。IS使つてとか甘ちゃんか？ いや、甘ちゃんか。生憎だが俺は、そんなクソつまらない物を使つて戦うつもりはない。何よりも——ISなんて使つてそいつ単体の実力なんてわかるわけだからさ。そんな簡単なことすらわからないんだつたらもう一度生まれなおしてくれば？」

にしても、武藤さんが無理やり俺を押しさえつけようとしているけど土下座する気ないよ。それに、今更土下座したところで時すでに遅いしね。

案の定というか俺の狙い通りというか、デボラという女は俺に生身で戦うと宣言した。



その頃、ラウラは一人でドイツ軍の統括者であり右目に眼帯をしているレイング・ブラッド・クロニクルと対面していた。

「……では、搭載されていたことすら知らなかった……と？」

「はい」

そう返事するが、ラウラは怯えきつている。相手は軍の代表でもあるが、何よりも何か見えない力で封じられている感触すら感じるのだ。

「……………そうか。やはり知らなかったか」

「はい。VTシステムの存在は私も認識しています」

「だな。私も理解するよう、あのようなグロイものを見せたかいはあった」

VTシステムの使用は一切禁じられているが、軍をはじめとするIS操縦者育成機関を担っている場所ではVTシステムの使用を禁じることを知らせることを国家代表や左官には見せることは義務付けられている。使用を禁じているからこそその対処法の1つとして使っているのだ

「処分は追って伝える。なに、心配するな。君のここ最近の活躍ぶりは聞いている。VTシステムの使用は厳禁のためかなりの処分は下されるだろうが、現階級を下げるようなことはしない」

「………ありがとうございます」

一礼するラウラに対してレイングはかなり複雑そうな顔を向けるが、聞こえてきた音に立ち上がった。

「……………やれやれ。老体がいる時に暴れてくれるとはな。どこのどいつだ…?」

「総統、ここは私が」

「…いや、私も行こう」

実際、ラウラは嬉しく思った。レイングはラウラにとって憧れの1人だからだ。

2人は總統室から出て少し移動すると、2人が激しく移動しているのを視界に捉える。その2人を確認したラウラは冷や汗を流した。

「な、何をしている!?!」

「あ、ボーデヴィツヒ。話終わった?」

避けながらラウラの方を向いて確認する静流は隣を歩いていたレイングを確認すると笑みを浮かべた。

「あ、ごめん。そこのおっさん、ちよつとこの雑魚すぐに倒すから止まってて」

言うや否や静流は攻撃を続けるデボラの懐に蹴りを入れて飛ばした。

「……………貴様、何者だ?」

「……………舞崎静流。男性操縦者でそいつのせいでタッグマッチを負けにされたって説明すれば理解できる?」

「そのための仕返しに我が国の代表を潰したというのか?」

「違う違う。その豚がちよつとウザかったから実力でねじ伏せただけ。それよりも今はアンタだオツサン。俺と戦え」

唐突だった。静流が後ろから殴られて無理矢理土下座させられた。

「すみませんクロニクル總統! この男は少々馬鹿でして……………ほら舞崎君、君からも謝りなさい」

「……クロニクル？」

レイングは静流から放たれている気配の質が変わったことに気付いた。そしてそれはラウラも同様であり、すぐに止めに入る。

「待て舞崎！ この方はこれまでのどの人間よりも強い！ お前が相手にした誰よりもだ！」

「……クロエ・クロニクル。この言葉にアンタは何か覚えがあるか？ あるなら、俺と戦え」

そこからは素早かった。

数歩前に行っていたラウラを越し、サーベルを抜いて静流に突く。静流はその突きを回避したが、頬から血を流していた。

「……聞かせてもらおうか。その話を」

「そうだな。たつぷり聞かせてやるぜ。……ただし、俺の欲求を満たしてからだ」
静流はトンファーを出して構える。

「君、今回の件はくれぐれも内密に」

「……くれぐれも、彼が希少な存在だということを忘れないでください」

正勝は耳打ちするとレイングは頷いて静流に仕掛けた。



ここまでは概ね計算通りだった。

何らかの方法でこのボスを出して、織斑先生に対する土産であるボーデヴィツヒを軽い処分です済ますように交渉する。誰でもよかったが、最初に国家代表が出てきてくれたのはありがたかった。

「中々の動きだな、少年。将来が楽しみだ」

「オッサンこそ、年の割に動く。しかも技は素早い上に力強いと来た」

防刃グローブで受け流しつつ、警戒を怠らない。というか、実力で言えばあの轡木の

爺を越えているか同等だろう。

俺は久々に会えた強敵に、そしてそれがクロエの関係者であることに喜びを感じて興奮する。しかも、かなりの歳だろうに俺同様壁を走れると来た。まったく、場所を選ばずに戦えるというのはこんなにも嬉しいとは。

片方のトンファーで受け止めても対応が間に合わないほどのサーベル捌きに後れを取った俺はかなりの力で弾き飛ばされる。

「やれやれ……あの娘をこの程度の男のために送る羽目にやるとは……ワシの目も衰えたものよ」

「……………期待外れで悪かったな。……………まあ、確かにアンタにやトンファーごときで相手にしたのは失礼だったな」

結局、あのトンファーは最近使い始めた付け焼刃でしかない。だから俺はトンファーのホルダーを闘技場らしき場所の端に投げ捨てた。

「日本に住まう鬼として、アンタには敬意を表そう。誇つていい。アンタは俺を完全に本気にさせた」

……………60%、か。

昔、俺は全身の骨を折ったことがある。俺自身が未熟者だったからというのはあるだろうが、あのクソ兄貴曰く俺の全力は体に大きな負担をかけるらしい。俺の骨折は高速

道路から落ちたことよりも疲労骨折の方のようだ。もちろん、俺はそれで全力を出すことにトラウマを持つたということはなかった。ただ、相手の情報を引き出すことや今の俺の状況を考えて、60%ぐらいが妥当と判断しただけだ。

ちなみに、俺が「僕」と言っていたことや丁寧に接していたのはそういう訓練をしていただけであり、本気を出せばボディービルダーを潰すことは容易だった。

「さて、第2ラウンドの開幕だ」

俺は地面を蹴ってジジイに接近した。



レイングが織斑千冬の出身国から来た男と戦っているという情報は駐在していたドイツ軍人にすぐに知れ渡り、ほぼ全員がその様子を覗いていたが、誰もが後に口を揃えて同じことを言った。「人間同士の戦いを超越している」と。

それもそうだろう。残像すらその身一つで出す2人の戦いだ。誰もが冷や汗をかき、確かにISでも技術が進めばそれくらいのことではできるだろうが、2人はどちらもISを使用していないのだ。

レイングがサーベルを振り下ろす。その衝撃で風が巻き起こるが静流はひるまずに突っ込み、レイングのサーベルを折ろうとするがあと一步及ばず回避される。その状態からレイングはサーベルでの連続攻撃を行うが、静流は捌いて回避をするのだ。

そのような拮抗状態から、レイングが懐から出したナイフを投げた。

——!?

予想していなかった静流は回避するも、肩など一部食らってしまった——はずだった。

「何っ!?!」

レイングが驚くのも無理はない。確かにダメージを負った静流が怯まずに飛んで足で攻撃してきたのだから。

咄嗟に身を下げ、雷を落とす。だがそれは知っている者にとっては悪手であり、すぐさま脳天に踵落としをしたのだから。

—— エアリアルオーガ

それが静流の二つ名であり、全盛期を知る者たちは揃って言う。「まるで奴はゲームのキャラのようだ」と。

それは静流が重力が存在する世界の中でも少しの間だけ滞空し、様々なアクションをこなして敵を潰していくからであり、これまで名の通った不良たちは次々と静流に対して決闘を行った者はすべて潰されていった。そういう意味では高間晴文が静流に課した訓練はある意味では実っていただろう。もしこれまで通り不良としての生活を静流が送っていた場合、とあるイギリスの代表候補生は間違いなく初日で潰されていたからだ。

特に静流には悪癖が存在する。それは——

静流は怯んだ雷を蹴り上げて姿を消す。だがあくまで高速で移動しているだけで消えたわけではないが、あまりの速さに目が追いついていないのはほんの数人だけだった。

—— ガッ!!!

その内の一人である雷は攻撃しようとした静流の動きを止めた。眼帯は外れ

ており、そこからは金色の瞳が顕わになっている。

「本来ならこの瞳は対IS用を想定していたのだが、まさか人間である君に使うことになるとは——」

「……………これだから……………これだから生身の戦いは止められないな」

—— 静流の悪癖、それは戦いが楽しすぎるあまり目的を忘れるということだ

「食らいな、しゅうは・かさねうがち衝波・重穿！」

捕まった両手を少し引き、心臓マッサージをするように押して衝撃を起こしてレイングを吹き飛ばした。

壁に叩きつけられたレイング。静流は着地し笑みを浮かべた。

「……………あのオタの癖が付いてしまったか」

どこか残念そうに言う静流だが、顔は笑ったままだった。

第31話 置き土産

あの戦いの後、俺たちはメディカルチェックを受けて傷はIS普及による不思議なワ―で直してもらった。

それから俺たちはぐっすり眠り、翌日会談することになった。

「ふう。実にいい運動になった」

「俺……僕も久々に本気で戦えて実に有意義でしたよ。いやあ、こんな強い人がたくさんいるなんて世界はまだまだ広いですね」

何故か武藤さんは心からホツとしているけど、たまには休まないといけないのではないだろうか。……最近、俺もかなり引つ張り回しているからなあ。少しは自重するか。

「……………血を出しながら戦うことが良い運動ですか?」

「そうだ。最近、ISの普及で生身で強い人間も少なくなってきたおる。彼のような物が少しでも増えてくれればこちらとしてもありがたいことこの上ない」

「それはこちらの言葉ですよ。本当に最近の女ってほとんどがISを使わないとまともに戦えない雑魚ばかりで」

「……………」

ボーデヴィツヒが冷や汗を垂らす。……冷静に考えてみれば、こいつは最初は生身で戦おうとしていたからまだ及第点だと思っけどな。どっちかと言うと防衛本能で展開したって感じだし。

「……それで、この部屋に俺とこいつだけを呼び出して一体何の用ですか？」

「……真実を話そうと思っただよ。舞崎静流、君はラウラ・ボーデヴィツヒがどうい存在か知っているか？」

「あなたや他の優秀な軍人の遺伝子の元である精子と卵子を組み合わせてさらに優秀な軍人を生み出すためのプロジェクトで作られた一人、という認識でしょうか？ 確か、遺伝子強化素体でしたよね？」

俺はかつての黒歴史を紐解きながら説明すると、ボーデヴィツヒはあまり驚きもせず言った。

「……やはり知っていたのか」

「やはりって……」

「……私は、お前の記憶を見た。両親に攻撃されている記憶と、お前が大人に対して否定的な目で見ていた記憶だ」

「………やっぱりお前も見ていたのかよ」

こいつの人生の回想みたいなのを見せられたからまさかとは思っていたが、というか

何でピンポイントで俺の黒歴史を直撃してるんだ？ いじめか？

「……ふむ。どうやら君は妹の方でも相性が良いようだ」

「……はい？」

「ラウラはクロエの双子の妹だ」

……………へー。

なるほど、双子か。それは確かに似るはずだ。あそこまで似ているのは偶然か必然かないしな。

「……私に姉がいるのですか？」

「……まあ、諸事情で死んだが」

「いや、生きている」

俺は反射的にレイニング・クロニクルに近づいて怒鳴るように言った。

「そいつは本当か!？」

「…ああ。あの子の体には発信機が備わっていてな。時折だが微弱な反応を見せている。死んでいればそのような反応が送られてくるようになっていて——」

「どこだ!?! 今どこにいる!?!」

「待ちたまえ。今はアメリカの方に移動しているようだ。ここから追うのは難しいだろう」

「じゃあその受信端末を——」

「落ち着きたまえ。これは私の物だ」

ドサクサに紛れて借りるのは失敗した。次はどんな手で行くべきか考えていると、レイングのオツサンはおかしなことを言いだした。

「さて、ここからが本題なのだが……舞崎静流君、君はラウラと婚約しないか？」

頭は大丈夫なのだろうか？

僕は思わず本人にそれを聞きそうになった。どうしてそこでそういう話が出てくる？

「……姉がダメなら妹をつという考えは好きじゃないんだが……つていうか、それじゃあ俺にドイツに付けてってことか？」

「……流石だな。もちろん、それなりの待遇は用意するつもりだ。例えば、彼女を大尉に降格して君を中佐にするか、もしくは君を中佐待遇で彼女が所属する部隊の隊長をしてもらってもいい」

「……どっちかと言うと、俺は一番槍向けだと思うんだが」

「以前は人を率いて不良共を倒していったと聞いたがね？」

「喧嘩の集団と軍人の集団を一緒にすんな」

思わず口調が外れてしまったが、この男の発言は突っ込みが必要なはずだ。

「なに、人を率いる手段はラウラから教われればいい。それに部隊員は女性で構成されている。良い話ではあると思うがな？」

「絶対嫌です勘弁してくれ」

手を出すとかの話ではない。そんな状況で受け入れられるかとかの問題でもなく、そんなことで責任を負いたくないのだ。部隊員を殺さないように指揮を執るとか、どつちかと言えばそれは早坂の得意な領分だろうし。

「そこまで嫌かね？ 一応、年上から年下まで様々なタイプが部隊員にいるのだが——」

「悪いが俺はどちらかと言えば単細胞なタイプだ。暴力的な意味で手が早いし、やめておいた方がいいと思うぜ」

どう考えても、先陣切つて敵を潰すか混乱させるかの二択しか存在しないんだが。ところで、ボーデヴィツヒはさつきから何でだんまりなんだ……？

「……………」

あ、ヤバイ。混乱してる。

にしてもリアルで頭から煙を出している人間なんて初めて見たわ。

「……………ボーデヴィツヒ？ 大丈夫か？」

「うむ……………少しわからないことがあつてな」

「わからないこと?」

「そうだ。その、お前が知っている遺伝子強化素体と私は姉妹で、何故かクロニクル総督はその強化素体の事をご存じで……」

「……OK、何がわからないのか大まかにわかった」

もしかしてこの子は実はかなりのアホの子ではないのだろうか?

「ぶっちゃけると、この総督さんとお前は親子だ」

「……馬鹿か貴様は。姓が違うだろう?」

馬鹿って言われた。……確かに戦闘馬鹿って意味なら正解かもしれないけど、よりもよって馬鹿に馬鹿って言われたらダメマジキツイ。

「あー、そのだね。バレているようだからこの際言うが、私と君は実の親子だ」

「総督、流石にその冗談は笑えませんか? それに確か総督は結婚していないと聞き及んでいますか?」

何故か自慢げに語るボーデヴィツヒに、俺は説明してやった。

「……だから、このオッサンはその計画で遺伝子を提供していた。で、この反応だとおそらく好きな人の遺伝子が使われていたとかだろ」

「……………何故わかった?」

「冷静に考えてみたんだよ。普通に考えて、そういうのは上層部が決めて優秀な軍人の

遺伝子を使用する。精子に限らず髪や血液を使っているとかな。でもそんなのは自分のあずかり知らぬところで普通なら誰だつて拒絶する。可能性があるとすれば好きだった奴か気になっていた奴か……軍人であるとしたら、昔コンピを組んで惚れていた相手が戦死して、遺伝子情報を取得した国に自分の遺伝子を使うように恐喝……というところか？ 恐喝云々は定かではないが、やろうと思えばできるつてところか？」

まあ、15年前のドイツ軍がどんな状況だったかは知らないが、おそらくなくもない話だ。というか、わかりやすいほどに別の場所を向くのは子どものすること、オッサンがしても気持ち悪いだけである。

「……その様子なら凶星のようだな」

「ふっ。認めたくないものだな。若さゆえの過ちというものを……」

何でそんな有名なセリフを引用しているのかはさておき、だ。

「そうだ。私はかつて愛した女の遺伝子を勝手に使った。本来なら処罰されることだが、軍はそれをしなかった」

……そりゃあ、あれだけ強かつたら誰だつて処罰できない……抵抗すれば銃弾すら斬りそうな男だからな。

「あの時、私は相手を失ったばかりだった。レジスタンスを蹴散らしていたらそんな話を聞いてな」

思わず俺は内心でそのレジスタンスに黙禱を捧げた。

「で、その相手の性は「ボーデヴィツヒ」だった、と」

「そういうことだ。きつと私は死んだら責められるだろう。だが、どうしても彼女との子どもが欲しかった……というか家庭を持ちたかったんだ」

……そんな理由で生み出されたら、流星にボーデヴィツヒでもキレル——なんてところではなかった。

「あ、体調が悪いようなので失礼しますね」

俺はお姫様抱っこしてすぐさま総督室から離脱。放心状態になったボーデヴィツヒを介抱することにした。その前に、オッサンには言っておくことがあるな。

目を覚ましたボーデヴィツヒはまだ混乱しているようで、憧れの総督が自分の親だということを受け入れられていないらしい。

「私は……これからあの人とどう接すればいいのだ……」

「誰もいないところで」「パパ」もしくは「お父さん」が有効的じゃないか?」「何故だ?」

「俺の友人曰く「父親は「パパなんて大っ嫌い」と言われるのが一番ダメージが来る」らしい」

あくまで、とある引きこもりのオタクに聞いた話だけだな。

「ま、別に気にしなくていいんじゃないか? これで辞めさせられることはなさそうだし」

「そういう問題か!」

「これは経験則だがな、伝手というものはプライドを持たずに使った方が良いいぜ。文句があれば暴力で黙らせればいい。世の中つてのは所詮、やりたいことを実現させたもん勝ちだしな」

特にIS関連じゃ戦闘能力は高い方が有利だしな。そういう意味ではこれまでの人生は無駄になっていないだろう。

「……だが、所詮私はISを暴走させてみんなを危険に合わせた。その責任は取らねばならない……だろう?」

「……ああ、そのことなんだけど、ちゃんと保険をかけておいた」

いやあ、まさかあのじーさんがそれに快諾してくれるなんて思わなかったな。

その頃、IS委員会はVTシステムの件についてラウラ・ボーデヴィツヒ並びに証人として舞崎静流を超越すように言ったのだが、IS学園側は全面拒否した。というか、せざる得なかったのだ。

何故なら兩名とも既にドイツに渡っている。こういうことになることは十蔵も予想していたので予め2人を中々手の届かない場所へと移動させたのである。

委員会の面々は十蔵の正気を疑ったが、次の言葉に全員が閉口する。



「ちなみにですが、舞崎君から書状を預かっています。この場で読み上げるように言われていますが？」

「そんなもの破つて捨てなさい！」

「では読み上げますね」

委員の命令を無視して十蔵は読み上げた。

「『拜啓、ＩＳ委員会所属の方々。この書状の内容を知っているということは私は既にヨーロッパに渡っているでしょう。あなた方がこれを聞かされているということは、おそらく今回のＩＳの異常事態の件について話し合っていることでしょう。その件でおそらくラウラ・ボーデヴィツヒを処分する方向に話が向かっているでしょうが、今回の件は綺麗さっぱりなかったことにし、ドイツの機体の整備不良による暴走だと処理すること。この要求が呑めない場合ＩＳ学園の生徒をかつての仲間たちに売り、ＩＳ学園を酒池肉林の乱交現場にしてインターネット上にアップロードします。そもそも、私の意見を無視して相手の機体が暴走したというだけで勝手に失格したのですから、それくらい提案を呑むべきです。それを拒否するというのなら、私は今後ＩＳ学園に異常があらうと喜んで女たちのレベルの低さを嘲笑つて見学します。そもそもこつちにはクラスメイトだろうがなんだろうが雑魚を助ける義理はないし、男より強いんだから別に生身だろうが男相手にタイマン張れるはずなのに、俺が襲われるとなれば大体銃火器所

持だし複数だし、挙句弱すぎて話になりません』……だ、そうですよ。ま、彼の考えは理解できませんがね。確かに今の女は昔以上に弱すぎる」

十蔵の言葉に主に女たちが舌打ちをした。その音が聞こえた千冬は内心怯えながら十蔵の表情を伺う。

「この条件を呑めと？ あなた方よりも上である格上に？」

「立場では、でしょう？ 少なくとも彼はIS学園の現状に嘆いているのは確かであり、我々も彼が敵に回るのであれば相応の準備が必要です」

「相応の準備？ たかが一生徒如きに準備がいるというのか!？」

「かつて恐れられた轡木十蔵ともあろうものが、毫碌したな」

すると十蔵が着ているツナギから軽快な音楽が鳴り響いた。一言断りを入れた十蔵はすぐに取り、軽く相槌を打つと笑った。

「先程、舞崎諍流がレイング・クロニクル氏に勝利したという報告が入りました」

その言葉に全員が驚いた。

レイング・クロニクルの名を知らない人間はIS委員会にまずいない。男として轡木十蔵に並ぶ危険人物であり、かつてたった一人で、そしてサーベル一本で大規模なクォーターを鎮圧したという活躍をした男である。一般的に剣使いでは千冬の名が挙げられることが多いのは、「モンド・グロツソ」という公表された舞台で活躍したからである

が、それはあくまでも表の話だ。

「そう言えば彼はこういうレポートも作成していましたね」

笑みを浮かべながら十歳はパネルを操作していくつかのファイルを見せる。どれも「IS学園の生徒が弱い理由」や「織斑一夏程度に専用機を与えられているのに俺にないのは上の人間がアホだから」などと明らかに特定の組織を馬鹿にした内容が書かれているものがあるが、その中に1つだけ面々を震撼させるものがあった。

——そもそもVTシステムをドイツが持っていて得があるのか？

同じく開いた千冬はその文章を読んでいく。

『ラウラ・ボーデヴィツヒはこれまで出会った代表候補生の中ではかなりマシな部類に入るだろう。セシリア・オルコットや凰鈴音とは一線を画していて、場数を踏んでいるためか咄嗟の判断力に優れている。AICという1対1による戦闘ではほとんど無敵を誇る特殊兵装を持っていることから彼女本来の戦闘力以上の能力を見せているとも言える。また、性格に多少の難はあるが精神面もしっかりとしており、ISという兵器を扱うための心構えが他の女生徒とは違うのも好点ではある。そんな他国の代表候補生を倒したドイツの金の卵を早々ドイツがVTシステムを組み込むだろうか？ いや、ない。他国の代表候補生に勝ったという証拠があるため、政府がわざわざ捨てるという選択を取ることは難しい。彼女の存在を疎ましく思う候補生の線もないことはないだ

ろうが、VTシステムを用いている以上、可能性は限りなく0に近い。故に、ドイツではなくドイツの発言力を削ごうとする他国の仕業と断定する』

断定……つまり静流はドイツではなく他国が怪しいと言っているのだ。

「15歳にしてこの推理力。私とて疑問ですが、何故彼が放置され続けているのでしょうかね？」

「……………だから、あなたは舞崎静流を自由にさせている、と？」

委員の1人がそう尋ねると、十蔵は笑みを浮かべた。

「ええ。それに、これはあなた方を守るためでもありますよ」

「……………何？」

「彼の身体能力は織斑先生に匹敵しています。彼にしか反応しないコアを持っていることでいざという時のために織斑先生と同居という体で監視下に置いています。おそらく来年には彼女を超えているでしょう。今のままでも女権団を葬る力を持ち合わせていると言っても過言ではないくらいの戦闘能力があることはクロニクル氏を負かせたことで証明済み。ですがあなたは権力を盾に無理矢理連れて行こうと思つたので敢えて彼がしたいようにさせています。それとも、あなた方の中で彼を止めることができるのでしょうか？」

その質問に全員が沈黙。さらに静流のレポートによりその場にいる全員が疑心暗鬼

となり、会議はお開きになった。

第32話 フランス遠征

協議の結果、ドイツのことは保留となるがやはり国内での争いという線は消えていないためしばらくはドイツ国内での捜査を行うようだ。それによつてかなりの被害が出ると思っていたが、逆に感謝された俺は対価として金をもらうことにした。

「……にしても……もう少し張り合いが欲しいな……」

「そういう点でラウラは……合格かな……?」

「……妥協点としては……だけどな……今後強くなることを期待……する……」

「……そうか………にしても……まさかこんなことを……毎日しているとは……」

まあ、身体を鍛える点では最適だろ? 丸太を持ってスクワットは。

「それでもしないと強くなれないからな」

地響きがしたけど気にしないようにする。……遠巻きに見ているのはドイツ軍人だろうか? 俺と目が合うと逃げて行つたが。

「んで、これを斬ればいいのか?」

「そうだ」

「了解つと」

俺は大剣を持って軍人たちのトレーニング道具を作るために斬った。

ラウラの一件から夜が明けた。

IS委員会は所詮アラスカ条約に加盟している各国の集まりであり、それぞれ思惑が存在するのは目に見えていたから「もしかしたらドイツを消したい他の国が行ったことで、次はお前のところかもしれないよ?」という意味で書状を用意したらあら不思議、それぞれは牽制しあつてとりあえずはドイツを調べるといふ形に落ち着いたのだ。

ラウラに対する質問は2、3あつたが、特に問題はなかつたこともあつて「ラウラが意図的にVTシステムを持ち込んで発動させた」という線もなくさせる。もちろん俺も「仮にそうだとしても俺の活躍によつて沈静化したんだから無能は黙つてろよ」と「じゃあアンタら、織斑千冬に勝てるのか? だつたらテメエらの中から代表者を選べ。俺が直々に戦つてやる」とそのまま言つたら全員が沈黙した。うーん。やつぱり「五体満足になるようには手加減してやるから」と言つたのはマズかつたのだろうか?

「で、次はフランスなわけだが、ラウラと戸高はお留守番な」

「な、何故だ!?!」

「ちよつと待つてよ!?! それはいくら何でもあんまり——」

「その代わり引き続き戸高と武藤さんは同室——」

「任せなさい!」

別にどうでも良いんだけど、学生に簡単に操られる国家代表ってどうなんだろう。

ちなみにドイツとフランスは近いけど距離的には遠いので飛行機で移動中である。

「……………ストレスで吐きそうだ」

「だったら俺が相手になろうか? 性欲は戸高で発散すればいいと思うけど?」

「君は弱いから嫌だ」

「OK、空中戦で相手してやる。表出ろ」

飛行機の上を果たして空中戦というのかはともかく、俺は武藤さんに喧嘩を売った。

「……………そんなことをしたところで意味はない。で、今度も勝算はあるのかい?」

「まあな。具体的に言えばデュノア社長と友人になる」

「……………友人に、か? 話を聞けばその男がシャルル・デュノアを男として侵入させた元

凶なのだろう?」

道中、盗聴器がないことは確認してから軽く今回の遠征のことは説明している。なので情報は共有済みだ。

「そうだな。ま、おそらく政府も繋がっているからせいづらとも友人になるが」

「? 話がイマイチわからないが…………」

「ま、この際ぶっちゃけるか」

俺は笑みを浮かべて説明すると、3人は驚いた。

場所は変わってデユノア社。戸高満は「女の子が生まれた時の予行練習」とか言ってるウラとシヨツピングに出かけた。……ま、ラウラは化粧とかしてないけど綺麗系だし、武藤さんも戸高も整っているから美形が生まれてもおかしくはないだろうけど。

なんて思いながら最上階の待合室で俺は座り、武藤さんが立って待機していると、秘書と思われる女性が3人の男たちを連れてきた。武藤さんからあらかじめ情報を得ていたからその人たちが今回のターゲットだということはわかった。

「初めまして。本日は忙しい中一学生の私、舞崎静流のためにお集まりいただきありがとうございます。こちらは私の護衛を務めている武藤です。ただの動く置物程度と思っただけで構いません」

「全くだ。学生が学校をサボりこうして我々を呼び立てるとは、君でなければ追い返し

ていた」

残り2人はそれを賛同するような態度を取る。

「それで、君が我々フランスに所属したいという話だが。それは本当かね？」

「ええ。私は強いということになっていますが、それでも今は所属を持たぬ人間。そのままの立場でしたら流石に危ういかなと思つて相談に来た次第です」

「ほう。だがその必要はない。我々は既に男性IS操縦者を獲得したも同然だからな」
『何で男の振りなんてしてたんだけ？』

『それはその……実家からそうしろつて言われて……』

『うん？ 実家つて言つてデュノア社の——』

『そう。僕の父がその社長。その人から直接の命令なんだよ』

「で、お聞きしたいのですが、誰が男性操縦者だつて？」

デュノア社の社長であるアルベール・デュノアは顔を青くした。

「これは一体どうことだ!？」

「お待ちください。これはその男が我が国に取り入ろうとするために何らかの脅迫をした可能性も——」

「あーあ。これじゃあフランスは大打撃だなあ。まさかおいそれと出るわけがない男性操縦者が出て小躍りしたんだろうなあ。イグニッション・プランだつて？ あれに参加

できないからって焦ったんだろうなあ。不祥事にしても国としての信頼が落ちるだろうなあ」

わざとらしく騒ぎ立てる。3人は揃って顔を青くするが俺は構わず続けた。

「ま、本来なら委員会でも騒がれて最悪クビ。デュノア社は解体待ったなし。これを世界に公開してもいいかな？　良いよね？」

「だ、ダメだ！　ダメに決まってるだろう!？」

「答えは聞いてないけど？」

全くなんて悪役ぶりだ。正々堂々なんてものは存在しない。だけどこれは計算だ。

……………あからさま過ぎるのは自覚しているがな。

「ま、条件を呑むというのならこれは消してやる」

「……………元のデータもだ」

「それは流石に譲歩できないな。今これを消すだけで手を打ってくれ。なに、アンタらにとつても悪い話ではない。選んでもらえるか？　一先ずはこれを消すことを承諾して俺の提示する条件を呑むか、実力行使して俺を倒してデータを吸い出すか。2つ目は止めておいた方が良好いぜ。ドイツじゃ楽しんだから最初からある程度の加減しかできなくなってるからな」

それでもISを出ささないだけマシだろうけど。

「……その条件とは何だ？」

「1つ目は俺に今回の件での金を支払うこと。そして2つ目は俺と友達になること。最後に、ある物を用意してもらいたい」

話は出発前に遡る。

轡木十蔵と話をしていて、フランスのことをどうやって回避するかというものだ。

「今回の件に関わっている人と友人になる、か。それで、どうやって理由を付けるんだ？」

「実は面白いことに俺は以前フランスに行っているんだ。そこでたまたま休憩していた重役と話をして盛り上がって文通していたことにする。公式発表をしてから調べても後の祭りだしな」

「……………それで？」

「文通していた時に、「女たちは恋愛に花を咲かせたりしていますが、最近俺のことを

狙ったりする人が多くて困ってるんです」という文を送ったことを説明する」

「……はい？」

「だけど文通で話している以上、どうしても時間はかかる。だから向こうは先に手を打ってサブライズとして俺を孤立する状況を作らせる。「1人になっているところよく襲われる」とすれば、後からそのサブライズとして贈られた人間が護衛してくれる寸法であり、男だつたら織斑一夏に接触できてさらに俺が孤立している状況を作つて反乱分子を生み出しやすい。アンタはこう切り出してくれてもいい。「いずれ研究素体になるであろう男を女の下らない嫉妬で潰されていいのか」ってね」

俺でも結構ガタガタな気がするが、単細胞な俺だとそれくらいしか出てこない。

それでも実際、実行者をあぶり出す方法はそれくらいしかない。

「だからアンタにはデュノアが織斑一夏のデータを盗んでいないことを調べてもらいたい。ログかなんかを調べることはできるか？」

「……できますよ。むしろ、秘密裏にしてはいますが常時各専用機持ちの機体にアクセスして怪しい動きをしているかを調べていますから。ああ、ご心配なく。通常の操縦データなどはそのまま放出していますし、あなたの場合は全く取得していません。要は通信を一度こちらに送ってもらい、関所を通せると判断した場合に本来のアクセス場所に移動させていますから」

IS学園を守るための防衛策、そう考えた方が良さだろうな。

普段は何でもない情報はそのまま流しているが、もしIS学園に害を成そうとする動きがあれば潰すか。

「こりゃあ、学園で何か悪いことはできないな」

「する気もないでしょう?」

「まあな。俺の目的は戦うこと。戦って強くなれば、あんな思いはもうしなくていいだろうからな」

それが何かを察したのか、轡木十蔵は俺に優しく手を置いてくれた。

そして現在。轡木十蔵に説明したことは思いのほか受けが良かった。

「確かに、我々の信頼は落ちることはない。………だが」

「勘ぐられる可能性はある、か。即興だと難しいし、質問パターンはいくつか考えておく必要がある。だがここには俺がいるんだから打ち合わせは容易だ」

ま、道筋は立てたからここから先は大人の戦場だ。

「……………大筋は理解した。また、このような提案をして我々が助かるヒントを提供してくれたことを心から感謝する」

「勝手にしたことに対しての不満はあるだろうが、その処理はそつちで頼む」

「それくらいはお安い御用だ。……………それで、君が先程言っていた「あるもの」とは何かね？」

向こうからそんな話が出てくるとは思わなかった俺は少し意外に思った。

「……………てつきり、俺を捕らえるかと思っただぜ」

「そんなことをして録音データを流されては困る、ということもある」

「正直で何より。ま、そう身構えることじゃねえよ。俺はただ、アンタのところの機体のデータ……………というよりもライセンスが欲しいんだ。もちろん無料で今後もしライセンス料の支払いは無し。もちろん部品の注文でかかる費用も一切なし、だ」

「……………その費用は委員会から出るが？」

「やっぱり注文の費用の件はなかったことにしてくれ」

俺が払わないなら金はジャンジャン使うさ。他人の金でたくさん買い物できるのは幸せの極みだな。

「貴様……………」

「黙っている。もちろん大歓迎だ。サービスとして、君はラファール・リヴァイヴの装甲一式を送らせてもらおう」

「できれば前のも欲しいかな」

「もちろんだ」

本当は羽だけで良かったんだが、古いのを知って新しい発見があるかもしれないもらっておいて損はない。

「待ってください！ それではこちらが赤字です！」

「それがどうした？ そもそも、そちらが成果を出せないことを苛立つて暴走したのが原因だろう！」

「……………それが嫌なら、デュノア社の暴走が原因だというのを入れようかな」
小さく呟くように言うと、案の定震え上がって契約成立となった。

その会議はとりあえず円満に終わり、俺たちは予約していたホテルに向かおうとした。だけどその前に、

「で、何か用？」

「ナイスタイミングだな。そろそろ私も暴れようと思つてね」

さつきから見ていた危ない奴らには「退場願うか。」



その頃、服屋に来ていたラウラはため息を吐いていた。

これまでラウラは軍の中で育っていたこともあって世間には疎い。特に異性に褒めてもらうために着飾るということは理解できず、綺麗ではあるが服を買うのが何が良いのかわからない。

(……………私がこういうのを着れば、少しは私の方にも向いてくれるだろうか…………)

とはいえラウラにも知識はあり、今回静流のおかげで助かったことは理解していた。だが、ラウラは今回の件で静流に振られている形であり、心のどこかでそれを感じてい

るラウラは気持ちが悪く落ち込んでいる。

「? 何か買わないのかい?」

「……まあな。私はこういったものは疎い。それに、着たところで今更だろう。逆に聞くが、何故貴様は着飾ろうとする?」

「そりやあもちろん、好きな人に振り向いてほしいからだよ」

「……あの男か」

武藤正勝。ラウラにとってあまり知らない人物であり、数日行動を共にしているがあまり良い印象は抱いていない。

「今のあの人は女性に頭が上がらない、そこらにいる男だと思ってるだろう?」

表情から読み取られたラウラは少し顔を背ける。

「ま、そう思うのも無理はない。実際同期の人間に言われたよ。「あんな男に本気になるなんて趣味が悪い」って」

「……ならば、何故あの男を思うのだ?」

「顔、というのもあるよ。でも、あの人は本当に強い。……本当に今の女はどうかしていると思えないけどね」

「……どういう意味だ」

「私はね、一度あの人に勝負を挑んだことがあるんだ」

「……確か、貴様は近接もこなせるんだったな」

戸高満の機体「打鉄射型」はブルー・ティアーズ同様遠距離型だ。だが、満は近接戦もこなすことができ、シャルルと同じオールラウンダーでもある。

「ま、近接専門には流石に後れを取るけどね。当時私はあのクソアマ……織斑千冬に負けっぱなしでね。どうにかして近接戦でも強くなりたいって思ってた彼が所属する場所に行つて師を探して出会つたのが彼だった」

「……………一目惚れ？」

「ううん。あっさり承諾したからまさか体目的ではないかと疑つたこともあつたけど。ある日私の存在を目障りだったからつて話だけど、ナイフで刺されそうになつたところを助けてもらった」

「……………よくある話だな」

「本当は私でも対応できたと思うけど、ともかく早かつたんだ。私に来るはずのナイフはコンクリートにぶつかつて折れたと思つたら、その人の首に向けていた。そこから興味を持つてお礼と称してデートしたら惹かれて。それに経歴とかも申し分なかつてそういうのを重視する親にも好評。……本人はまだ私といることに抵抗あるみたいけど、いつか落とす！」

惚気始めた満に対してラウラはため息を吐いた。

「で、君はどうなんだい？」

「どう、とは？」

「舞崎君のことだよ。たぶん、あの子は警戒心が強くて攻略するのは至難の業だけどその分のリターンはある」

「そう宣言する満にラウラはため息を吐くが、誰もいないところで無意識に顔を赤くした。」

第33話 ブチ切れるのも仕方ない

ホテルに帰るとボーデヴィツヒが買った服を着て遊んでいたことが印象的だったが、それは同時に向こうが大変なことになっているという目安にもなったのである意味助かった。顔を赤くしていたのがクロエとダブったせいか、気が付けば頭を撫でていた。

そして、必要なものを受け取って帰国した俺に待っていたのは拳骨だった。

「拳骨を受け止める奴があるか！ 大人しく受ける！」

「アンタの攻撃は遅すぎるんだよ」

「そうか」

武藤さんの拳骨は痛かった。

「全く。向こうに行つてから君はやりたい放題しすぎだ」

「それもこれも、IS学園にまともに俺とやり合える相手がいないのが悪い」

「……1人いるだろう」

「やり合えるつてことは、鍛え、戦える相手つてことだよ。ああいうラスボスを倒すまでのレベルに俺は達していない」

そう、まだ足りない。

場合によってはあのジジイが俺の敵になる場合だってあるんだ。そうなれば今の俺なんて完膚なきまでに叩きのめされるだけだ。

「まだ足りないんだ。向こうじゃ1人を除けば雑魚しか相手していないからな。いや、あのジジイのレベルを考えれば武藤さんたちの組織を壊滅させないと話にならない……」

「……………それはすごく物騒だな」

「あの、流石にそれは困るんで、この女で勘弁してください」

そう言つて戸高は織斑先生を差し出した。

「……………でも弱いしな」

「ならば今度本気で相手をしてやろう。その減らず口を二度と利けなくしてやる」

「それは楽しみだ。その時は本気を出しても良いんだろう？」

「……………それで君は1度長期入院していたよね？」

「中学の時は体ができていなかったから。今なら大丈夫ですよ」

「今も禁止だ」

俺はあからさまに嫌な顔をするため息を吐かれた。……………だつてえ。

「……………相変わらず苦労しているようだな、武藤」

「中学の頃は問題児が3人いたからな。……………ラウラちゃんが大人しくて助かった」

「待て。私も問題児に含まれているのか!？」

「……委員会の仕事を放って篠ノ之と遊びに行っていた奴を問題児以外にどう表現すればいい?」

その言葉に俺は顔を引き攣らせた。というかこの教師、一体何をしているんだ……。

「それはだな……」

「まあ、そんなことはどうでもいいから教室戻っていいか?」

「ああ。そろそろHRも終わる時間だろうしな」

武藤さんがそう言うと、IS学園に爆音が起こった。



話は数分に遡る。

投影ディスプレイではシャルル・デュノアのことに取り上げられており、実は彼は女性でありIS学園に男として入学させたのはフランスからIS学園に入学した生徒が男性操縦者が入学されたことによつて目的を見失つているということがとある男性操縦者によつて聞いたので、その調査並びに撒き餌として男装させて入学させたのだという。

『特に昨今では女性による男性に対する風当たりが強く、場合によつて過度な行動を起こす人間が出てくるかもしれない。そのため我々はフランス人がそういった物に加担しないために抑止力として現在候補生の中でも高位に位置するシャルル……いえ、シャルロット・デュノアさんを派遣しました。幸いなことに我が国の人間がそう言ったものに手を染めた者いなかったのですがね』

『ですが、彼女はあの織斑一夏君と同居していたのでしょうか？ 会社独自でデータを取るなどはしなかったのですか？』

『はい。IS学園の学園長には既に事情を説明していたので、そのようなことを行った場合はすぐに確保し行うべき処置をして構わないと最初から言っていましたので』

『ま、最初から信頼の足る人物に行かせましたので。データもIS学園から委員会に渡っています』と説明する担当。そこまででいいと判断したのか、真耶はテレビを消して説明した。

「ということで、デユノア君はデユノアさんでした。みなさん、仲良くしてあげてくださいね」

「よ、よろしくお願いします」

当然、シャルル改めシャルロットもこのような状況に内心焦っていた。千冬にすべてを打ち明けようと話したら急に別の場所に連れて来られて女子の制服を渡されて詳細を説明からである。

『少々苦しいがな、お前はフランス人の動きが歪んだ方に向かっているかを確認するため「男」として入学し餌になった、ということと今日から女として通え』

『え? どういうことですか……?』

『知らん』

『知らないんですか?』

『そうだ。急に学園長から話を聞いてな。IS学園の制服はカスタムできるようになっているから、後でデザインを描いて持ってこい』

そう言っただけで千冬は出て行った。シャルロットから見てかなり疲れている風だったの

で忙しいのだろうと自己完結したのである。

だが、他にも問題があった。

「じゃあ、デュノア君って女……なの……?」

「おかしいと思った! 美少女だったのね」

「……って織斑君、同室だから知らないってことは——」

「ちよつと待つて! 昨日って確か、男子が大浴場使ったわよね!」

そう。これまで男として接していたため質問攻めにされる可能性が残っているのだ。もつとも、それだけじゃないのだが。

「一夏あッ!!」

ドアを思いっきり開けて乗り込んでくる2組のクラス代表。顔の各所に血管が浮かび上がっている。

「死ね!!」

そして容赦なく衝撃砲を展開して一夏に発砲した。

爆音が響く。一夏は自分が死んだことで様々な走馬灯が見えた気がしたが、やがて鈴音の激しい息遣いが聞こえてきたので生きていることに気付く。

「全く。代表候補生が周りに人にも関わらず容赦なく撃つとはな。私が言えたことではないが、少しは立場を考えたらどうだ?」

「あれ？　ボー……ラウラ？　そう言えばここ数日どこにもいないって千冬姉が言ってたけどどうしたんだ？」

「ふむ。少しばかり帰国していた。それと織斑、転校初日に逆恨みして殴って済まなかつた」

頭を下げるラウラに困惑する一夏。ちなみに彼が「ラウラ」と呼んだのは名前が言いにくかつただけである。

「いや、その、急にどうしたんだ？」

「考えてみれば、貴様のような馬鹿で愚鈍で鈍感でアホで弱くて弱い一般人がいざという時のための対策をしている方が間違っていたんだ」

「それ本当に謝ってるのか!?　というか何で弱いつて2回も言った!？」

急に飛んできた罵詈雑言に涙目になる一夏。

「それと、嵐にオルコットも悪かつた。いくら織斑をおびき寄せるための餌で予想外に弱かつたとはいえ、ルールを超えてサンドバッグのように殴つたのはこちらに非がある」

「あなた、それで謝っておられるつもりですの?!」

「ふむ。舞崎静流が言うには「一応雑魚に謝っておくべきだが、ちゃんと毒を吐いて線引きする必要がある」ということだ。毒というものは罵倒と教わつたから早速実践してみ

た」

2人の怒りが静流に向いた瞬間である。

一夏はそこで疑問が湧いたが、それよりも早く静流が現れて殺気を放ったので咄嗟に後ろに逃げる。

「で、何でまたI Sを展開してるんだ？」

「そ、それは……一夏とデュノアと一緒に風呂に入ったから……」

「……………そうか。でも、I Sを展開するのは違うよな？ それとも織斑が貧乳かつ魅力ゼロのお前にセクハラでもしたか？」

「殺すわよ？」

「OK。だがここはアリーナじゃない。そして俺たちには拳がある。I S以外にも武器を使う方法も知っている。後は、わかるな？」

満面な笑みを浮かべる静流。そんな時に鈴音に希望が湧いた。



「そこまでだ。嵐、今すぐI Sを解除しろ」

「待っててください織斑先生！ 私、死にたくありません！」

「だったら最初から展開するな。それとデユノア」

「は、はい……」

「I Sを勝手に使用した馬鹿」を正義の名の元に制裁を加えようとしたら、織斑先生がその邪魔をしてきたので俺は舌打ちをした。

「まさか貴様、変なことはいないだろうな」

「織斑先生、それはこれを使えばわかることなのでは？」

俺は嵐の装甲を掴んで言った。

「……具体的に、何をするんだ？」

「まず嵐にこのまま横になってもらいます。そして腕を突き上げてもらい、デユノアに

は股を開きながら勢いを付けて座ってもらいます」

「……舞崎、本気で言っているか？」

「それで処女なら膜が破れるだけ。そうじゃないなら黒と断定してIS学園で調べて内容を全世界に対して発信するというのはどうでしょう？ あ、座るのは5回ぐらい……いや、10回——」

「織斑先生！ 私は断じて織斑君と何もなかったことを誓います！ 一緒にお風呂に入っただけで、それ以上のことはしていません!!」

「どうやら本気で怯えているらしい。直立不動でそう宣言するデユノア。そしてクラスメイトや凰は「なんてことを提案するんだ、こいつは」という顔を向けてきた。まあ、ボーデヴィッツヒは首を傾げているが。」

「………ま、まあ、とにかくだ………凰、貴様はグラウンドを倒れるまで走って来い」
「え？」

「詳細はすべてニールン先生に伝えておく。なに、あの先生なら「むしろその程度で済んで良かった」と納得してくれるだろう。それとも、舞崎にボコられるか？」

「あの、織斑先生？ いくらなんでも教師がそのような態度は………」

「………仕方ないな。では、今回の件は「嫉妬でISを使用した」と上に——」
「喜んで走らせていただきます！」

……後で差し入れを持って行こう。ちよつと倒れるまでは可愛そうだし。

「……………というわけだ。同じような目に遭いたくなければ今すぐ矛を収めろ」

「……………」

言われた篠ノ之とオルコツトは大人しく矛を収めた。

「それと織斑とデュノア、お前たちは後で職員室に反省文を取りに来い」

「……………はい」

まあ、思春期真っ盛りの男女が一緒に風呂に入つて反省文を書かされるだけで済むなら安いものだろう。

「……………」一緒に風呂に入ったら反省文を書かされるのか」

隣から聞こえてきたドイツ娘の眩きは聞かなかつたことにしよう。



舞崎静流。

身長は175cm。体重は70kg。ここまで重いのは筋肉が原因だろう。見た目はかなり華奢であり、とても戦えるようには見えない。

使用ISは打鉄を自己防衛のために待機状態にして貸し出されているという話だけ、私がアクセスしようにも何故かコア・ネットワーク上に浮かんで来ないのでできない。ISは通常、自ら切断することはできても再接続しないといけないように設定している。そして何より、ISが必要ないレベルで本人が強い。

(ま、私やちーちゃん程じゃないけど)

前にそこそこ認めるレベルの人間に勝つたらしいけど、正直有象無象で張り合っているだけで私には全く興味ない話だ。

でも、私は気に入らなかつた。というかたぶんこいつのせいだ。

「……東様、どうしました?」

この前拾った女の子が声をかけてくる。私は「なんでもない」と答えて資料を見つめ

る。あの子が焦るのは、たぶん私の顔が険しくなっていくからだろう。

私思うに、おそらく妹はこの男に出会ってから少し変わった。そうじゃない部分もあるけど、ほとんど変わっている。そしてこの男に私が拾ってきた女の子は慕っている。

(……今はそんなこと、どうでもいいか)

今は邪魔者の消去。それが結果的に私が新たに気に入った女の子が惚れている相手
で悲しませることになっても今はまだ何も感じない。確かに私もこの男には感謝して
いる。けど、それはI Sに触れる前の話だ。

(……………ムカつく)

もしこいつのせいで篝ちゃんが力を求めなくなったら、許せない。ムカつく。嫉妬
……………？ だとしたら尚更だ。

高が少し強いだけのゴミが、私の邪魔をするなんて。

——バキッ!!

端末が音を立てて割れる。それを見たくーちゃんやんは端末と破片を回収した。そんな
少し家庭的なことでもふと思い出したことがあり、親友に連絡を取った。

ここ最近、とても忙しかった千冬はため息を吐く。

(……………全く。あの馬鹿は余計なことをして……………まあ、アイツのおかげで色々と解決したのは事実だが……………)

彼女の通信端末には静流から「帰ったら部屋のことで説教がある」と送られてきているが、忙しいことを理由にあえて無視して仕事をこなす。思い当たる節はあるが、千冬にも言いたいことがあるので今夜は喧嘩だろうと予想していると、珍しい番号から連絡が入り、周囲に誰もいないことを確認して出た。

「……………何だ？」

『あ、ちーちゃんちーちゃん！ ちょっと聞きたいんだけど、あの2人目と同棲してるってホント？』

「……………そんなことで電話をかけてきたのか？」

千冬は苛立って電話を切ろうとしたが、束が「待って待って」というので仕方なく戻した。

「で、何だ？ 用がないなら殺すぞ？」

『もしかして溜まつてる？ そんなちーちゃんに私がお勧めの物を送るよ。たぶんあの2人目よりも気持ち良くできるよ？』

躊躇いなく電話を切った千冬。するとまた電話がかかってきてすかさず言った。

「死ね」

『ちよ、第一声がそれ!? いくら何でも酷いよー!』

「だったら用件を言え。もしくは死ね」

『ま、スキンシップはこれくらいにして、実は今度そっちで臨海学校だっけ？ その時に箒ちゃんに特別な物を用意するから』

「……………まさか箒から連絡があつたとか言うまいな?」

『それがないんだよー。ずっと無視なんて酷いんだよー』

「……………鏡を見ろ」

そう言つて千冬は電話を切り、「自分もあまり言えないな」と思いながら仕事に戻つた。

第3章 闇が渦巻く臨海学校

第34話 舞崎静流の暴論

IS学園は建設に多額の費用をかけていて、特に運動部は生徒の身体的な向上のために施設に力を入れられている。

柔道部員が外でランニングをしている間という制限時間の中、1人の男性操縦者に対して一夏、箒、セシリア、シャルロット、鈴音が対峙している。5人は静流を囲うように戦闘態勢を取っていた。特に一夏と箒は木刀を、鈴音は物干し竿を、セシリアとシャルロットはエアガンを装備していた。対する静流はゴム製の短い刀身のサーベルを使用している。明らかに舐めた行為だが、一夏を除いた女子陣には受け入れられた。

（俺は別に構わないけど、実際のナイフとか持ったら今度臨海学校は休まされると思うけど？）

その言葉に何を想像したのか、あつという間にそう言った構図が完成したのである。

まず最初に動いたのは一夏だった。いつも通り雄たけびを上げて静流に接近するが、静流は動かない。すかさずセシリアとシャルロットが援護射撃をし、鈴音は時間差で一夏の後ろから接近。箒は迫ると見せかけて静流の後ろに移動した。

静流はまず一夏よりも早い弾丸を回避し、一夏の腹部に素早く潜り込んで腹部を殴る。そしてそのまま顔を蹴り上げて鈴音の妨害をさせた。

「届け！」

「覚悟！」

前門の虎、後門の狼、そして左右から援護射撃。だが静流は素早く安全地帯に移動してサーベルを投擲してシャルロットの顔面にぶつける。迫る竿を掴んで体勢を崩しながら箒にぶつけるように逆に振った。

「え？ ちよっ!？」

まさか自分が振られると思わなかったのか、鈴音は慌てて手を離すがそれが逆に箒の邪魔になった。

「くっ!？」

すぐに後ろに下がる箒。勢いを殺されて慌てるが静流はそのまま物干し竿をセシリアに手にぶつけた。

「隙あり！」

倒れたはずの一夏が起き上がって静流に向かう。腰に掴まれて体勢を崩された静流は後方回転飛びを応用させて一夏を背中から落とす。

「もらった！」

箒が再び迫る。そして突きを繰り出すが静流が右に大きく体を傾けて刀身を掴んで逆に引き寄せられた。

——ゴンツ

額に軽く小突いた程度の肘討ちした静流。力をゆるんだ瞬間に木刀を奪い、一夏の腹部を蹴って拘束を離脱した後に動こうとする鈴音の喉にいつでも打てる体勢で先端を向けた。

「オルコツトは両手首火傷により戦闘不能。デユノアは頭部にナイフが刺さり死亡、織斑は気絶で篠ノ之は顔面を破壊されて戦闘不能。そして、凰鈴音は動けないところを持って帰られて慰安婦としての扱いを受けさせられるってところか。今の時代だったら両腕を手錠か何かで拘束しとけば俺の知り合いなら容赦しないと思うけど？ それとも、ここからどうにか抗ってみる？」

「……………参りました」

そう宣言する鈴音。それを聞いた静流はさっそく箒の所に行つて尋ねようとしたら、「舞崎静流はクールに去るぜ」

小さくそう言つて宣言通り静かに去つた。

何故こんなことをしているかというと、話は少し前に遡る。



「……………なあ、静流って実際どんなに強いんだ？」

「少なくともお前みたいなミジンコなら相手にならないと思うけど？」

「いや、そう言うんじゃないやねえよ。なんて言うかさ。日頃から模擬戦でも手加減されている気がするんだ」

「……………織斑の勘が当たった……………だと……………」

本気で驚いた俺は思わずそう言った。

それが不服なのか織斑が俺を睨む。

「何だよ。俺、勘は鋭い方だぞ」

「いや、それはまずくない。ありえない。お前レベルで勘が鋭いなら、この世界にいるすべての人間は漏れなくニュータイプになつてる。そしてオルコットのビット操作は少しはマシになつてる」

「……いや、何でそこでセシリア……？」

引きこもりが言うには、オルコットのビット操作は不完全なんだそうだ。ちなみにこれでもかなりボカシて言っているが、実際は「え？　この程度の実力で自分がエリートとか言ってるの？　ビット操作とか自分と他のを同時に動かして初めて意味を成すのに。むしろこの程度なら猿でもできる」と本気で言っていたくらいだ。

「まあ、ISで戦つても何が得られるかという疑問があるというか、個人的にはもう少し力を発揮できる場面が欲しいんだよ。だつてIS学園の生徒のレベルつて……ぶっちゃけクソじゃん？」

「義兄様にいさま、それは流石に可哀想かと思えます。そもそも……総督と対等に戦える時点で義兄様の實力は他の生徒が立ちはだかるのは難しいかと」

「あー……やつぱりそうなん？　なんかやる気出ないなあ」

いつの間にか俺を「兄」と呼んでいるラウラはさておき、俺はフライドポテトをつまみながら思った。

——もう1度、武藤さんに喧嘩を売るか

フラストレーションは溜まっているだろうし、こつちも不完全燃焼だからたまにはリフレッシュしないとな。

「却下だ」

「何で!？」

「最近の貴様の行動が目にも余るからだ。勉強などは手を抜いていないことは褒めてやるつもりだが、だからと言ってせっかくの日曜日をそれで潰すのは勿体ないだろう。というか、おそらく今度の日曜日は忙しくなるからその暇はないぞ?」

「……………何で?」

今度の日曜日は臨海学校の前日だが、それが一体何だと……………ああ。

「でも宿泊セットを揃えるのはすぐに終わるだろ?」

「……………水着はどうするつもりだ? 初日は1日フリーだぞ?」

……………そんなもん、決まってる。

「スク水で遠泳」

「……………お前には遊ぶという選択肢はないのか」

「何言ってるんだ。青い空に白い雲。見えるは砂浜と海と言ったらランニングか遠泳の選択肢以外はすべて邪道」

「……海にデートは行ったことがないのか？」

「誰とロマンチックに愛を語らえと？」

「…………ラウラという選択肢はないのか、貴様には?！」

いや、姉は姉、妹は妹だろ。物事はキツチリと分別しておかないと。

「あのな、織斑先生。いくら血がつながっているって言ってもちやんと線引きした方がいい。アンタら姉弟は性別はもちろんアホの度合いも違うんだし、篠ノ之に至っては頭
のできが違う」

「……………ほう。お前には好きな人がいるのか」

ニヤニヤと気持ち悪い笑顔を作る。周りも珍しいものを見るような目で俺を見てくるが、

「別におかしくないんじゃないかね?　むしろアンタら教師は少しはマシな思考を持ったらどうだ?　元代表候補生なら払いは良いはずなんだし、男を養うこともできるのにそれをしないとか、真つ当な女としてどうなの?　実際、女権団だって「女が権利が上だ」と主張するのは勝手だけど、従ってくれる男はいるんだしそう言う男を飼うという意味で困うことぐらいいは……………あ、ごめん。そういえば俺がこれまで相手してきた女権団ってブスしかいないから無理だわ。むしろ焼いてでも拒否したい。」

(……………仕方ない。本当は頼りたくないけど……………)

渋々俺はあのジジイに修行してもらおうと思っていくと、あの雑魚共を鍛えるように言われたのである。

そして、今に至る。……っていうか、

「お前ら、責めるのは織斑じゃなくて俺だろ。それとするのは反省会だ」

「いや、でも……」

「でももクソもあるか。大体、お前ら本当に織斑の事が好——」

敢えてそこで言葉を切ると、4人共俺に向かって突進してきたので全員均等に攻撃した。

とりあえず「何でみんなを攻撃したんだ」と馬鹿なことを言っている織斑には大人しく寝てもらって4人を正座させた。

「この際言っておくけど、そんなアプローチで男が簡単に釣られるなんて思うなよ。特に凰、お前は一度周りを見ろ」

「…見ろって……」

大人しく凰は横にいる3人のとある部分を見る。

「デュノアとオルコットはCとD、篠ノ之はGはありそうだろ？　そしてお前はペツタン」

「そんなこと言われなくてもわかってるわよ！」

「待ちなさい！ どうしてわたくしのバストサイズをご存じですか?!」

「そうだよ！ もしかして僕らのことを調べ——」

「目測なんだが。それに、言っておくがBカップの奴が変態が相手とはいえ彼氏がいるんだから何も胸がすべてってわけじゃない。確か、4組の代表もBくらい——」

すると急に電話が鳴る。確かこの着信音はあのアホからか。

後でうるさいので大人しく電話に出ると、

『もし4組のクラス代表に手を出したら、オマエヲコロス』

「いや、出せねえって。そんな趣味は……おい待て。何でお前が4組の代表の話を知って——」

急に電話が切られた。今度会ったらミンチにしてやると心に決めておき、話を続ける。

「ま、つまり言いたいのは女は胸で決まるわけじゃないってことだ。大体、仮に織斑が胸好きだとしたら篠ノ之はとつくにゴールインしてるだろ」

「「……………ああ」」

哀れな視線を向けられる篠ノ之の抗議の睨みはさておき、そろそろ柔道部員が戻ってきたので俺たちも解散することになった。

「ところで、何故柔道場を借りれたんだ？」

「部長を頭から10回ぐらい落とした」

「……………変わったな、お前は」

整備室で打鉄の改造を終えた俺は気晴らしに寮の屋上に移動すると、珍しいことに先客がいた。

この屋上は俺以外は校舎とは違ってあまり整備されていないから訪れる奴はいない
と高を括っていたが、どうやら物好きはいたらしい。

「女はもう帰ってるよ。夜道じゃ襲われるぞ」

「……………本当、お前は変わったな」

その物好きこと篠ノ之は俺にそう言った。

「いや、むしろ元に戻ったというのが正しいな。……………というよりも遅すぎた」

もう少し早ければよかった。ISを初めて動かした時に戻っていれば、女は逆らうことをしなかったのかもしれない。

「それよりも、意外なことがあるんだけど」

「……何だ？」

「何で篠ノ之は専用機を姉からもらおうとしないんだ？」

率直な疑問をぶつけてみた。

そもそも、篠ノ之にはその権利はあるだろう。周りが批判しようがなんだろうが、俺ならば援護できる

「……………」

だが、された側の篠ノ之は俺が言ったのか理解できていないのか、それとも理解が追いつかないのか呆然とした顔で俺を見ていた。

「……………お前は、私が専用機を持っていても良いと思ってるのか？」

「むしろ何で入学した時点で持っていないのか不思議でならない」

「そこまでののか……………？」

まあ、これはあくまで他人からの意見だが……………そもそも篠ノ之箒は周りからのプレッシャーが激しい中で中学時代を過ごしてきたそう。俺と出会って連れ出すようになってからはなくなってきたようなのだが、とにかく日本政府は篠ノ之東の居場所を知りたがって拷問という程ではないが苦しい思いはしてきたらしい。という情報を早坂から手に入れた……………というよりもお節介で送ってこられたんだが。案の定、奴のイタ

ズラのようで向こうは俺と篠ノ之が付き合っていると思っていたらしいのだ。
(…………だからこそ、こうして情報を知り得たことは十分か)

久々に感謝しておくか。……初めて感謝したのは勉強で詰まっていた時にわかりやすく説明してくれた後に、延々と俺が女の子たちとの時間を邪魔したことだろうけど。

「それに、学年別トーナメントではそれなりの順位を残したんだから別に問題じゃないだろ」

「……………知らなかったのだ。まさかあの女が専用機を完成させていたとは」

「……………あの女？」

「更識簪。4組のクラス代表だ」

……………誰が完成させたのかわかったわ。

「まあ、それは運が悪いことで」

「……………信じられなかった。私も勉強のために薙刀の試合に出たことがあるのだが、あのように素早く攻撃できる存在など私は知らん。それに、機体のデータがただの打鉄の発展機ではなかった」

「……………あれがただの発展機を作るとは思えないのだがな。たぶん製作者は早坂零司。奴が作ったら並大抵のものは常識を外れるからな」

本人の装備も物凄く常識を超えているし。

「……確か、そいつは舞崎の友人だったか？」

「友人、程度で済めばいいんだがな。ともかく、そいつらの話はあまりしたくない」

……すれば戦いたくなるが、零司は仕事で忙しいしもう一人は条件付きで強くなるタイプだしな。

「………そうか」

「で、何で専用機を持つとうとしないんだ？」

「……私には、病気があるからな」

それは、本当にくだらなないことだった。

篠ノ之は力を持つとそれを振るいたくなる病気があるらしいが、聞いていて本当に馬鹿らしかった。

「………別に間違つてないだろ」

「何？」

「いつもの自分とは違う強い力。それを振りたいというのは別に恥ずべきことでもなんでもない。だったら俺は今の力がどれだけ通じるか試したいだけの子どもだぜ。ま、武道じゃ心を律するという考えもあるだろうが、俺らにとつちやクソ食らえ。確かにある程度のセーブは必要だし、ISは兵器でオルコットのBT兵器なんざ一瞬で人を塵と化すが………お前はそういう方向で力の使い方を間違えるような間抜けなのか？」

「…………それは違う」

「じゃあ、別に持ったっていいじゃねえか。大人は処理に追われるだろうが、そんなのどうした。高がそれだけだろう?」

全く。こいつは変なことで悩みやがって。

俺はため息を吐いてドアの方に行く。

「じゃあ、俺は寝るわ。あんまり遅いと担任がうるさいんでな。後、織斑を誘えよ。そろそろ他の3人も動いているぞ」

「わ、わかってる!」

ああは言ったが篠ノ之は変な躊躇いがあるから絶対に間に合わないパターンだろうなあ。



さつさと帰っていく静流の背中を見ながらを箒は内心思う。

(……………私が専用機を持つ、だと)

性格上、箒が頼めば束は確かにISをくれるだろうということは理解している。だが、そんなものは箒のプライドもそうだが、なによりも彼女が引け目に感じるからだ。

(……………逆に聞きたいさ。ならば、何故専用機持ちを潰して来たお前が専用機を持たないんだ……………)

だが、箒には許せないのだ。実力は国家代表すら相手になるのか怪しい。それほどまで底知れなさを感じる男が未だに専用機を持たないという異常な状況。それなのに、相手にならない自分が専用機を持つなどおこがましい。同じ土俵だからこそわかる圧倒的な差を。

箒は感じていたのだ。自分と静流の圧倒的な差、何かの間違いで静流を本気にさせて戦うことになった場合、他者が介入する間もなく自分が消されることを。

第35話 過保護な周囲

せつかくの外出日。まともに墓参りに来ることができなかった（というか鍛えることしか頭になかった）ので初めて訪れて線香を上げて近況を報告した。アニメとかで墓に話しかけるとか滑稽だと思っていたのが懐かしい。

土地は俺に譲ってくれた……というか、重要保護プログラムのせいで権利者不明となっていたので勝手に悪いが奪った。その旨を報告してもらっているが、向こうから手紙が届かない。まあ、そういうものだろう。もし見せしめに叔父と叔母を殺したなら、おそらく俺は日本政府関係者をすべて殺し、女権団の重要役職に就いている奴らの家族すべて殺しているだろう。

まあ、物騒な話はともかくとして、墓地から移動して俺はレゾナンスに来ていた。決して陰陽師カプルが使う能力ではない。

「クラリツサから怒られた」

今日の予定は世間知らずの子どもの相手らしい。

その相手であるラウラは少し涙目なのが印象的だった。

「何で?..」

「『せっつかくの海に、スクール水着で行くな!』……と」

……まあ、まともな10代女子がビーチでスクール水着は流石にマズいか。周りは当然遊ぶつもりだろうし、その中でたった1人だけスクール水着はかなり浮くか。

仕方がないと思ひ、俺たちは水着店にも足を向けることを決めるが、

(……そう言えば、篠ノ之の誕生日ってそろそろだっけ)

初めて七夕生まれと聞いて俺は正直篠ノ之の運に引いた。どれだけ星に恵まれれば気が済むんだよ、と。ま、俺とは違つてこれからはまともに過ごせるかもしれない……と、思ったが篠ノ之博士の妹である以上はそれは難しいか。

「あれ? 静流じゃないか」

「……織斑、それにデュノアか」

その2人を見て俺は内心ため息を吐いた。

(……あの馬鹿が)

余計なところで躊躇いやがって。

そもそも、織斑を狙っているのは専用機持ちだけじゃない。その容姿はもちろんのこと、態度も礼節も一応はわきまえているのでハニトラ狙いの奴らも一気に織斑を狙い始めている。デュノアは一応開放したが、専用機に乗り続ける限りいつデュノア社の言いなりになるかわからない。そして俺の方にハニトラが来ないのは、ラウラと悶着があつ

たからだろう。

俺はつい最近、ベッドに忍び込もうとした裸のラウラと織斑先生を寮長室から蹴り飛ばしたことがある。

「ただのトイレだったら眼を瞑ってやるがな、俺の睡眠の邪魔をするんだったら教師であろうがぶつ殺す」

そのせいで部屋の一部に破れた痕跡があるが、後悔はしていない。……ま、ラウラと一緒に寝ることになってパジャマがないから改めて買いに来たわけだが。

「そうだ、静流も一緒に水着を買い物に行かないか？」

「悪い。俺たちはこれからランジェリーショップに行くから」

「え……？」

2人は揃って哑然とする。

「ああ、勘違いするな。ラウラの下着を買いに行くんだ。だがこいつはそういうのが一切わからないって言うから追って行くだけ」

「そうぞ。私はお兄ちゃんと買い物に行くんだ！」

ちなみにこれは俺からの指示だ。いくらラウラのような篠ノ之と同じ堅物タイプだとしてもこうして言わせておけば少しはマシになる。……要は、他人にもわかるように妹の振りをさせているわけだ。

「だ、ダメだよ！ そんなことしちや!?」

だというのに、何故かデュノアが反対した。

「いい？ 舞崎君だつて男の子なんだよ？ そんなところに入って行つたら——」

『おい元スパイ女。ちよつと周囲をハイパーセンサーで確認してみろよ』

個人間秘匿通信を使ってデュノアに指示する。ちなみに今のは正気に戻すために言った。

『……これつて……』

『ま、全員が俺か織斑を狙っているのは間違いないな。ということ、あまり織斑を一人にしない方がいい。別にランジエリーショップに本当に行くわけじゃないし、行つてもラウラの付き添いだということで見逃してもらえらるだろうし……そもそも、ブスのパツ見たつて吐き気しかしねえつての』

何で平然と命令してくるゴミ共の下着なんてみたいと思つていると考えられるかわからない。

『……わかつた。気を付けるよ』

別に気を付けなくても良いんだけどな。

「じゃ、また学校でね」

「お、おいシャル、静流と一緒に」

「彼には彼のやることがあるの」

……説明が無駄にカッコいい気がしたが、たぶん気のせいだと思った。

意外なことに、俺は何も言われなかった。

ラウラがお金を持っていないから俺が支払ったが何故か同情されたんだが。

ちなみに、お金は後で払ってもらったことになっている。これも何故か織斑先生が「絶対にそうしろ!」としつこく言ってきたからだが……。

「じゃあ、今度は水着を買いに行くか」

「はい。ですが、少しお願いが。私はどの水着が似合うのかわかりません。ですから、選んでもらえませんか?」

……これは、中途半端な水着は選べないな。

下手すれば、他のドイツの奴らから巡り巡ってオッサンの方に連絡が行く可能性がある。
る。

「……………わかった」

センスは悪い方だとは思いますが、努力はしよう。時に大切な者を守るための人は恐ろしいほど強いことを知っている俺は頑張ることに決めた。

水着売り場に移動した俺たちは、どちらも女性用水着はアウエーであるため圧倒される。

(……………あの引きこもりなら、何故かセンスが良いからサクツと決められるから聞けばあるいは……………)

とはいえ、クロエに似ているラウラの水着を決められるのはかなり癪な気がする。

「……………静流……君の彼女……………固まってる……………」

「あ、悪い。ラウラ、早く行く——」

俺は思わず後ろを向いた。

「……………桂木？」

「久しぶり……………君の話……………よく聞く……………」

引きこもりが外に出ていた。じゃなくて、何でこいつがここにいる!?

「珍しいな。お前がここにいるなんて」

「最近……………バイト初めたから……………」

「へー」

「義兄様、この方は？」

「桂木悠夜。大人しそうに見えて、IS学園生を普通に潰せる奴だ」

ま、条件付きだけど。

「……初めまして……よろしく……確か君は……シユヴァルツェア・レーゲンの……パ
イロット……」

「私のことを知ってるのか？」

「……名前は……知らない……」

「こいつはロボットが好きなんだよ。俺の知り合いの中じゃ珍しくISに詳しい……」

「……でも……ISは……正直……好きじゃない……」

「そうなのか……?」

「女のパイロット……いても普通だけど……露出度高いから……痴女を見るみたいで嫌
……20代はまだギリギリ許せるけど30以上は死ねばいいのに」

身長は180近くからあること、そして見た目が怖いことも相まってかなり恐ろしく
見える。

「そんなことより……ここは危険……」

「……だな。じゃあお前は彼女の所にでも行つてろ」

「……そうする。またね……静流……」

普段大人しそうな奴だけど、切れると割とてこずる。ま、俺も成長しているし勝てるだろうが、アレの執着心は心臓を穿たないと終わりそうにない。

それはともかく、俺はラウラと共にまずは男性用の水着を見て回ることにした。流石に織斑とデュノアはいないだろうが、カップルの邪魔をする気は毛頭ない。と言って、適当に商品を見て回るだけだ。

適当な物を買ってからラウラの物を買うために移動する。……と、その前にだ。

「ラウラ、まずは自分で選んでみる」

「ですが私は……」

「もし任務でわがままな女の世話をするようになった時のための服選び。そう思っ
てやってみろ」

「わかりました」

転入初日に来た時のことを彷彿させる綺麗な敬礼をしてラウラは早速水着を探しに行く。……サイズは知ってるだろうし、水着を漁って犯罪者と思われなくて済むようになった。

（俺はゴーグルとか買っとくか）

ラウラはズレているとは言え年頃の女の子。化粧とかにも気合は入れるかどうかは正直怪しいが、せめて視力は落ちないようにゴーグルでも買っておくか。

どんな水着にも合うような無難なゴーグルを探していると、
「そのあなた」

別の方向から声が聞こえてきた。まさか悠夜が絡まれているわけじゃないよな。

「男のあなたに言ってるのよ」

このご時世、男を女の奴隷と勘違いをしている奴がいる。そいつらの70%が女権団に所属しているという話だ。

「聞いているの？ 返事しなさい！」

問題は、そうかもしれない女が俺に話しかけていることだが。

「……………俺か？」

「そうよ。鈍いわね。頭腐ってんじゃないの？」

一度ボコつてやろうか、このアマ。

「生憎、アンタみたいな奴の相手をしているほど暇じゃねえんだ。他を当たれ」

「随分と舐めた口を利くわね。良いわ。あなたに立場というものをわからせてあげる」

「……………立場？」

「ええ。見てなさい。所詮あなたは私たちの奴隷でしかないのよ」

そう宣言する女が近くにいた警備員を呼ぶ。そして案の定の反応をした。

「お、お前は……………舞崎静流!？」

「よお、ポリ公。俺を知っているってことは……………俺の過去で潰した奴か？ 生憎、誰であれ潰しまくったからなあ」

「……………舞崎静流？ !? あなた、あの舞崎静流ね!? よくも私の仲間を!!」
ナイフを出して来たのでため息を吐いた。まさかその程度で俺を殺せると思っ
てるのだろうか。

警察が動くよりも先に女が俺を攻撃してくるので軽く捻って地面に寝かせる。

「何の騒ぎ……………どうしましたか？」

「気にするな」

「そうですか？ とところで、これは……………」

「俺を攻撃してきただけだ。気にするな」

とりあえず離すとすぐにナイフを持ってもう一度襲って来るので止めた。

「……………ここまで行くと、多少本気出しても正当防衛の気がしてきた」

「いつまで触ってんのよ！ キモいのよ！」

……………そうか。

ラウラに俺の財布を回収してもらい、それで支払いを済ませてもらって俺は女を外に連れ出す。

「……………一体、どれを出せばいいんだ？ 必要なものは手配されるからわからん」

そんな声がしたのは気のせいだと思いたい。

俺は女を噴水に投げ飛ばして、後は警察に任せて戻った。

戻ってみれば、どうやら俺が持つポイントカードのどれを出せばいいのかわからなかったらしい。俺はホツとして店を出ようとしたら、

「一体何をしているんですか!？」

……… 副担任が叫んでる。

一体何で喚いているのかと思っていると、更衣室の中で織斑とデユノアと一緒にいる。……なるほど、何かがきっかけでバレてしまったのか。

「………で、さっきから何をコソコソしてんだよ」

戻ってから近くの棚で織斑たちの様子を伺っているオルコットに風、近くに篠ノ之がいる。

「大方、尾行でしょうね」

「………デユノアと一緒にいる織斑を見つけ、あわよくば入れ替わるつもりか？」

「そ、そんなわけないでしょ!？」

「そ、そうですね! そんな淑女にあるまじき行為をするわけがありませんわ!」

高が制裁ごときで I S を持ち出す奴らの言葉を早々信じるわけがないだろ。………と
ところで、篠ノ之はさっきから何をしているんだ？

「なんて……………面積が少ないんだ」

ビキニを持って固まっていた。

「おーい、篠ノ之ー」

「な、何だ!？」

「何を固まつてるんだよ。ちようど良いんだから織斑に選んでもらえば?」

ま、説教もいずれ解放されるだろうしな。なにせ外で説教していること自体が頭がおかしい行為だ。…………わざわざ床に正座させているのは真面目が故だろう。

「そ、そんなことできるか!」

「なら、これはどうですか!?! 黒ビキニです!」

「……………」

結局悩んだけど、ラウラのサイズだと珍しく良さそうなものがなかったのでそれにした。

で、問題の篠ノ之なんだが…………

「ビキニしかないだろ」

「だ、だが…………それだと色々と見えてしまう…………」

「いや、見せるよ。というか男を落とすのは要は見せ方なんだよ。それにだ篠ノ之、見せる見せないは結局のところ時間の問題だ。性行する時に見せないわけにはいけないだ

ろ?」

「そ、そうだが……それとこれとは——」

「——騒がしいと思つたら、お前たちか」

予想以上に騒がしくしていたらしい。織斑先生が織斑弟を引き連れて現れた。

「何を騒いでいるんだ。店に迷惑だろう」

「さつきまで正座で説教して止めなかつた奴が言うセリフか、それ。ところで織斑先生、

アンタ泳ぐ気か?」

「そうだが?」

俺は冷静になつて考える。

今、織斑先生には2つの水着を持っている。そのどちらを買うであろうことは容易に想像できるが、どつちだ?

「……織斑先生、白い水着を胸元に上げてください」

「……うか?」

違和感があるな。

織斑先生が来ているのは主に黒いスーツに白いジャージ。だが、部屋でも藍色に近いパジャマだから黒系統のイメージが強い。だが、篠ノ之は——白の方が引き立つ。

「ところで織斑先生、水着はどちらに?」

「ああ。そのことでお前を探していたんだ。お前はどつちがいいと思う？」

「黒ですね。白は正直、織斑先生には似合わない……というかそろそろ25なんだから身を固めることを考えましょうよ」

「……そうだな。そろそろ貴様に対する指導方針は変えないといけないと思っていた」「やれるものならやつてみるよ」

戦闘態勢に入ろうとするが、店先だということであれは遠慮することにした。買い物も終わり、外に出た瞬間、俺は誰かにさらわれた。

第36話 再会―ハジメマシテ―

油断した。俺は自分の戦闘力には自信があったから完全に油断した。そして女ごときでは俺を運ぶのは難しいだろうと思っていた。……まあ、ISの補助を使っているならば話は別だろう。

「……何やってんだ、戸高」

「すまない。今は緊急なんだ！」

「……………いや、何が？」

「武藤君が、浮気した！」

……………俺はこいつと武藤さんの仲を応援しているだけで、そもそも別に付き合っているわけではないと記憶しているが。

だが武藤さんが浮気だとは少し気になる。あの人が他人と恋愛するなら関係の整理はするであろうとはわかるから。

気になって戸高に追いて行くと、確かに武藤さんが女と話していた。

「……………ロリコン？」

「少なくともあの女の子と一緒にいる今の君には言われたくないと思うけどね」

ただし、女は中学生であの時の会話から察するに3年生だろう。

「……たぶんこれ、浮気じゃねえよ」

近くの電柱から様子を伺う。名前は覚えていないがあこの食堂の名前から考えて「五反田」だろう。

にしても、中学生と一緒にいるなんて珍しいな。あそこでの会話から親戚ということはないはずなのに。

「ともかく、本人らに直接話を聞いた方が早いしろ」

「……そうだけど、もし付き合ってるなんて言われたら……」

「いや、それはない」

とりあえず無理矢理髪を引っ張って中に入る。店員を手で制して2人がいる場所に移動した。

「何の用だ？ 今日君の護衛をする日ではないはずだが？」

「いや、そうじゃない。この女が浮気だなんだと騒がしかったから無理やり真相を聞きに来た」

「……なるほど」

にしても喫茶店で座っている姿が様になるな。将来はこういう大人になりたいと思える。

なんて考えはしまつて机の上の資料を見ると、IS学園のパンフレットを渡していたようだ。俺を見て五反田は震えている。

「ちようど君の話も思っていたんだ。かけてくれないか。……その人も」
「そうだな」

俺は武藤さんの、戸高は五反田の隣に座つた。

「にしても驚いたな。五反田、お前IS学園の事を調べていたのか」

「は、はい。……どんな学校か、ちゃんと知っておきたくて……」

「仮にも自分の将来が決まる高校だしな。俺は勧めないけどな」

そう言うと五反田は驚いたように言つた。

「自分が通つている高校なのに、ですか？」

「じゃあ、お前には覚悟があるのか？」

「覚悟……？」

「そうだ。人を殺す、覚悟だ」

五反田は顔を青くする。

「言つておくが俺にはそんな覚悟はない。邪魔な奴は精々……」

俺はすぐさま机に上がり、ISを部分展開した。

ガラスが割れて破片が飛び散るのを展開した盾で防ぐ。

「……………全く。これだから女つてのは嫌いなんだよ」

視線を向けた先には女。だがその前には人質らしき子どもがいる。年齢はわからないがおそらくは幼稚園児。

「……………大丈夫か？」

「問題ない」

「バッチリ守ったよ」

「そうか。国家代表の割にはよくやった」

「これくらいは朝飯前だからね!」

軽口を叩きつつ、俺は女らに視線を離さずに外に出た。

「揃いも揃って何の用だ？」

「この子を殺されたくなかったら今すぐ死になさい」

人質を取っている奴がそう言った。その女以外にも銃を所持している奴らがほとんどだ。それ以外は俺に向けているが、周りの被害のことを考えているのだろうか？

「随分な言い草だな。雑種共が高が銃を持っただけで俺をどうにかできると思っているのか？」

「当たり前よ。この数に勝てるわけがな——」

人質を取っていた女の顔面に蹴りを入れる。周りは高がこの程度のことでは驚いてい

るが、俺は躊躇いなく腕を切断して人質を鎖で掴んで武藤さんの方に放る。

「脆い脆い……この程度で俺に勝つ気かよ——身の程を知れ」

そう言つて俺はコンクリートを蹴つた。後ろに一部が飛び散つた。



突然、銃声が鳴り響いた。

この賑やかな街中で異常な音声に千冬とラウラは戦士に戻り、箒に逃げるように言つてすぐさま銃声がした場所に移動する。

(クソッ！ まだ舞崎が見つからないと言うのに……)

千冬は内心そう思う。2人の前には既にハイパーセンサーが展開されていて、既に銃音がした場所を特定していた——が、

——ドサツ

上から血だらけの女性が倒れてきたことで、2人は足を止める。

「どうした、何があつた？」

「……………ち……………ふゆさ……………」

その女は腕と足を切断されており、動けない状態だ。

しかし千冬にはその惨状に見覚えがあつた。

「……………まさか」

「どうしましたか？」

「まさか舞崎が暴れているわけではあるまいな」

「義兄様が？」

ラウラは知らないが、以前静流はISで女を潰した後に腕を切断するという暴挙を行っている。それを知っているからこそ千冬はすぐに犯人が静流だと予想した。……もつとも、同時に女たちが何をしたのかという疑問が出てきたが。

(……………少なくとも、舞崎は理由なしに他人を攻撃するような奴ではない。こいつらは—

体何をした……？ いや、今はともかく応急処置だ)

千冬のIS「打鉄特式」には応急セットが常備されている。すぐに展開して止血を始めた。

「ラウラは救急車を」

「わかりました」

指示に従い、ラウラはすぐに電話する。

その少し向こうでは静流が戦っていたが既に終わった。

「この程度か。もしヤバそうだったら武藤さんに助けてもらおうって思ったけど、その必要もねえとか弱すぎるだろ」

馬鹿にするようにため息を吐くが、外は悲惨な光景が広がっている。

まず、敵方に血を出していないものなんていない。全員が何らかの血を出していて、酷いものには壁にすら埋め込まれている者もいる。

「……………何で……………こんな……………」

「まさか、銃を持ち出せば「いくら強くても所詮銃には敵わない」とか思ってたんだろ。残念ながらそんなレベルは超えている」

静流は知らないが、彼に専用機が渡されないことは2つの事が起因している。

1つは彼にしか動かさせないISコアを所持しているということ、もう1つは彼のこの

強さだ。

ISの操縦は細かな操縦性も必要だが、ほとんどが生身で戦闘していた時の経験が生きてくる。国家代表は幼い頃に武術や射撃経験があるのがほとんどで、当然生身の戦闘も強い。中には達人級の実力者もいる。実のところ、IS学園で専用機を持つていない生徒の中で近接戦に限って言えば箒が一番有力とされているが、彼女の場合は篠ノ之束の妹という事とランクがCであるため専用機支給は見送られていた。だが、これはあくまで「女」という基準の中での話だ。

女は男より強いという風潮はある意味では間違つてはいない。だがそれは本当にあくまで「ISがあるから」という面が大きく、身体能力が高い千冬でもそれ以上に裏の経験をしている轡木十蔵に勝つことは10回に1回勝てれば良い方だと言うのが実情だ。そしてドイツには「レイング・クロニクル」という化け物がいたが、静流はその男に勝てるほどの経験は既に積んでおり、1人を除いて生徒の中では強者という立ち位置にある。そして現に静流は何度も裏の荒くれ集団を纏める大人の組合を何度も潰しており、銃弾を読むのは最早朝飯前だった。

それに今回勝つたのは、近くには静流側の人間がいたことで安心して攻撃に専念できたという点も大きい。

「武藤さん」

「安心しろ。こちらで今回の処理は受け持つ。そして女権団の方には正式に抗議しておこう」

「それは確かに安心だな」

ホツとため息を吐き、目下の問題である子どもの方に向く。

「……………この子の素性は？」

「残念ながらまだだ」

「そっか」

とはいえ、静流もほんの数分程度で何かがわかるなどと思っていない。

静流はおしぼりを使って軽く血を拭って少女の方を向いて何かを尋ねようとするが、すぐに蘭の後ろに回った。

「……………あの、舞崎さん。流石にあなたは……………」

「……………まい……………さき……………？ あなたも……………まいさきなの……………？」

その問いかけに静流は驚き、背中にしまったはずのトンファーを出す。

「……………お前は誰だ？」

「——比奈——」

蘭は思わず逃げ出したくなった。それほどまで静流の殺気は濃くなり、今にも近寄ってくる相手を殺さんとしていたからだ。

「……………お前は」

「……………よう、随分と久しぶりじゃねえか」

瞬間、いきなり現れた男は静流に対して殴りかかるが、当たるとはなかった。

「どこ見てんだよ、雑魚が」

静流はその男の頭部を吹き飛ばそうと蹴り上げるが、それは途中で止まることになる。

「……………それ以上は……………ダメ……………」

「……………桂木」

悠夜は2本の指で止めていた。

「……………邪魔するな。これは俺たちの問題だ」

「……………子どもが……………路頭に……………迷う……………」

静流は怯えている子どもを見て、ため息を吐いて渋々足を降ろした。



「……………で、アレが6年前に生まれたのか」

「そうだ。お前に攻撃されて死ぬかと思ったがな」

「安定期に入ってたはずだろうが。それをテメエらがギャーギャー騒いで俺を徹底的に痛めつけた結果だろ。文句なら過去に馬鹿みたいに俺をボコった無能な自分らに言えよ」

全く。何で俺がこんな屑と話さなきゃいけないんだよ。虫唾が走る。

ちなみにこの場には既に五反田と比奈という俺の妹はいない。五反田は織斑先生が、比奈はラウラと戸高が連れ出している。で、俺たちはその場に待機という事で裏道にいる。

「……………それよりも、何故お前が生きている？ 日本政府に引き渡したはずだが？」

「よくもまあ、自分よりも格上の奴にんなことを堂々と言えるよな。頭腐ってんだろ。」

ま、どっかの誰か共が余計な情報を配ってくれたおかげで祖父母は死んだがな」

男が俺の顔をめがけて殴ってくるが、それを止めて強く握る。

「…………お前のせいだ。お前がI Sを動かしたせいで父さんと母さんが死んだんだ!!」

「そっか……………で?」

「で……………だ……………」

「あの女はまだ女権団にいるのか?」

6年前、女権団が力を付け始めた頃にこいつの女が入ったことは知っている。もし抜けたら勘弁してやろうと思うが——

「まだいるさ。それがどうし——」

俺は軽く腹部を殴る。だがそれでもこの男には十分だったようだ。

「俺がI Sを動かしたとして、それがどうした? あの2人を殺したのは俺じゃない。

お前ら夫婦だろう?」

「……………何を……………」

「情報を送っておいてよく自分じゃないとほざけたな、屑が。だが娘に感謝しておくんだな」

「……………ふざけるなよ、家族殺しが」

「お前ら夫婦は気に食わないが、今の俺は学生だ。だが卒業した瞬間、お前から比奈を

引き剥がす」

これは復讐だ。俺がいるのに人質になっていないことは疑問だが、そんなことはどうでもいい。

「……………ふざけるな。比奈に指一本触れさせない！」

「まあいいけどな。女権団に入ったら、真っ先にミンチにするから」

そんなことよりも俺にはすることができたので先に表通りに戻ってそのまま帰路に着く。武藤さんには悪いが今は構ってられない。

「待て、舞崎。お前には話を——」

俺は反射的に織斑千冬を弾き飛ばしていた。

——このレベルじゃダメだ

もう、織斑千冬じゃ相手にならない。かと言って桂木にも頼めない。今はアレを倒すのが目標なんだから。

——だとすれば、俺にはたった1人しか思い当たらない

モノレールでIS学園に戻った俺はすぐに用務員室に向かった。その途中で目当ての人物を見つけた俺は早速話しかけた。

「……………1つ聞きたいことがある」

「……………何だ？」

「アンタが桂木悠夜を孫の彼氏として認めたのか？」

俺が見る限り、轡木家の実権はこいつが握っているはずだ。どんな家柄かは知らないがな。

「だとしたら何だ？」

「なに。ちよつと目標を見つけちまつてな。死ねとは言わないが——俺の特訓の相手になつてくれ」

立ち上がった轡木十蔵を見て俺は早速仕掛けた。

俺はIS学園に来てから、妥協したことはあまりない。

ウザい奴らは全部潰した。休みに休みらしいことをしたことはあまりない。例え俺以上の存在がこの学園にいなかったとしても、誰にも負けない強さを求めた。だと言うのに、俺は呆気なく桂木悠夜に蹴りを止められた。それも指2本でだ。

——まだ、まだまだ足りない

授業だけじゃ話にならない。成績を多少落としても、こいつに勝たなきゃ意味がない。——いや、少なくとも、本当の意味で戻らないといけないんだ。あの頃に。



手続きを終わらせた千冬は少し疲れながら部屋に帰ると、ボロボロになった状態で眠っている静流を見て安堵する。

その後、十歳から連絡が入って静流がIS学園に戻ってきたことは知っていたがボロボロになった理由に疑問を抱く。

「おかえりなさいませ、教官」

「ラウラか。舞崎がこんなことになっている理由はわかるか？」

「……いえ。ただ、老人が「ISの使用を認めるので部屋に運んで下さい」と言われたのでそうしました。既に治療は済んでますし、問題ないと思っけて置いています。……ですが」

ラウラはふと、思い出してポツリと言った。

「攻撃されないのです、少し心配です」

「……私はもうごめんだけだな」

ちなみに、ラウラはもちろんのこと静流は臨海学校の準備はしていない。そのことで慌てるのは8時間後だった。

第37話 夏だ！ 海だ！ 特訓だ！！

「海！ 見えた！」

周りの奴らがテンションを上げる。だがどうせ彼女らの中では海や浜辺で遊ぶことしか頭がないんだろう。

「おー、やつぱり海を見るとテンション上がるよなあ」

「そうだな。ここから海に移動して泳いだら少しは強くなれるよな」

「……………」

沈黙するクラスメイト。中には顔を青くしている奴らもいるが、

「あのさ、お前ら本当に強くなりたくないなら最低でも俺に勝てないと話にならないぞ」

「……………正直言うとき、舞崎君に勝てたら学園を支配できる気がする」

誰かがそう言うのと全員が頷くように言った。

「でも、どうして舞崎君ってそんなに強いのに生徒会長になろうと思わないの？」

「……………だって生徒会長になるのって面倒だし、トレーニングする時間が減る」

最近じゃ、俺もクラスにも馴染めるようになってきたみたいだ。どういふことかわからないが、向こうにも心境の変化があったということだろう。

「そろそろ目的地に着く。全員ちゃんと席に座れ」

そう言われて周りは大人しく席に着くが話をするのは止めないようだ。

隣に座る織斑は俺に話しかけようとするが、ラウラが後ろからプレッシャーを浴びせてくるからか。さっきのは本当にたまたまだろうしな。

目的地に着き、俺たちはバスから降りて荷物を受け取って整理した。

「それでは、ここが今日から3日間お世話になる花月荘だ。全員、従業員の仕事を増やさないように注意しろ」

「「よろしくお願ひしまーす」」

全員で挨拶するが、俺は口パクだった。織斑先生が睨んでくるのは気のせいかもしれない。

「はい、こちらこそ。今年の一年生も元気があつてよろしいですね」

「と言つてもただ弱いだけの烏合の衆ですよ。初めまして。舞崎静流です。このたびは私ともう1人の男子のせいで浴槽分けて迷惑がかかったと聞きました。お手を煩わせて申し訳ございません」

((……………誰?))

総勢8クラス分から何やら不快なことを思われた気がするけど、黙っておこう。俺が常識人で良かったな、お前ら。

「こちらが噂の……。暴君とお聞きしましたがそうでもないようですね」

「ええ。全く、誰がそんなことを言ったのやら。(血沸き肉躍る) 戦いが好きなのだの15歳ですよ」

まあ、暴君時代もあつたと言えばあつたけど。

「あ、挨拶が遅れました。織斑一夏です。よろしくお願ひします」

「うふふ、ご丁寧にどうも。清洲景子です」

商売柄か、作り笑いが出てくるババア。ハッ！ その程度で俺を騙せると思つたら大間違いだぜ。

「不出来の弟でご迷惑をおかけします」

「あらあら。織斑先生つたら、弟さんには随分厳しいんですね」

「いつも手を焼かされていますので。……まあ、最近はもう1人手を焼く生徒が増えました」

「こちらも手を焼いていますよ織斑先生」

いい加減に少しは女らしく家事ができればいいのにな。

「それじゃあみなさん、お部屋の方にどうぞ。海に行かれる方は別館の方で着替えられるようになっていきますから、そちらをご利用なさってくださいな。場所がわからなければいつでも従業員に聞いてくださいまし」

返事をした生徒たちは中に入って行く。自由時間を楽しみしていたらしい彼女らだからこそテンションだろう。

近くでは布仏が織斑に部屋の場所を聞いていたが、俺も織斑も部屋の場所がわからない。

「織斑、舞崎、ボーデヴィツヒ、お前らの部屋はこっちだ。追いて来い」

言われて俺たちは何故かラウラも含めて呼ばれたので織斑先生に追いて行く。

旅館の中は広くて綺麗だ。何考えているかわからない女将でもその辺りの分別はちゃんとしているようだ。織斑は何故かテンションを上げている。……ラウラはおそらく「どこから攻めてくるか」というシミュレーション中だろう。

「織斑はここ、舞崎とボーデヴィツヒはここだ」

「……ここって、教員室?」

「俺の部屋は何故かその隣だな」

「最初は男子を同じにする話で私もそれで良いと思ったんだがな」

「……就寝時間を無視したらに……舞崎の容赦ない暴力が範囲攻撃というもので行われますからね。ですが、何故私は舞崎と同室なのでしょう?」

ラウラの疑問は当然だな。

「ボーデヴィツヒは私がないことで侵入するだろう? それだけでなく舞崎は寝てい

る間に騒がしくしたら殺しにかかるが、同室の者だとそうならない。私も起きがけやたまに飲み過ぎた時にトイレに行くが襲われたのはあの一回だけだ」

「……………たぶん静流だから違う。違うんだ」

織斑は一体何と格闘しているんだろうか？ ま、それはともかく、

「なるほどな。確かにそれならこいつを襲う確率はなくなるな」

「わかっていると思うが、私がないからって襲うなよ？ 責任を取るって言うなら構わんがな」

「わかっているっての」

とりあえず俺と同室になったことで顔を赤くして体をくねらせているラウラを部屋の中に入れて水着の準備をする。布団は従業員が敷いてくれるから気にしないでいれればいいだろう。

ラウラが回復するのを待つてから荷物を持って部屋を出て、デュノアにラウラを預けてから別室で着替えて海に出ると、世界的に有名なRPGを彷彿とさせる状況があった。

「このリア充野郎があ!! お前だけは生きて返さん!!」

「イケメンは処刑!! イケメンは死す!! さらばイケメン!!」

「ガンホー!! ガンホー!! ガンホー!!」

……とりあえずボコるか。

何でここに男がいて、ワカメを被っているのかはさておき、だ。先制攻撃すれば大抵なんともなるものだ。

「おいテメエら、そこに座れ。俺がぶつとばしやすくなるよ」

「……………あ、あなたは……………」

「噂に聞いていたが……………こんなことがあるのか……………」

「総長!! お久しぶりです、総長!!」

すると全員が俺に土下座……………というか跪く。

「……………こんなところで総長に会えるとは……………」

「……………お前ら、まさか俺らが抜けてから「懇親会で海行こうぜ!」とか言つて遭難したとかじゃねえよな?」

行動パターンを予想して言つと、

「……………まさしくその通りです!!」

俺は心から頭を抱えた。

「……………えつと、これは一体何の騒ぎ?」

「義兄様、敵か!?!」

「……………ビキニは流石に戦闘じゃ支障が出るから要考察だな」

1人での外れなことを言っていると、後ろから雄叫びが上がった。

「女神降臨キター!!」

ゲームの影響でラウラと予想した俺は悪くない。

とりあえず織斑先生に事情を説明し、シャワーを借りてから帰り賃を渡して返してやる。

「……………まさか本当に出かけ先で遭難するのがいるとはな」

「そしてそれが俺の知り合いだというのはかなり恥ずかしいな」

ため息を吐き、俺はゴーグルをセットして海の方に向かう。

「どこに行く気だ？」

「処理も終わったんでな。このまま泳ぎに行くつもりだ」

「そうか。だが決して無茶はするなよ」

わかっていると手を振って、俺は泳いだ後にトレーニングに最適な崖を探して登っ

た。

しばらくすると頂上が見えてきて、そこには何故か俺が選んだ白ビキニを着た篠ノ之が座り込んでいた。

「何やってんだよ」

「ま、舞崎か……。驚いたではないか!？」

「普通なら海に行っているはずだろ。まさか尻込みしたのか？」

顔を背けるが、そういうことなんだろう。俺はため息を吐き、よじ登って言った。

「全く。こういう時に攻めずにいつ攻めるつもりだ? このままじゃ完全に出遅れて織斑は既にデュノア辺りと結婚してそうだけど?」

「……そ、それは……」

結婚式場で自分が客席にいることを想像してしまったのか泣きそうになっていた。

「……………それは嫌だ」

「じゃあ胸だ」

「……………は?」

「さりげなく胸で奴の腕を挟め。特に嵐の前でして胸囲の格差社会を奴に知らしめろ」

ビッチな篠ノ之はあまり想像できないが、今のこいつのテンションなら凄いものを見る気がする。

「……………だが、流石に恥ずかしいぞ」

「……………篠ノ之、お前何か忘れてないか？ セックスをする時はコスプレしてならともかく、普通は裸だろ」

それを言うとうと篠ノ之は固まった。……………こいつ、やっぱり忘れてたのか。

「お前なあ……………」

「し、仕方ないだろう!! 頭がパンクしてそれどころじゃなかったんだ!!」

「……………ま、それもそうだろうが……………だからと言ってパンクはないだろ」

「……………しかしだな」

頬を膨らませる篠ノ之。そうしたら普通に可愛いんだがな。

「……………仕方ない。ならとっておきを見せてやる」

「……………何だ?」

「お前はただ、来ればいい。そうすればすべて理解する」

俺は意味ありげなことを言い、篠ノ之を浜辺に来ることを言った。

ちなみに俺が考えた「篠ノ之を意識し、キスまで行く作戦」は篠ノ之の胸に織斑の頭を押し付けるまではしたが、篠ノ之の耐性が無すぎたことによって失敗した。

誰かが言い始めたことよって行われたビーチバレーは俺と織斑先生によつて白熱していた。いや、正しくは――

「消え失せろ、クソババア!!」

ビーチバレーという名の殺し合いに発展していた。

本来ならば3対3だったが、邪魔だったので2対2で戦っている。レシーバーとスパイカーは俺と織斑先生がそれぞれ兼任し、織斑先生のチームは山田先生が、俺のチームはラウラがトスを上げている。

かれこれ30分はしているだろうか、未だに最初の1点すら取り終わっていない。

「……………私、もう舞崎の前じゃ「男が女より弱い」とか言えないわ」

「織斑先生と身体能力で張り合えるとか無理よ」

「ほとんど動きが見えないわ」

雑魚共が総じて何かをほざいているが、高がこの程度で何を言っているのか。

とはいえ流石にこれ以上付き合っていたらトレーニングの分がなくなる。とつとと終わらせるか。

「ということで死ぬ、老いぼれ!!」

「そこまで老いていないわ!!」

ならば一種の賭けに出よう。

山田先生がトスを出し、その場所に織斑先生と同時に移動した俺は力任せに叩きつけて落とした。

「……………ふっ」

「くっ。やはり力ではお前に劣っているか」

「そもそもガチで張り合っただけに俺に勝てるか。だがまあ、久々に燃えた勝負だった」

「それはこっちのセリフだ」

俺は織斑先生に手を差し出して立たせるのを手伝う。織斑先生も空気を読んで手を掴んで立ち上がり、俺たちは握手をし直した。

周りからは拍手が送られる——が、それは馬鹿かと言わざる得ない。

「……………で、テメエはいつになったら家事をし始めるんだ?」

「……………そつちこそ、いつになったら大人しくなる?」

お互いの腕を潰しにかかっているのを見て拍手は割とギャグでしかない。

握手を止めて目的のために移動する。ちょうど日陰になっている俺が立てておいたビーチパラソルを見つけてそのベンチに寝転がった。

「義兄様!」

「あー、気にするな。俺は少し休むだけだ」

流星は織斑千冬か。女の割には戦える人間なんだろう。

俺の手を痺れさせるほどの実力は認めるが……やはりあの女では少々物足りない。

なんて思っていると、ラウラは俺の上に乗ってきた。……体重はそんなにないだろう

が、やはり人体だとそれなりに重さがあるんだろう。……とここで、

「ラウラ、ここは公衆の面前だからな」

「私は構いません」

「いや、構えよ」

ツインテになっているラウラの額にデコピンをした。周りは遠巻きに俺たちを見ていて、「場所を考えなさいよ」とか「どうなるのかな」とか、それぞれ興味を持っているようだ。

「ところで、この格好はどうですか? シャルロットにしてもらったのですが……」

「そうだな……見違えた」

素直に可愛いと思った。デュノアの奴、将来はIS操縦者ではなくヘアデザイナーになるのだろうか?

未だに離れないラウラの頭を撫でる。すると大人しくなったので離そうとするが俺

の海パンを掴んで離さない。仕方なく諦めてそのままでいた。

(……懐いたのは良いが、本当に俺のどこが良いのかわからないな)

俺はこいつの双子の姉が好きで、同じ年だが女としては見ていない。妹としては見ている。義妹ではなく本物の妹だ。……大体、妹というのはこういうものなんだろうってことはわかった気がするが……

(……本当、俺のどこが良いんだろ……)

頭を撫でて休むと気が付けば寝ていたので旅館の部屋で寝かせてやることにした。



一方その頃、

——バキヤツ!!

突然の音に驚いた天才は後ろを振り向くと、そこにはモニターを握力で潰している助手の姿が映った。

「ラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺すラウラ殺す……」

基本的に科学において無敵を誇るその科学者も、義理とは言え娘のその形相に少し引いたとかなんとか。

第38話 邂逅—Where are you?—

「義兄様、私も食べさせてほしい」

「ちよつと織斑を殴ってくるから大人しく食べなさい」

そうピシヤリと言うと、ラウラは頬を膨らませる。残念ながらその攻撃は俺には効きません。

今は夕食。織斑がオルコツトに食べさせようとしたせいでラウラがねだって来たのだ。

ちなみに俺はそこまで食材にこだわっていないので、ワサビの違いはわからない。

(……大体、そんな騒いだらどこかの誰かさんが切れるだろうに)

なんて思っていると、噂をするとなんとやらの方式で案の定現れた。

「お前たちは静かに食事することができんのか!!」

流石は鬼教師。たった一言で黙らせたよ。

「どうにも、体力があり余っているようだ。よかろう。それでは今から砂浜をランニングして来い。距離は……そうだな。50 kmもあれば十分だろう」

「いえいえいえ！ とんでもないです！ 大人しく食事をします！」

「あ、じゃあ俺は後で行くけど、食後すぐはマズいから1時間後ぐらいでいいか？」

「……………ちなみに今日は何をしていた？」

「ブイを3往復して、崖登りを10本、ランニングはしていないから——」

「お前はもう休め！　そして食事が終わったらとっとと風呂に入れ！　流石にオーバーワークだ!!」

「そうか？　俺はもつとできるけど……………」

とはいえ、基本的に夜は外出禁止となっている。走りに行ってもいいが余計なことをしてせつかくの明日の行事に参加できないことになったらそれはそれで面倒だ。仕方なく自重する。……………ちなみに、後で聞いたらブイの端から端の距離は1kmはあったらしい。

「織斑、あまり騒動を起こすな。鎮めるのが面倒だ」

「わ、わかりました……………」

オルコットの機嫌を取るために織斑は部屋に誘ったようだ。姉がいるのに部屋に呼ぶとか中々勇気がある奴だ。

風呂から上がり、ラウラと一緒にフルーツジュースを飲みながら廊下を歩いていると何やら俺らの部屋の隣で人だかりができていた……というか、何をしているんだ？

「？ 何をしているんだ、貴様ら」

ラウラが俺の代わりに疑問をぶつけると、咄嗟に風が口を封じる。

他にも篠ノ之、デユノア、そして少し着衣が乱れているオルコットが襖に耳を当てている。

『くあつ！ そ、そこは……やめつ、つうツ!!』

『すぐに良くなるって。大分溜まっていたみたいだし、ね』

『あああつ!』

……結論。この会話だけで言えばラウラの教育上よろしくない。

俺たちは離れようとすると、

『じゃあ次は——』

『一夏、少し待て』

俺は数歩離れると襖が飛び出した。破れないように手加減はしているらしい。

4人はまともに食らい、10代女子にあるまじき声を出したが。

「何をしているか、馬鹿共が」

「さあな。大方、アンタらが近親相姦しているとでも思ったんだろ」

「……………はあ」

軽く臭いを嗅ぐが、あまりイカ臭くない。つまり何か別の事をしていたのだろう。

「盗み聞きとは感心しないが、ちようどいい。入っていけ」

「「え？」」

「もちろん、舞崎にボーデヴィツヒもだ」

「……………マジで？」

だがまあ、部屋に帰ってもI Sの調整以外は何もないし、面白いことになりそうだから一緒に一緒しようかね。

「セシリア、遅かったじゃないか。じゃあ始めようぜ」

そう言って織斑は布団を叩いて誘う。

「え？ ああ、皆さんもいらつしやいますし……………」

その発言はアウトだが、それが後でマッサージだと判明してオルコットは恥をかい
た。

にしても平然と女の身体を触る織斑って……………正直引くわ。ちなみにラウラは普通に風呂に入ってくるので色々諦めた。さつきも普通に入ったしな。

なんて、どう改善しようかと思っていると織斑先生はオルコットの尻を触った。

「おー、マセガキめ。しかし歳不相応の下着だな。その上黒か」

「……きやあああッ!?!」

椅子に座っている俺からはラウラが膝に座っていることもあつてどんな下着かはわからないが、

「義兄様、私もあんなパンツを買った方が良いのだろうか？」

「ラウラはもう少し成長したらな」

危ない下着なので、もう少し色々と成長したら買うことを検討してもらおうとしよう。

「せ、先生！ 離してください！」

「やれやれ。教師の前で淫行を期待するなよ、15歳」

「い、いいい……いんこ……」

俺はともかく全員が顔を赤くする。ラウラはちゃんとその意味を知っているのか頬が熱かった。

「ふー。流石に2人連続ですると汗かくな」

「手を抜かないからだ。少し要領良くやればいい」

「いや、そりやせつかく時間を割いてくれる相手に失礼だつて。あ、静流。後でお前にもやっつてやるよ」

「それをした瞬間、お前を女子風呂に入れてやる」

「……………それは勘弁」

大体、男に身体を触られる趣味はないっての。

「まあ、お前はもう1度風呂にでも行ってこい。部屋を汗臭くされては困る」

「そうする。静流も一緒にどうだ？」

「そうなるともれなくラウラも一緒になるが？」

「……………え？」

全員がポカンとして俺たちを見た。

「え？ アンタたち、一緒に入ってるの？」

「何か問題でも？」

「……………舞崎」

「たぶん嵐でも大丈夫なんじゃないか？」

「ちよ、何言ってるのよ!？」

「だっってお前、貧乳だし」

「……………OK、覚悟しなさい」

「ほう。俺に喧嘩を売るか、雑種」

嵐を睨みつけると委縮した。ま、当然か。

「とりあえず、一夏。お前はとつとと風呂に入れ。どうせ舞崎は何もしないし、する気ならとつとつにやっている」

「……………それもそうだな。でも静流、千冬姉に手を出すなよ」

「わかっているし出す気はないから安心しろ」

織斑はようやくいなくなる。全く、この女に手を出すとか正気じゃないだろ。

「じゃあ、俺も帰るわ」

「義兄様が帰るなら、私も帰ります」

「おい待て。お前らも話を——」

「いや、いい。アンタが下らないことで俺を誘ったのはわかりきっているし、恋バナに男が参加するのは法度だろう？　そういうマナーの悪い男子は織斑だけで十分だ」

そう言い、俺はラウラを連れて部屋に戻った。

それは朝早くのことだった。

俺は少し早いトレーニングをしていると、突然感じた視線に足を止める。

「……………誰だ?」

そう言えば、織斑先生が言っていたな。

この臨海学校は遠くから各国の視察が行われているって。もしかしてその類——
いや、違う。

「……………仕方ない」

トンファアを出して銃にした俺は辺りにぶつ放す。

すると一つだけ変な反射がし、そこにトンファアの先端から鎖を飛ばした。

「捕らえた。お前は誰だ? 俺を狙う——」

俺は思わず言葉を切った。

そこには本来いないはずの女が——クロエがいた。

「クロエ!? ——!?!」

突然クロエから光が放たれる。俺は咄嗟に眼を瞑り、失明を避けた。

「……………どこだ」

……………あれは確かにクロエだった。……………一体どこに消えたんだ。

それから俺はしばらく探していたが、いないことをラウラが織斑先生に相談したのか、電話が鳴って渋々帰ることにした。

「ようやく集まったか。……………舞崎、それは何だ？」

「放置されていたから拾った。ISの装甲に使えそうだったからな」

「……………それを、か」

デフォルメのニンジン指して織斑先生はそう言った。

「色を変えて調整すればおそろく使える」

「……………そういう問題ではないんだが……………まあいい。その話は後だ。さて、それでは各班ごとに振り分けられたISの装備試験を行うように、専用機持ちは専用パーツのテストだ。全員、迅速に行え」

言われて俺たちはそれぞれ作業に入ろう——としたが、

「舞崎、篠ノ之。お前たちはちよつとこつちに来い」

「はい?」

「何だ?」

もしかしてニンジンの件だろうか? 俺は関係ないはずだけど。

「舞崎、そのニンジンはかなり危険なので預からせてもらえないか? 適切な処分を行

う」

「……………ババア、潰されたいか?」

「お前の気持ちはわからなくもないがな。ちよつとそのニンジンは危険だ」

「……舞崎、濟まないがそのニンジンだけは織斑先生の言う事を聞いた方が良い。私や千冬ならばともかく、たぶん舞崎は厄介なことになると思う」

「……篠ノ之まで？ このニンジンに一体何があるというのだろうか？」

「……そうなれば自己責任だ。悪いが使わせてもらう」

毒を食らわば皿まで。俺には余裕がない。……本当なら、今すぐ行事をポイコットしたい気分だ。

さっきの森にクロエがいるならば尚更。一体どうしてクロエがあそこにいるのかわからないが……。

「……舞崎に関してはとりあえず保留だ。それよりも篠ノ之、お前には今日から——

」

「——ちいいいちゃああああああんツ!!」

大きな声がして、全員が何事かと振り向くと砂煙を上げながら何か接近してきていた。俺は篠ノ之を抱えて少し離れて降ろす。

「……束」

「やあやあ！ 会いたかったよ、ちーちゃん！ さあ、ハグハグしよう！ 愛を確かめ——

ぶへっ」

織斑千冬は手加減していなかったことはわかった。

「話は以上か？ ならば俺は作業に戻らせてもらおう」

………とりあえず計器を弄る。たぶん、あの時にもISを持つていたからクロエの事は映っているかもしれない。

そのことを期待していると、

「うるさいぞ、束」

「ぐぬぬぬ……相変わらず容赦のないアイアンクローだねっ」

そんな会話が繰り返されている。あの女、織斑千冬のアイアンクローを抜け出せたのか。凄い力だな。

つと、感心している場合じゃない。今はあの映像を……考えてみたら、あの時ISを展開していないから映像は残っていないんじゃないか……。

とりあえず、機体の調整だ。山田先生が困った様子で俺の隣を通過した。

「え、えつと、この合宿では関係者以外——」

「んん？ 珍妙奇天烈なことを言うね。ISの関係者というなら、一番はこの私をおいで他にいないよ」

「え？ あ、はい、そうですね……」

やっぱり、使い物にならねえ。

「おい束。自己紹介くらいしろ。うちの生徒たちが困っている」

「えー、めんどくさいなあ。私が天才の篠ノ之束さんだよ、はろー。終わり」

「……………何？ あれが？」

あんまり写真がなかったから顔を覚えていなかった。……………とりあえず、

「織斑、あれって本当に篠ノ之束か？」

「あ、ああ。そうだけど。まさか束さんに話しかけるのか!! 止めとけ。どうせ適当に

あしらわれるぞ」

「……………いや、篠ノ之の姉の割に猫背だなど思っただけだ」

「……………え？ そこ？」

援護しておくか。

「何を言っているんだ、お前は。篠ノ之の背筋は綺麗だろう？ そもそも、あの胸が垂れ

ずに一定のバランスでいるのは篠ノ之の背筋が綺麗からであり、篠ノ之の乳房の形が良

いのはその背筋ありきだ」

「……………お、おう」

おっと、いけないな。思わず力説してしまった。

「すまなかつたな。じゃあ俺は作業に戻る」

そう言っただけは自分のISの所に戻る。そして周囲に怪しい動きをしている奴がい

ないかを探るが……………いない。

(……………後で、あのオッサンに確認を取るか)

今はクロエの事を置いておく。まずは機体のチェックを——しようと思った瞬間、上から何かが降ってきた。

それが着地した衝撃で軽い揺れが起こる。……………あれ？ 着地していない？ と思つたらそれが開いた。

「じゃじゃーん！ これぞ箒ちゃん専用機こと、「紅椿」！ 全スペックが現行ISを上回る束さんお手製ISだよ！」

そんなことより俺は、菱形から出ているアームが紅椿とやらから離れた瞬間、菱形を奪つて元の位置に戻った。

(……………とりあえず、これを解体して使える奴を使って——)

——ガッ!!

拳が来ていたので軽く受け止めると、

「……………お前、何やってんだよ？ ……って、それ束さんの!？」

「……………やはりか」

篠ノ之束の後ろから織斑先生がため息を吐いていた。

「お前、それどこで取つたんだよ!?! 事と次第によつては殺すよ?！」

「……………せっかくの出会いですが、今私は機体の強化に忙しいので挨拶は後でお願いし

ます」

「いや、おい、ちょっと!」

そう言うのと不満そうに声をかけてくる。

「……………姉さん」

「ごめんね箒ちゃん! 今こいつをとつちめて——」

「姉さん。私はISを受け取れません!」

急にそんなことを言われて驚く篠ノ之束。その顔は本気で驚いていた。

「ほ……………箒ちゃん……………? どうして……………」

「……………私は何の努力もしていない。たぶん、私にはその機体は使いこなせない。でも

その男ならば、舞崎静流ならば姉さんの作った機体を使いこなせるはずです!」

「……………箒ちゃん? 本当にどうしたの? だって専用機だよ? 私が作ったから強

いよわ。」

……………本気で驚いているな。にしてもあの天才、篠ノ之束が作った機体か。

とはいえ、天才というものは本当に何を考えているかわからない生き物だ。近くにそういうのがいるからな。

「篠ノ之束、1つ聞きたい」

「何だよ蛆虫。箒ちゃんと会話してんだから邪魔してんじや——」

「……仕方ない。このクソ詰まらないことが終わったら後で篠ノ之を襲うとするか」
俺は突きを回避した。中々に早い突きである。

「……お前、何考えてんの？ 多少強いくらいで粋がつてんじゃねえよ」
「そんなことよりも織斑先生」

後ろで篠ノ之束が驚いているのは放置して、聞きたいことを尋ねた。

「……何だ？」

「実際の所、あの機体に何か細工していると思いますか？ 乗ったら爆発するとか？」

「……いや、ない。束がこの10年の間に何か心境の変化があれば別だが、アイツは篠ノ之のことを大切にしている。これだけは確実だ」

小声で話していると、後ろから素早い動きでこっちに来た。それを織斑先生に任せて俺は篠ノ之の所に行った。

「篠ノ之、お前がああの機体……まあ、あの赤いのに乗れ」

「……正気か？ そもそも、舞崎は十分に強い。専用機を受け取る資格はある」

「……前にも言ったが、お前は本来ならとくに専用機を受け取ってもおかしくない。国家代表養成所に行かなくてもだ。それほどお前は特別な存在だとは思ってたし、だからこそ政府の人間が付いていたのだろう？ まあ、特別って言っても俺には関係ないことだが……それとも、周りを気にしているのか？」

「……………それもある」

……………まあ、敢えて突っ込むまい。

「……………ともかくだ。資格だ何だというならお前には十分にある。お前はこれまで窮屈な思いをしてきたんだ。だったら少しは姉に償ってもらっても良いだろう」

「……………良いのか？ あの行動は私も擁護できないが、姉さんはそれ以上にお前のことを嫌っている。それに、姉さんの機体は特殊性の強いものも多い。私はとても扱える自信がない」

「……………んなもん、最初から扱える奴なんていねえよ。要はお前の頑張り次第だ。文句ある奴は俺が黙らせるから、お前は受け取れ。それにだ篠ノ之」

「……………何だ？」

「俺はどつちかというのと、自作する方が好きだ。俺に引け目があるなら機体のデータをくれるだけで良い。ま、冗談だけだな」

そう言つて俺は篠ノ之の背中を軽く叩く。

「こ、後悔しても知らないからな」

「安心しろ。俺の実力は知ってるだろ？」

「……………むしろ、この機体を使つても勝てる気がしない」

精々努力しろよ？　そして俺を楽しませてくれ。……………さて、火消しにでも行きま

しようかね。

「あの専用機って、結局篠ノ之さんがもらえるの……？ 身内ってだけで？」

「だよねえ。なんかずるいよねえ？」

「……………だつたらお前ら、政府の監視付きで思春期を監視されたいか？」

2組でそんな会話が起こつたので無理矢理介入してやる。

「……………何よ？」

「篠ノ之はこれまで、姉のせいで窮屈な状況を味わされていたんだ。姉の居場所を聞き出すために尋問されたり、姉の存在がバレて転校を繰り返したり、遠足なども遠出も禁止されてきた。そんな状況でお前らは楽しい学校生活を邪魔されたいのかと聞いているんだよ。あの機体は要は姉からの詫びも兼ねている、ようやく返してもらつたらものだ。それに、下手すれば今後結婚しても命を狙われる可能性だつてある。そのための守る力を受け取つただけに過ぎない。篠ノ之に文句を言うなら、まずお前らの努力のしなさを呪えよ。温い努力していないお前らが文句言つてんじやねえよ。それに篠ノ之にI Sに乗るようにけしかけたのは俺だ。文句があるなら俺に言え。俺に喧嘩を売れ。それができない時点でテメエらに何も言う資格はねえ」

———ブチ殺すぞ

数人腰が引けたのか、その場で座り込んだ。……ザマア。



篠ノ之束は少し嬉しかったのか、心から笑みを浮かべる。

そう。これは確かにそれも兼ねている。大切だと思っていた妹には苦行を強いてきたことには負い目を感じている。だからこそ「織斑一夏」を利用して自分が考える最強のISを妹にプレゼントした。

(……………その働きに免じて、さっきのことは帳消しにしてあげるよ)
紅椿の調整をしながら作業に戻った静流を見ながら箒に質問した。

「ねえ箒ちゃん、箒ちゃんはあの男をどう思っているの？」

「……………舞崎ですか？ 舞崎は、お兄さんみたいな感じでしょうかね。あんな兄がいたら良かったなって思っています」

その顔は照れていた。それだ。だから彼女は、舞崎静流が気に入らない。

妹は変わった。だけど変わり過ぎた。それが彼女は気に入らなかった。

紅椿の調整が終わった頃、山田真耶が千冬に緊急事態を知らせに来た。そしてそれは—— I S 学園史上、もっとも長く感じる黒い時間が始まる合図でもあった。

第39話 めぐりまわる修羅場

山田先生からの突然の知らせであり、織斑先生としばらく話した後、専用機持ちが集められた。……何故か俺でもあるが。

機体スペックで言えば強化されたとはいえ所詮は第二世代の域を超えない。そんな奴の機体が何の役に立つのか甚だ疑問ではある。

「では、現状を説明する」

本来は使われる予定はなかったであろう、一番奥にあった宴会用の大座敷で俺たちに向けて説明がされるようだ。

投影ディスプレイをより綺麗に映すためか暗くされているが、目が壊れないか心配である。

「二時間前、ハワイ沖で試験稼働にあつたアメリカ・イスラエル共同開発の第三世代型の軍用IS「銀の福音」シルバリオ・ゴスベルが制御下を離れて暴走。監視空域より離脱したとの連絡があつた」

「……………」

んなもん作る暇があつたらもつとまともな機体を作れよ。

「その後、衛星による追跡の結果、福音はここから2 km先の空域を通過し、日本に向かって移動していることがわかった。時間にして50分後。学園上層部からの通達により、我々がこの事態に対処することとなった」

……日本にアメリカが関わったISが向かうか、そりや滑稽だな。

「教員は学園の訓練機を使用して空域及び海域の封鎖を行う。よって、本作戦の要は日本からの助っ人と私を含めた専用機持ちに担当してもらおう」

そろそろ、か。

俺は立ち上がりながら全員に声をかける。

「んじゃ、俺は部屋に戻るわ」

「え？ 何でだよ!? 今の説明じゃ日本が危ないってことじゃないのか?」

「流石にそこまでは頭が腐っていないみたいだな、織斑。だからこそ、だ。仮に俺たちが出撃して任務に失敗しても日本がどうにかするだろ。ならばこの作戦は尚更不必要だ。それに俺はリターンがあったとは言え働きすぎているからな。たまにサボったって罰は当たらんよ」

そう言ってさりげなくラウラの頭を撫でて俺は退出して自分の部屋に向かった。



織斑一夏は疑問を浮かべていた。

これまでの事を考えれば静流が飛びつきそうなことだというのに、あっさり退場した静流が意外に感じたのだ。

そしてそれは、ラウラと簪、そして箒を除く他の専用機持ちも同様だった。

だが千冬は知っている側。気にせず話を進めていく。

「それでは作戦会議を始める」

「ま、待ってくれ!?! 静流は良いのか!?!」

「……舞崎は自分が戦えないということを自己申告し、部屋に戻っただけだ。織斑もそ

うなら部屋に戻ってくれて構わない」

だが、一夏はここに残ることを選んだ。

作戦会議が始まり、福音の機体データを閲覧して皆はある結論を出した。

——機動力が高いため、一撃必殺で沈めるしかない、と

そこで一夏に白羽の矢が立つことになるが、それを千冬が言った。

「……安心しろ。今回は織斑が出る必要はない。ただ、『雪片式型』の使用許諾を出してくれ。デュノア、手伝ってやれ。お前の方が詳しいだろう」

言われてシャルロットは頷いて一夏の手伝いを始めた。この非常時に嫉妬はしている者はいたが事を大きくするつもりはないようだ。

「……問題は、福音のところの誰に運んでもらうかだ。お前たちの中で一番早く福音の所に移動できる奴はいるか？」

「それなら、わたくしのブルー・ティアーズがちょうどイギリスから強襲用高機動パツケージ『ストライク・ガンナー』が送られてきていますし、超高感度ハイパーセンサーも付いています」

「超音速下での戦闘訓練時間は？」

「20時間です」

千冬は許可を出そうとした瞬間、天井から声がした。

「待った待った！ その作戦はちよつと待ったなんだよ」

「……………やはり舞崎にも作戦に参加してもらうんだった」

思わずそう呟くが、東は構わず下に降りる。

「聞いて聞いて！ ここは断然、白式と紅椿の出番なんだよ!!」

「……………東、いい加減に分別を持って。今は大事な作戦会議中だ」

「ちよつと待って!?! 予想外の返しに東さんはびっくりなんだよ!?! ……ま、それはともかく、紅椿のスペックデータを見てみて！ パッケージなんかなくても超高速機動ができるんだよ!」

瞬間、千冬は東の頭部を畳に叩きつけた。

「何するのちーちゃん!?!」

「ちようどいい。天才科学者が手に入ったことだし、東。お前が福音を止めろ」

「やーなこつた。何で私が石ころ共の尻拭いをしないとイケないんだよ」

「ISは元々お前の開発だろう？ それに、色々とおかしな点があるんでな。何故お前が行動しないんだ？ 仮にもISの不祥事だ。お前が責任を取るのも1つの筋だと思うんだがな」

言われて東は一夏にバレないように舌打ちをして言った。

「もーいーよ！ ちーちゃんの馬鹿!」

そうやって東は泣きながら出て行く。すると千冬のISの待機状態であるミサンガから電流が走り、一瞬痺れた。

「……………まさか」

千冬はすぐに外に出てISを展開するが、彼女の専用機となっている打鉄特式は反応しなかった。

それにより千冬は作戦変更を強いられ、セシリアも「ストライク・ガンナー」の量子変換が終わっていないことが判明し、箒を投入しないといけない事態になった。

まず一夏と箒が先行し、量子変換終了後にセシリアが合流する形となり、作戦会議は終了する。

——しかし、3人……………いや、2人は作戦を失敗させてしまい、一夏は昏睡状態に陥った



本来俺は部屋で監禁されるのが当然なんだが、残念ながら大人しくするほどまともな性格はしていない。

ノルマの筋トレを終わって外を覗くと、周りは慌ただしかったので様子を見に行っ
た。

「作戦は失敗だ。以降、状況に変化があれば招集する。それまで各自現状待機しろ」
そんなことを織斑先生が言っていたので、大体察した。

おそらく任務は織斑と篠ノ之が担当したが、どちらも未熟だったので作戦失敗ってところか。詳細は後でラウラに聞くとして、今は改修作業に戻るか。



「……………暇だ」

そう言って高校生相当の男がため息を吐く。

「……………飽きた？」

「うん。っていうか急にテストできないって何なのさ!? せつかくとっておきをたくさん運び込もうってした矢先なのにさ!!」

「……………どんまい」

悠夜がそう言って慰めるが、零司にとっては慰めになっっていなかった。

「せつかく……………せつかく静流みたいな奴に懐く女が出てきたから、お祝いによく効く媚薬を持って来たのに!!」

「……………本音は？」

「簪と本音に一服盛ってやるつもりだった」

「……………」

悠夜は静かに零司を殴るという制裁を与える。

「……………今、手加減しなかったよね？」

「……………必要性……………感じなかった」

そう答える悠夜はさつきからゲームをしているだけではなかった。

突然の「緊急事態のため、テスト稼働を中止する」という通達は既にされているが、ほとんどの人間が帰っていない。今のところ倉持技研に所属している零司とそのアルバイトである悠夜は風呂を覗くという目的のために時間を潰しているが、他の人間は全員大人だ。

「お久しぶりです、零司さん！ 悠夜さん！」

突然声をかけられた2人は後ろを向くと、かつて彼らが所属していたチーム「ブラッドデーモンズ」のメンバーがいた。

「あれ？ こんなところでどうしたの？ もしかしてみんなも夜まで待ってIS学園生の風呂場を覗くつもり？」

「ええ、それで——すみません。冗談です。たまたまこの辺りを通ったら珍しい顔ぶれがいたので声をかけさせてもらったんです。お久しぶりですね——でも、邪魔です

ね」

突然の事だった。

悠夜が持っていたゲームが叩きつけられ、驚いている間に悠夜は刺された。

「悠夜！」

「おっと」

——トンっ

零司は動きを止める。

「……………一体、どういうつもりだい？」

「いやあ、ずっとあなたたち3人は目障りだったんですよ。だからこの際、3人には退場してもらおうと思ってるね」

そう言っつて声をかけた男は引き金を引く。辺りに銃声が響くことはなかった。



汗でシャツがべたべたしてきたので温泉に入ってから出ると、篠ノ之が泣きながら部屋を出て行った。

俺は部屋を軽く覗くと、織斑が倒れている。俺が死になつた時に着けられたものが諸々装着されているが、そういうことなのだろう。

(……………馬鹿な奴だな)

織斑は経験が圧倒的に不足している。こいつは成長速度は早いけど、状況判断が上手くできているわけではないし、何よりも馬鹿だ。そんな奴を任務に出すことになつた状況を作り出した奴は相当なアホだろう。

そしてさつき、篠ノ之が出て行ったということはろくなことではない。

俺の足は自然と浜辺に向かっていた。篠ノ之が持っていると思われる紅椿がそつちにあるからだ。……………捨てたかもしれないがな。

俺が着いた時には既に代表候補生が囲んでいた。……………更識がないな。まあ、あの

女は放置で良いか。

「やるべきことがあるでしょうが！ 今！ 戦わなくてどうすんのよ！」

「……………わ……………私はもう……………ISは使わない」

風が篠ノ之をピンタした。……………風つて力強いんだな。判断が遅いだけかもしれないが。

「甘ったれてんじやないわよ……………。専用機持ちつつーのはね、そんなワガママが許されるような立場じやないのよ。それともアンタは、戦うべきに戦えない、臆病も——」
 今度は篠ノ之が風をグーで殴った。

「……………黙れ」

……………様子がおかしい。篠ノ之から殺気が出ている。

(……………これって……………)

場数の差か、俺よりも弱いがこれは何かが弾けた時の状態だ。

「お前たちに何がわかる……………私は、ISが嫌いだ!! 未だに子どもな姉さんも嫌いだ!! 全員が私にISを押し付けて何が楽しいんだ!? IS学園に入ったのも、入れられたんだ! 私はずっと別の所が良かった!! なのに誰も聞いてくれない!! 私はお前たちとは違う!! 好き好んであんな、あんな女の妹になったわけじやない!! お前たちみたいにISに関わりたくて……………専用機を持ちたくて持ちたかつたわけじやないんだ

!!!
」

おそらくそれが彼女の本音だろう。

更識以外のその場にいる専用機持ちたちは言葉を失う。俺は降りていくと篠ノ之が駆け寄ってきた。

「舞崎!」

拳が迫るが、俺はそれを敢えて受けた。

「アンタ……」

「……舞崎……どうして……?」

「流石に木刀じゃ回避していたけどな。でも流石にダメージ来るわ」

拳が頬から離され、俺は頬をさする。そして篠ノ之を引き寄せてクロエやラウラを扱うように頭を撫でた。

「ま、舞崎!?! 何を——」

「いや、こうすれば落ち着くだろ?」

「………義兄様、浮気ですか?」

「お前にも何度もしてるだろ」

温泉内でも、風呂場でもしてただろ。

「ま………ままま………舞崎!?! さ、流石に落ち着いた………落ち着いたから離してくれ」

「……そうか。なら良いけどな」

そう言つて離してやり、少し離れる。

「ところでお前ら、これから敵討ちか？」

「……そうよ。アンタも来てくれたら嬉しいんだけど……」

「それはできない相談だな」

成り行きならばともかく、俺は織斑に対して思い入れはあまりない。所詮今の奴は俺にとつて石ころ程度の価値しかない。

「どうしてですか……？　一夏さんはあなたにとつて——」

「取るに足らない存在だ。むしろ、そろそろ雑魚の癖に鬱陶しいハエだと思つていほどだ。だがラウラ」

「……何ですか？」

「お前は俺に縛られる必要はない」

その言葉の意味を察したのか、ラウラは驚いた顔をした。

「悪いが俺が好きなのはお前じゃない。だから俺はお前を縛る気はない」

「……そう……か……」

「とはいえ、流石にこのままじゃ目覚めが悪いからな」

ラウラの手を取り、俺は彼女の左の中指に指輪を嵌めた。

「…………義兄様…………」

「勘違いするな。回数は数回だけの効果は薄いものだ。放置したとはいえ、それで死なれたら目覚めが悪いからな」

「……………わかりました」

俺は踵を返してそのまま自室に戻る。そろそろ日が沈みそうな夕方だった。

(……………寝るか)

寝れるときに寝ておこう。何か、嫌な予感がするから。

そしてその数分後、ラウラたちは織斑の敵討ちに出て行った。



太陽が半分以上沈んだ頃、花月荘に助つ人が向かっていた。日本の国家代表の戸高満とその付き人の武藤正勝である。

急を要することで、2人はまた呼び出されたのだ。

(……………1週間休んでも問題ないだろうな)

内心、正勝はそんなことを思つて車を運転する。

「……………一体だろうね、この機体の目的って」

「さあな。本州を攻めるわけでもない。かといって近くの花月荘を襲うわけじゃない。

……………交戦して3時間以上、あのように固まって——嘘だろ!？」

正勝は驚いて叫ぶ。

「……………これ、一体どういうこと？」

「織斑千冬は何をやっているんだ」

すると、後部座席から人の舌打ちが聞こえてきた。

「……………どうせ、織斑一夏の敵討ちだろう。……………まあいい。戸高、出るぞ」

運転中だというのに、ドアを開け、飛び出した。

「……………済まない戸高さん、付き合ってやってくれ」

「ダーリンの言う事なら喜んで」

そう言つて満も同じようにドアを開けて飛び出し、ISを展開する。先に出たのとは違つてドアをちゃんと締めて行つたが。

「……………そのまま説明すればいいか」

再び正勝は長期休暇を申請することを心に決めた。

たった1人を残して役者が揃い始める。

各々はそれぞれの野望のために動き始める。だが、まだ誰も知らない。

——自分たちは所詮、特別ではないということ

第40話 ブラッドデーモンズ

それは突然のことだった。

男たちは素早く侵入し、次々と部屋を制圧していく。予め持ってきていた娯楽に興じていた生徒たちはわけがわからず、銃を突きつけられて男たちの要求に従っていく。

そしてそれは、風花の間も同様だった。

「動かないでもらおう」

千冬は抵抗しようとしたが、教員の中には素人が半数いる。さらに、

「抵抗すれば生徒を数人殺すことになる」

その事実を突きつけられれば、千冬は動けない。彼女は束とは違って非情ではなかった。

「今は作戦行動中だ！」

「それはこちらと同じことだ。安心しろ、目的の物を回収すればすぐに撤収する」

それを言われて、千冬は戦慄した。

男たちが急に現れて生徒を人質。だが……生徒はまだ人質でしかない。

「……………その目的の物とは何だ？」

「言うまでもないだろう。ともかく、あなた方は現状を維持し——」
突然の事だった。

男のインカムから別の男の悲鳴が上がったのである。

「おいどうした!?! 何があった!?!」

『り、リーダー………わかりません。急に襖が開いたと思ったら仲間が殴られて——』

ぎゃあああああああああ!!?』

悲鳴と共に通信が切れる。どういふことか全くわからない一同はその場で沈黙する。

その頃、現場では——鬼が暴れていた。

話は少し遡る。

「いつつ………あいつら、いきなりぶつ放しやがって………」

銃で撃たれたはずの零司は生きていた。それもそのはず、彼は中に男性用のISSスーツを着ていたのである。それは悠夜も同様だが、彼の場合は刺された拳銃まともな治療

をされずに森に移動され放置されていたのだ。普通ならば死んでいてもおかしくはない——のだが、

「……………もういい」

その一言で零司は察した。

ISスーツを着ていた恩恵か傷も大して深くなさそうだと判断した零司はそれ以上何も言わずにとある場所に連絡する準備をする。

「……………悠夜？」

「起きた？ ちょっと行くわ」

「たぶん聞かなくてもわかったけど一応聞くね。どこに？」

悠夜は醒めた眼で零司を見て一言、たった一言だけ言った。

「——花月荘」

試作型の剣は持たせているし問題ない。そこまで考えた零司は凄惨な形相で向かって行く悠夜をただ眺め、

「あ、楯無？ ちょっと悪いんだけど轡木十蔵に変わってくれる？」

心の中で悪いと思いつつそう言った。

「え？ 良いんですか？」

『ええ。事態は概ね把握しました。あなたたちの行動はこちらでフォローしましょう。それにあなたも行きたいでしょう？』

「はい！ だってまだ届けていませんからね！」

何を、とは言ってはいけない。

『……零司』

「大丈夫。ちゃんと手加減するから」

『……それもそうだけど、簪ちゃんと本音ちゃんのこと、絶対に救ってね』

『お嬢様、たぶんそれ愚問かと思えます』

虚の突っ込みに笑い、零司は通信を切って花月荘に向かっていった。

1年8組のために用意された部屋は、もはや処刑場と化していた。

辺りには血が飛び散り、畳の上には大怪我をした男たちが倒れている。中には眼球を

傷つけられている人間もおり、今ものたうち回っている。

その惨状を作り上げた存在は、両手のすべての指を破壊した男の足を折っていた。

「……………助けて……………くれ……………」

「じゃあ、次腕を切断するね」

「……………あのね、悠夜君」

見かねた朱音は悠夜に声をかける。

「何だ？」

「あのね、もうちよつと丁寧にできない？」

「……………四肢をちゃんと切断すればいいの？」

「ごめん。まだマシな提案をしてくれると嬉しいかな」

ちなみに8組の生徒はその会話に戦慄していた。それもそうだろう。いきなり銃を突きつけられて従わされたと思つたら別の男が乱入し、素手で次々と潰したのである。

「……………朱音、この人は……………」

「大丈夫。私たちの味方だよ。サイコオーガって二つ名持ってるけど」

「……………朱音の味方だから……………いざという時は見捨てる」

そう本人に言われたことで全員が泣きそうになった。

1年1組の生徒たちは恐怖していた。いや、この程度の恐怖なんて慣れたものだと思っていた。

だけど、いざ銃を突きつけられてみれば呆気なく捕まったのだ。1組には本音がいるが、すぐに別の生徒が捕まったこともあつて動けずにいた。

「本音!」

1人の男が本音を押し倒し、帯に手をかけた瞬間に槍が肩に突き刺さった。

「何!?!」

「ハロハロ、いやあ、間に合つてよかったよかった」

笑みを浮かべる零司は槍が刺さっている男を教えて倒す。

「本音、大丈夫?」

「……大丈夫だよ、ありがとう」

零司は指を鳴らすと全員の腕が切断された。

「そうだ本音、これ渡しておくからいざという時に使つて!」

そう言つて零司は本音にリボンが付いたバックルみたいなのを渡す。

「……………おいおい、そんなにゆっくりしていて良いのかよ」

「何が？」

「更識やテメエらに恨みを持つてる奴は何人もいるんだよ。当主の妹は今頃襲われてるだろうな」

槍に刺されている男がそう言つと、零司は本音の肩に手を置いて行つた。

「ちよつと……………行つてくる」

零司の姿が消えたのを確認して、本音は容赦なくその男に蹴りを入れた。

「……………あーあ。君、バカだね。たぶん仲間はまだ死ぬよ」

4組の部屋ではまさに更識簪が襲われそうになっていた。

本当ならISで応戦するべきだが、一体どこで彼女の機体が完成していることを仕入れたのか彼女ではなくクラスの間を人質に取つたのである。彼女はすぐにISを奪われ、家の関係上で襲われそうになっていた。

「お前ら、早くしろ。俺だつてやりたいんだけど」

「落ち着けて。まずカメラをセツトしてだな」

椅子に座らされ、拘束されている簪に向けてカメラをセツトする男は良い位置に置けたのか、録画ボタンを押して簪の所に戻った。

「おら、さっさと自己紹介を——」

その時だった。突然襖が開かれ、零司が現れたのは。

すぐに状況を察したのか、ビデオカメラを支える三脚を足でこかせて宙に浮かせ、畳に叩きつけることでたった1撃で破壊した。

「……………お前は——」

一体どれだけ早く移動したのか、零司は簪を掴んでいた男の顔面に拳をぶつけていた。それだけでない。簪に近付こうとしていた男に砲筒を向けて容赦なく吹き飛ばす。

「……………テメエ!?!」

「おい、このガキじゃねえのか?! IS学園の生徒会全員とその娘でハーレムを築こうとしている奴は!?!」

「男の敵が!!」

1人がアサルトライフルで零司を撃つが、目の前に展開されたシールドによってすべて受け止められた。

「……………嘘だろ」

「まさかこいつ、ISを使えるんじゃない……」

そんな疑念が過ぎり、それは同時に4組の生徒を震撼させた。

「……………全く。君たちって本当に馬鹿だね。僕と同じ人間か疑わしいよ」

——IS使って何が面白いの？

零司はそう言い、男の1人を蹴り飛ばした。

「正直、ムカついているんだよね。まさか君たち、僕がISという兵器として程度の低い機械で満足すると思ってるの？ だとしたら心外だな。モードマジシャン」

そう唱えた零司の周りに魔法陣が浮かび上がり、サークルが上昇して零司の姿を変えた。

「……………お前……………魔法使いか……………？」

「ああ、これはIS技術の応用だよ。でも誰もしないんだよね。こんな簡単なこと、1年すれば俗物でもできるはずなのに」

砲筒はなく、杖を持った零司は軽く畳に杖を打つとその先端から鞭が飛び出した。

「な、何だこれは!?!」

「く、苦しい……………」

「これは罰だ」

静かに、だが覇気ある声を放つ零司に近くにいた簪は恐怖する。

「さつき誰かが言ったよね。僕がハーレムを築こうとしているって。ああ、そうさ。僕はハーレムを築こうとしている。だがそれは僕が優秀だからさ」

「ふざけるな！ この変態が!!」

「ふざけてないさ。もちろん、僕は相手をちゃんと選んでいるよ。容姿はもちろん頭脳は秀でて気が合う相手を選んでいる。僕の眼鏡に適うのが、たまたま4人いて近くにいるだけでいい——というのはいはるすべて冗談。僕は優秀であり、優秀な僕は何人もの女と関係を持つていいと思っているし、それが男の義務だが——残念なことにこのクラスは僕的に簪以外はゴミ屑だね。彼女と同じクラスでだけでバリアを張って生かしているだけに過ぎない」

高らかに宣言した零司は簪を拘束していた縄を解き、抱きしめた。

「ふざけやがって……………死ね！ 世界の敵!!」

「世界……………？ まさか君、世界如きが僕の敵になれるとでも？」

途端、零司を殺そうとした男の両手が鞭に貫かれる……………いや、先端はワイヤーへと変化しており、両足も貫く。

「な……………なんだ……………」

「……………テメエ、何をした!? いや、お前は何者なんだ!? I Sを持たずにどうしてこんなことができる!!」

「……………僕は以前、ガンオーガと呼ばれていた者。そしてこの時この瞬間を持つて敢えて名乗ろうウイザードオーガと」

男たちに魔法陣が展開され、そこから茨が出てきて縛り上げた。ただし、茨なので棘が刺さる。

「実はその茨の棘には毒が塗つてあつてね。ああ、安心したまえ。死ぬようなものじゃない。ただ、動けなくなるだけさ」

そう言いながら歩き、1人目に到着した零司は容赦なく男の局部を——破壊した。「ぎゃあああああああ!?!」

「覚えておくと良い。僕は他の鬼に比べて比較的に優しい方だ。僕の好きな女の子に手を出して、金玉を踏み潰されるだけで済むんだからね」

「止める……………頼む、逃がしてくれ!! 潰されたくない!!」

「——嫌なこつた」

零司は笑みを浮かべ、移動し、潰して回った。

——三鬼

それは裏の人間すら恐れを抱く者たちの総称であり、その名前を聞いた者は一斉に恐怖する。

舞崎静流は「エアリアルオーガ」という名を持ち、早坂零司は「ガンオーガ」から「ウィザードオーガ」に変わり、そして桂木悠夜は「サイコオーガ」という名を持っている。この3人を潰そうと様々な手段を取った男たちは入院を余儀なくされた。

彼が所属していたチームは「ブラッドデーモンズ」。そのチームに関わろうというのは今ではほとんどいない。

そのチームの初代総長にして、2人目の男性操縦者こと舞崎静流は今、苛立っていた。作業に疲れて寝ていた彼は幸せな夢を見ていたが、その途中で物音を聞かされ目を覚ました。

「この程度かよ」

その八つ当たりのため獲物を探していた彼はたまたま騒がしかった1組の部屋に入り、そこで本音と男たちが戦っていたので介入したが味気ないものと思い、腕を潰していた。

「動きも遅い、判断も遅い、何もかもが遅い。何だそのトロさは。仮にも俺と戦うつて言

うのに遅すぎる。その筋肉は飾りか、ああ?」

「……………何故だ……………お前は少なくとも怪我を負っているはず……………なのに——」

「はあ? お前馬鹿か? あんなトロい攻撃なんかでダメージ食らう奴はただのゴミだ! 良きる価値のねえ屑だ!! そしてお前は俺に期待させた挙句その体たらく詫びて死ね!」

思いつきり腹部を蹴る静流。そして壁に向かって筋肉が多い男を蹴り飛ばしてめり込ませた。

「ゴミが」

1組の生徒、そして床に穴を開けられて男たちに襲われていたところを助けてもらった5組の生徒は悟った。舞崎静流に喧嘩を売ったら死ぬ、と。

静流は風花の間に向かい、襖を開けると銃弾が襲ってきたので回避した。

「中々の反射神経だな」

「……………アンタが親玉か?」

「そうだ。仲間を忍ばせて暴れさせるとは、頭がはたらかぐばあつ?!」

一瞬のうちに懐に入って親玉をぶん殴った静流は消え、次々と暴力を振るっていく。全員が動けなくなるまで暴力を振るい、終わったからか姿を現した。

「……………弱すぎて話にならねえな」

盛大にため息を吐いた静流。彼の携帯が突然鳴り、電話に出る。

本来ならば特殊任務中のため電話に出ることは禁止だが、まだ目が覚めていないことと千冬を含めた教員らが呆然としていたこともあつて誰も静流に注意することはなかった。

「何だ？」

『……………アンタの大切な人間は預かっている。返してほしくば指定する場所に来い』

それだけ言つて乱暴に電話を切られる。静流は最初間違い電話か手の込んだイタズラ電話かと思つたが、次に来たメールでそう思うのを止めた。

「……………くろ……………え……………」

すぐに送られてきたメール。そこには指定する場所の座標と猿轡を噛まされて拘束されているクロエの姿があつたからだ。

静流は銃火器と予備の弾倉を回収し、一度部屋に戻つて装備を整えて一目散にその場所へと向かう。

余談だが、静流の部屋は彼を襲おうとした男たちの血だまりができていて、衛生的ではなくなつていた。

第41話 恋は盲目—I love you—

おそらくこれは畏だと、俺の理性が叫ぶが本能はそれを否定する。——いや、無視する。

畏だろうが関係ない。どうしてそこにいるのかとか興味がなかった。ただクロエがそこにいるなら、助けるだけだと。

【ミサイル群の接近の確認】

ハイパーセンサーが勝手に開き、俺にそう知らせてくる。見ると確かにミサイルが迫ってきたので俺は着弾するよりも早く地面を駆ける。本気を出せばそれくらい余裕だ。

すべて回避し、100mもあるであろう崖を俺は走って登った。

「何で——!?!」

「構うな! 殺せ!!」

瞬時に敵がISを展開する……って、多いな、おい!

軽く30機はいると思われるが、こっちもすぐにISを展開して対応する。

「クロエを………返せ!!」

そう叫びながら、俺は両肩部からレーザーを飛ばして攻撃する。的確に相手を攻撃するのは流石は早坂零司といったところか。

「こつちには人質がいるんだぞ!」

「この少女が殺されても良いって言うの!」

その声が聞こえた瞬間、俺は近くにいた女たちを容赦なくぶん殴ってクロエに抱き着いた。

「……ま……マスター……」

「良かった……無事だな。何もされていないよな? もし何かされたなら言えよ? その組織には物理的に消えてもらうから」

「……だ、大丈夫です……」

にしても可愛いなあ、こいつは。思わず撫でたくなる。……なんてことをしている場合じゃなかった。

俺は彼女を庇うようにして消していたISをもう一度展開する。クロエを守りながら逃げるよりも全員潰した方が早いと判断したからだ。

——ドンツ!!

いぎ、攻撃しよう——としたところで俺の後ろから衝撃が走った。

「……何……で……」

後ろを向きながら、クロエが俺に攻撃したことがわかった。そして何より驚いたのは、彼女の首に見たことがない首輪が付いていることだった。



織斑一夏は目を覚ますや否や、すぐに福音のもとに向かった。そのせいだろうか、

「……………零司……………そろそろ……………離して……………あげて」

「だってIS展開されて行くって言われたら困るからね。」

「それよりも何でかんちゃんの方に言ったのかく説明が欲しいな」

零司が暴走し、簪を拘束している。

「……一体、何を考えているんですか。一般人にここに入ることを許可するなんて!!」
『ですが、ちょうど良かったでしょう? あなた方は銃を向けられ動けなかったところに彼らのような伏兵がいたからこそ、敵を一網打尽にできた』

「その一網打尽のせいでどれだけの被害が出たと思っっているんですか、あなたは!」
「まあまあ、落ち着きましたよ。というかむしろあの程度の被害だと思っってくださいよ」

なお、あの程度の被害とは旅館の2階の屋根が吹き飛ぶ事態のことを指す。

「……ふざけているのか、貴様らは」

「全然。僕も手を抜きましたし、轡木朱音のコントロールが無ければ——生徒たち諸共彼は男を殺していましたよ?」

「……照れる」

「照れるところじゃないよ。……まあ、いつものことだしね」

「……いつものこと……なのか……」

千冬は思わず倒れそうになったのをギリギリでこらえた。

「そうそう。本当だったら旅館諸共爆破魔法とか使ってたし、ねえ」

「……流石に魔法は……使えない」

「でもちようにいい薬じゃない？ これで多少は彼女らも強くなる決心はするでしょ？
とかあれくらい、普通に対処してもらいたいものだよ。簪にあんな格好させた
のって、そもそも周りがクソみたいなレベルの癖に男を弱いとか思っているのが原因だ
ろうに」

ちなみに、簪にあんなことをさせた男は裸で庭に寝そべる形で貼り付けられ、「私は銃
を持っていたのに素手に負けたクソ雑魚です」と書かれている。

「ところで静流はどこ？ いつも通りトレーニング？」

「……………行方不明だ。電話に出たらすぐにどこかに行った。今は別の教員に探させてい
る」

「電話に出てどこかに行った……………？ ……まあいいか」

それ以上は気にせず、零司は怒る本音を宥めつつ簪を撫でる。

「いや、良いのか？ 友人だろう？」

「友人だからって入って良い領域とそうじゃない領域があるの。まあ、静流が持ってい
るI Sにはちよつとばかり細工をしてあるし」

「……………何？」

それを聞いた千冬は眉を動かし、零司を睨むように見る。

「何か仕組んでいるのか？」

「武装の強化もだね。改修に時間がないからアドバイスとか欲しいって言われたから個人的にちよちよつと」

そう説明しながら、零司はあることを考えていた。

(……こつちとしてはISに自我があることが発見できたし、報酬は十分にもらつてるしね)

——俺の仲間は、誰一人としてやらせねえ!!

そう叫びながら一夏は福音に仕掛ける。福音は既に二次移行していて、専用機持ちたちを粗方落としていた。

「………何で彼、ああも痛いセリフを吐けるんだろ?」

『さあな』

突っ込んでいくのを見て2人は一度攻撃をやめる。そして距離が開いたところを見て福音を攻めた。

『邪魔だ。引つ込め』

「え？ つていうか誰!？」

一夏の反応を無視して黒い機体は福音に剣で猛攻する。満は後ろから当たらないように援護するが、

『お前も邪魔だ。失せろ』

「私は国家代表だし当たってないじゃん!!」

だが黒い機体は構わずしつこく近接戦を仕掛け続けた。

『やはりI Sは嫌いだ。生身の方がよっぽど動ける。こんな重りを纏って戦うことの何が楽しいのか理解できん』

「その発言、全世界の女性に対して喧嘩売ってるからね！ 後2人目もさ！」

『あれも心からI Sを「手段」としか見ていない』

会話をしながら攻めるのを止めない2人を見て一夏は内心唾然としていた。

(……………何なんだ……………この人たちは……………)

一夏でもわかる力量の差。それを思い知らされた気がした。

それもそうだろう。1人はそもそも国家代表であり、もう1人はそれ以上の実力者。一夏のような高々数か月程度しか乗っていない男が付いていけるレベルではない。

——機体が二次移行した

だから福音を倒せるかもしれない。今度こそ静流と対等に戦えるかもしれないと思っていた一夏の思いが崩れて行く。

「織斑一夏、君は他の奴らを回収して離脱しろ」

「え……………いや、あの——」

「気にするな。ここにいる専用機持ちは全員足手纏いでしかない」

「それ、絶対私も含んでいるよね?! そうだよね?!」

満の突っ込みに黒い機体は対応せず、斬りかかろうとした——が、

——GYIAAAAAA!!!

つんざくような悲鳴に近い雄叫びがどこからか聞こえる。

黒い機体の近くにいた福音はすぐさまその雄叫びがした方に移動する。黒い機体も同じく追いかけて、満もそれに追従していった。

「……………俺は……………どうすれば……………」

「——何言ってるのよ、アンタは!!」

突然の声に一夏はその場で驚くと、どうやら復帰したらしい5人が上がってきた。

「鈴……………それにみんなも……………」

「全く、らしくないわね。言っておくけど、国家代表って大体あんなもんよ!」

「……………いや、少し気になることがあるのだが」

「何ですの、ラウラさん」

静流の人望か、一時期険悪だった仲だが今では名前を呼び合う程回復している。

「さっきの機械声の黒い機体の方だが、どこか義兄様に似ている気がしたんだ」

「……………そういえば、さつき戸高代表を邪魔者扱いしていたよね。それって考えてみれば……………タッグトーナメントの時のラウラの扱いに似てない……………？」

シャルロットの意見に全員が「そういえば」と思った。

そんな中、箒だけはとある人物が頭に過ぎる。

(……………いや、まさかな)

静流という前例があるが箒は首を振って思い直した。

「ともかく行くわよー!」

鈴音の号令に全員が頷き、後から3機の後を追う。だが、すぐにすべてのハイパーセンサーが高エネルギーを感知し、全員が緊急回避した。

「ちよ、今の出力は何よ……………」

「まるであの時の機体……………いや、出力が桁違いだ」

そんな会話をしつつ移動する。だが彼らは——その中心にいる人物と自分たちの力量の差を何よりも知らされ、容易に近付いたことを後悔するのだった。

(……………なんてことを……………してしまったんだろう……………)

クロエは対IS用拳銃で静流を撃った。

彼女はあの事件の後、束に拾われた。そこでの生活は静流という異分子であり、自分を守ってくれるヒーローに会えないということ差し引けば、まだ快適な暮らしをしていた——はずだった。

つい昨日の事だった。束はどうとう痺れを切らしてクロエに言った。

——ちよつとあの男を殺してきてよ

最初は嫌だと言うつもりだった。だけど彼女の首に巻かれているものは何の命令であれ拒否すれば毒を打たれるものだった。これまで自分がどう見ても料理と言えないダークマターを出しても毒を打たれなかったのは、彼女が一生懸命作った結果だから。

「……………私は……………私は……………」

自分の命を選んだ。

もう彼女は限界だった。ようやく解放されたと思った矢先の絶望。それに耐えられ

なかつたのである。

「……………がう……………」

「……………ごめんね……………私……………あなたのご主人様を……………」

——殺してしまった

決して嫌いだったわけじゃない。むしろ好きだった。自分を解放しようとして策を講じてくれた。肌着を持ってない自分に色々な物を買ってくれた。

クロエは物を求めたわけじゃない。彼がくれた優しさが好きだった。

「まさか……………本当にやるなんてね」

「この女、悪魔じゃん……………」

気が付けば、女たちはクロエに銃口を向けていた。

「実は依頼主に言われているのよね。アンタを殺せって」

「……………何で……………?」

「さあ? ま、アンタみたいな遺伝子を操作されて生まれた化け物なんてこれ以上面倒見切れないと思ったからじゃない?」

真相は違う。だが、彼女は「そうかもしれない」と思っただけ意見を述べた。しかしその言葉はクロエの精神を折るには十分だったようだ。

「じゃあね」

その言葉を皮切りに女たちは一斉に引き金を引き、銃弾が1人と1匹に飛ぶ。すべてが貫いた——そう思われた。

急に悲鳴に近い雄叫びが聞こえたと思つたら、当たる直前にクロエと彼女が抱えていたキメラの姿が消えたのだ。

「——ずつと思つてんだけど、やっぱりそいつの名前は安直だがレオンにしない？」
そんな、あまりにも場違い過ぎる発言に全員が状況を受け止めることができなかつた。

「……………ま、ますたあ……………え……………あれ……………」

「ん？ どうした？ まるで幽霊でも見るような目で……………あ、そうだ。さつき俺、お前に攻撃されたよな」

「そ……………それは……………いや、でも、何で——」

クロエの言葉は無理矢理遮られる。キスという手段によって。

突然のことに女たちは全員制止した。いや、せざる得なかつた。自分たちが攻撃すれば間違いなく全員殺せる——その状況で目の前の男がしている行為に対する理解が追いつけないのだ。

1分間ほどディープキスをした静流。クロエの顔は真っ赤に染まっている。

「な、な、ななな……………何をしているんですか!?! 私はあなたを攻撃したんですよ!?! 殺

そうとしたんですよ！　自分が生き残るために、あなたを犠牲にしたんですよ！　それにあなたにはラウラが——」

「いや、ラウラとはそう言う関係に発展してないからな。大体、俺が今もアイツと寝ているのは、俺が寝ている時にラウラが侵入する物音で誰であろうと潰すからで、そんな関係になつてない」

言い切る静流。クロエも場を忘れて問い詰めそうになつた時、銃声が走る。

「……………アンタたち、状況わかつてるの……………っていうかアンタ、何で生きてるのよ!?　死んだんじゃないの!?!」

「そ、そうよ！　おかしいじゃない！　だって銃弾に貫かれて——まさか、アンタも人造人間とかじゃないわよね!?!」

「……………そうじゃなかったら銃弾が貫通して生きてられないわよ!?!」

その言葉に静流は心から笑い、言った。

「よおーく見ておけよ、クロエ。これが男に振り向かれなかつたら負け犬……………いや負け豚の皆さんだ。あ、さっきのことなんだけど、次あんなことしたらディープキスよりもレベルの高いことをしまくるからな。1日中」

「いや、あの、流石にそれは……………じゃなくてですね！　今私たち危険なんですよ!?　殺されかけているんですよ!?　なんでそんな話をしているんですか!?!」

「ピンチ? どこが?」

あつげらかんとクロエに尋ねる静流。そもそも静流にしてみれば——大半の女は相手にならないのだ。ましてや生身の相手で銃を持っていようが今の彼には全く関係ないことだ。

「調子乗ってんじゃないわよ!!」

1人が叫び、次々と女たちはISを展開して行く。

(……………私が戦わないと)

さっきのスペックを見る限り、いくら静流とはいえこの人数相手には流石に振りと判断したクロエは自分も戦おうとするが、それよりも先に静流は言った。

「そうだ、クロエ。実はお前に言っておきたかったことがあるんだ」

「こ、こんな時に何を言っているんですか!?!」

本気で泣きそうになりながらクロエは叫ぶ。次の瞬間、静流たちがいる場所に向かって白銀の熱線が放たれた。

クロエすら巻き込んだその熱線。どちらもISを展開しておらず、まともに食らった。

「——おい、クズ野郎」

もはやその声は絶望を感じさせる福音だった。

「デメエがしたことは最早罪だ。故に死ぬ——ディメンション・ブラスター!!」

いつの間に展開したのかと言いたくなるほど早くISを展開した静流はそう叫び、銀の福音に向かって彼の機体が放った熱線よりも出力が圧倒的に高い熱線を放った。

第4 2話 一方的な暴力

目が覚めた時、俺は死んだのかと思った。

思わぬ裏切りに俺は怒りもよりも後悔が先に来っていた。

「……何で俺は、先にIS学園に入学したんだろう」

「それは仕方ないことだと思えます。何故なら人は自分のことが大切——」

「IS奪って女権団を壊滅させとけばクロエと離れることがなかったのに!!」

「……………もはや予想の斜め上にぶっ飛びすぎて何とも言えません」

そんなこと言われてもな、後悔と言えばそっちの方が先に……………とところで……

「誰だ、テメエ」

「あ、私ですか？ 私はその……………」

「新しい遺伝子強化素体？」

「……………違います。あなたのイメージとしてクロエ・クロニクルの身体をお借りしてい

るだけです」

わけがわからないよ。

「で、誰だお前は。さっさと答えないとお尻ぺんぺんだ」

「……………実はあなた、凄く子ども好きですよね？ あ、わかりました！ 言いますから」
一睨みすると黙り、こいつもこいつで予想の斜め上を言った。

「私はコアNo. 27、そしてあなたの感情に予定外の事態で反応し、あなたの家族が殺される元凶を作ったものです」

……………OK、把握した。

俺は目の前の女を掴み、文句を怒鳴るように言う。

「テメエのせいで……………テメエのせいで俺の家族は!! ………………つて、あの時の俺なら
言つてたろうな」

「……………え？ いつもみたいに殴らないんですか？」

「じゃあ逆に聞くが、お前は俺を殺したくて反応したのか？」

自称ISコアは首を横に振る。そりやそうだ。基本的にこいつらに世界をどうこう
できないのだから。……………できたとしても、逆に「いざれ世界を乗っ取られるかもしれ
ない」と思われて処分されるのは目に見えている。

……………ところで、いつもみたいとは一体どういうことかね？

「つまりそういうことだ。ま、恥ずかしいことに、確かに俺は前まではISを恨んでい
た。藍越学園に進んだのも技術を吸収して新兵器を作るため……………だがまあ、今じゃそ
んなことは止めることにしたよ」

「……………どうしてですか？　そうすれば男の利権だつて——」

「だつて今の女と戦争したつて俺ら3人の圧勝だつてわかり切つてるからな」

早坂零司も桂木悠夜も、俺が知らない間に力を付けている。だからこそあいつらと共にかつてのように戦えば女権団だろうがなんだろうが余裕で潰せる。

「……………あなたはもう、そのような形でしか対話できないのですか？」

「向こうがまともな対話をするつて言うなら、こつちはそうするつもりだ。実際女でもまともに話が分かる奴はいる。それは俺の経験の中でも現れているが……………女権団は別だ。それに俺は——」

俺はふと、あることに気付いて周りを見渡した。

「……………時間が……………止まつている？」

「……………いえ。私が存在できるのはあくまであなたの意識下の中。なので、あなたの意識を無理矢理引つ張り込みました。……………つまりあなたは生きています」

俺はさつきまで自分が立っていた自分の位置からクロエが銃を撃つたと仮定して飛んだであろう銃弾の場所を探す——と、

「あれは私が投影した偽物です。本物の銃弾は量子変換してすぐに消去しました」

「……………な、なあにそれえ」

「凄いでしょ。ですが、この映像もわずかですが少しずつ動いています。……………見ての

通り、今度は彼女が狙われますよ」

見ると、1人が懐から銃を出そうとしているようだ。

「……………じゃあ、もう早速本題に入れ」

「…わかりました。私があなたに問うのはたった1つ。あなたは、ISという力を欲しますか？」

「もちろんだ」

即答すると、その少女は驚いたように言った。

「……………あの、あなたは専用機をいらないうって——」

「話を変えるが、俺にしか反応しないコアってお前だろ？」

「何でわかつたんですか？」

とりあえず近付いて俺は少女の頭をグリグリした。ちゃんと手加減しているけどな。

「まるで幼女に取りついた幽霊みたいに何度も何度も謝ってきた怪奇現象の声に似ていて、さつきからしなくてもいいお節介ばかり焼いていれば誰だつてわかるつての!!

俺は織斑みたいな超が100個じゃ足りない程ついている阿呆じゃねえんだぞ！」

「だからって、それだけで私があのコアだつてわかるわけが——」

「織斑千冬っぽいのを相手にする時に装甲の解除に反対する意見が妙に人間ぽかつたんだが？」

「……………あ、あれは、つい……………」

負けると思われていたのか。結構シヨックだ。

「ともあれ、だ。今はそんなことどうでもいい。さっさと寄越せ。後出口もだ」

すると少女は泣きながら見覚えのあるコアになり、まるでアニメのようにドアが現れる。

俺はそれを掴んでドアを開けた。

という事を伝えたところで鼻で笑われるだけなので、話が分かる奴にしか言うつもりはない。……………にしても、

(エネルギー吸収に異空間に無茶な理論で強制接続してエネルギーをぶつ放すつたあ……………俺でもわかるレベルのロマンだな)

思わず叫びながらぶつ放したが、威力は全く申し分ない。いや、それどころか……………クロエが殺されたと思っていたあの時の早さと何ら変わっていない。

「この I S はあなたのための……いえ、あなたのためだけに生み出したもの。思う存分使ってください」

(……ああ。言われなくても、だ)

機体名を出すと、これはこれで洒落た名前じゃねえか。「羅^ら鬼^き」とはね。

「……なんなのよ……」

「あれって、アメリカとイスラエルが共同開発しているって機体よね……?」

「どうして軍用 I S がここにいるのよ?!」

「——へえ……」

俺は思わず笑みを浮かべた。だって軍用だけ、軍用。そんな大物を相手にできるなんて……

「最高にハイって奴だ!!」

瞬時加速でいつも通り福音の懐の中に入ってぶん殴った。



——最高にハイって奴だ!!

遠くでそんなことを静流が叫んでいる頃、1人の女性スナイパーが馬鹿にするように笑みを浮かべながら静流を撃とうとしていた。

「何馬鹿なことを叫んでいるんだか」

「それに関しては概ね同感だ」

急に男の声がしたため、スナイパーはすぐそつちに照準を向けようとするが腹部を蹴られて吹き飛ぶ。

「な、何でここが……」

「ここ以外に絶好の殺害スポットはないからな。従弟を囚にして奴の化けの皮が剥がれた後に1人1人逮捕しようとしたが……まさか祖父母を殺すとはな」

男は女に踵落としした——が、それだけで女性の右腕と右足はもげ、肘と膝から先

が分離した。

悲鳴を上げ、助けを呼ぶ女性。だが、

「よく見ろ……………つて見れないか。今、下では馬鹿が軍用相手に暴れていてな。そろそろ弱すぎて飽きる頃だろうよ」

「……………何で……………相手は軍用……………」

「おそらく俺と同じISだろうな、あれは」

女性は今の発言の意味を理解できなかった。いや、してしまえばそれは——彼女らにとって新たな絶望の種になるからだ。

「そんなことよりも、だ」

男は女の顔を殴り、鼻の骨を折る。

「アンタの処遇は俺個人に一任された。つまり、お前を殺すも生かすも俺次第——」

「そこまでにしろ、高間」

高間と呼ばれた男は舌打ちをして現れた男に言った。

「何の用だ？」

「そこまでやれば十分だ。後は法で捌く」

「そうか。では罪状は「女として存在し、逆恨みで老夫婦を殺害したので虐殺処刑」だな」

「お前裁判舐めてるだろ？」

「舐めてねえよ。っていうか何でお前が来たんだよ、武藤」

「お前を止められるのが俺しかいないからだよ！」

盛大に突っ込みを入れる武藤正勝。

「全く。ようやく起きたと思つたら早速勝手に出撃した挙句に今度は「仇を見つけたからちよつと殺つてくる」とか意味不明なメッセージを送りやがって!!」

「そのままの意味だつたんだが？」

「そつちの話をしているんじゃないやねえよ!!」

すると下の方で騒がしくなつたので、高間と呼ばれた男は女を掴んで他の女たちがいる場所に放つた。

「おい待て、何さりげなく止め射してんだ」

「なに。着地する瞬間に口ゼに受け止めさせる」

そう言つて高間は同じ軌道で自分の従弟である静流がいる場所に飛んだ。

一方、静流の周囲はまさしくお通夜状態だった。それもそのはず、急に高性能機を展開したかと思つたら軍用相手に一方的な蹂躪ぶりを見せ、福音を右足のみで地面に抑えつけているのだから。

「……………軍用つてこんなに弱いのか。やっぱり篠ノ之束と友達になつてもう少し強い最終兵器でも作つてもらおうかな」

第四世代機である紅椿の他、3か国の最新機影に1機のカスタム機が相手になつても苦戦した第二形態となつた福音。それを静流は羅鬼のみで潰してこの発言である。これには女らは何も言えまい。

——ドサツ

静流の後ろに何かが落ちてくる。それを見た一夏はあまりのグロさに意識が飛びそうになつた。

「え……………」

「何で撃たないのつて思つたら……………」

「つて言うか、何でバレてんのよ……………」

「——狙撃手を使うなら市街戦が常識だ。それをこんなクソツ広いところで使うとか常識を疑うな。襲つてくれと言っているようなものだぞ」

そう述べる高間を見た静流は舌打ちをして、福音の装甲を無理矢理引き剥がして、コ

アを無理矢理分離させて自身のISを解除する。

「……こんなもんか。で、これは何だ？」

「じいさんとばあさんを殺した奴だ」

「そうか」

そして静流は既に弱っている女の腹部に蹴りを入れた。

「おい！ 何やってんだよ静流！ もうその人は弱ってんだぞ?!」

「こいつに關して……いや違うな」

静流は一夏を馬鹿にするような目で見て言った。

「ここにいる女は愚かにも俺たち喧嘩を売った馬鹿共だ。ならば、相応の制裁が必要だろ」

「そんなこと必要ない！」

「そうか——だがそれは所詮、お前ら雑魚の理屈だ」

静流はそこから消え、状況を打開するためかクローエを人質に取ろうと移動した女の顔を蹴り飛ばした。

「覚えておけ、織斑一夏。俺がIS学園を潰さないのは——どうせ戦っても雑魚しかないからだ」

一夏は今すぐ止めようとするが、それを止めたのは意外なことに箒だった。

「箒!? 邪魔をしないでくれ!!」

「……………一夏、はつきり言おう。行っても無駄だ」

「でも——」

「今行つても、無駄死にするだけだ!!」

叫ぶように言われたこともあり、一夏はその場で止まる。だがそれは正解でもあつた。

もしあそこで庇おうものならば、一夏は静流によつて「処刑」と称してポコポコにされていだろう。ISを壊され、完膚なきまでに精神を折られてもおかしくない。そうなりそうだと思つたからこそ、箒は止めたのである。

しばらくし、その一方的な蹂躪は誰も戦えるものがいなくなつたので終わった。

「作戦完了……………」と言いたいところだが、お前たちは独自行動という重大な違反を犯した。学園に帰つたらすぐ反省文の提出と懲罰用のトレーニングを用意してやる。……

だがその前にだ」

千冬は帰ってきた戦士たちに冷たくそう言い、後ろで平然といちやつく（というよりも一方的に愛でている）静流に言った。

「舞崎、お前も一応は違反者だ。正座しろ」

「黙れ死ぬせろ」

静流は嘸まずにクロエを撫でる。抱きしめる。そのパターンを何度も繰り返すが、もしここに人がいなければ押し倒していただろう。そんな中で正座を強要された場合の発言に、千冬は頭を抱えた。

「ま、マスター……その、あの………正座、しまししょう？」

「………まあ、クロエがそう言うなら」

クロエに言われて静流は大人しく正座すると、千冬は少しシヨックを受けた。

ちなみに静流はクロエを離すつもりはないのか、彼女を膝に座らせてそのまま抱きしめている。

「で、でも、織斑先生。みなさん怪我をしていますし……」

「舞崎はしていないだろう？」

「流石にここで着替えさせるので少しマズいですよ」

空気を読んだのか、静流はクロエを抱きしめたまま立ち上がって部屋を出る。

「……とても同一人物とは思えないわね」

「……ええ。ラウラさんにも見せたことありませんわよね、あの笑顔」

そのラウラはと言うと、バレないように顔に出さないが物凄く嫉妬していた。



そろそろ、シャワー浴びたいと思う。

いや、決して下品な意味ではない。ただいくら雑魚相手とはいえ、流石に汗をかきすぎた。

「なあクロエ、一緒に風呂に入らないか？」

「……………随分と大胆になりましたね。ラウラと一緒に入ったのに、私とも、なんて」
「あれはただの妹だからな……………おい待て」

今、とても重要な事を聞いたんだが……………というか、

「何でラウラと一緒に入ったことを知っている!？」

「それは……………」

「……………その秘密、教えてあげようか？」

唐突に声をかけられて俺は本心から驚いた。全く気配が感じなかったこともそうだが、何よりも……………」

「篠ノ之束、か？ アンタが俺に話しかける一体どういう……………」

……………パアンツ!!

乾いた音が俺の前で起こる。一瞬、俺が死んだかと思つたがそれは間違いだつた。

……………何故なら、俺の隣で鮮血が舞つたから

「……………君が悪いんだよ、舞崎静流。君みたいなのがいたから、私はくーちゃんを捨てたんだ」

俺は倒れていくクロエを受け止める。周りからは急に起こつた音で生徒たちが飛び出して来た。

「クロエ！ クロ——」

揺らしながら名前を呼ぶと、感じたことがある手が俺に触れる。

「彼女の命は私が繋いでおく。だから……行つてらっしゃい」

その声は信じれる。そう思った俺は事を成し得てスキップした女を——ぶん殴つて山に叩きつけた。

—
完

最終章 篠ノ之

第43話 唸る修羅

少女たちは本気で竦んでいた。

まるで自分たちの存在がちっぽけであると思われ知らされた感覚に陥ったのだ。

「ロゼ、何故勝手に実体化をしている」

後ろで高間晴文がクロエに空いた穴を塞ぐようにしている少女にそう言うと、ロゼと呼ばれた少女はジト目で言った。

「それでもしないと、彼女は助からない。だからよ」

「……………それに関しては感謝は述べるがな。で、あの馬鹿はどこに行った?」

言うまでもなくあの馬鹿とは静流のことだ。

晴文は聞いておきながら「やっぱいい」と答え、今もなお爆発が起こっている場所に目を向ける。

「……………あのバカ女、本当に余計なことをしやがって」

3年前、晴文は静流を止めることはできた——が、彼もまたすぐに治しただけで怪我を負わなかったわけではない。全身に数百か所の怪我をしていたが、ロゼの力によつ

て修復してもらった。

ロゼは普通の人間ではない。

元々はISコアだったが、篠ノ之束に「不良品」の烙印を押され破棄されたのだが、篠ノ之神社に訪れた晴文に拾われたことで九死に一生を得たことにより晴文の専属の部下として、また彼の機体として存在が許されている。もともと彼女がISコアだと知っているのは他には武藤正勝ぐらいだ。

(……あれが本気出したら手が付けられないからな。……それにあれは、ちよつとま
ずいな。……ま、いつか)

晴文はロゼと一緒にクロ工をどこか寝かせられる場所に寝かせた後に医療班の追加などの要請するなど仕事に戻った。

IS学園は常に見張られている。それはISのデータはもちろんだが、国家に所属していない操縦者や技術者の卵をチェックするためなのだ——今、彼らは撤収を余儀

なくされていた。

「この、しつこいんだよ!!」

そう叫びながら束はミサイルを飛ばす。だが静流は肘から指の先端にかけて紅黒い禍々しい装甲でミサイルをすべて引き裂いて破壊した。爆風が静流に襲い掛かる——はずなのに、それすらも感じずただ束を殺そうとする。

——もはやこの2人は常識の範囲外で戦っていた

素早いスピードはもちろんのこと、通常兵器も何のその、触れた地面は次々とクレターを生み出していく。

「死ねー!」

静流の靴もまた、変わっていた。

本来、静流は黒くシンプルなスニーカーを好んで履く。だが今は装甲同様の色に統一されていて、裏にはプロペラが内蔵されている。回転数によつて滞空することが可能であり、また水上でも立つことが可能となる。

だが、その装甲には大きな弱点が存在する。

「負荷が強い？ 舞崎はそんなものを装備しているというのか!」

「そうだ。だがその負荷は半端じゃない。俺自身も一度装備したことがあるが、あれは並大抵の——それこそ普通の人間が装備したら死ぬような代物だ。静流が今もお装着し続けられているのはこの少女が撃たれたことによる怒りだろうよ」

ロゼが得たコアNo. 27を名乗ったコア反応の位置が投影型ディスプレイに表示されている。

今、半壊した風花の間には千冬と晴文が残っている。そこで作戦会議をしていた。

本当ならば一夏や他の教員たちも参加するはずだったが、全員無理矢理「邪魔」という理由で締めだされたのである。

「その分、戦闘能力は現役時代のお前を遥かに超えているがな。今、機体は？」

「さあな。束の奴が解除しているならば使えるだろうが、おそらくまだ使えんだろうな」
「——そのコアはもう使えるけれど、あの戦いに乱入するのはやめておいた方が良いでしょうよ」

唐突の言葉に晴文は舌打ちをする。

「誰だお前は？」

「企業秘密。でも教えて、神出鬼没の美少女だと言っておいてあげるわ。で、あの戦いだけど——もうここからかなり離れている。それにどちらも織斑千冬よりも上だから死に行くようなものよ」

実際、ロゼの言う通りだった。

「いい加減……ウザいんだよ!!」

束はレーザーを大量に発射するが静流はそれを装甲の力と勘のみですべて回避した——が、レーザーは反転し静流の方に向かって来た。

（もらった!!）

「邪魔だな」

静流は腰からトンファアを抜いて先端から鎖を伸ばして振り回してレーザーを霧散させた。

「ちよつとは耐えるから少しはマシな奴かと思ったら……さつきから見ればそこから

の女と変わらない。お前みたいな屑がクロエが殺したのかよ」

瞬時加速が霞むほどのスピードで束に接近した静流は束の顔面に連続でパンチを見舞った。

「テメエに命乞いの権利は与えねえ……死にやがれ、クズ野郎!!」

本気のアストレート。だが束はそれを回避して静流の顔に蹴りを叩き込んだ。

そのまま静流は海の方に向かって落下する。

「ハハッ! 騙されてやんの!!」

無邪気な笑みを浮かべる束はP I Cを使って陸地に移動する。いつの間にか海上にいたことは驚いたが、高度50mぐらいあったのでおそらく奴は死んでいるだろうと。相手もI Sが使えるのはどういう理由かはわからないが、絶対防御は解除するように指定していたのもう死んでいるだろうと、そう思っていた。

「……………何で…………」

海面に叩きつけられたからか、所々傷がある。だが静流は殺意を込めて束を殴る。

束はそれを流して静流の攻撃を躲す。そしてそのまま攻撃は山にぶつかると――

山は吹き飛んだ。

「……………はっ?」

吹き飛んだ上部の土を見て束がわけがわからなくなる。それもそうだろう。目の前

にいる相手はただの人間。遺伝子強化素体でなければさらに改造を加えた人間でもないことは束自身が調べてわかっている。なのに――

「何で……………山が……………」

少なくとも、ISを使わなければ山を吹き飛ばすなんて無理だ。しかもISで殴つても無理と来ている。

だが静流は生身で吹き飛ばしたのである。

「……………殺す」

地面を蹴り、再び静流は束に仕掛ける。束はISを完全展開して所構わずミサイルを発射。さらに個別リボルバー・イグニッション・ブーレスト瞬間加速を規則を感じさせないように行つてランダムにレーザーを発射した。

静流はすべて回避して束に迫る。束はそれを読んで静流が殴ろうした瞬間に高エネルギーのビームは放った。

少女は賢かった。

この世に生を授かってから10年、状況などを教えられて普通ならしないであろう子供に高等教育を叩き込まされたが、最近の彼女は不平1つ言わなくなった。それもそうだろう。彼女に守るべきものを与えられたから。

「覚えておきなさい。これがあなたのお父さんとお母さんよ。あなたが私たちに協力しないなら、私がこの2人を殺すわ」

そう言った女性は本気であり、事実彼女の目の前で何人もの命を奪っている。やると言ったらやる。そんな女性に少女は言う事を聞かされていた。

当然、その女性は少女が特別だからしているものであり、一般人の子どもだつたらそんなことはしないのだが。

だがその少女は特別だつた。特別が故に常に高等教育を叩き込まれ、10歳だというのに一般の大人同様兵器の開発をさせられている。

「……お父さん……お母さん……」

まともに会話をしたことはない。だけど、彼女に流れる血がわかる。少女に「この2人が君の両親だ」と教えている。だが、このままだと会話をすることができない。だが、2人をここから出すことはできても逃げ出すことは不可能だ。2人がいるのはフラスコの中であり、水槽の中で当時の衣服を着せられたまま酸素ボンベを装着させることで延命されている状態だ。

それを理解している少女は抗わず、女性に従って兵器を——ISを使っている。ついこの前、6歳上の女のために新兵器を開発したところだ。

「……私は嫌だ……誰か……助け——」

そんな時だった。

急に壁が破壊され、現れた何かは両親が入っているフラスコにぶつかって止まり、警報が鳴り始めた。

「……………え？」

少女は本気で驚いていた。まるで祈りが届いたかのように何かが現れ、両親を望ましい形とはいえ解放したのだから。

「……………いつつ……………あの女、一体どこに飛ばしやがった……………あ？ どこだこ

？ 外じゃねえ？」

「……………あなたは……………誰……………?」

現れた男の後ろのドアが開き、人型の機械が現れる。そしてすぐに男を捕縛しようとしたが、軽く吹き飛ばされた。

「ここは一体どこだ? ダンジョンか? おいニーナ」

『場所は花月荘よりも100 km地点は離れています。まるで何かの研究施設のようです。……………ちなみに今、マスターが吹き飛ばしたのはISです』

「ISだあ? じゃあ何で俺はあのクソアマに負けたんだよ」

『経験の差、ではないでしょうか? 確かにマスターは強いですが、クリエイターはこれまで何度も裏の人間を生身で退けてきました。その戦闘経験の差、でしょう。マスターの場合は言っては悪いですが結局はゴロツキとの戦闘が多いので』

ちなみにニーナとは、静流がコアのナンバーを聞いた時に考え付いた名前である。またついでに補足すると、ニーナの言葉は静流にしか聞こえていない。

「……………あの——」

「経験の差、か。あー、こんなことなら学園に行くんじゃないやなくて研究施設のISパチって裏組織の奴らに喧嘩売ればよかったな……………何だ?」

しっかりと聞いていたのか、静流は女の子の声に返事をした。

「……………あなたが……………あなたが私の王子様ですか!」

「……………はい？」

言われていることを理解できなかった静流。だが少女が本気で聞いてきたのは理解できた。

目を輝かせる少女に少し怯む静流。彼はこういうタイプの少女に弱いのである。

「すまない。俺は君の王子でもなんでもない。通りすがりの一般人だ」

『ダウトです、マスター』

「……………そう、ですか……………」

少し悲しそうな顔をする少女に静流は罪悪感を感じた。

確かに静流は女が嫌いだ。だが、常識をわきまえている女性や自分に懐く少女、そして天真爛漫や年相応の少女には優しくする。

これは本人が知らないことだが、女尊男卑の影響で男の立場が失われつつなる昨今、男性たちは少女たちに性欲の牙を向けるようになった。俗にヤクザと呼ばれる反社会勢力もそう言った人間を誘拐しては売り、安値だが女を売買することが多くなった。たまにそう言ったところに乗り込んでポコポコにしているが、そのたびに大体静流がボスを潰して解放させることが多いので大体懐かれています。

……………ちなみに、何故一般人の彼らがそう言うのを潰しているかというと、零司の小遣い稼ぎに使われているだけなのだが。

「で、ニーナ。今なんて言った？」

『ダウトです。マスターの強さから考えて一般人は難しいかと』

「……………もしかして、助けですか？」

「残念ながら違う」

また泣きそうな顔に戻る少女。その少女と倒れている男女を見て静流は訝し始めた。

(……………どこかで見えたことがある気がする)

そう思った静流は少女に質問した。

「お前、なんて名前だ？」

「……………私の名前、ですか？ ごめんなさい。実は言えないんです」

静流は羅鬼を展開して少女の肩に触れた。

『発見しました。感知・暴走型ナノマシンです。これより除去を開始します』

静流は並の人間よりも状況処理能力が高い。なので今の少女の発言に違和感を感じてすぐに体内を調べ回らせた。曰く「普通の少女が——実験体であろう少女がこんなところで何で普通に話せている？」と。

そこから少女に対する「どこかで見えたことがある」という感情、そして男女に対する既視感からある1つの仮定を出す。

『除去が完了しました』

「…………お前、篠ノ之か？」

少女はそう言われて体をビクつかせた。

(……………何でこんなところに？ 妹は治療中だろうし姉は今どこかにいる。それに次女より下はいないと聞いているが…………)

そんな時だった。

唐突にドアが破壊され、数体の機兵が現れた。その後ろに綺麗な金髪に面積が少ない格好をしている女性と黒いスーツに身を包んだ女性も入ってきた。

「何やら騒がしいと思ったら、これは何？ 楓、説明しなさい」

「……………これは事故です。……………じ……………実験中に人が飛んできて、その……………」

——ドンツ!!

女性の隣に機兵が叩きつけられる。

「……………あなたは……………まさかどうして、私たちの仲間になりに来てくれたの？」

「……………ふざけてんのか、クソババア」

「テメエ!! 誰に口を利いてんだ、ああッ?!」

「少なくともテメエみたいな猿女じゃないことは確かだ」

「ふざけんな!!」

黒スーツの女性が叫び、ISを展開するとすぐに吹き飛んだ。

「オータム!？」

「わりいな。俺はああも頭が弱い女つてのが嫌いだね」

そう言った静流もまた、IS「羅鬼」を完全に展開していた。

第44話 やはり舞崎静流は狂っている

「舞崎君が行方不明？」

「ああ。面白いことにな。アイツ篠ノ之如きにぶつ飛ばれてやんの」

身内が行方不明だというのに会話をする晴文に正勝はため息を吐いていた。

「お前なあ。少しは心配しろよ」

「まあ、心配はしているさ。後1時間程度で進展がないならこっちで動く」

その1時間程度というのは、ロゼの持つ延命機能の制限時間だろう。

クロエが付けられた傷はすぐに死ぬものではない。だが半壊した旅館であるこの場所から移動させるのは遺伝子強化素体ということや戸籍がないという点ではとてもマズいのだ。色々と。

金髪の女性——スコール・ミューゼルは心から予想外だった。

自分たちが狙っていた舞崎静流が専用機を所有していたこともそうだが、何よりも相手のやる気だ。

「1つ聞きたいんだけど」

「な……何ですか……?」

「お前を借りに救ったとして、メリットとかあるのか? 今1人銃で撃たれて倒れているけど」

——それはマズい!?

スコールは心から叫びそうになったが、それよりも早く少女——楓が言った。

「私、免許ありませんけど簡単な縫合でしたら10秒で1人を縫えます!! 銃弾を取り出したたり女の子用に傷を消したりできます!」

「……………そうか」

瞬間、静流の放つ殺気が膨れ上がり、瞬間移動した。

「グッ!?!」

「悪いが、個人的事情によりアンタを——潰す!!」

スコールも「ゴールデン・ドーン」の尻尾と両手で、さらに火球で攻撃をかける。火球の1つが少女の方に行ったのを見た静流はすぐに援護に入る。

すると羅鬼のハイパーセンサーに楓の顔が表示された。

『こちらは問題ありません。あなたは目の前の敵に集中してください。その人たちは強敵です!!』

「……………きよう……………てき……………」

——ニヤア

スコールは静流の不気味な笑顔を直視してしまった。

(……………この子、一体何を考えているの……………?)

すると後ろで瓦礫が飛ぶ太い音が発せられた。

「テメエ、殺す! 絶対に殺す!!」

「あー、安心しろ。テメエらをボコるのは俺の趣味であり生業であり当然の行為だ。相手になってやるよ」

そう言いながらも静流は楓に指示を送った。

『これは個人秘匿通信だな。ならばアンタは今すぐ3人が入れる対G用カプセルを用意してくれ。ここから脱出する』

『え……………?』

『資材散策はすべて後だ。本当は機体データも奪つときたいがそれは君をある場所に送ってからだ』

『き、機体データならばすべて持ってます。大半が私が作った物なので、必要でしたら他のデータもバックアップを持ってますから』

『そいつは重畳だ。ならば準備しろ』

その頃、スコールもオータムと共に作戦会議を行っていた。

『熱くならないで、オータム。この男は危険よ』

『わかつてる。今からこいつを引き裂いてやる!』

『わかつてないわ。オータム、連携で叩いてこつちの実力を見せるわ。そしてある条件で寝返らせる』

『条件?』

『女よ。遺伝子強化素体ならこつちにもたくさんいるわ。そのハーレムで手を打たせる』

だがスコールは知らない。静流は遺伝子強化素体だから好きだというわけではないことに。

確かに彼にとっては魅力的な提案かもしれない。だが、今の彼は「クロエを助ける」という一点しか考えていないのだ。

『あの、ここで逃げても彼女らは追ってきます』

『そうじゃなくては困る。なあに心配ない。俺たちはここから帰ればそれで勝ち。それ

から先に何をしようが俺の勝手だ」

『……わかりました。あなたを、信じます』

楓は自分のフォルダの中からカプセルを展開。さらに年相応のためかランドセルを背中に展開して両親の中に入れた。

「何をしているの、楓。死にたいの?」

楓の動きに気付いたスコールはそう言うと楓は動きを止めてしまう。

その隙に静流は銃を展開してスコールに発砲した。

「デメェ!!」

オータムがさかさず援護に入る。だがオータム単体では静流は抑えることはできない。

「楓、今すぐ準備を止めなさい。そうなればあなたを殺すわ」

「……でも、私のような人間はそう簡単に作れません。困るのはあなた方なのでは?」

「確かに。でも、問題ないわ。あなたがコアを提供してくれたおかげで我々の戦力は整った。今すぐ各国を攻めても問題ないほどにね。つまり、あなたは用済み。どうやってフラスコを破壊したのかはわからないけど、私は本気であなたを殺すわよ? 嫌なら大人しく従いな——」

オータムを突破した静流はスコールに迫った。

「楓、構わねえ！ お前だけでも逃げる！」
 『とつとと準備しろ』

本音は個人間秘匿通信で、建前は普通に通信で言った静流。

「まさかあなた、あの子の技術目的？ ならば——殺すわ」

何かを押す仕草をするスコール。だが、楓からは何も出ない。

「え？ 何で？ もしかしてもうとつとくに——」

「とつとくに殺した。俺は織斑ヨミとは違うんだよ……織斑ヨミとはッ!!」

勝ち誇った笑みを浮かべた静流はスコールを蹴り飛ばした。

楓は喜びながら作業スピードを速める。そして戦っている静流に合図を送った。

『終わりました！ すぐに発射できます!!』

「というわけだ。じゃあな2人共」

静流はカプセルに取りついてウイングスラスタを全開にする。

「待ちなさい、舞崎静流。あなた、亡国機業に来る気ない？ 遺伝子強化素体の女の子が
 いっぱいいるわよ。いいえ、それだけじゃない。業績させ残せばいろんなことができる
 わ。100人の女と寝たつて文句言われないのよ？」

「……………そいつは魅力的だが、悪いけど俺、好きな女を泣かせる趣味はない」

「……………そう。じゃあ死ね!!」

火球を複数展開して飛ばしたスコール。彼女の鬼の形相にオータムは怯んだ。

「デイメンションジャンプ、イグニッション・フルブースト!! ……まあ、アンタらが俺より上つて言うなら考えなくもないが、まずありえないしな」

そう唱えた静流はカプセルごとその場から去った。

「……………スコール……………奴らは……………」

「花月荘よ。Mを起こしなさい、オータム」

その言葉の意味を悟ったオータムは驚きを隠さない。

「許さないわ。あそこまでこけにされて許せるなんてそいつはおかしいわ。……………あの男、ブチ殺す」

本気で切れたスコールの恐ろしさを見たことがオータムは慌ててMという存在を呼びに言った。

その頃、花月荘では珍妙な戦いが幕を開けていた。

「俺はお前を絶対に許さない。箒を攻撃したお前を!!」

『あ？ 何言ってるのこいつ？』

現在、クロエは端の医務室に寝ており、その前に大きなライオンが寝ていたのが周りの興味を引いていたのだ。そこでとある事情を知った箒が見舞いに行こうとしたが、そのライオン……もとい、レオンに吠えられたのである。

理由は単に気に入らないことが1つ、そしてもう1つが主人の1人であるクロエを殺そうとした女の関係者だからだ。

『大体、こいつ頭大丈夫か？ そりゃあ、静流様は色々つぶつ飛び始めているけど比較的常識人だしクロエ様を大事にしているし、何より俺に勝ったから実力は認めるが……どう見ても雑魚だしな、こいつ。行動するのも馬鹿らしいぜ』

「お前、今俺を馬鹿にしただろ!？」

レオンの言葉は一切伝わっていないが、何故か鋭く勘が働いたようで一夏は叫ぶように言った。

『勘だけは鋭いか。聞いた話じゃ「他人の気持ちに全く気づかない鈍感な奴だつて聞いたけど。……まさか恋愛面だけってことはないよな?』

実はこのキメラ、人間に匹敵……という程ではないがかなりの知性を持っている。

もし人類がその他の哺乳類との会話をすることができるようになったら一夏は精神が修復不可能なくらい折られるだろう。

——ん？

嫌な予感がしたレオンは自分の能力を使って障壁を展開すると、カプセルを持った羅鬼が現れた。

「着いたぞ。とりあえずバレないように布を被って出て来い。荷物も一緒にな」

後部ハッチが開き、布を纏った何か飛び出して来た。それを臭いで判別したレオンが襲おうと考えると、

「レオン、不愉快だろうがそいつを通せ。殺さないという事は俺が保証する」

「……………」

「いざとなればバラバラにすればいいんだしな」

「いや、何でだよ!？」

レオンは仕方なくそのナニカを仕方なく通す。それを見て静流はレオンを撫でた。



「まあ、簡単に説明するとここに敵が迫ってきているから。以上だ」

「舞崎。頭を出せ。久々に私はキレた」

俺の帰還に事情を知る奴らは全員安堵したが、重大な話があると言って集めて現状を説明した。そのために織斑先生が戸高満に止められている状態だけど、

「安心しろよ。全員俺が止める」

「根拠は何だ？」

「気合と根性」

「……………ハンマーはどこにやったかな」

そもそもアンタ、ハンマーを装備しちやいないだろ。

ちなみにこの場所に専用機持ちは当然0。全員部屋に戻した。

「でだ、その敵の名前はどいうった奴だ？ 所属は？」

「所属は知らないけど、片方は金髪で露出狂でスクールって呼ばれてたな」

「……………静流。お前はなんてものを引き当ててきたんだ」

クソ兄貴こと高間晴文が本気で呆れている。そんなにマズいことはしていないはずだが。

「そんなにヤバい奴なのか？」

「こちらでは特A認定されている超が付く危険人物だ。現在はコアの収集をしていたと聞いていたが攻めてくるとはな」

「まあ、あれだけ雑魚だのなんだの言ってこなかったらプライド云々の前に今度会ったら「あ、バカにされてこなかった弱虫だ」と本人の前で言うつもりだった」

まあ、まだ確定情報じゃないからな。向こうも相応の準備をしてくるだろう。

——!?

今、何かヤバい気配を感じた気がする。

「敵が来たな。ともかく時間が無い。俺は単独で奴らを迎え撃つ」

「IS学園からは私が出よう——おい、何だその嫌そうな顔は」

「俺の取り分減るじゃねえか!!」

「今そんなことを言っている場合か！」

「…………まあ、アンタには他にやるべきことがあるから、出てくるにしても俺に狩られるにしてもそれをしてからにしてくれ」

怪しそうに俺を見る織斑先生。俺は笑顔で耳打ちすると、

「本気か？」

「すべてはクロエ次第だな。ま、これだけ上等な餌を釣らせば嫌でも来るだろ」

そう言つて俺は部屋を出て羅鬼を展開し、そのまま戦場となる空域に移動する。

すると向こうもやる気満々なのか、殺気を全開——つて、見たことがないタイプだ。

「殺す……殺す……何かも……姉さんも……世界も……すべてを!!」

「おー、おー、昂つてるねえ。俺、そういうの好きだぜ」

もはやおなじみとなつて来た《チェインシザー》を展開し、大型ブレードで迫る敵さんとの死闘が始まった。



篠ノ之東は啞然としていた。

壊された携帯電話のメールは彼女のラボにも送られるようにもなっていて、そこからでもメールを閲覧することは可能となっているが、その文面に啞然としていた。

『7月8日の午後12時、アンタに関係することについて篠ノ之箒を含めて情報を交換するつもりだ。そのまま消えるつもりならそれもよし。ただし、アンタの妹はもうISを否定し、紅椿にも乗らなくなるだろう。少なくとも俺は信頼を勝ち得ているしそうすることは可能だ。天の上から妹が怒っているのを泣きながら見ておけ、神様気取りのお馬鹿さん』

装置を2つほど衝動的にお陀仏になったのはこれが原因である。

(ふざけるな………何で生きてんだよ。いや、生きてたとしても仮に肋骨が粉々になっているはず。あの場から動けるわけがない)

だが、送られてきたのは千冬からであり、千冬もまた静流がそう言った旨を記載している。

東は悔しがりながらも花月荘周辺を独自に飛ばした衛星と予め仕掛けておいたカメ

ラで確認する。そこには——自分がいずれ一夏や筈のためにとっておいた敵が静流と戦っていたのだ。

しかも大きな計算違いがあり、静流は銃はもちろん、剣や鈍器を巧みに使い、推定最大スペックの紅椿を凌駕した動きで敵を翻弄しているのである。

『何故だ……何故だ私の『黒騎士』の攻撃が当たらない!?』

『俺の羅鬼の方がかなり上手だってことだよ!! 遅い遅い!! 遅すぎるぞ鈍間!!』

東はこの状態を知っている。いや、ずっと思い描いていた存在だ。だけどそれは妹が先に到達するはずなのに……何故……

「何でこいつが……I Sに認められてるの……?」

フル・シンクロ
——完全同調

それはI Sそのものと同調をして発揮する単一仕様能力を超えた究極のシステム。機体すべてを自分のものとし、何の欠陥も存在しない超越領域。静流はそこに、たった3か月という期間で入っていたのだ。

東は戦慄した。そして後悔した。絶望させるだけではだめだ。この男を完全に消さないといけない、と。

第45話 篠ノ之三姉妹

スコール・ミューゼルは心から後悔していた。一体どうしてあんな下らない挑発に乗ってしまったのだろうか。

「どうして……2対1なのに……」

こちらの連携が取れていないことは理解している。そして切り札を投入して3機で相手しても既に1機落とされた状況だ。さらに悪いことに、死神すら現れる始末。

『もらった』

「くっ?!」

咄嗟に回避するスコール。しかし「死神」とあだ名された先程もいた黒い機体はオータムをさつさと落とし、今度はスコールに標的を向けていた。

(……どうして……どうしてこんな——)

スコールはプロミネンスコートで周囲を防御する。だがその防御壁はあっさりと消された。

「な、何で——!?!」

『生憎、この機体は特別性だね。零落白夜は既にコピー済みだ』

スコールは離脱を選択した。

死神の技量はおそらく織斑千冬を超えている。そんな人間が零落白夜を持っているとなれば自分の機体では相手にならない。

「そんな……嘘よ……こんな……こんなこと——」

彼女は機体の力を決して過信しているわけではない。だが、自分よりも強い相手といつまでも戦っているほど彼女は馬鹿ではない。

（ごめんなさい、オータム。でも今は——）

——ドスッ

スコールの胸から大きな刃が飛び出てきた。それが死神が持つブレードの物だと知った瞬間、彼女は言った。

「こんなの……かてるわけが……」

そう呟いている最中、スコールは未だ自分を挑発した男と接戦を繰り広げている切り札の姿を見た。

「……そうよ……フフフ……あなたがまだいたわね……エム……」

スコールはシステムを弄ると、エムという少女の動きが早くなる。

「『何をした……？』」

「あなたたちを……すべて壊す様に……指示を……送ったのよ」

「『……………そうか。お前、舞崎静流についてちゃんと調べたな?』」
「ええ、そうよ」

あの男に関してはスコールはすべて記憶している。

「『ならば知っておくべきだったな。舞崎静流に上限はないことを』」

瞬間、動きが変わった黒騎士と同時に羅鬼も同様にスピードを上げた。

静流が東に負けた理由は、実はもう一つある。それは、「ただ仇を討つことが本当に正しいのか」という迷いを保有していたことだ。

だが、クロエを助ける技術を持つ少女がいたら? 回復する見込みがあるなら? 移動中にカルテを持ち出して成功例の映像を見せられ——つまり、信頼に値する技術を見せられたら?

つまり、今の静流は完全に迷いが無い。戦いに専念できる——それはある意味敵にとって最悪のことだ。

だが今の静流は満身創痍という言葉が近い。機体の装甲は所々消失しており、シールドエネルギーも1000あったはずなのに415となっている。

「いやあ、まさかここまで追い詰められることになるとは思わなかった」

「……………フー……………フー……………」

「だがまあ……………そろそろ夜も遅い。決着をつけるか」

そう言つて柄を折られた《チェインシザー》の代わりに大型の剣《アクスブレード》を展開した。

黒騎士は大型バスターソード《フェンリル・ブロー》を握り、接近する。静流は素早く右腕で《アクスブレード》で受け止めると同時に離して黒騎士の後ろに回る。

黒騎士はすぐさま反転。するとピンポイントにエムの顔面に蹴りが入り、同時に身体に銃弾の雨を浴びせる。

エムは無理矢理離脱。だが、それが間違이었다。

高威力のビームが2本、エムの身体に直撃した。

「まだまだ……………まだまだだ」

そこからランダムで回転し、さらに束ねるようにビームを飛ばし続ける。

エムは回避に徹し、ランサービートを盾にして行方を眩ませて不意打ちを選択するつもりだったが、大きな爪を展開した静流がエムの身体を抉るように弧を描いた。

「?!?!」

今のは左腕——そして、右手から始まるラツシユを食らったエムはフィニツシユで食らわされた踵落として地面に激突。動かなくなつた。



翌日。IS学園のバスは既に発進したが俺はまだ花月荘に残っていた。そして残っているのは俺の他に後2人いて、その内の1人は少し複雑そうな顔をしている。

「……………じゃあ、間違いないんだな？」

「……………ああ。私の……………父さんと、母さんだ」

にしても遅いな。……………まあ、流石に来れないか。

本当は篠ノ之束が来てから両親のことは見せようと思ったが、楓曰く「私は所詮子どもだからちゃんとした医療機関で診察してもらわなきゃだ」とのことなので救急車を呼んだのである。治療費に関しては日本政府が出すことになっている。

篠ノ之はやはりショックのようだ。久々に出会えた両親がまさか大雑把に言えば悪の組織に捕まっついていて、第二の篠ノ之束を生み出そうとしていたのだから。

「ほ、う、き、ちゃあああああ——」

突然現れた篠ノ之束。だが、俺の姿を見たからかその場に停止した。

「ちっ。やっぱり生きてたか。何の用だよ、ゴミ野郎」

「ゴミはあなただろう!!」

突然叫ばれて驚いたのは黙っておく。

「ほ、箒ちゃん、どうしたの? 何で?」

「一体誰のせいじゃこうなった? 言うまでもなくあなたのせいだ! あなたがISなんかを発表したから、私たちが巻き込まれた!! 違うならば今ここで言ってみろ!!」

「で、でもさ、私がISを作ったから箒ちゃんはいっくんと再会できたし——」

「作らなかつたらずっと一緒にいた!!」

聞いた話だと、篠ノ之の家は道場もあるから引越しとは無縁の生活だったかもしれないしな。

「何が篠ノ之東の妹だ!! 何がI Sだ!! こんなもの、やはり私には必要ないではないか!!」

そう言つて待機状態になつてゐる紅椿を思いつきり投げる。方向的に海の中だろう。……今から拾いに行きたいと言つたら怒られるだろう……な……。

「姉さんなんて……やっぱり大つ嫌いだ!! もう顔も見たくない!! とつとと失せろ!!」

「………悪いが、それはちよつと困るな」

「何?」

まさか俺に止められるとは思わなかつたらしい。篠ノ之箒は驚いて俺を見るが、実は本題がある。

「………もういいぞ」

近くの岩から、10歳ぐらいの少女が顔を出す。妹はその顔を見て驚愕し、姉は心底嫌そうにその存在を見た。

少女—— 楓は俺の方に来て服を掴んだ。

「………舞崎、そいつは何だ?」

「……………ほら、自己紹介してみろ」

こればかりは本人の口から言わせるべきだと判断した俺は促すと、少女は自己紹介をした。

「……………し……………篠ノ之楓……………です……………」

そう言うのと恥ずかしいのか、俺の後ろに隠れる……………身長差もあつてあまり隠れられてないけど。

戸惑う妹とは対象的なんでレベルではなく、どす黒い殺気を放つ姉がこつちに迫ってくるので文字通り軽く捻って彼方に飛ばす。

「……………で、その子供は一体何なんだ？ 歳はいくつだ？」

「じゅ、10歳です……………」

「……………待て。計算が合つてないぞ。仮に2人から生まれたならば6つのはずだろう！？」

「……………私は……………その……………」

「その前に、あれは良いのか？」

「昨日、お前が激怒して追つて行つたことと今回の事で完全に見切りをつけた。拘束されて犯されていようが殺されていようが知つたことではない」

すると姉が抗議の声が当たりに響いた。

俺がしたのもなんだけど、すぐ崖の所で受け身を取りつつ倒れたするこいつってやっぱり変人だよな。

「酷いよ箒ちゃん!!? IS作ったよね!!? それに私、ずっと箒ちゃんのことを——」
「ストーリーキング?」

「……………舞崎、向こうで話さないか? あんな女など放っておいて」

マンガならば間違いなく「ガビーンッ」みたいな擬音があっただろう。

まあ、自業自得だな。話は聞かないわ、少女を平然と殺そうとするわ、一緒にいた女すら殺そうとするわ、信頼を失う行動を本人がしているのだから仕方ないだろう。

「聞けば、あなたは私の友人が可愛がっていた人を撃ったそうですね。あなたの目的はわかりませんし、もう理解する気すら起こりません。いつそのこと、もう縁を切ってくださいっても構いません。あなたという害悪のせいで私たちの人生は何もかも無茶苦茶だ」

完全な拒絶だった。あまり言い過ぎると暴走する可能性もあるが、それが妹としての本音なんだろう。

「……………黙れよ。私がいなければ、何もできないくせに!! 未だにいつくんにすら告白できない臆病者の癖に!!」

「凡人の気持ちも理解できない自称天才のくせに何を!!」

今にも戦闘に入りそうな勢いなので、俺は2人の間に割つて入る。

「はいはい。そこまでにしる」

「黙れ蛆虫！ 引つ込んで——」

目潰し鼻折り両足壊して顔を掴んで岩に顔面を打ち付ける。

「だけど残念！ この束さんに効きません!! 何せこの天才束さんは——」

瞬間、俺は篠ノ之束の両足太ももにトンファーを銃形態にして撃ち抜いた。足の向この景色が見えている。

「だ、大丈夫……束さん挫けな——」

「そうか」

俺は温かい目で篠ノ之束を見る。篠ノ之束も俺に釣られてか笑みを作った。

「——じゃあな」

心臓を思いっきり殴る。あれで死なないなら思いっきり殴ったくらいが心臓を止めるのにちょうどいいだろ。

「俺はあの子供がクロエを助けてくれた恩人だから、その恩人がちゃんと家族と会って話したいというからアンタを呼んだだけにすぎない。俺は最初から、テメエを許した覚えはない」

ま、聞こえていないだろうけどな。

俺はそのまま奴を尖っている岩の上に押しつけてその場を離れる。外れようが外れまいがどうしても良かったからだ。

「……………舞崎……………お前は……………」

「悪いな篠ノ之。俺の事を軽蔑してもらっても構わない。あの女がどんな奴であれ、俺は人を殺したんだからな」

とはいえ、なまじ手を抜いても勝てる相手ではないのも確かだ。……………それをわかっていながら心臓を抉っていないのは2人に残酷なシーンは可哀想だと思ったからである。

「気にするな。もうあの女はそうでもしないと私たち凡人に波長を合わせる事ができない存在となっている。……………舞崎みたいに凡人のすべてを理解せずとも、姉さんみたいな人間にも歩み寄ろうとすることが出来る人間もいるのにな」

それで良いのかと言いそうになったが、これは姉妹の問題であるため俺は深く追求しなかった。



篠ノ之東の身体は人のそれとは違う。

本人が手を加えたというのものもあるが、身体は頑丈で回復能力も人の50倍は有している。だが、弱点として脳と心臓を止められると死ぬという部分が残っているが、その前に大抵のことは回避できていた。

「……………何だよ……………これ……………」

なのに彼女は今日、殺されかけた。

昨日の仕返し——いや、そんな生半可なものではない。彼女は走馬灯を見せられ、見たくもない過去の事を思い出させられた。

彼女が楓を殺そうとしたのは単に気に入らないから。彼女は今までそれが許される立場にあった。許される状況を作り出すことができた。なのに今日、妹にも見捨てら

れ、目的を雑草のような存在に邪魔された。

「……………不愉快だ」

ずぶ濡れになった体と服が一瞬で乾く。そして東は一直線に静流のいる方向に走り、殴りかかった。

「——ちっ」

すぐに反応した静流はそれを受け止めて防ぐ。

「な、何で…………」

「もうお前らの理屈なんて、この私に通じないんだよ!!」

宣言するように言った東はそこから消えた。

そして箒の後ろに現れて首を斬ろうとしたが、背にして守るように立った静流に防がれる。

「な、何で…………」

「さつき、俺が全く同じことを言ったけど……………まあ、あれだ」

静流が笑みを浮かべながら。

「恨みつらみ抜きでアンタと戦っておかないと後悔するって思ったんだよ」

東に掌打を放った静流。だが東は素早く回避して右足で静流を蹴り飛ばそうとした。それよりも早くトンファーを出した静流が上に弾いて掌打で吹き飛ばす。

「……………この——」

「嫉妬してるのか、アンタ」

「は？」

「いや、嫉妬だな。妹を守る絶対的な立ち位置、そして天才として君臨する絶対的な立ち位置。それが俺と楓に奪われそうになったから、焦ったアンタはどうとう妹の前に関わらず牙を向いた」

言われて東は言葉を失った。

「……………何で——」

「アンタは10年前から成長していないからな。10年前のデータが役に立ったというのが1つ。あ、そうだ。篠ノ之箒、お前はたった1つだけがアレに感謝しないといけないことがある」

「……………何だ？」

「中学3年の1年間だけ、同じ中学に留まらせてくれたこと、だ」

その言葉を聞いた東は、心の底から驚いた。

東の胸の鼓動が早くなる。その正体に彼女が気付くのはもう少し後の事だった。

第46話 これからのこと

— A M 9 : 3 0

クロエはゆっくりと瞼を開ける。

見覚えのない天井。だが、そこが束と行動を共にしていたこともあつて座敷タイプの天井と理解し、自分がまだ生きていることに驚いていた。

「……………わたし……………は……………」

体を起こそうとし、自分に謎の荷重があることに気付いたクロエはその物体を退けようとした。

(……………束様に、そっくり……………?)

身長や顔の幼さから、彼女が何らかの事象によつて生み出されたクローンか何かと判断したクロエはすぐに起こして逃がそうと判断した。そのすぐだった。

襖が引かれ、見覚えのある影が入ってきた……………というか、げっそりしていた。

「あー疲れたー……………」

静流だった。静流はクロエの足を枕にしてうつ伏せで寝ている楓を複雑そうな顔をしてから脇腹の部分を両手で持って移動させようとしたところでクロエと視線があつ

た。

「……………」

もし、楓を持っていたら間違はなく落としていただろう。それほど静流は動揺し、ようやく頭を整理した時、素早く、そして静かに移動してクロエを抱きしめる。

「クロエ……………良かった……………本当に良かった……………」

「あの、マスター……………少し痛いです」

「あ、悪い。いやあ。女を殺すためにとりあえず経験値を貯めるためにボコつてたら、結構強くなっててさ。でも良かった。縫合されていた何かの肉の糸の並びが綺麗だったから任せただけ、本当に目が覚めてくれて……………生きててくれて本当に良かった」

そんなことを言われるなんて初めてだったクロエは混乱し、嬉しさのあまり涙を流し始める。

「く、クロエ……………？ 大丈夫？ 痛かった？」

「い、いえ……………大丈夫です……………その……………嬉しかったから……………」

「クロエ……………」

小学生相当の子どもがいるというのに、静流はクロエにデ IPP キスをした。もしこの光景をあの2人が見たら間違いなく嘔すだろう。「とても「恋人？ 何それ？ 食えんの？」と笑っていた奴と同一人物だとは思えない」と。

1分ぐらいした後、静流はもう1度しようとした時にクロエが止めた。
「……………あの……………静流様は束様のことを——いえ、何でもありません」
殺気で景色が歪んだ。外ではレオンが驚いて固まっている。

「……………ところで、彼女は……………？」

「こいつは……………たぶん篠ノ之の末っ子になる。名前は楓っていうんだと」

「……………そうだろ。束様に似てますね」

「おそらく、あの女も歪んであんなったんだろうなっと思うけどな」

今も寝ている楓の髪を梳く静流。そこでクロエはある提案をした。



— AM 10:03

「……………何？」

「おそらく、彼女にとつても意外だったんだろうな。箒星の意味を知っている人間が中学でいること、そして篠ノ之束の名前に過剰に反応しないどころか普通に流せる人間なんて俺が言うのもなんだがまずくない。本人にしてみれば罪滅ぼしのつもりだったんだろ。今まで自分の行いで迷惑かけたんだから、IS学園に入学する前にせめて楽しい思い出を作つてあげたいってな。中学3年と言えば受験でもあるが修学旅行というイベントもあるし、学園生活を満喫する最後の1年にしては好条件だと思つたはずだしな」

さしずめ、「何でわかつた」という顔をしているのだろう。驚いて俺を見る篠ノ之束。「考えてみれば、「篠ノ之束」の関係者ということではISを手に入れることができる可能性がある希望でもある。例えば男でも、先に研究できてISのことを新しく知ることができれば御の字だ。だけど俺はあの時は武装組織を壊滅させていた経験があったから「ISなんて使つて何が面白いの？」って感じだったしな」

「……………何で、わかつたの？」

「本当なら俺が篠ノ之の存在を知っていた時点で転校は確実だ。仮にそれができるとしたら、政府の弱みを簡単に握ることができる篠ノ之箒の関係者に絞られる。ま、たつた1人しかないが」

篠ノ之束は本気で驚いていたが、これは別に驚くほどでもない。世界的に有名なイギリスの名探偵からすれば「初歩的な推理」ですらないだろう。

「それと篠ノ之束、1つ提案がある」

「何？」

「お前、俺と共に来ないか？」

—— AM 9 : 37

「束様を……………許してくれませんか？」

クロエからの提案は本気で驚いた。

まさかのあの女を許せという。本気で驚いた。いや、驚かない方がどうかしている。本来ならクロエは激怒して良い。彼女にはその権利がある。

「理由を聞いてもいいか？」

「……………私はずっと、あの方と生活をしていました」

だけどそれが許す理由にならない。しかしそれは俺の早とちりだったようだ。

「そしてあの方と一緒にいて思ったことがあります。あの人は確かに天才ですが、人と接するのを恐れているが故に歪んだ人間だと」

「恐れている？」

「……………はい。確証はありませんが、あの人は他人を卑下し、見下すことによって心を守っているんです。夢の中で聞きました。あなたは以前、篠ノ之束について調べ、理解しようとしていた、と」

……………俺はとある心当たりを外して柱に向かってスロウした。

その心当たりは後から迫る俺の足の裏を実体化することによって回避した。

「おいニーナ」

「な、何……………？」

「テメエ、クロエが生きてたことを知ってたな!? 何故さつさと教えなかった!!」

近くに楓がいたことを思い出した俺は恐る恐る目を向けると、今ので起きたらしく身を守るためにクロエの布団に潜り込んでいる。

「……………私が口止めしてほしいと頼んだのです。私の事でISを疎かにしてほしくなかったのです」

「……………まあ、そういうことなら……………」

ニーナは実体化を解いてアクセサリーに戻るのを見つつ、とりあえず急に叫んだことを楓には謝った。

ちなみにニーナに当たりがきついのは、俺がISを動かせなくなることを願ってである。

『絶対にそんなことはさせませんけどね!!』

絶対に動けなくしてやらあ!!

「……………話を戻します。私はずっとあの人といいて、あることに気付きました。もしかしたら東様は本当に信じられる人と一緒にいたいのではないかと」

つまりそれは人を選定しているということか……………？ 兎だし、もしかしてそういうものなのか？

などと考えていると、クロエは俺に信じられないことを言った。

「だからマスターにあの方の「信じられる人間」になつていただきたいのです」

「……………え？ マジで？」

「はい。マスターは料理ができますし、束様の胃袋を掴むことができます」と思います」

そんなキラキラした目で見られた俺は、見栄を張って立場をわからせてからにすると宣言した。

「というわけらしいがな」

「……………いや、ふざけすぎでしょ!? 特に最後!!」

「俺だつて耳を疑ったわ!! というかクロエに料理させたは良いが、何出されたんだよ」
個人的に凄く気になって仕方がないんだけどな。特にその部分が。

「焦げたパンとか、焦げたパンとか…………」

「……………確認したタイミング、悪すぎるだろ」

「でも美味しかったけどね。いやあ、お前みたいなところに来なかつたらあんなことはしなか——」

手が滑って篠ノ之東に仕込んでいたナイフを投げてしまった。

俺は笑顔を向けながら篠ノ之東に近付いた。

「とういわけだ、篠ノ之東。とりあえず俺の物になれ。どうか従え」

「ねえ、もうヤケになつてない？ 見栄張つたことを後悔してない？」

「さあな。ともかく首を縦に振れ。そうすればお前は死を回避することができる」

「だが断る！ 私の好きなきことは自分が優位に立つて——え？ 耳を掴んでな——

痛い！！ 顎を地面とキスさせるのはすごく痛い！！」

「とりあえず縛っておくか」

鎖で良いだろ。

亀甲縛りで羞恥心を誘発させ、顔に鎖を巻き付けてそのまま旅館の方に移動した。

「銃で撃つてごめんなさい」

「束様、そのことはもういいです」

現在は俺の部屋としてあてがわれた部屋。そこでクロエが寝ているので連れてきたのだが、改めて聞くと銃で撃たれて普通に許すクロエって凄く大物だよな。

ちなみに傍から見たら俺が篠ノ之束を土下座させている状態だったりする。正座させて両足を左足で踏んで右足で背中を押している状態だ。

「くーちゃん。本当にごめんね。あと、こいつをそろそろ退かせてくれると嬉しいかな？」

「諦めてください」

「わー！ 見捨てられたー！」

本気で泣く20代に俺は軽く引いている。

「そろそろ退いてやれ、舞崎」

「……………仕方ない。足を折るか」

「さりげなく酷いことを提案するの止めて!!」

だってそうでもしないと何をするのかわからないからな。必要措置だ。

「止めておけ、舞崎。話が進まん」

「……………チツ」

舌打ちをして仕方なく退いてやる。

そもそも、こうして無理矢理篠ノ之束を連れてきたのには理由がある。それは――

「問題は、この2人の処遇だな」

篠ノ之姉妹の血縁者である楓と、織斑姉弟の血縁者（というか実の姉妹らしい）マドカの処遇についてだ。

マドカに関してはまだ良い。織斑千冬は既に成人を超えているから保護者として保護することは可能だろうが、問題は楓だ。正直、

「これに預けるのは反対なんだが？」

「……………私も同意見です、千冬さん」

「かと言って、他に誰がいるか、だ」

篠ノ之夫妻がここに話題が上がっていないのは、楓が普通の女の子じゃないからだ。

聞けば楓は篠ノ之の両親の遺伝子情報から組み替えて作った子ども——つまり、遺伝子強化素体なのである。そして顔は束の方にそっくりだ。

「祖父母が生きていたら事情を話したら快諾してくれたかもしれないがな。全く、あのゴミ共は余計なことをしてくれた」

今度本部に文字通り殴り込みをかけようとしていると、ある名案が浮かんだ。

「篠ノ之束、やっぱりアンタが親権を持つて」

「はあ？ 何で束様がそんなことをしないといけないんだよ」

「何か勘違いしているようだから言っておくが、アンタは親権を持つだけで良い。クロ

工を含め、楓の面倒は俺が見る」

織斑先生も篠ノ之束も、そして篠ノ之箒もその意見に驚いた。

「確かにアンタが親権を持つとそのしわ寄せが来るだろうよ。定期的に居場所を聞き出すようにする奴がいるはずだ。だが俺が面倒を見るとなればそれはない」

「……………何故そう言い切れる？ 確かにお前は強いが、その影響力は私や束に及ばない」

「……………確かイタリアだっけ？ アンタと決勝で戦おうとしたIS操縦者は」

「そうだが、それがどうした」

俺は笑みを浮かべて言っただけだ。

「ならばそいつを再起不能にすれば良い。泣きながら、そして漏らしながら土下座して見逃してもらおうようになるまでボコボコにしても問題ないだろう？」

そいつには恨みはないが、これもすべてこの少子高齢化が進んだ時代が悪い。その礎になっただけだ。

「……………楽しみだなあ。正義と発散を同時に行えるから一石二鳥。楽しみだなあ。少なくともあの天使を気取ったクソ機体よりかはマシだといいなあ」

「……………そこなのか」

ちなみに最初から武藤さんやクソ兄貴こと高間晴文に頼らないのは日本の政府関係者だからである。



私はたぶん、日本の男性に恋をした。

迎えに来たアメリカ軍。その1人にして同僚でもあるイギリス・コーリングに抱き着かれて何も感じない。それどころか拒絶してしまった。

「……あの人、かつこよかった」

「何言ってるんだ、ナタル」

「あ、イーリ」

私は慌てて電話番号を隠す。それを目ざとく見つけられてしまい、彼女に笑われた。

「まさかこれ、さっきの男のか？」

「か、返して!!」

「嘘だろお前。これから裁判だって言うのに……」

だ、だって仕方ないじゃない。昨日のことが怖くて、たまたまついてくれていた人に抱き着いてしまつて、それで優しくされて……いや、まだそんな関係は踏んでないけど、踏んでませんけど!!

（今度はいつ会えるかしら……）

私はふと、そんなことを思ってしまった。いつか、で……デートでもできたらいいなあ……。

その頃、晴文は心の底から悩んでいた。

（……………アレ絶対、マズいよなあ……………）

『どうしたの？』

『いや、ちよつとな。さっきのアメリカ人、ずっと熱っぽい視線を俺に向けていて……ま、気のせいだろうけどよ』

晴文はIS且つ自分のパートナーでもあるロゼにそう説明する。

『なるほど。じゃあ、付き合っちゃいなさい。というか告白しなさい』

『阿呆か。対有事処理班って色々と面倒なんだよ。特に結婚関連は』

『……………それ、目の前のバカップルにも当てはまるの？』

『お互い日本人だからな』

晴文らが所属している対有事処理班はISの鎮圧や女権団などの裏の武装組織など違法組織を有事になる前やなった後に処理をする武装組織だ。身体能力はもちろん、思想の方も厳しくチェックされており、当時自衛隊に所属していた晴文にとつて渡りに船だったの移籍し、たまに専用IS『ゼロ』を装備してISの暴走も鎮圧している。実は戸高満がそのチームに入ったのは4月頃で、国家代表と特殊チームの仕事を兼任している。

『それが外国人となると、話は別だ』

『じゃあ、振る？』

『それもこつぴどくな。あー、出会いが欲しい』

ため息を吐く晴文がIS操縦者になって9年。そんな彼がその事情でさらに疲れるのはまた別の話。

第47話 突きつける真実

とりあえず俺たちはIS学園に戻った。篠ノ之束はしばらく織斑先生の部屋に滞在することになり、俺は俺で事情聴取の後に別室が与えられた。

他にも事情を知る者として、篠ノ之とラウラが同じ部屋になったという話は聞いている。まあ、そっちの方が楽だからだろう。ラウラも事情はある程度把握しているしな。

ちなみに何故か……本当に何故か……

「やったー！ レコード更新だー!!」

10歳の少女はパズルゲームで遊んでいる。いや、ホント、

(こうして見ると、なんか家庭を持った気になるな……)

年齢16にして妻子持ち……今では考えられない事である。……というのは冗談なんだが。

まさかお咎めなしの上にISを返却され、クロエや楓と同居することになるとは思わなかった。まあ、大半が天才の力なんだろうが、今はそれに感謝しておこう。

(……まあ、面倒な問題が出てきてしまったんだがな……)

その面倒なものとは、楓がとうとう両親に会いたいと希望したのである。

いや、別におかしいことじゃない。ずっと物言わぬ体みたいなものだったし、ずっと一緒だった親と触れ合いたいというのもあるだろう。褒められたいとか、そう言う気持ちがあるはずだ。それは尊重する。……でも、はつきり言おう。おそらく楓は受け入れられない。

(……そうなれば、天災2号でもできてしまうのだろうか……)

今はずっと庇護下にあつたこともあり、まだ無邪気だ。無邪気だが、現実を知ればおそらく今みたいな笑顔を見せることはないだろう。

(……だからって、誤魔化し続けるのはもう無理だし)

今ももうテストも終わり、結果も発表されている。今週末に終業式があり、その翌日から夏休み。連れて行く時間は十分にある……今だから言えるが、そんな時間なければ良いと思いたい。でも――

『お父さんとお母さんに会うの、楽しみだなあ』

無邪気にそんなことを言われたら流石の俺も騙すことはできない。……あー、将来甘やかしそう。

「……………帰りてえ」

「来て早々、何を言っているんだ」

「心労でちよつとな……………」

「……………そう言うなら私だつて色々言いたいことがあるんだが……………何故お前はあんなに勉強できるんだ!? おかしいんじゃないのか!？」

「学年トップじゃなかったら意味がねえだろ」

「そう言う問題じゃない! 姉さんにも手伝ってもらったんだ。ラウラにも教えてもらったのに……………」

まあ、俺の場合は暇あればトレーニングか勉強しかしてねえからな。

「諦めた方が良いでしょう、箒。マスターは普段は喧嘩しか能がない男に見えますが、読書にIS教本を使うような方ですから」

「お前の頭、おかしいんじゃないのか!？」

「そもそも一人暮らしの条件が成績上位だからな。むしろ成績が平均レベルしかないことに泣きそうになった」

ちなみに成績は上から更識、オルコット、ボーデヴィツヒ、デユノア、凰と専用機持

ちが占めている。次こそはぜひ学年トップになりたいものだ。にしても、今年は3人も同位が出るなんて快挙だと騒いでいたが、周りがIS技能で俺の動きにケチをつけ過ぎだ。まあ、それはドベだった織斑も同じか。

「大体、PICを瞬時にオートに切り替えてからの停止後方移動のどこが「学生レベルじゃない」だよ。あんなのゲームしてたら誰だってできることだろうが」

「千冬さんでもそんなことできないからな!？」

たぶん、少なくとも悠夜は瞬時にできると思う。

まあ、つまらない話はそこまでにして、だ。

「仕方ない。行くか」

「わーい!」

「はー、何で私がかんなどころに行かないといけな——痛い! 静流の馬鹿!!」

「テメエの方が馬鹿だろ!」

馬鹿と天才は紙一重と言うが、束はびつたりと当てはまる。

「そう言ったら俺とクロエは全く無関係だろ」

「私の関係じゃダメなのか? 友人を紹介したいという理由じゃダメなのか?」

「……………箒、何でそれを織斑の前でしないんだ…………」

篠ノ之という姓を持つ人間が一気に増えたこともあり、それを気に俺は全員を名前で

呼んでいる。初めてそう呼んだらクロエが泣きそうになったのは記憶に新しいが、まさか箒が「ようやく呼ぶ気になったか」と言うとは思わなかった。

「……………」

最近、箒はこうしてだんまりになることが多くなった。理由はわからないし特に詮索もしていない。

「ともかく行くぞ。すみません、篠ノ之柳韻と桜の部屋を知りたいのですが——」

箒が受付に言っただけで聞かずに行く。俺は当然、クロエと一緒に問題児と無邪気ちゃんのお守りだ。

「聞いてきた。早速行くぞ」

俺は内心ため息を溢しつつ、篠ノ之夫妻の病室に向かった。

どうやら父親は既に退院しているが、近くに滞在させてもらっているらしい。

酷いだろうがまずは様子見として箒だけで言ってもらい、後から俺と楓を紹介しても

らう手筈になっている。束はクロエと絶賛俺の後ろで待機中だ。

『久しぶりです、母さん』

『ええ。あなたも無事のようなね。本当に大変な目に遭ったわ』

どうやら少しは記憶が残っているみたいだ。……まあ、記憶の操作はされている人間にかなり負担を強いると聞いたことがあるし、両親と話をしたいと思っていた楓にはできないだろう。

『……何があつたのですか？』

箒には知らない振りをしてもらっている。そもそも信じることはできないだろう。産んだ覚えもない子供のために人質になっていたとは。

ちなみに俺が中の会話を聞いているのは、箒の服に盗聴器を仕込ませてもらっている。言うまでもなく束のお手製なのでノイズなどは走らなくなっているようだ。

『わからないわ。ただ……変な場所でも不気味な夢を見た。束に似ていた女の子がね、私に楽しそうに笑いかけていたの』

………本当、俺だけ聞いてて良かった。これを束が聞いてたら間違いなく乗り込むだろう。

『………ところで箒。あなたはいつかからブレスレットなんてつける趣味を持ったの？』

まさかISに関わっているとは言わないでしょうね』

『……………ええ。私は今、IS学園に通っています』

すると部屋に沈黙が訪れる。どうやら母親にとってISは禁句のようだ。

『……………それは政府からの命令？ それとも、東がそう仕組んだの？』

『姉さんのことはわかりません。おそらく政府が守りやすいように入れるように画策したのでしょう』

『……………じゃあそれは政府から専用機が支給されたってことかしら？』

『それは——』

その時だった。

「——東!？」

外からそんな声が聞こえた俺の思考は停止した。だがそれは一時的なものですぐに復活する。

「一体こんなところで何をしている!？」 いや、一体何のつもりでここに来た!？」

「別になんでもいいじゃん」

「私たちを笑いに来たのか。……………ところで君たちは——」

耳元で大きな音がしたかと思ったら、病室のドアが思いつきり開かれた。

「何しに来たのよ!!？」 箒、あなたまさか——」

「ま、待ってください！ これには事情が——」

「事情って何よ。これは立派な——いやああああッ?!」

急に叫び始める母親。俺は急いで仲介に入ろうとすると、どこから引つ張り出したのか姉妹の母親は木刀を楓めがけて振り下ろした。

咄嗟に木刀を叩き折って先端を別の場所に飛ばす。その隙に箒は母親の前に出た。

「急にどうしたのですか、母さん!」

「誰よその子! といつかどうして連れてきたのよ!!」

「桜、落ち着け! 流石に病室の中で木刀は——」

——パンッ!!

女性の目の前で手を叩く。急に音を立てたからか全員が硬直した。

「……………とりあえず全員、中に入れ」

そう指示した俺に、全員はおずおずと中に入った。

中に入った俺は、楓について軽く説明した。

篠ノ之夫人にしてみれば産んだ覚えのない子どもであり夫のことも信じているよう
で外で作った子どもの可能性は低い。それは意外にも束が監視していたようだが、夫人
は「余計なことを」と言いたげに束を睨んでいる。

そうなる仕方がないので、俺は正直に話した。

「この子は遺伝子を操作されて産み出された子どもだ」

その言葉に夫も驚きのあまりか何かを呑み込む。だが、夫よりも先に妻の方が口を開いた。

「……………なんですか……………それは……………冗談でしょう……………？」

「残念ながら本当だ。これが証明書」

そう言つて俺は早坂に頼んで出してもらつたDNA検査の結果を出す。遺伝子パターンは束と全く同列。ほとんどクローンと言つても問題ないそうだ。

「おそらく原因は束が白騎士事件前に学会で発表したこと。夢物語であろうとなかろうと、いずれ世界のエネルギー問題を簡単に解決するかもしれない存在を手駒にしようと考えてる奴らなら、その技術があれば容易に作り出せる。接種したのはおそらく血から遺伝子情報を読み取つて複数のパターンで作り出したと考えるべきだ」

篠ノ之夫妻は顔を青くする。まあ、これが普通の反応だ。

「……………出て行つて」

小さく、妻の方が言つた。

「出て行つて！ もう顔も見せないで！！ もううんざりよ、こんなの！！」

あー、やっぱり無理かあ。俺はそうでもなかったのは結構なアンダーグラウンドを体験しているからかな。……………体験、したか？

思い当たる節はないが、ともかくこういうのは慣れだと思う。

「そうか。じゃあ帰るぞ。もちろん箒もだ」

「何？」

「あの、待つてください。娘をどうするつもりなんですか!？」

「もう顔も見たくないんだらう? ならばアンタの夫はともかく俺たち5人はすぐに退散するべきだ。身体に障るしな。だから、ご希望通りアンタが嫌いなI S関係者はここから去つてやると言つた」

今にも泣きそうな楓を打ち合わせ通りクロエに任せながら、言葉を続ける。

「待つて。待ちなさい! 箒は私の——」

「そして束と楓は違つてか? そりゃあ都合が悪いだらうよ」

「え?」

「束だつてアンタらの娘だ! そもそもこんな人生を歩むことになつたのはお前らがちゃんと教育をしなかつたのが原因じゃないのか! 楓はいつも苦しい思いをしてきた! お前らを人質に取られ、逃げることもできない状態で従いたくもない指示を嫌々従つてきた! それもすべてアンタらの教育の結果だ! 娘を否定するのはお前らの選択の1つだろうがな、それならば相応の覚悟をしるよ? アンタらは束と同じ姓を持ちながら、人質にされようと永遠に捨てられる選択をするんだからな!」

とりあえず、言いたいことは全部言えた。箒と束、そして楓をクロエと一緒に連れて帰る。

あの2人は俺の中で最悪の選択をしたに過ぎない。俺の意見は子どもを育てたことのない人間の意見に過ぎないが、産んだ以上は相応の責任を持つ必要がある。何よりも

——あのオッサンだ。

何で俺の意見に口を挟まない。挟んだところで無理矢理口を閉ざさせるが、あの場で俺が切れたら「子どもの君に一体何がわかる」なりなんなり言うべきだ。それともあのオッサンは虚を突かれることに慣れていないのか？ だとしたらそれはただの無能だろう。それとも娘に関することに思う事でもあったのだろうか？ それなら多少は許してやるがな。

………とりあえず、数日待つか。待って何らかのアクションがない場合は無様に切り捨ててやろう。

と、思っていた俺は何故か10歳近く歳が離れた女性とベッドインしていた。……い

や、正しくはインしただけでそれ以上のことはしていない。ちなみに考えた日数には届いていない。それどころか1日すら経っていないんだけど!?

「……………それは本気か?」

『ああ。どういいうつもりか知らんが、1日だけ部屋を開けると本人から直接言われた。殺そうとしたら犯して構わんぞ』

というのが親友の言葉だった。酷いな親友。というかそこは「殺して構わん」じゃねえのか。いや、殺したらスケープゴートにできないけどさ。

「……………で、一体何を企んでる?」

「酷いなー。東さんは何も企んでいないよ?」

「そういうえば5月くらいに変な機体が来たんだけど、すつげえデザインがダサかった——」

「なにおう!? あれくらい素晴らしく計算されたスタイルは——痛い!! でもいいじゃん! 結局君個人で所有しているんだしき!!」

それに関しては感謝するがな。

「ところでクロエをどこにやった?」

既に夜10時を過ぎていているのに未だに帰ってこないクロエの事を聞くと、

「さつきいつくんの部屋に——待って! 冗談だから! 嘘だから! 殺気を一瞬で

放たないで!!」

「安心しろ。ただ織斑が自分の血で汚れるだけだ」

「冗談だから!!」 冗談だからあ!! だからそんなに殺気を放たないで!!」

全く。少し慌て過ぎだろ。俺はただ織斑の鈍感クソ野郎に人の女を寝取ったらどうなるか教えてやるだけだ。

「ホントだって! ほら! これ! いくんしかいないよね!」

「監視カメラ?」

「私の移動型ですよ。ところでき、何で君ってオナってすらいな——あ、はい。今後仕掛けるのは自重します」

にしても、さつきからこいつに違和感がある。

「……………東、お前若くなつた?」

「あ、わかる? 実はちよつと手術したんだ。自力で」

「よし。今のは空耳だな。……………で、冗談抜きで一体何の用だ?」

すると東は意外なことに、本当に姉妹かと思う程の色気を出して来た。

「——ねえ、どうしてあそこで怒つたの?」

さりげなく胸を腕に当てるスキルを、妹に教えてやれと思つたのは悪くないだろう。

最終話 優しい風景

「——ねえ、どうしてあそこで怒ったの？」

唐突にそんな質問をされた俺は少し驚いていたが、少し溜めてから返事した。

「……………まあ、個人的にな」

「……………もしかして親と別れた時のこと？」

「しつかりと調べてるんだな」

「もつちろん！ 天才だもん！」

「はいはい」

やんわりと剥がそうとするが、やはり見た目が華奢なのに意外と力が強い。

「はつきり言つて、俺の親はお前らの親を超えるほどの屑だ。イラつきのみで殺そうとされた。本来ならば俺が守られるべき存在だったが、父親は母親を愛しすぎて俺を殺そうとした。その状況にちよつと似ていてさ」

だからこそ苛立った。

束と両親の間に何があつたのかは知らない。それもあるからあそこで俺は怒った。

束とはもうダメだろうが、楓とならちゃんとやり直せるはずだ。少なくともあの子は常

識を弁えられているのだから。

「……………でも、私がしたことって結構酷いよ？ 基地とか襲撃したし」

「……………忘れていたから言っておくがな、俺は一応一般人だから」

「君の部類で一般人なら、他の人間なんてミジンコなんてレベルじゃないね」

ちよつと強い程度の一般人だよ、俺は。

俺の上には何人もいるしな。……………悔しいことに。

「まあ、予想通りだろうが、理由はそんなところだ。後は楓がお前に似ているってことだけで拒否されたのは正直ムカついた、ぐらいだ。大した理由もなくて悪かったな」

「……………うん。そもそも、私のために怒ってくれる人なんていないからさ。ちよつと新鮮だったよ」

いつも怒られているイメージはあるがな。

「ところでだな、そろそろ言いたいことがあるんだが」

「何？」

「1mとは言わんが、少し離れる。胸が当たってる」

「当たってるんだよ」

平然とそう返す束。俺は心から心配になって束の額に手を当てた。

「熱はないようだな。そう言えば体温計があったな。念のため測って——」

「熱じゃないからね！ いや、確かに一種の熱でもあるけど……………」

「いや、それは熱だ。そうじゃなければたった1度庇われただけで天才が他人にこんなことをするわけがない」

「本気で怯えつつお世話モードにならないで！」

ましてやこいつだぞ？ I Sを開発した篠ノ之束だぞ？ 傍若無人の天才様だぞ？

「任せろ。「病は気から」という言葉はあるが俺はそんなのを認めるつもりはない。適切な処置はするつもりだ」

「素人がしたら危ないけど!？」

「まずは織斑先生の部屋に戻してだな。とりあえずその軽装を……………何でワイシャツ1枚？ というかうさ耳は？」

「……………外して来た。それに、この格好だったら受けが良いって漫画であつたから……………」

確かに受けはいいがな。

「クロエの服じゃ流石に入らないし……………仕方ない。とりあえず俺の服を着ろ。今はゆっくりして体を休めろ」

「だから風邪じゃない!!」

だとしたら何だというんだ。

ため息を吐きながら俺は束を寝かせるために近付くと、無理矢理ベッドに押し倒された。

「おい、たば——」

無理矢理唇を塞がれ、何かが入ってくる。……あ、これ、デープだ——じゃねえ!!

焦った俺は束を引こうとするが、舌の力が強すぎるのか絡んでくる。

「——予想通り、やっぱりこうなりましたか」

俺と束の動きが同時に止まった。だが束はすぐに俺の口から自分の口を離れた。

「く、くーちゃん!? どうして!?!」

「たぶんこうなっているだろうなあと思っただけですよ」

「私もするー!!」

どうやら吹っ切れたらしい楓が俺に飛び込んで来たので慌ててキャッチ。流石は篠ノ之の血を引く女と言うべきか素早い動きで頭を突っ込ませて来るが、なんとか回避した。

「パパー、私もー」

「おい待て。その呼び方はおかしい。せめて言うなら「お兄ちゃん」だ」

「待て楓。私が先だ」

「何でラウラも!？」

そう言えば束つて、箒とクロエにはちゃん付けだが俺や楓、ラウラは普通に呼び捨てだな……じゃなくて、

「ラウラ、就寝時間はとつくに過ぎてるぞ？」

「ん？ 性交をするには良い時間だろう？」

「ラウラ、楓の教育に悪いから平然と言うな。あとそんなことするか」

「もー、くーちゃんはともかく、ラウラと楓は帰つてよ!!」

「私は元々この部屋だもん！ それにお兄ちゃんは束のものじゃないもん！」

「みんなのもの、でしょう?」

あの、クロエさん？ 何か怒つてません？

というかあれは束から来たからノーカンだ。束の实力はクロエだって知ってるはずだしな。だよな？

結局、その日は解散させたかったが、楓が眠たくなつたというのでそれに合わせて全員寝ることにした。というか、させた。

夏休み。それは学生にとって楽しい期間だ。

1日中休みであり、何してもいい時間。宿題は出るがレポート以外は計算とか国語とかなので簡単に終わった。で、専用機持ち所持者は自主的にアリーナを借りて特訓をしているが、

『その程度か、雑魚共が!!』

黒騎士を駆るエム……もとい、織斑マドカ相手に5人の専用機持ちが苦戦していた。

「なるほど。かなりの出力と機動性だな。だけど何でライフル?」

「マドカは格闘は「こなせる」程度なんだけど、銃撃は上手くてね。だからそっちの方に力を入れたの」

「ほう。だが、なんというか……専用機持ちがどれだけ井の中の蛙だということが理解できるな」

織斑マドカは立场上、織斑千冬の妹ということで専用機を束から譲渡されている形となっている。これからの戦力としても期待できるという点においては確かにそうだろう。

「にしても、1分程度しか持たねえのかよ。弱すぎるぞテメェら!! よくそんなに生

きてこれたな！ あんな雑魚に負けて悔しくないのか！ ええ?!?」

『それは舞崎さんの感覚でしょう!!』

『そうよ！ アンタみたいな強者からしたらみんな雑魚よ!!』

「否定しねえけどな!!」

「……………否定しないんだ」

俺の右隣に楓が座っているが、そのさらに右隣には更識簪が座っている。言うまでもなく、ボコられて零司が乗り込んできても対処するのが面倒だからだ。

「まあな。はつきり言ってIS学園のレベルは低すぎる。よくそれで「女は男より強い」とか言えたものだ」

ま、その証明はつい最近したが、それはそれこれはこれだ。ただ文句を付けてきた女権団を軽く腕いで病院に入れただけだ。……………その時に「お兄ちゃん凄いな」と楓が抱き着いてきた。つくづく彼女がアウトローな存在だと実感できる。……………それで束が「自分もできる」と言い出した時の女たちの怯えようは一興だったかな。

『そんなに言うんだったら静流が証明してごぶばらあツ?!』

織斑が俺にそう言ったが、織斑マドカが蹴り飛ばした。

『次、そんなことを言ってみろ。貴様を文字通り消し炭にするぞ織斑一夏』

『何でだよ?! それにマドカだって言われっぱなしだったら悔しいだろ?!』

『アレは最早怪物だ！ そんな怪物に貴様は私に単身で挑めと言うのか!? 貴様は存外鬼畜だな!! あと馴れ馴れしく名前と呼ぶな気持ち悪い死ね!!』

「おい更識、お前の機体の開発主任のことを化け物だと言われてるぞ」

「……………魔法っぽいものを行使する点では否定できない。魔物狩りで真つ先に狙われるかもしれないけど……………」

「更識家が魔城となるのも時間の問題かもしれないな」

いつの間にか膝の上に移動している楓の頭を撫でる。本来ならクロエに対してそうしてあげたいのだが、生憎彼女は席を外していた。

というのも、今は狙われるという理由で箒に紅椿を持たせているが、せつかくの機会という事で機体調整に勤しむことにしたらしい。

そんな時だった。

電話が鳴り響く。俺は出ると織斑千冬から来客が来たという報告を受けて楓に大人しくするように、そして織斑弟に手を出されたら容赦なく殴るように言ってから向かった。

「……それで、一体何の用だ？」

予めここに来ることは聞いていたが、今日は以前と違って殺気を放っている。

「再確認だ。君はあの娘を育てるつもりか？」

「……今更だろ。アンタらが束の事で何か思っていたなら大切に育てるだろうと思つたし、そうでないなら最初からそのつもりだ。クロエ……束が娘として大切にしている女の子もそうしたいと言っていたしな。まさかそんなことを確かめるためにここに来たのか？ だとしたらほとんどでもない暇人だな、アンタは」

「……そうか。確かにそうだな」

ベンチで腰を掛けて束たちの父親にそう言つてやると、オッサンは認めた。

「それもあるが、何より気になるのは筈のことだ」

「……………帰つていいか？」

「いや、そうじゃない。桜の……あの子たちの母親の手前、言う事はできないが私は束も大切に思っている。だが、楓ちゃん、だったか？ あの子のことを考えると私たちのところではなく君の所の方が良いと思う。君の言う通り、私たちは篠ノ之束という悪魔を生み出したのは事実だ」

まさかそのことを認めるとは思わなかった俺は素直に驚いていた。

「……………おかしいか？」

「てつきりあの時の文句を言いに来たのかと思つたが。安心しろ。それで喧嘩を売つてきたら夫婦水入らずの部屋にしてやる」

「……………君は随分と戦うことに自信があるんだな」

「アンタに勝てる自信はあるさ。アンタが3分持てばそれこそ良い方だろうよ」

「……………そして生意気だ。本当に意外だよ。箒が君のような男を友と呼ぶのはね」

「最初の頃は猫を被つていたからな。大変だったぜ？　かなりの堅物だったアンタの娘の信頼を得るのはな」

「言つてくれる」

「ああ、言うさ。アンタの娘はとんでもない堅物だ。だからこそ織斑一夏とは相性が悪い。……………いや、それは世界中にいる女たちに言えることだな」

「……………私は見合いだったから、そういうのはよくわからないな」

近くに楓がいる。どうやら俺を探している時に前に出会つた自分の父親といふから出るに出来ないのだろう。

楓を呼んでやると、楓はこつちに来て自分の父親から隠れるように俺の隣に座る。

「……………改めて、初めまして。だがすまない。……………私は——」

「……大丈夫……です……。私だって……。わかってるから……」

そう言いながら、俺の腕に顔を押し付ける楓。俺はため息を吐いて楓を持って立った。

「オッサン。アンタも立てよ」

「……………」

訝し気に立つオッサンに、俺は楓を差し出した。

「渡すつもりはない。そして今から少しだけだ。ほんの少しだけ、こいつに触れる許可をやるよ」

その言葉が意外だったのか、オッサンは驚いて俺を見る。俺は楓の背中を押して近付けさせた。

「……………ほら、楓」

「……………うん」

楓は少しずつ、オッサンに近付く。そして2人は再会を祝して抱きあった。

たった1回だけ。おそらく今後はあり得ないだろう状況を俺は監督役として見守った。

あれから大体3年後。時間は朝8時を過ぎ、俺はリビングでレポートを書いていると玄関から楓の声でした。

「行つてきまーす！」

「おう、行つてこい」

俺はIS学園を無事卒業し、日都大学の総合工業学科に進学した。今期の合格者は俺だけだったので周りから憎しみの視線を向けられたが品行方正な俺に面接とテストなんて余裕だったと言っておく。ま、流石に主席は無理だったけどな。………というか、主席がまさか同じ年だとはな。俺もまだまだ勉強が足りねえか。

「あー、ねみー」

「また徹夜か。せつかく若返つたのにまた老けたんじゃねえの？」

「老けてないよ〜」

そう言つて床に寝る束を俺は仕方なくつかんでソファに寝かせる。

「束。いくら研究が好きだって言つてもお前はもう少し休め」

「じゃ〜静流が膝枕してくれたら〜」

「だつてお前、俺のレポートを勝手に弄るだろ」

後うるさいいな。まさか天才に懐かれるのがこんなに辛いことだとは思わなかった。

「俺は自分の力だけで世界に挑戦してえんだよ」

「すでに終わつてるでしょ。全国家代表を潰したんだし」

それとこれとは話は別である。あと、人の黒歴史を勝手に掘り返すな。

「そのせいで最初は凄くヤバかったんだからな」

「でもそれ、調子に乗つて「その程度かよゴミ共が。よくそんなんで女なんて優遇たあな。頭湧いているとしか思えねえ」って言ったのって静流だよな？」

「頼むから掘り返すな。今となつてはマジで恥ずかしいんだからな」

どれくらい恥ずかしいかというと、ISをテレビで見れないくらいにだ。

ここ3年で世界は大きく変わった。俺の無双が全世界で放映されたことで女性の尊厳はほとんどなくなつた。辛うじて法律でかつての優遇はなくなつた程度として捉えられているが、治安が悪いところでは可愛い女の子は誘拐されているぐらいだ。

女権団も、そして男権団も解散を余儀なくされ、今ではそう言った1つの異性のみで構成され、共にいる集団でも一方的に虐げられることは重罪とされるほどだ。一部では俺のことを「第二の天災」などと騒ぎ始めているようだが、直接的な攻撃は1度しかされていない。………というのも、大学進学を選んだ俺を無理矢理誘拐しようとしたさまざま

な組織を平然とボコる姿を束が世界に生中継したのである。

——私はただ、私の人生を歩みたいだけです。私はその邪魔をする人々——いえ、その根幹のみ撲滅し、中継し、尊厳を潰すことをお約束します

我ながら、悠夜を馬鹿にできない中二病患者になつてしまったと嘆きたくなつた瞬間である。

「ところで、ラウラは？」

「アイツなら朝からバイト」

ちなみにそのバイトは銀行の警備。以前銀行強盗されそうになつたようだが、さつさと制圧したらしい。流石は元ドイツ軍少佐。今は父親の計らいでこうして俺たちと暮らしている。ま、家は束が自作して俺が色々と訂正させて、一軒家に住んでいるけど。今ならわかる。俺は本当の意味で充実していることを。

「マスター」

食後のコーヒーをテーブルに置いたクロエは俺の所に来ていつも通りキスをした。

俺たち2人の左手の薬指には、同じ銀色の婚約指輪をしている。つまり、そういうことだ。